

四国縦貫自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

23

丸山遺跡

2003

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団



SB1022出土弥生土器



SD1027出土弥生土器

序 文

本報告書は、平成7年度から8年度にかけて調査を実施した三好郡三野町丸山遺跡についての発掘調査の成果をまとめたものであります。

丸山遺跡は阿讃山脈南麓に発達した河岸段丘の段丘面上に位置し、断続的ながら弥生時代以降、近代に至るまでの生活の跡が確認されました。遺跡は弥生時代中期の大規模な集落を中心とした遺跡で、検出された遺構も27基の竪穴住居跡をはじめとして、土坑、溝、大型の掘立柱建物跡など多岐にわたっています。出土遺物も多彩で弥生土器の他にも翡翠製の勾玉や銅剣の茎なども出土しています。中でもサヌカイトを素材とした打製石鏃や打製石庖丁、石剣などの石器群は県内で出土している弥生時代の遺跡の中でも質、量共に群を抜く存在で、今後、県内の他の弥生時代の遺跡と比較するうえで貴重な資料になるものと考えられます。また、中世は鎌倉、室町の二つの時代にまたがっています。残された遺構としては南北方向に段丘上を走る溝や火葬墓などわずかな物ですが、隣接する花園遺跡とともに中世段階のこの地域の資料の空白を埋めるものであり、本地域の中世史を解明するうえでの基礎資料になりうるものと考えております。

本報告書が調査研究の基礎資料として活用され、文化財に対する理解と保護への一助となれば幸いです。なお、発掘調査の実施、報告書の作成にあたり、日本道路公団及び関係諸機関、並びに地元の皆様には多大の御援助、御協力をいただき、研究者からは貴重な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
理事長 松村 通治

例 言

- 1 本書は平成7年度ならびに平成8年度に調査を実施した四国縦貫自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書には丸山遺跡（三好郡三野町勢力所在）の調査報告を収録した。
- 3 発掘調査は日本道路公団高松建設局（現日本道路公団四国支社）から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 遺構の表示は（財）徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

凡 例

SA 掘立柱建物跡	SE 井戸	SO 窯跡
SB 竪穴住居跡	SK 土坑（壙）	SP 柱穴
SD 溝	ST 墓	SX 不明遺構

- 5 第3図の地形図は建設省国土地理院発行の1/25000の地形図「辻」を縮少・転載したものである。
- 6 方位は国土座標第IV座標系の北、高さは東京湾標準潮位（T・P）を表す。
- 7 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』1997年度版によった。
- 8 調査にあたっては次の機関の指導・協力を得た。
徳島県教育委員会 日本道路公団四国支社 徳島工事事務所 同協町工事事務所
徳島県土木部縦貫道推進局 同中央事務所 三野町
- 9 本報告書を作成するにあたり当センター職員ならびに次の方々の御教示を頂いた。
梅木 謙一 大島 和則 岡崎 壮一 川辺 浩司 久家 隆芳 坂本 憲昭 柴田 昌児
白石 聡 高田 浩司 出原 恵三 中村 豊 信里 芳紀 乗松 真也 水口あおい
水元 完児 森下 英治 山本 敏裕 吉田 広
- 10 本報告書内の平面図ならびに断面図中の網掛け部分は、特別な断りがない場合、全て焼土及び灰を表わしている。
- 11 本書の執筆は以下のとおりである。
I 貞野保仁 II 久保脇美朗 III 久保脇美朗 IV 久保脇美朗 V 久保脇美朗
なお、遺物の写真撮影は金森英人、全体の編集は久保脇が行った。

本文目次

I	調査の経緯	1
1	調査に至る経緯	2
2	調査の経過	5
(1)	調査の経過	5
(2)	発掘調査の方法	5
(3)	調査日誌抄	5
II	遺跡の立地と環境	13
1	遺跡周辺の地理的環境	13
2	歴史的環境	13
III	調査の成果	15
1	遺跡周辺の地形と基本層序	15
(1)	遺跡の基本層序	15
2	検出された遺構と遺物	17
(1)	弥生の遺構と遺物	17
(2)	中世の遺構と遺物	203
(3)	近世の遺構と遺物	207
(4)	包含層出土遺物	215
IV	まとめ	243

挿図目次

I	第 1図 丸山遺跡調査地位位置図	第 13図 SB1004出土遺物実測図(1)
	第 2図 丸山遺跡グリッド配置図	第 14図 SB1003出土遺物実測図(2)
II	第 3図 三野町主要遺跡分布図	第 15図 SB1004出土遺物実測図(2)
III	第 4図 丸山遺跡遺構配置図	第 16図 SB1004出土遺物実測図(3)
	第 5図 丸山遺跡土層図	第 17図 SB1005実測図
	第 6図 SB1001実測図	第 18図 SB1005遺物出土状況図
	第 7図 SB1001出土遺物実測図(1)	第 19図 SB1005出土遺物実測図(1)
	第 8図 SB1001出土遺物実測図(2)	第 20図 SB1005出土遺物実測図(2)
	第 9図 SB1002実測図	第 21図 SB1005出土遺物実測図(3)
	第 10図 SB1002出土遺物実測図	第 22図 SB1005出土遺物実測図(4)
	第 11図 SB1003・1004実測図	第 23図 SB1005出土遺物実測図(5)
	第 12図 SB1003出土遺物実測図(1)	第 24図 SB1006・1007実測図

- 第 25 図 SB1006 実測図
- 第 26 図 SB1006 出土遺物実測図 (1)
- 第 27 図 SB1006 出土遺物実測図 (2)
- 第 28 図 SB1006 出土遺物実測図 (3)
- 第 29 図 SB1006 出土遺物実測図 (4)
- 第 30 図 SB1007 実測図
- 第 31 図 SB1007 出土遺物実測図
- 第 32 図 SB1008 実測図
- 第 33 図 SB1008 出土遺物実測図 (1)
- 第 34 図 SB1008 出土遺物実測図 (2)
- 第 35 図 SB1009 実測図
- 第 36 図 SB1009 遺物出土状況図
- 第 37 図 SB1009 出土遺物実測図 (1)
- 第 38 図 SB1009 出土遺物実測図 (2)
- 第 39 図 SB1010 実測図
- 第 40 図 SB1010 出土遺物実測図
- 第 41 図 SB1011 実測図
- 第 42 図 SB1011 遺物出土状況図
- 第 43 図 SB1011 出土遺物実測図 (1)
- 第 44 図 SB1011 出土遺物実測図 (2)
- 第 45 図 SB1011 出土遺物実測図 (3)
- 第 46 図 SB1011 出土遺物実測図 (4)
- 第 47 図 SB1012・1013 実測図
- 第 48 図 SB1012 出土遺物実測図 (1)
- 第 49 図 SB1012 出土遺物実測図 (2)
- 第 50 図 SB1012 出土遺物実測図 (3)
- 第 51 図 SB1013 出土遺物実測図 (1)
- 第 52 図 SB1013 出土遺物実測図 (2)
- 第 53 図 SB1013 出土遺物実測図 (3)
- 第 54 図 SB1014 実測図
- 第 55 図 SB1014 出土遺物実測図 (1)
- 第 56 図 SB1014 出土遺物実測図 (2)
- 第 57 図 SB1014 出土遺物実測図 (3)
- 第 58 図 SB1014 出土遺物実測図 (4)
- 第 59 図 SB1015 実測図
- 第 60 図 SB1015 出土遺物実測図 (1)
- 第 61 図 SB1015 出土遺物実測図 (2)
- 第 62 図 SB1015 出土遺物実測図 (3)
- 第 63 図 SB1016 実測図
- 第 64 図 SB1016 出土遺物実測図 (1)
- 第 65 図 SB1016 出土遺物実測図 (2)
- 第 66 図 SB1016 出土遺物実測図 (3)
- 第 67 図 SB1017 実測図
- 第 68 図 SB1017 出土遺物実測図 (1)
- 第 69 図 SB1017 出土遺物実測図 (2)
- 第 70 図 SB1018 実測図
- 第 71 図 SB1018 出土遺物実測図 (1)
- 第 72 図 SB1018 出土遺物実測図 (2)
- 第 73 図 SB1018 出土遺物実測図 (3)
- 第 74 図 SB1018 出土遺物実測図 (4)
- 第 75 図 SB1019・1020 実測図
- 第 76 図 SB1019 出土遺物実測図 (1)
- 第 77 図 SB1019 出土遺物実測図 (2)
- 第 78 図 SB1021 実測図
- 第 79 図 SB1021 出土遺物実測図 (1)
- 第 80 図 SB1021 出土遺物実測図 (2)
- 第 81 図 SB1022 実測図
- 第 82 図 SB1022 遺物出土状況図
- 第 83 図 SB1022 出土遺物実測図 (1)
- 第 84 図 SB1022 出土遺物実測図 (2)
- 第 85 図 SB1022 出土遺物実測図 (3)
- 第 86 図 SB1022 出土遺物実測図 (4)
- 第 87 図 SB1022 出土遺物実測図 (5)
- 第 88 図 SB1022 出土遺物実測図 (6)
- 第 89 図 SB1022 出土遺物実測図 (7)
- 第 90 図 SB1023 実測図
- 第 91 図 SB1023 出土遺物実測図
- 第 92 図 SB1024 実測図
- 第 93 図 SB1024 出土遺物実測図 (1)
- 第 94 図 SB1024 出土遺物実測図 (2)
- 第 95 図 SB1024 出土遺物実測図 (3)
- 第 96 図 SB1025 実測図
- 第 97 図 SB1025 出土遺物実測図
- 第 98 図 SB1026 実測図
- 第 99 図 SB1026 遺物出土状況図
- 第 100 図 SB1026 出土遺物実測図 (1)
- 第 101 図 SB1026 出土遺物実測図 (2)
- 第 102 図 SB1026 出土遺物実測図 (3)

- 第103図 SB1026出土遺物実測図(4)
第104図 SB1026出土遺物実測図(5)
第105図 SB1027実測図
第106図 SB1027出土遺物実測図(1)
第107図 SB1027出土遺物実測図(2)
第108図 SA1001実測図
第109図 SA1001出土遺物実測図
第110図 SA1002実測図
第111図 SA1002出土遺物実測図
第112図 SA1001・1002出土遺物実測図
第113図 SK1006実測図
第114図 SK1006出土遺物実測図
第115図 SK1011実測図
第116図 SK1011出土遺物実測図
第117図 SK1022実測図
第118図 SK1022出土遺物実測図
第119図 SK1024実測図
第120図 SK1026実測図
第121図 SK1026出土遺物実測図
第122図 SK1027実測図
第123図 SK1027遺物出土状況図
第124図 SK1027出土遺物実測図
第125図 SK1029実測図
第126図 SK1029出土遺物実測図
第127図 SK1034実測図
第128図 SK1034出土遺物実測図
第129図 SK1035実測図
第130図 SK1035遺物出土状況図
第131図 SK1035出土遺物実測図
第132図 SK1040実測図
第133図 SK1047実測図
第134図 SK1047出土遺物実測図(1)
第135図 SK1047出土遺物実測図(2)
第136図 SK1076実測図
第137図 SK1076出土遺物実測図
第138図 SK1077実測図
第139図 SK1077出土遺物実測図
第140図 SK1079実測図
第141図 SK1079出土遺物実測図
第142図 SK1080実測図
第143図 SK1082実測図
第144図 SK1082出土遺物実測図
第145図 SK1112実測図
第146図 SK1112遺物出土状況図
第147図 SK1112出土遺物実測図
第148図 SK1114実測図
第149図 SK1114遺物出土状況図
第150図 SK1114出土遺物実測図(1)
第151図 SK1114出土遺物実測図(2)
第152図 SK1114出土遺物実測図(3)
第153図 SK1116実測図
第154図 SK1116出土遺物実測図
第155図 SK1117実測図
第156図 SK1117出土遺物実測図
第157図 SK1118実測図
第158図 SK1118出土遺物実測図
第159図 SK1122実測図
第160図 SK1124実測図
第161図 SK1124出土遺物実測図
第162図 SK1126実測図
第163図 SK1133実測図
第164図 SK出土遺物実測図(1)
第165図 SK出土遺物実測図(2)
第166図 SK出土遺物実測図(3)
第167図 SK出土遺物実測図(4)
第168図 SX1001実測図
第169図 SX1001遺物出土状況図
第170図 SX1001出土遺物実測図
第171図 SX1002実測図
第172図 SX1002出土遺物実測図
第173図 SX1003実測図
第174図 SX1003出土遺物実測図(1)
第175図 SX1003出土遺物実測図(2)
第176図 SX1004実測図
第177図 SX1004出土遺物実測図(1)
第178図 SX1004出土遺物実測図(2)
第179図 SX1005実測図
第180図 SX1005出土遺物実測図(1)

- 第181图 SX1005出土遺物実測図(2)
- 第182图 SX1006実測図
- 第183图 SX1006遺物出土状況図
- 第184图 SX1006出土遺物実測図(1)
- 第185图 SX1006出土遺物実測図(2)
- 第186图 SX1007実測図
- 第187图 SX1007出土遺物実測図(1)
- 第188图 SX1007出土遺物実測図(2)
- 第189图 SX1008実測図
- 第190图 SX1008出土遺物実測図(1)
- 第191图 SX1008出土遺物実測図(2)
- 第192图 SX1009実測図
- 第193图 SX1009出土遺物実測図
- 第194图 SP出土遺物実測図(1)
- 第195图 SP出土遺物実測図(2)
- 第196图 SP出土遺物実測図(3)
- 第197图 SP出土遺物実測図(4)
- 第198图 SP出土遺物実測図(5)
- 第199图 SP出土遺物実測図(6)
- 第200图 SP出土遺物実測図(7)
- 第201图 SD1027遺構断面図
- 第202图 SD1027A地区出土遺物実測図(1)
- 第203图 SD1027A地区出土遺物実測図(2)
- 第204图 SD1027A地区出土遺物実測図(3)
- 第205图 SD1027A地区出土遺物実測図(4)
- 第206图 SD1027A地区出土遺物実測図(5)
- 第207图 SD1027A地区出土遺物実測図(6)
- 第208图 SD1027B地区出土遺物実測図(1)
- 第209图 SD1027B地区出土遺物実測図(2)
- 第210图 SD1027B地区出土遺物実測図(3)
- 第211图 SD1027B地区出土遺物実測図(4)
- 第212图 SD1027B地区出土遺物実測図(5)
- 第213图 SD1027C地区出土遺物実測図(1)
- 第214图 SD1027C地区出土遺物実測図(2)
- 第215图 SD1027C地区出土遺物実測図(3)
- 第216图 SD1027出土遺物実測図(1)
- 第217图 SD1027出土遺物実測図(2)
- 第218图 SD1027出土遺物実測図(3)
- 第219图 SD1027出土遺物実測図(4)
- 第220图 SD1027出土遺物実測図(5)
- 第221图 SD1027出土遺物実測図(6)
- 第222图 SD1027出土遺物実測図(7)
- 第223图 SD1027出土遺物実測図(8)
- 第224图 SD1027出土遺物実測図(9)
- 第225图 SD1027出土遺物実測図(10)
- 第226图 SD1027出土遺物実測図(11)
- 第227图 SD1027出土遺物実測図(12)
- 第228图 SD1027出土遺物実測図(13)
- 第229图 SD出土遺物実測図(1)
- 第230图 SD出土遺物実測図(2)
- 第231图 SD出土遺物実測図(3)
- 第232图 SD出土遺物実測図(4)
- 第233图 SD出土遺物実測図(5)
- 第234图 SD出土遺物実測図(6)
- 第235图 SD出土遺物実測図(7)
- 第236图 SD出土遺物実測図(8)
- 第237图 SD出土遺物実測図(9)
- 第238图 SD出土遺物実測図(10)
- 第239图 SD出土遺物実測図(11)
- 第240图 SD出土遺物実測図(12)
- 第241图 SD出土遺物実測図(13)
- 第242图 ST1001実測図
- 第243图 ST1001出土遺物実測図
- 第244图 ST1002実測図
- 第245图 SK1005実測図
- 第246图 SK1005出土遺物実測図
- 第247图 SD1005遺構断面図
- 第248图 SD1005出土遺物実測図
- 第249图 SD1015遺構断面図
- 第250图 SD1015出土遺物実測図
- 第251图 ST1015実測図
- 第252图 ST1015出土遺物実測図(1)
- 第253图 ST1015出土遺物実測図(2)
- 第254图 SA1003実測図
- 第255图 SA1004実測図
- 第256图 SA1005~1010実測図
- 第257图 SK1129実測図
- 第258图 SK1131実測図

第259図	SK1132実測図	第272図	包含層出土弥生遺物実測図(13)
第260図	包含層出土弥生遺物実測図(1)	第273図	包含層出土弥生遺物実測図(14)
第261図	包含層出土弥生遺物実測図(2)	第274図	包含層出土弥生遺物実測図(15)
第262図	包含層出土弥生遺物実測図(3)	第275図	包含層出土弥生遺物実測図(16)
第263図	包含層出土弥生遺物実測図(4)	第276図	包含層出土弥生遺物実測図(17)
第264図	包含層出土弥生遺物実測図(5)	第277図	包含層出土弥生遺物実測図(18)
第265図	包含層出土弥生遺物実測図(6)	第278図	包含層出土中世遺物実測図(1)
第266図	包含層出土弥生遺物実測図(7)	第279図	包含層出土中世遺物実測図(2)
第267図	包含層出土弥生遺物実測図(8)	第280図	包含層出土中世遺物実測図(3)
第268図	包含層出土弥生遺物実測図(9)	第281図	包含層出土中世遺物実測図(4)
第269図	包含層出土弥生遺物実測図(10)	第282図	包含層出土中世遺物実測図(5)
第270図	包含層出土弥生遺物実測図(11)	第283図	包含層出土中世遺物実測図(6)
第271図	包含層出土弥生遺物実測図(12)	第284図	包含層出土近世遺物実測図

表目次

II	第 1表	四国縦貫自動車道（脇～美馬・美馬～川之江）埋蔵文化財調査地一覧表		
IV	第 1表	SB1001出土遺物観察表（弥生）	第 21表	SB1023出土遺物観察表（弥生）
	第 2表	SB1002出土遺物観察表（弥生）	第 22表	SB1024出土遺物観察表（弥生）
	第 3表	SB1003出土遺物観察表（弥生）	第 23表	SB1025出土遺物観察表（弥生）
	第 4表	SB1004出土遺物観察表（弥生）	第 24表	SB1026出土遺物観察表（弥生）
	第 5表	SB1005出土遺物観察表（弥生）	第 25表	SB1027出土遺物観察表（弥生）
	第 6表	SB1006出土遺物観察表（弥生）	第 26表	SA1001出土遺物観察表（弥生）
	第 7表	SB1007出土遺物観察表（弥生）	第 27表	SA1002出土遺物観察表（弥生）
	第 8表	SB1008出土遺物観察表（弥生）	第 28表	SK1006出土遺物観察表（弥生）
	第 9表	SB1009出土遺物観察表（弥生）	第 29表	SK1011出土遺物観察表（弥生）
	第 10表	SB1011出土遺物観察表（弥生）	第 30表	SK1022出土遺物観察表（弥生）
	第 11表	SB1012出土遺物観察表（弥生）	第 31表	SK1026出土遺物観察表（弥生）
	第 12表	SB1013出土遺物観察表（弥生）	第 32表	SK1027出土遺物観察表（弥生）
	第 13表	SB1014出土遺物観察表（弥生）	第 33表	SK1029出土遺物観察表（弥生）
	第 14表	SB1015出土遺物観察表（弥生）	第 34表	SK1034出土遺物観察表（弥生）
	第 15表	SB1016出土遺物観察表（弥生）	第 35表	SK1035出土遺物観察表（弥生）
	第 16表	SB1017出土遺物観察表（弥生）	第 36表	SK1047出土遺物観察表（弥生）
	第 17表	SB1018出土遺物観察表（弥生）	第 37表	SK1076出土遺物観察表（弥生）
	第 18表	SB1019出土遺物観察表（弥生）	第 38表	SK1077出土遺物観察表（弥生）
	第 19表	SB1021出土遺物観察表（弥生）	第 39表	SK1079出土遺物観察表（弥生）
	第 20表	SB1022出土遺物観察表（弥生）	第 40表	SK1082出土遺物観察表（弥生）

- 第 41表 SK1112出土遺物觀察表 (弥生)
第 42表 SK1114出土遺物觀察表 (弥生)
第 43表 SK1117出土遺物觀察表 (弥生)
第 44表 SK1118出土遺物觀察表 (弥生)
第 45表 SK1124出土遺物觀察表 (弥生)
第 46表 SX1001出土遺物觀察表 (弥生)
第 47表 SX1002出土遺物觀察表 (弥生)
第 48表 SX1003出土遺物觀察表 (弥生)
第 49表 SX1004出土遺物觀察表 (弥生)
第 50表 SX1005出土遺物觀察表 (弥生)
第 51表 SX1006出土遺物觀察表 (弥生)
第 52表 SX1007出土遺物觀察表 (弥生)
第 53表 SX1008出土遺物觀察表 (弥生)
第 54表 SX1009出土遺物觀察表 (弥生)
第 55表 SP1026出土遺物觀察表 (弥生)
第 56表 SP1034出土遺物觀察表 (弥生)
第 57表 SP1039出土遺物觀察表 (弥生)
第 58表 SP1058出土遺物觀察表 (弥生)
第 59表 SP1102出土遺物觀察表 (弥生)
第 60表 SP1104出土遺物觀察表 (弥生)
第 61表 SP1126出土遺物觀察表 (弥生)
第 62表 SP1193出土遺物觀察表 (弥生)
第 63表 SP1211出土遺物觀察表 (弥生)
第 64表 SP1299出土遺物觀察表 (弥生)
第 65表 SP1334出土遺物觀察表 (弥生)
第 66表 SP1384出土遺物觀察表 (弥生)
第 67表 SP1398出土遺物觀察表 (弥生)
第 68表 SP1405出土遺物觀察表 (弥生)
第 69表 SP1433出土遺物觀察表 (弥生)
第 70表 SP1438出土遺物觀察表 (弥生)
第 71表 SP1541出土遺物觀察表 (弥生)
第 72表 SP1838出土遺物觀察表 (弥生)
第 73表 SP1860出土遺物觀察表 (弥生)
第 74表 SD1027出土遺物觀察表 (弥生)
第 75表 SD1003出土遺物觀察表 (弥生)
第 76表 SD1005出土遺物觀察表 (弥生)
第 77表 SD1007出土遺物觀察表 (弥生)
第 78表 SD1012出土遺物觀察表 (弥生)
第 79表 SD1015出土遺物觀察表 (弥生)
第 80表 ST1001出土遺物觀察表 (中世)
第 81表 SK1005出土遺物觀察表 (中世)
第 82表 SD1005出土遺物觀察表 (中世)
第 83表 SD1015出土遺物觀察表 (中世)
第 84表 包含層出土遺物觀察表 (弥生)
第 85表 包含層出土遺物觀察表 (中世)
第 86表 包含層出土遺物觀察表 (近世)
第 87表 SB1001出土遺物觀察表 (弥生)
第 88表 SB1003出土遺物觀察表 (弥生)
第 89表 SB1004出土遺物觀察表 (弥生)
第 90表 SB1005出土遺物觀察表 (弥生)
第 91表 SB1006出土遺物觀察表 (弥生)
第 92表 SB1008出土遺物觀察表 (弥生)
第 93表 SB1009出土遺物觀察表 (弥生)
第 94表 SB1010出土遺物觀察表 (弥生)
第 95表 SB1011出土遺物觀察表 (弥生)
第 96表 SB1012出土遺物觀察表 (弥生)
第 97表 SB1013出土遺物觀察表 (弥生)
第 98表 SB1014出土遺物觀察表 (弥生)
第 99表 SB1015出土遺物觀察表 (弥生)
第100表 SB1016出土遺物觀察表 (弥生)
第101表 SB1017出土遺物觀察表 (弥生)
第102表 SB1018出土遺物觀察表 (弥生)
第103表 SB1019・1020出土遺物觀察表 (弥生)
第104表 SB1021出土遺物觀察表 (弥生)
第105表 SB1022出土遺物觀察表 (弥生)
第106表 SB1024出土遺物觀察表 (弥生)
第107表 SB1025出土遺物觀察表 (弥生)
第108表 SB1026出土遺物觀察表 (弥生)
第109表 SB1027出土遺物觀察表 (弥生)
第110表 SA1001出土遺物觀察表 (弥生)
第111表 SA1002出土遺物觀察表 (弥生)
第112表 SK1006出土遺物觀察表 (弥生)
第113表 SK1024出土遺物觀察表 (弥生)
第114表 SK1027出土遺物觀察表 (弥生)
第115表 SK1035出土遺物觀察表 (弥生)
第116表 SK1040出土遺物觀察表 (弥生)
第117表 SK1047出土遺物觀察表 (弥生)
第118表 SK1076出土遺物觀察表 (弥生)

第119表	SK1079出土遺物觀察表 (弥生)	第158表	SP1752出土遺物觀察表 (弥生)
第120表	SK1080出土遺物觀察表 (弥生)	第159表	SP1776出土遺物觀察表 (弥生)
第121表	SK1112出土遺物觀察表 (弥生)	第160表	SP1842出土遺物觀察表 (弥生)
第122表	SK1114出土遺物觀察表 (弥生)	第161表	SP1860出土遺物觀察表 (弥生)
第123表	SK1116出土遺物觀察表 (弥生)	第162表	SP1883出土遺物觀察表 (弥生)
第124表	SK1117出土遺物觀察表 (弥生)	第163表	SP1900出土遺物觀察表 (弥生)
第125表	SK1122出土遺物觀察表 (弥生)	第164表	SP1911出土遺物觀察表 (弥生)
第126表	SK1124出土遺物觀察表 (弥生)	第165表	SP1918出土遺物觀察表 (弥生)
第127表	SK1126出土遺物觀察表 (弥生)	第166表	SP1919出土遺物觀察表 (弥生)
第128表	SK1133出土遺物觀察表 (弥生)	第167表	SP1922出土遺物觀察表 (弥生)
第129表	SK1145出土遺物觀察表 (弥生)	第168表	SD1027出土遺物觀察表 (弥生)
第130表	SX1003出土遺物觀察表 (弥生)	第169表	SD1003出土遺物觀察表 (弥生)
第131表	SX1004出土遺物觀察表 (弥生)	第170表	SD1005出土遺物觀察表 (弥生)
第132表	SX1005出土遺物觀察表 (弥生)	第171表	SD1006出土遺物觀察表 (弥生)
第133表	SX1006出土遺物觀察表 (弥生)	第172表	SD1012出土遺物觀察表 (弥生)
第134表	SX1007出土遺物觀察表 (弥生)	第173表	SD1015出土遺物觀察表 (弥生)
第135表	SX1008出土遺物觀察表 (弥生)	第174表	SD1018出土遺物觀察表 (弥生)
第136表	SP1030出土遺物觀察表 (弥生)	第175表	SD1030出土遺物觀察表 (弥生)
第137表	SP1042出土遺物觀察表 (弥生)	第176表	包含層出土遺物觀察表 (弥生)
第138表	SP1118出土遺物觀察表 (弥生)		
第139表	SP1147出土遺物觀察表 (弥生)		
第140表	SP1162出土遺物觀察表 (弥生)		
第141表	SP1177出土遺物觀察表 (弥生)		
第142表	SP1199出土遺物觀察表 (弥生)		
第143表	SP1220出土遺物觀察表 (弥生)		
第144表	SP1222出土遺物觀察表 (弥生)		
第145表	SP1225出土遺物觀察表 (弥生)		
第146表	SP1262出土遺物觀察表 (弥生)		
第147表	SP1277出土遺物觀察表 (弥生)		
第148表	SP1330出土遺物觀察表 (弥生)		
第149表	SP1405出土遺物觀察表 (弥生)		
第150表	SP1417出土遺物觀察表 (弥生)		
第151表	SP1459出土遺物觀察表 (弥生)		
第152表	SP1478出土遺物觀察表 (弥生)		
第153表	SP1491出土遺物觀察表 (弥生)		
第154表	SP1517出土遺物觀察表 (弥生)		
第155表	SP1520出土遺物觀察表 (弥生)		
第156表	SP1613出土遺物觀察表 (弥生)		
第157表	SP1694出土遺物觀察表 (弥生)		

図版目次

- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 図版 1 | 丸山遺跡遠景
丸山遺跡調査前風景 | 図版 12 | SB1012・1013床面精査状況
SB1012・1013遺構完掘状況
SB1014遺構完掘状況 |
| 図版 2 | 調査区北西部遺構検出状況
調査区南西部遺構検出状況 | 図版 13 | SB1016遺構検出状況
SK1114遺構完掘状況
SB1016・1017、SK1114遺構完掘状況 |
| 図版 3 | 調査区北東部遺構検出状況（西から）
調査区南東部遺構検出状況（西から） | 図版 14 | SB1019・1020遺構掘削状況
SB1021焼土分布状況
SB1021遺構完掘状況 |
| 図版 4 | 調査区中央部遺構完掘状況
調査区中央部遺構完掘状況 | 図版 15 | SB1022内焼土分布状況
SB1022遺物出土状況
SB1022遺構完掘状況 |
| 図版 5 | 調査区北東部遺構完掘状況
調査区南東部遺構完掘状況 | 図版 16 | SB1024遺構完掘状況
SB1025遺構完掘状況
SB1027遺構完掘状況 |
| 図版 6 | SD1027A地区遺物出土状況（北西から）
SD1027A地区遺物出土状況（南東から） | 図版 17 | SB1026遺物出土状況
SB1026遺物出土状況
SB1026遺構完掘状況 |
| 図版 7 | SD1027B地区遺物出土状況
SD1027C地区遺物出土状況 | 図版 18 | SA1001・1002完掘状況
SD1005遺構掘削状況
SD1005遺構掘削状況 |
| 図版 8 | SB1001・1002遺構完掘状況
SB1001遺構完掘状況
SB1002遺構完掘状況 | 図版 19 | SK1027配石部分
SK1112遺物出土状況
SK1112遺物出土状況 |
| 図版 9 | SB1003・1004遺構検出状況
SB1003・1004、SX1006床面精査状況
SB1003・1004、SX1006遺構完掘状況 | | |
| 図版 10 | SB1005・1006遺構完掘状況
SB1005遺構完掘状況
SB1006遺構完掘状況 | | |
| 図版 11 | SB1008遺構完掘状況
SB1010遺構検出状況
SB1010遺構完掘状況 | | |

I 調査の経緯

1 調査にいたる経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づいて、四国4県を結ぶ幹線道路として計画された。徳島自動車道においては、まず最初に徳島～脇間について昭和48（1973）年10月「道路整備特別法」に基づき、建設大臣から第7次の施工命令が出され、昭和55年実施計画の許可、昭和56年1月に路線発表がされた。

昭和61年4月には道路局長通達により暫定施工に変更され、昭和62年11月に徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月には、藍住IC（追加IC）の施工命令が出され、6月に実施計画が許可されている。

この区間は徳島市川内町の徳島ICを起点とし、吉野川に並行して西進し、板野郡板野町の沖積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山脈を通過して脇IC（区間41.4km）を結ぶものである。

この間、徳島県教育委員会（以下「県教委」という。）は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。また、県教委は供用が第10次5カ年計画に取り入れられ、平成5年度が目標となっていることを受けて、昭和63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成5年4月、財団法人埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を発足させ、発掘調査に対応することとなった。センターでは発掘調査に当って、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することで、調査の効率化、迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査結果に基づくものであり、工事請負として発注するためには掘削土量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の状態及び層厚把握に努めた。また、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数に応じた調査方法、調査工期について検討を行い調査を実施した。その結果、平成5年3月に徳島～脇間の埋蔵文化財調査を終了することとなった。

脇～美馬間の第10次区間（区間11.7km）については、昭和63年5月に施行命令が出され、6月に路線発表が行われた。この区間の遺跡に関しても、徳島～脇間で実施された調査等に関する基本的な事項については適用され、その成果に基づいて周知の遺跡等は予定路線から極力回避するような方法で話し合いが行われた。平成4年4月には埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が成立し、脇町分で10遺跡65,600m²、美馬町分で5遺跡40,400m²の合計15遺跡106,000m²が調査の対象となった。発掘に際しては対象面積の規模やその立地状況等から調査効率の低下や進入路等の確保に関する問題点も多く、調査を進めるうえで困難を極める状況が想定された。また、当該区間の供用開始目標が平成9年度に設定されたことも受け、美馬～脇間においては、これまでの調査の経緯を踏まえ、より実態に即した調査基準の設定が図られ導入された。

平成4年度に脇町内3カ所（佐城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、美馬町内1カ所（滝ノ宮遺跡）の試掘調査が実施され、当該区間の調査が開始されることとなった。それから3年後、脇～美馬間の10次区間における発掘はピークを迎えることになる。一方、10次区間における発掘調査がピークを迎える頃、美馬～川之江間の第11次区間でも試掘・本調査が本格化し始め、県教委には各種団体からの要望書・質問書が提出された。これに先だって県教委では、センターの組織改正を行うとともに、より一層の調査体制の充実、強化を図り発掘調査に対応することとなった。センターとしても事業の一部変更などを実施して体制の充実を図り、当該区間の調査完了を目指して調査にあたった。そして、平成8年6月、田上Ⅱ、薬師遺跡芝坂地区の調査終了をもってすべて完了することとなった。

美馬～川之江間の第11次区間については、39遺跡323,195m²が調査対象面積となっており、平成10年度に供

用目標が設定された。調査にあたっては、試掘調査が優先されたが、当初の実掘見込み面積を上回る結果が出された。さらに一部の遺跡において調査の遅延を生じたため、他事業を割いて調査班を投入したが効果はあまりあがらなかった。そこで、先にも述べたがこうした様々な要因を踏まえ県教委は不足人員を教員派遣で対応する等、さらなる調査体制の充実、強化を図ることとなったのである。

ところで、各調査現場においては厳しい発掘調査が続く中、貴重な遺構、遺物等が確認されたことは極めて注目される。一重の環濠を巡らせ、防御的機能を具備した高地性集落の大谷尻遺跡、弥生時代前期末から後期後半の水田遺跡が確認された吉野川上流域を代表する大柿遺跡、煙管状土器焼成窯1基・灰原が検出された土井遺跡等、当時の社会構造の研究を今後さらに深めていく上で貴重な資料となるだろう。尚、発掘調査のベースとなっていた西部事務所は平成10年3月31日をもって閉鎖されることになり、昭和60年度の分布調査から始まった一連の発掘調査は閉じることとなった。また、調査終了後の出土遺物の整理作業については、公団・県教委の協議により平成10年度から開始することとなり、基本年次計画案を作成し、現在整理作業が進行中である。

調査組織及び整理解体制は以下である。

<調査組織>

所長	筒井豊祐（平成7・8年度）	
事務局長	柴田 広（平成6・7年度）	庄野徳保（平成8年度）
事務局次長	谷 一郎（平成8年度）	
総務課長	小林啓治（平成6・7年度）	長江 仁（平成8年度）
主事	三木和文（平成6・7年度）	西木未香（平成7・8年度）
	集堂正士（平成8年度）	
調査課長	紀伊司郎（平成6年度）	
調査第1課長	島巡賢二（平成8年度）	
調査第2課長	菅原康夫（平成8年度）	
調整係長	島巡賢二（平成6年度）	
調査係長	菅原康夫（平成6年度）	
課長兼調査第1係長	島巡賢二（平成7年度）	
主査兼調査第2係長	逢坂俊男（平成7・8年度主査兼調査係長）	
主査兼調査第1係長	南 信義（平成8年度）	
主査兼調査第2係長	佐々木清克（平成8年度）	
技術主任	酒井彰彦（平成6年度）	
技師	青木雅和（平成7・8年度）	笠井達雄（平成8年度）
西部事務所 所長	谷 一郎（平成8年度）	
次長	菅原康夫（平成8年度）	
縦貫担当係長	南 信義（平成8年度）	

調査担当

平成7年度

研究員 相原 聡 伊丹宇芳 久保脇義朗 下内新吾 常村 淳 原 芳伸 山田正之

平成8年度

研究員 小泉信司 板東勝美

整理組織

所長	寒川光明 (平成11・12年度)	本浄敏之 (平成13年度)
事務局長	細川靖夫 (平成11年度)	伊丹康裕 (平成12・13年度)
総務課長	井後伸一 (平成11年度)	高野 明 (平成12・13年度)
主査兼係長	福本紀美子 (平成13年度)	
主事	集堂正志 (平成11・12年度)	田所政義 (平成13年度)
整理普及課長	島巡賢二	
整理係長	西谷泰幸 (平成11・12年度)	貞野保仁 (平成13年度)
整理担当	報告書作成	
研究員	久保脇美朗	

第1表 四国縦貫自動車道（脇～美馬・美馬～川之江）埋蔵文化財調査地一覧表

番号	遺跡名	所在地	面積 (m ²)								備考	
			実掘面積	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度		
1	原 (Ⅰ)	美馬郡脇町北庄	380		380							
2	原 (Ⅱ)	美馬郡脇町北庄	1,500		1,560							報告書21集所収
3	鶴射	美馬郡脇町北庄	1,544		240	1,304						報告書21集所収
4	佐城 (Ⅰ)	美馬郡脇町脇町	565	165	400							
5	佐城 (Ⅱ)	美馬郡脇町脇町	779	89	70	620						報告書21集所収
6	佐城 (Ⅲ)	美馬郡脇町脇町	146	146								
7	田上 (Ⅰ)	美馬郡脇町田上	891			873	18					報告書27集所収
8	田上 (Ⅱ)	美馬郡脇町西田上	9,258			4,610	4,478	170				報告書27集所収
9	田上 (Ⅲ)	美馬郡脇町西田上	6,062		150	1,800	4,090					報告書27集所収
10	井口	美馬郡脇町井口	150		150							
11	薬師 (薬師)	美馬郡美馬町芝坂	9,335			330	9,005					報告書34集所収
12	薬師 (芝坂)	美馬郡美馬町芝坂	6,937			41	4,613	2,283				報告書34集所収
13	坊僧 (坊僧)	美馬郡美馬町坊僧	12,455		750	56	11,649					報告書34集所収
14	坊僧 (中黒)	美馬郡美馬町坊僧	229			154	75					報告書34集所収
15	坊僧 (東段)	美馬郡美馬町坊僧	5,850			116	5,734					報告書34集所収
16	坊僧 (西段)	美馬郡美馬町坊僧	63			63						報告書34集所収
17	池ノ浦	美馬郡美馬町池ノ浦	26			26						
18	滝ノ宮	美馬郡美馬町滝ノ宮	2,563	350	500		1,713					報告書21集所収
19	下突出	美馬郡美馬町中横尾	2,600				2,600					報告書21集所収
	脇～美馬		61,393	750	4,200	10,015	43,975	2,452				
20	荒川	美馬郡美馬町荒川	17,782				202	15,530	2,050			
21	吉永	美馬郡美馬町吉永	3,820				120	3,700				報告書39集所収
22	西屋敷	美馬郡美馬町中西	288				288					
23	中山	美馬郡美馬町中山	172				172					
24	西大佐古	三好郡美馬町突落	153				108	45				
25	清水	三好郡三野町清水	10,692			692		10,000				
26	塩塚	三好郡三野町清水	2,332			310	72	1,950				
27	加茂野宮 (Ⅱ)	三好郡三野町加茂野宮	300			300						
28	加茂野宮 (Ⅰ)	三好郡三野町加茂野宮	340			340						
29	大谷尻	三好郡三野町北原	4,595			95	4,500					
30	丸山	三好郡三野町勢力	14,760				11,110	3,650				本報告書所収
31	花園	三好郡三野町太刀野	3,456				356	3,100				報告書22集所収
32	太刀野山 (Ⅱ)	三好郡三野町アミダ堂	157			103	54					報告書22集所収
33	太刀野山 (Ⅰ)	三好郡三野町アミダ堂	450			450						報告書22集所収
34	台	三好郡三好町足代	1,203					1,203				報告書22集所収
35	宮ノ岡 (Ⅱ)	三好郡三好町足代	345					345				報告書22集所収
36	宮ノ岡 (Ⅰ)	三好郡三好町足代	898					898				報告書22集所収
37	東原	三好郡三好町足代	16,365			217	323	15,825				
38	西原	三好郡三好町足代	10,853			157	616	8,153	1,927			
39	円通寺	三好郡三好町足代	42,453				808	30,375	11,270			報告書28集所収
40	土井	三好郡三好町昼間	35,630			140	378	19,520	15,592			報告書38集所収
41	大柿	三好郡三好町昼間	53,012				1,562	22,960	28,490			
42	八幡	三好郡井川町八幡	1,250				20	1,230				報告書16集所収
43	井内	三好郡井川町西井川	277					277				報告書16集所収
44	井出上	三好郡井川町西井川	6,336				30	6,306				
45	相知	三好郡井川町西井川	15,500				120	15,380				
46	坊	三好郡井川町西井川	420					120	300			報告書16集所収
47	須賀	三好郡井川町西井川	3,869					689	3,180			報告書16集所収
48	末	三好郡井川町西井川	240					240				報告書16集所収
49	お塚	三好郡池田町トウゲ	5,314			354	1,238	3,722				
50	供養地	三好郡池田町クヤウジ	1,811			111	1,700					
51	山田 (Ⅱ)	三好郡池田町ヤマダ	1,515			285	1,230					
52	山田 (Ⅰ)	三好郡池田町ヤマダ	703			53		650				
53	馬路	三好郡池田町馬路	970						320	650		
54	源氏岡	三好郡池田町源氏岡	175								175	
55	林	三好郡池田町佐野	130							130		
56	和田	三好郡池田町佐野	1,220					1,220				
57	森常	三好郡池田町初草	90							90		
58	高毛	三好郡池田町高毛	25							25		
	美馬～川之江		259,901			3,607	25,007	167,088	63,374	825		
	計		321,294	750	4,200	13,622	68,982	169,541	63,374	825		



第1図 丸山遺跡調査位置図

2 調査の経過

(1) 調査の経過

丸山遺跡はその位置から従来から勢力上野遺跡として知られる遺跡の一部に含まれると考えられるが、四国縦貫自動車道建設に先行して実施された分布調査の際に名称を丸山遺跡と命名され、23795m²が遺跡の推定範囲とされた。試掘調査は重機を使用したトレンチ調査の方法で、平成7年4月27日から5月31日までの期間で延べ15日間行われた。試掘調査では総計48ヶ所のトレンチをあけ、288m²を試掘した。本調査は同年9月29日から翌3月31日にかけて実施され、10800m²を調査して年度末のため一旦作業を終了した。続く平成8年度は、前年度未調査地域3650m²について4月2日から発掘調査を再開し、同年12月5日に調査を終了した。

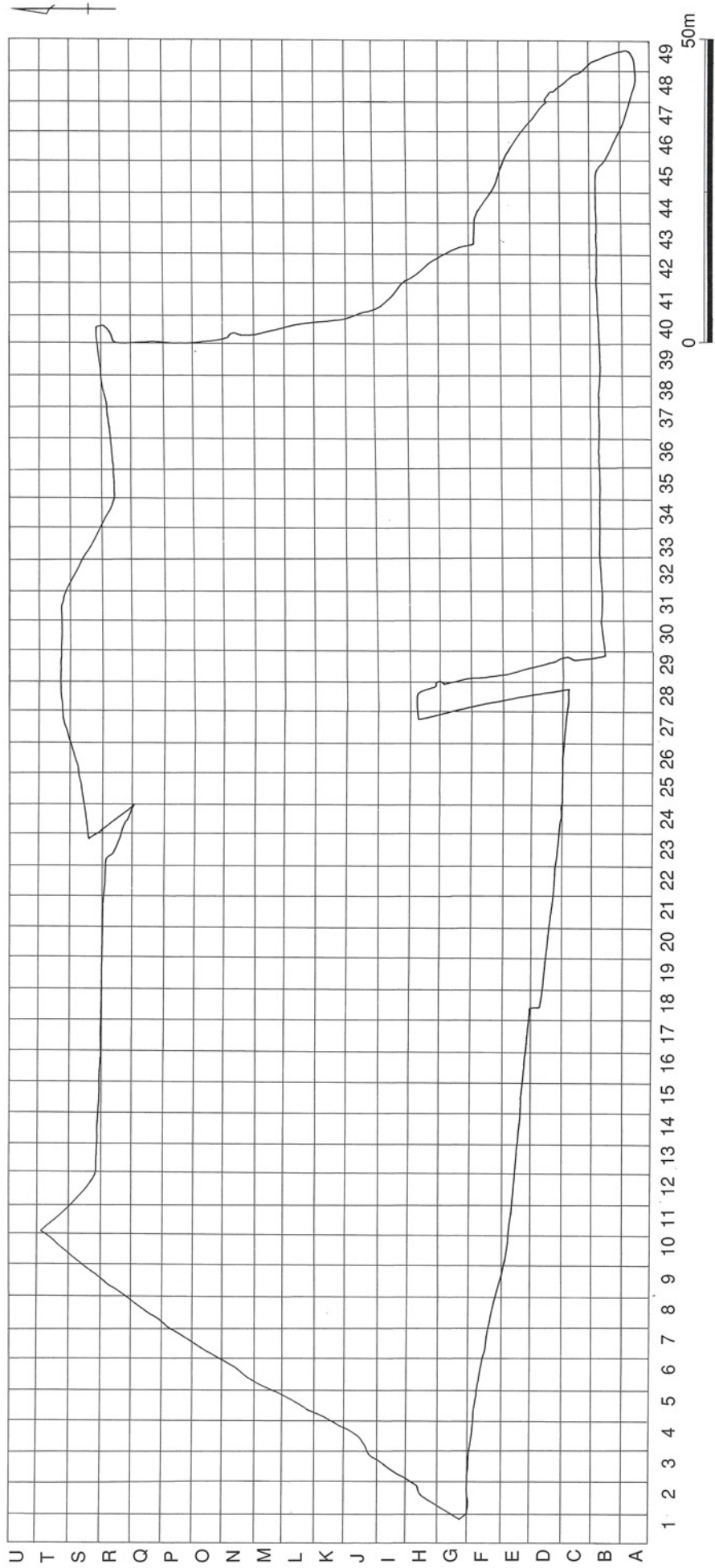
(2) 発掘調査の方法

調査を始めるにあたり、グリッドの配置は発掘調査統一基準にならい第IV系国土座標軸を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西の端を基準として北にABC…、東に123…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッドを表わすことにした。遺構記号、遺構番号は、調査区と調査年度ごとにそれぞれ別個に遺構番号を設定していたが、整理に際しては遺構の種類ごとに全て通し番号をふり直すこととした。また、時代の異なる遺構が存在したが同一の遺構面上で検出されたため、時代ごとに遺構番号を変えるようなことは行わず、同じ番号で統一する事とした。

(3) 調査日誌抄

		1月12日	SB1021床面精査状況を写真撮影
10月3日	道路公団と協議	1月18日	SD1027の遺構検出状況を写真撮影 掘削作業を開始
10月4日	業者と打ち合わせ		
10月5日	調査区内の伐採を開始	1月18日	SP群検出状況を写真撮影
10月12日	調査に先だって調査区東側の谷沿いの段丘面を再試掘	1月19日	SK1114遺構掘り下げ状況を写真撮影
11月1日	調査区内の町道東側の最上段部分から人力掘削作業を開始	1月25日	SB1015セクション図作成
		1月29日	SB1021遺構完掘
12月7日	一部の遺構の検出状況を写真撮影	1月31日	SB1023床面までの掘削終了
12月11日	SB1019～SB1023遺構検出状況を写真撮影 遺構配置図の作成作業開始	1月30日	SB1015遺構内遺構検出状況を写真撮影
12月12日	遺構掘削作業を開始	2月5日	SB1025遺物出土状況を写真撮影
12月14日	遺構の作図作業を開始	2月6日	SB1022遺構内遺構検出状況を写真撮影
12月18日	遺構内の遺物出土状況を写真撮影	2月7日	SB1024床面までの掘削終了
		2月8日	SB1018床面精査
		2月8日	SB1024床面精査

2月13日	調査区内町道西側下段部分の遺構検出状況を写真撮影	3月26日	中世墓ST1015の調査終了
2月13日	SB1005～1007・1009、SD1004・1005の遺構検出状況を写真撮影後、掘り下げを開始	3月27日	中世墓ST1016を完掘
2月14日	SB1015～1024など調査区東部分の空撮個別の遺構撮影開始	3月27日	SK1132完掘状況を写真撮影
2月19日	新たにSB1016を検出	4月11日	SK1022遺物出土状況を写真撮影
2月22日	新たにSB1017を検出	4月11日	SB1001・1002・1005・1006遺構完掘状況を写真撮影
2月23日	SD1027内の遺物検出状況を写真撮影	4月12日	調査区西側南西区域を空撮
2月26日	SB1008床面までの掘り下げ終了 床面精査開始 SB1009焼土検出状況を写真撮影	4月25日	SB1003・1004、SX1005の床面上の精査
2月27日	SB1007床面までの掘り下げ終了 床面精査	5月23日	近世墓ST1015を検出
2月28日	SB1006・1019・1020・1025の床面までの掘り下げ終了 精査開始	5月28日	調査区西側南西から中央部にかけての区域を空撮開始
2月29日	SB1006・1007床面精査終了後、遺構掘削を再開	5月28日	SB1003・1004を床面まで掘り下げ、床面上の精査開始
3月4日	SB1016・1017を完掘	7月2日	SB1003・1004遺構完掘
3月5日	空撮 遺構内の精査	7月5日	SX1005遺構完掘
3月6日	SB1009床面精査終了	7月9日	SB1003・1004遺構完掘状況を写真撮影
3月8日	新たにSB1002を検出	8月20日	SD1018・1019を検出 遺構検出状況を写真撮影後、掘り下げ開始
3月8日	SB1019・1020を完掘	8月29日	SD1015遺構検出状況を写真撮影
3月8日	SB1025を完掘	8月31日	新たにSD1012、SX1007を検出
3月12日	SD1012・1013の遺構掘削終了	9月2日	SX1007遺構検出状況を撮影後、掘削開始
3月13日	SB1026床面までの掘り下げ終了	9月4日	SB1010・1011、SX1008を検出 検出写真撮影後、遺構掘削を開始
3月14日	SA1001・1002を検出 SB1026遺構完掘	9月9日	SB1018遺物出土状況を写真撮影
3月16日	SB1001・1002・1005の床面までの掘り下げ終了 精査開始	9月11日	SX1008内の掘削終了
3月16日	SB1025を完掘	9月24日	SB1011の遺構内掘削作業 床面精査
3月18日	SB1009床面までの掘削終了 SB1027床面までの掘削終了	9月28日	SX1007内の掘削終了 床面精査開始
3月19日	SB1027の調査終了	9月28日	SD1005を完掘
3月19日	SB1007・1008を完掘	10月2日	SB1011床面精査終了
3月20日	調査区東側のSB1025～1027、SD1027及び西側のSB1007・1008を空撮	10月4日	SK1074～1079を検出
3月21日	SA1001・1002遺構検出終了	10月5日	新たにSB1014を検出
		10月21日	SB1012・1013を検出
		11月13日	SB1010・1011を完掘
		11月15日	空撮
		11月25日	SB1012・1013の床面までの掘り下げを終了、床面精査



第2図 丸山遺跡 グリッド配置図

12月2日 調査区西側中央部から北西部にかけての
地区の空撮

12月2日 遺構完掘状況を写真撮影

12月3日 SB1012・1013・1014を完掘

12月6日 調査を終了、センターに帰還

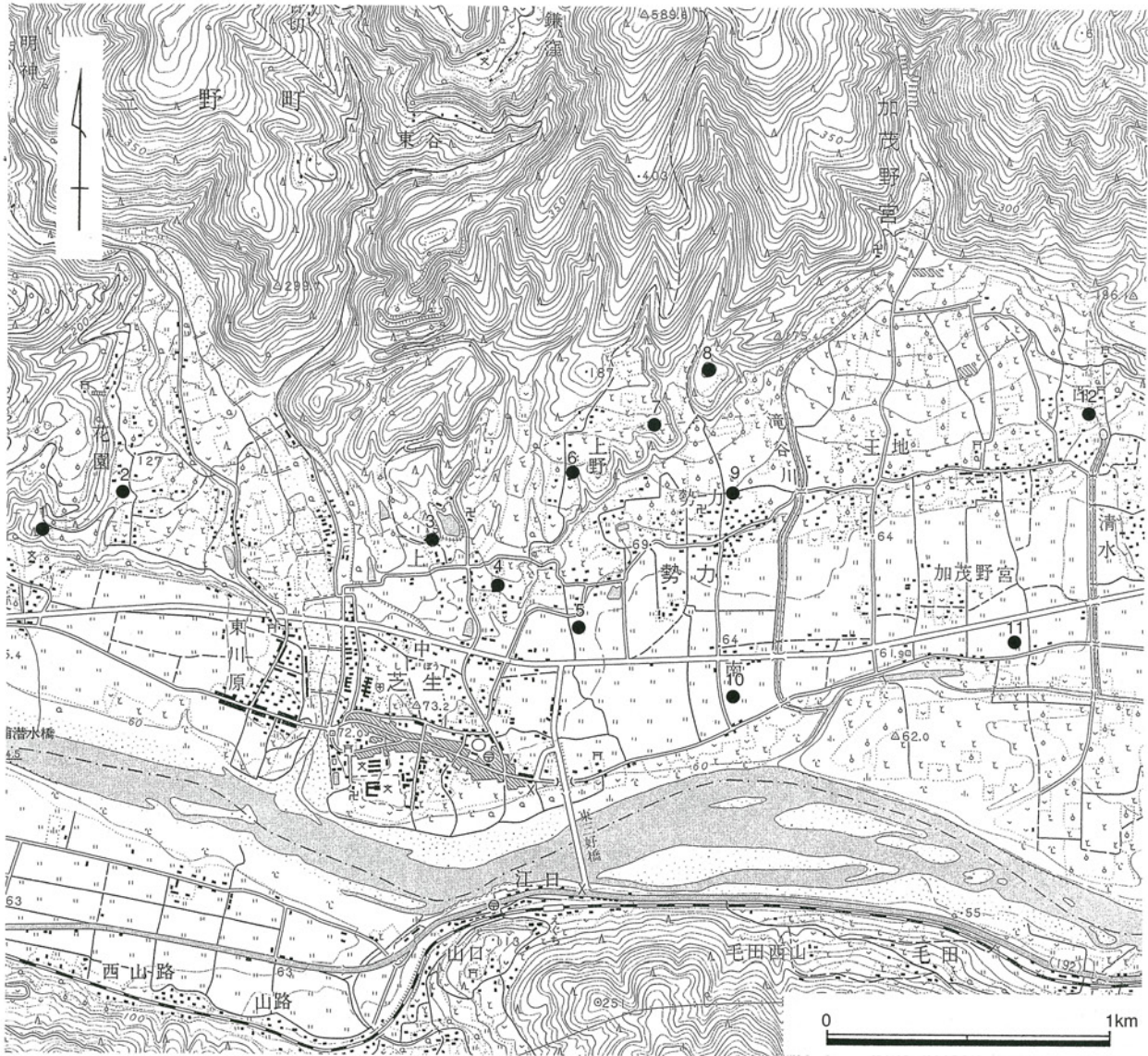
Ⅱ 遺跡の立地と環境

(1) 遺跡周辺の地理的環境

徳島県と香川県の県境を東西100kmにわたってのびる阿讃山脈は、分水嶺から南北に張り出した多数の急峻な尾根を持ち、山裾には山腹から流れ出る中小の河川による浸食作用によって多くの扇状地が形成されている。これらの扇状地は、山脈の南側を平行して流れる吉野川とその支流によって開析され、至る所に段丘面を形成している。吉野川北岸中流域の三野町も町の面積の大部分は北側の阿讃山脈によって占められているが、南側の吉野川沿いには河内谷川や滝谷川などによって形成された段丘面や扇状地が発達している。三野町の北を東西に連なる阿讃山脈の分水嶺には、標高1042mの大川山、1059mの竜王山をはじめ、太刀野山、鷹林山、三頭山など800m前後の山々が連なり、分岐した急峻な尾根が山麓部までのびている。このため、人家は吉野川沿いの沖積地や扇状地上を中心に、河内谷川をはじめとする小河川の流域に点在している。本遺跡が位置する勢力地区は、地区の北側は阿讃山脈の南麓に形成された上野の河岸段丘が広がり、南側は滝谷川・大谷によって形成された加茂野宮の扇状地や吉野川の沖積地によって占められ、段丘と扇状地との境は約30m以上の比高差を持つ段丘崖が形成されている。本遺跡はこのように対照的な地形を持つ勢力地区の阿讃山脈南麓の標高140mの河岸段丘面上に形成され、遺跡の北側は丸山から北にのびる尾根を通じて阿讃山脈に連なっている。

(2) 歴史的環境

三野町では従来からその存在が知られてきた遺跡は多くはないが、阿讃山脈の山裾に発達した段丘面上から扇状地、沖積地にかけての広い範囲に点在している。旧石器時代から縄文時代にかけての遺物を出土する遺跡は、ナイフ形石器が採集された勢力の東上野遺跡でだけであるが、三野町の周辺に目を向けてみると、吉野川を挟んだ対岸の三加茂町では旧石器時代のナイフ形石器が採集された丹田遺跡をはじめとして、縄文時代早期の押型文や前期の爪形文土器の他、中・後期にかけての遺物を出土した加茂谷川岩陰遺跡群、晩期前半の土器や石器が大量に出土した稲持遺跡など、徳島県を代表する縄文時代の遺跡が存在している。続く弥生時代には、三野町内でも本遺跡以外に吉野川の支流、滝谷川によって形成された扇状地上に位置する加茂野宮遺跡や、段丘面上の館山、芝生上、勢力などの遺跡が知られてきた。加茂野宮遺跡は平成8年に調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代、古代・中世にまたがる集落を中心とした複合遺跡であることが明らかになった。弥生時代の遺物は自然流路内から完形品を多数含む後期の遺物が出土している。また、館山遺跡は縦貫道の調査によってその呼称を大谷尻遺跡と改変されたが、発掘調査によって、段丘面縁辺部に環濠が巡らされる弥生時代中期末から後期初頭にかけての高地性集落が検出されている。古墳時代の遺跡は集落としては先述した加茂野宮遺跡以外は不明であるが、古墳は芝生の大塚古墳、桶川古墳の存在が知られている。加茂野宮遺跡では竈を持つ方形の堅穴住居跡が、須恵器や土師器を伴って9基検出されているが、出土した須恵器などから古墳時代後期の遺跡と考えられている。現在、町内に残されている古墳は先述した大塚古墳と桶川古墳だけである。大塚古墳の現状は、墳丘の盛土を除去され石室の石が露出した状態であるが、後期の古墳と考えられている。一方の桶川古墳は板状の片岩を用いた箱式石棺であるが、石室以外に出土品がなく、時期についても不明である。これ以外にも勢力や加茂野宮・芝生の各地区の扇状地や沖積地に古墳が存在したことが伝えられている。隣接する美馬町や対岸の三加茂町でも吉野川に面した段丘面上や沖積地上に古墳が点在していることを



- | | | | | | | |
|-----|---------|---------|---------|----------|----------|------------|
| 遺跡名 | 1. 花園遺跡 | 3. 桶川古墳 | 5. 大塚古墳 | 7. 丸山遺跡 | 9. 勢力北遺跡 | 11. 加茂野宮遺跡 |
| | 2. 花園窯跡 | 4. 芝生城址 | 6. 上野遺跡 | 8. 大谷尻遺跡 | 10. 勢力遺跡 | 12. 清水上野遺跡 |

第3図 三野町周辺主要遺跡分布図

考えると、本町内でも本来はさらに多くの古墳が存在していたのであろう。古代の三野町は文献上では「倭名抄」中の記載や、平城京出土の8世紀段階の木簡の記載から、三野郷が存在していたことは間違いないと考えられてきたが、古墳時代同様、近年までそのような文献上の記録に該当するような時代の遺跡の存在は全く知られてこなかった。しかし、先述した加茂野宮遺跡では、3面に分けられた遺構面の最上層から中世の遺構に混じって平安時代と考えられる遺構や遺物が出土している。遺構自体は中世段階の遺構と重なり合っただけで出土したため不明な部分が多いが、土師器や黒色土器・須恵器に混じって出土した遺物の中には、青銅製の帯金具や印章などが含まれていることから、単なる集落ではなく官衛などに近い性格の遺跡であろう。続く中世も三野町では三好氏の本拠とされる芝生の芝生城をはじめ、清水の天下山城・清水城・田中城・加茂野宮城、勢力の館山城など多くの城跡の伝承が伝えられてきたが、遺跡の存在自体は花園の窯跡以外、全く知られていなかった。しかし、近年、加茂野宮遺跡から土坑を中心とする12世紀末頃から13世紀にかけての中世前半期の遺構が検出されたことで、遺跡周辺に同時期の集落が存在する可能性が考えられてきている。また、本遺跡や花園遺跡からも、16世紀代の中世後半期の火葬墓が発見され、ようやく、この地域での中世段階での遺物や遺構が明らかにされつつある。

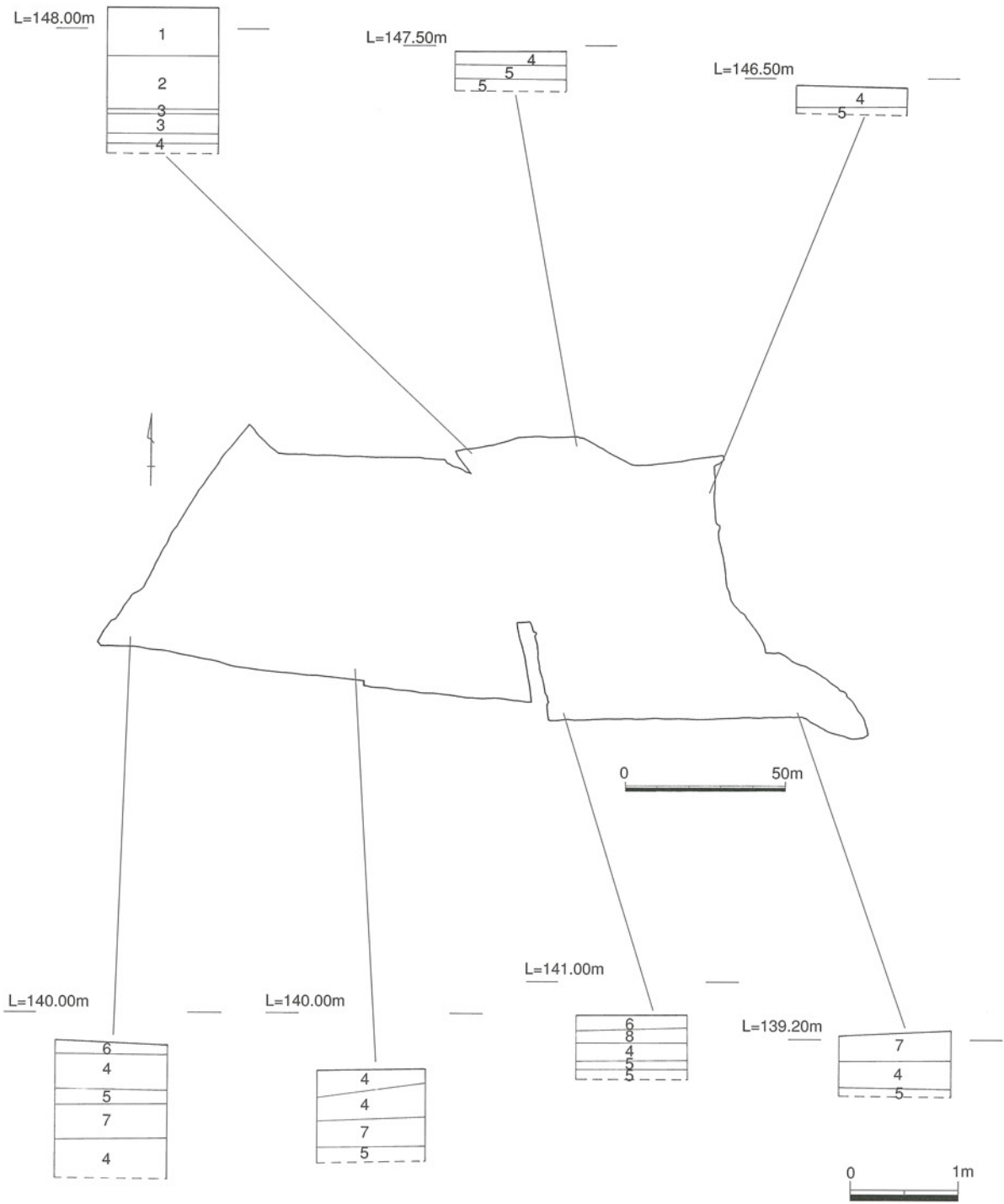


第4図 丸山遺跡 遺構配置図

Ⅲ 調査の成果

1 遺跡周辺の地形と基本層序

徳島県と香川県の県境を東西に連なる阿讃山脈の南側斜面は、山腹から流れ落ちる中小の河川による浸食作用によって山裾に多くの扇状地が形成されている。これらの扇状地は、さらに山脈の南側を平行して流れる吉野川とその支流によって開析され、至る所に段丘面が点在している。本遺跡が位置する吉野川北岸中流域の三野町も、町内の阿讃山脈の山麓部と沖積地との境界付近に段丘面が発達し、沖積地との間には段丘崖が続いている。三野町の北の阿讃山脈中の標高733mの天久保山から南にのびる尾根は、標高140mの上野の河岸段丘に連なり、尾根との境は標高187mの丸山と呼ばれる周囲から独立した小高い山になっている。この丸山の東麓の標高約165m付近に始まる上野の河岸段丘は、南に向かって徐々にその幅を広げ、緩斜面を形成しながら丸山の南側を回り込むように南西にのび、標高約120m付近で比高差にして約30mの段丘崖となって一気に沖積地に向かって落ち込んでいる。これらの段丘崖には所々に浸食作用によると考えられる「U」字状、または「V」字状の切れ込みを持つ谷が段丘内部に深く伸びているが、段丘面上の緩斜面上にもこれらの谷に流れ込む浅い浸食谷が幾筋か走っている。丸山遺跡の調査区は、北から南に向かって降る上野の段丘上の緩斜面を東西に横断するように設定されたため、調査区の北側が南側に比べて高く、7mから8mの比高差を持っている。さらに沖積地から段丘面上にのび、途中で交わる東西2本の町道のうち、東の段丘崖から東側の町道付近までの間は北側の一部に比較的傾斜の急な場所が見られる以外は斜面の傾斜が緩く平坦部が多い。これに対して、この東側の町道から丸山の麓を走る西側の町道との間の三角形の区間は、丸山の麓に近い調査区の南西部分が谷状に大きくくぼんでいるため、西側にいくほど傾斜が急になっている。この区間ではこのような傾斜が急な地形を削平して耕作地を造成しているため、東の町道沿いに近い区域以外は包含層が残されているところが少なく、耕作土を除去した段階で段丘の地山が露出する所が多かった。ただ、調査区の南西側の谷状の窪地周辺では周辺からの土砂の流入による堆積が著しく、1m近くの土壌の堆積が残されているところもあった。一方、町道の東側でも旧地形が北西から南東に向かって緩やかに傾斜している関係で、耕作地を造成する際には本来の比高が高いところほど削平を多く受けるためか、調査区内にあった果樹園も北東側により大きな削平が行われていた。それでも調査区の北壁際では複数のシルト質土壌の堆積と、黄褐色シルト質土の遺構検出面との間に暗灰黄色砂質土の遺物包含層が厚さ20cm前後の堆積で残され、町道沿いではその厚さが30cmを越えるところも確認された。



- | | | | |
|-----------|----------------|------------|----------------|
| 1. 黄褐色 | シルト質土(2.5Y5/6) | 5. にぶい黄橙色 | シルト質土(10YR6/4) |
| 2. オリーブ褐色 | シルト質土(2.5Y4/6) | 6. 暗オリーブ褐色 | シルト質土(2.5Y3/3) |
| 3. 明黄褐色 | シルト質土(2.5Y7/6) | 7. 褐色 | 粘質土(10YR4/4) |
| 4. にぶい黄褐色 | 粘質土(10YR5/4) | 8. 灰黄褐色 | シルト質土(10YR6/2) |

第5図 丸山遺跡土層図

2 検出された遺構と遺物

(1) 弥生時代の遺構と遺物

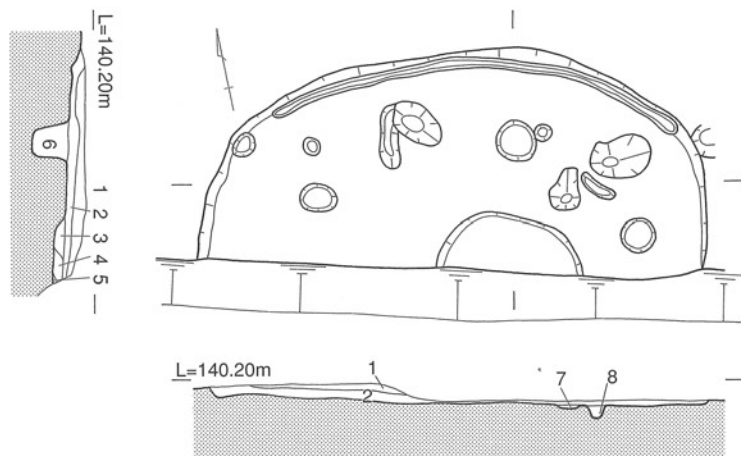
竪穴住居跡

竪穴住居跡 1 (SB1001) (第6図)

遺構の南側半分を農地の造成の際に削平されているが、本来は直径約5.4mの規模を持つ円形のプランの竪穴住居跡であったと考えられる。削平は残された遺構にもおよび、南側では床面直上まで削平され遺構覆土がほとんど残されていなかった。住居址の北側の床面の一部には側壁に沿って浅い周溝が巡らされ、中央からやや東よりに設けられた長径約1.6m、深さ10cmの楕円形の炉址の周辺には炉を円く囲むように掘り込まれた柱穴が3基残されていた。遺構内に残された覆土は二枚に分けられ焼土と炭化物が多く混入していたが、火災住居かどうかは明らかではない。

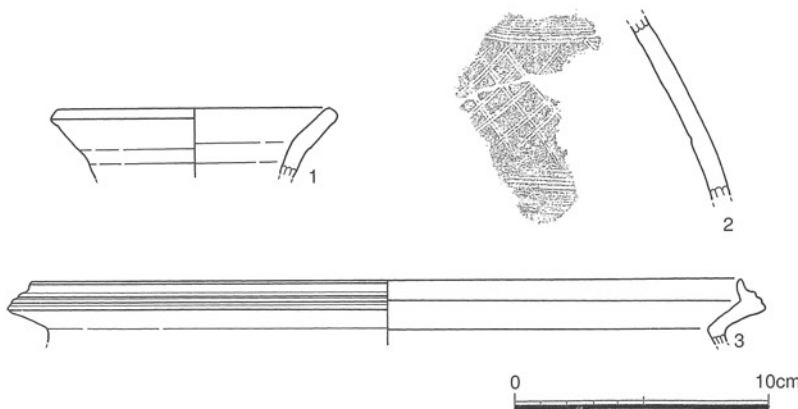
出土遺物 (第7～8図)

SB1001は遺構の南側半分がほぼ完全に失われていたうえに、残された北側部分も覆土の多くが削平



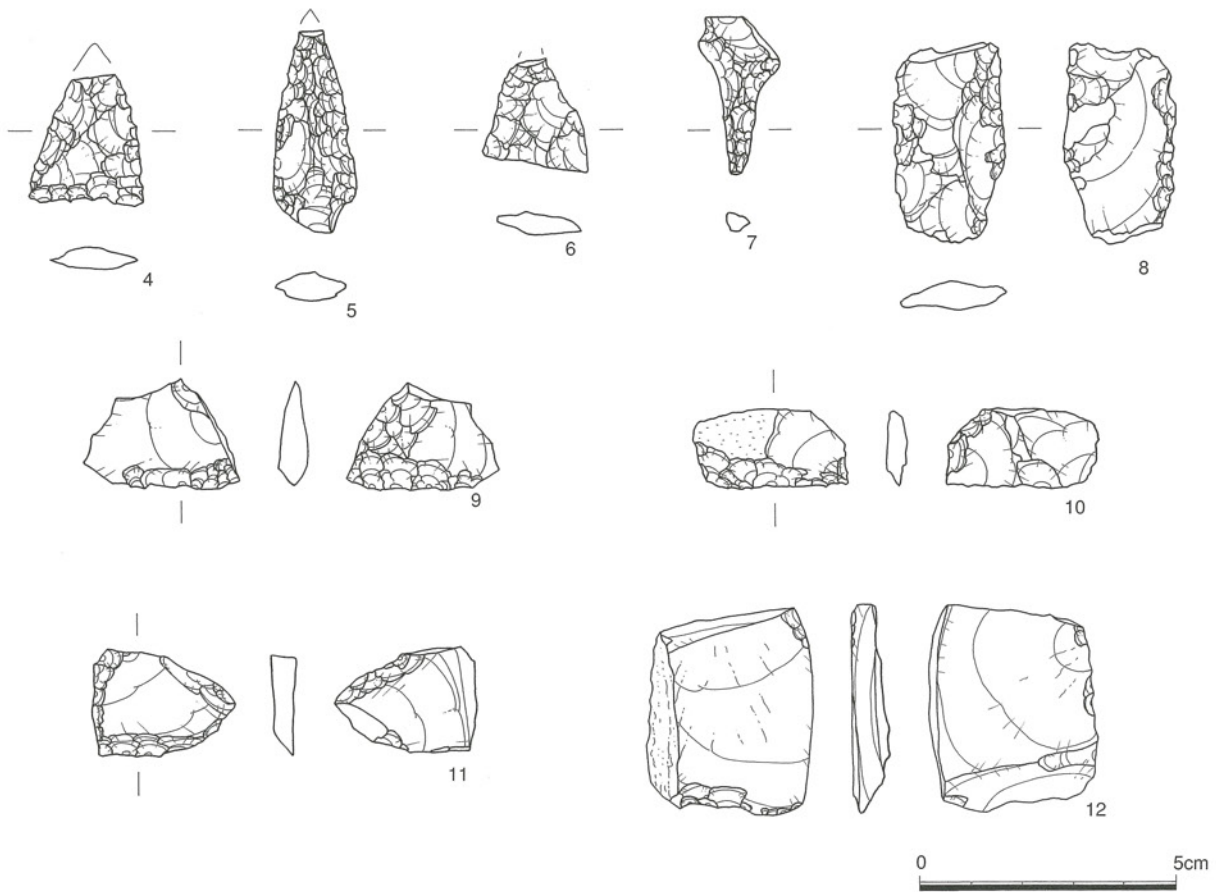
- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. におい黄褐色 シルト質土(10YR6/4) | 5. におい黄褐色 シルト質土(10YR7/4) |
| 2. におい黄褐色 シルト質土(10YR5/4) | 6. 褐色 シルト質土(10YR4/6) |
| 3. におい黄褐色 シルト質土(10YR5/4) | 7. 褐色 シルト質土(10YR4/6) |
| 4. 褐色 シルト質土(10YR4/6) | 8. におい黄褐色 砂質土 (10YR5/4) |

第6図 SB1001 実測図



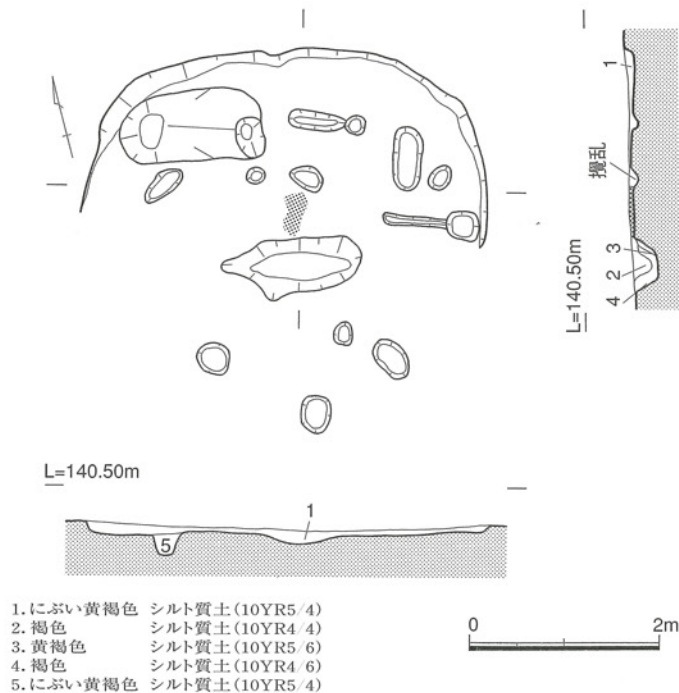
第7図 SB1001 出土遺物実測図(1)

を受けているため出土した遺物のごくわずかである。1は上方への開きの少ない緩やかに外反する口縁部を持つ壺で、口縁端部は円く仕上げられている。2も壺の体部の破片である。櫛描文によって上下を区画された区画内に半截竹管により格子目文が描かれている。3は口径約23cmをはかる大型の甕の口縁部である。頸部で「く」の字に屈曲し直線的に外上方にのびる短い口縁部は端部が上方に拡張され、凹線が3条巡らされている。石器はサヌカイト製の打製石鏃や石錐、削器などが出土している。打製石鏃は平基無茎式と凸基有茎式がそれぞれ1点ずつ出土したほか、基部を欠失しているため形態が不明なものが1点出土している。打製石錐は錐部が比較的短い。5点出土している削器のうち4点(8～11)は素材の剥片の縁辺部に簡単な調整を加えた小型の



第8図 SB1001 出土遺物実測図(2)

ものであるが、1点(12)は大型の剥片を折断したものを使用している。また図示したもの以外にも結晶片岩製の打製石庖丁の破片が1点出土している。

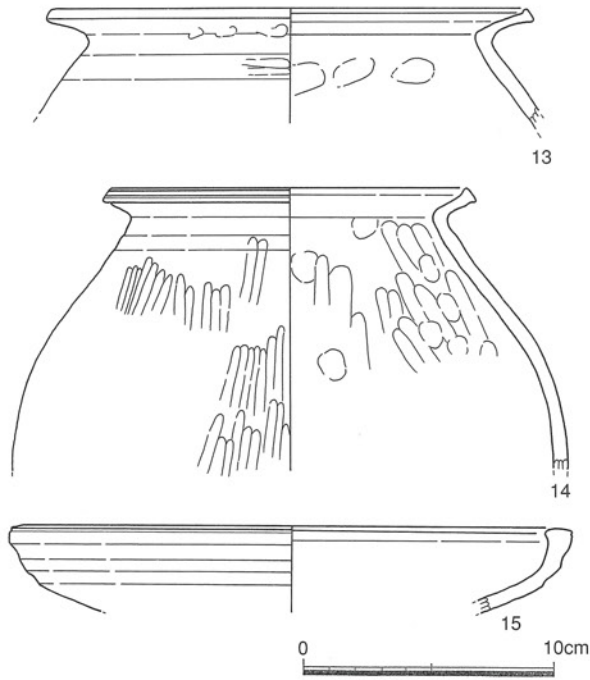


- 1. にぶい黄褐色 シルト質土(10YR5/4)
- 2. 褐色 シルト質土(10YR4/4)
- 3. 黄褐色 シルト質土(10YR5/6)
- 4. 褐色 シルト質土(10YR4/6)
- 5. にぶい黄褐色 シルト質土(10YR5/4)

第9図 SB1002 実測図

竪穴住居跡 2 (SB1002) (第9図)

遺構が北から南に向かって下る緩斜面上に位置しているうえ、掘り込みが浅いため元々比高の高かった北側の側壁の一部が半円形に残されているだけであるが、残された部分から推測すると直径約4m余りの円形のプランを持った竪穴住居であったと考えられる。北側の側壁沿いの床面からは周溝は検出されなかったが、削平された面積が多いため、部分的に周溝が掘り込まれていた可能性もある。残された側壁から住居址の中央部付近に位置していたと考えられる場所には長さ約1.4m、幅0.6m、深さ30cmの不整形のプランを持った炉址が検出された。この炉址の内部とその周辺には多量



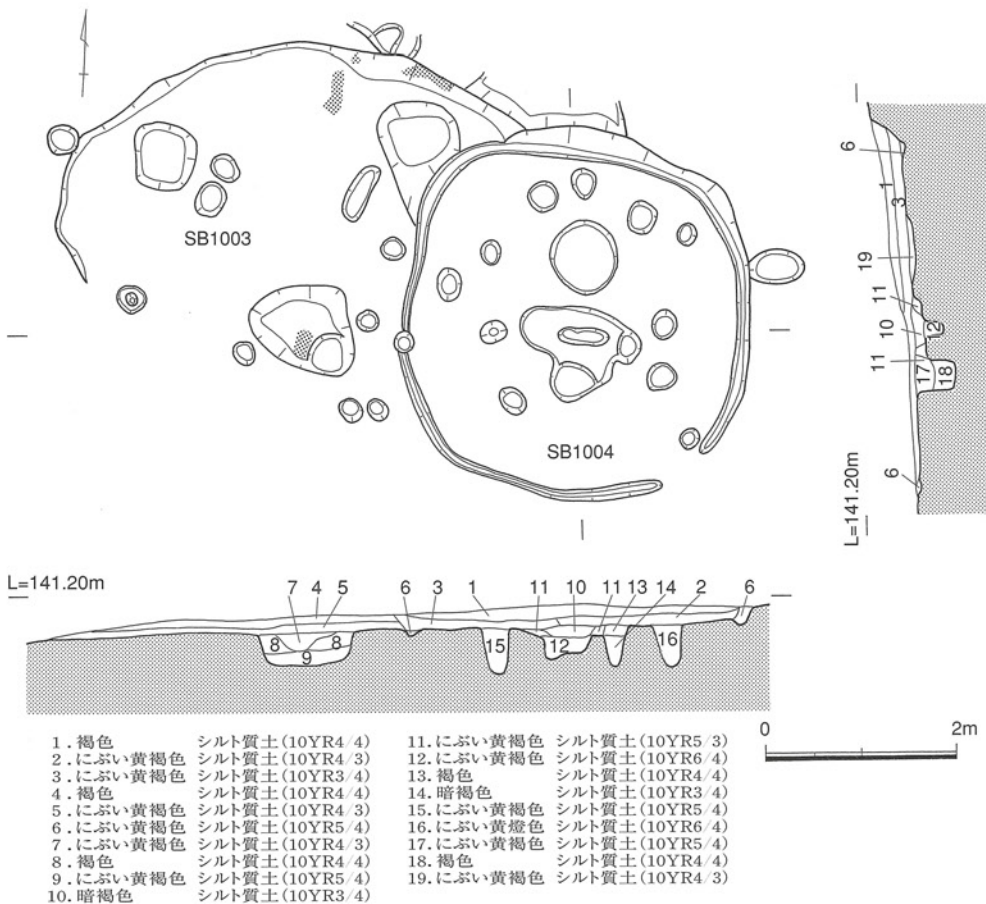
第10図 SB1002 出土遺物実測図

体部を持つ甕で、口縁端部は上方または上下にわずかに拡張されている。14の口縁の拡張部には凹線が2条巡らされている。15は緩やかに内湾する体部と内方に拡張された口縁端部を持つ口径約22cmの大きさの高杯の杯部である。拡張された口縁端部は平坦に仕上げられ、口縁部には幅広で浅い凹線が2条巡らされている。

の炭化物と焼土が残されていたが、特に炉址の北側では長さ約50cm、幅20cmの範囲で焼土が集中するところがあった。SB1001と同様、覆土の大半が失われていたため、火災住居かどうかは明らかにできなかった。削平を逃れた床面と残された側壁から住居であったと推測される範囲からは11基のピットが検出されているが、そのなかで不規則な間隔ではあるが炉址との間隔が比較的近く炉址を中心に円形に配された7基ないしは8基のピットがこの住居址に伴う柱穴であったと考えられる。

出土遺物 (第10図)

遺構内の削平が激しく出土した遺物は少数である。13・14は「く」の字に強く屈曲する頸部から外上部にのびる口縁部と「ハ」の字に開く



第11図 SB1003・1004 実測図

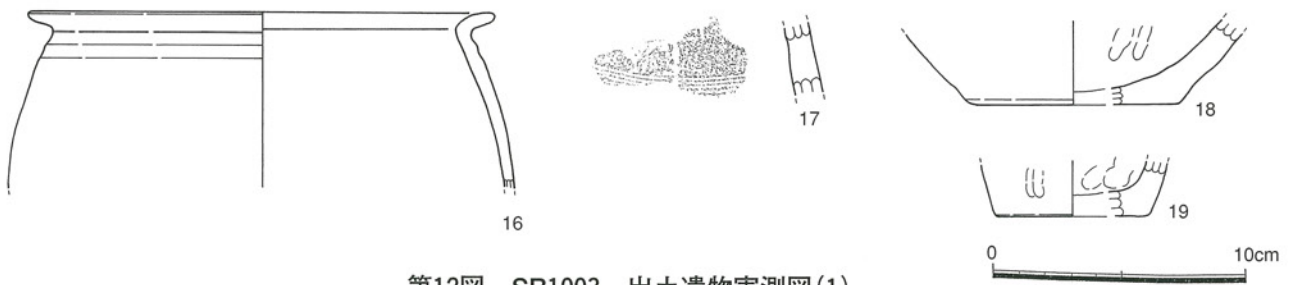
竪穴住居跡 3 (SB1003) (第11図)

SB1002同様、緩斜面上に浅く掘り込まれた竪穴住居のため、比高の高い北側部分しか側壁が残されていない不整楕円形の竪穴住居址である。遺構は北側の側壁の周辺を残して床面の半分以上が削平され、東側は別の竪穴住居跡SB1004と切り合っている。削平を逃れた北側の側

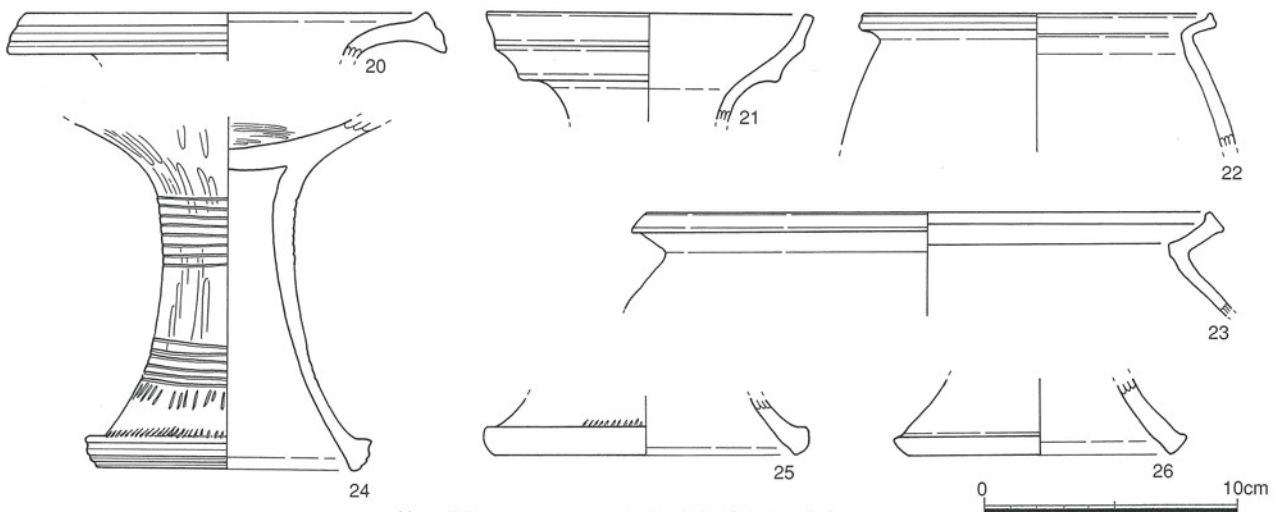
壁の床面では周溝は検出されなかったが、削平を受けた面積が全床面の3分の2近くを占めていることから周溝が存在していた可能性もある。床面には長軸の長さ約1.1m、深さ30cmの不整形の炉址が掘り込まれている。削平を逃れた覆土からは多くの焼土や炭化物が検出されたが、特に北側の一角からは床面上で炭化した大型の木片が集中して出土していることから火災住居であったと考えられる。炉址の南東約2mの地点の削平を受けた床面に残されていた浅いピット状遺構からブロック状の焼土が検出されたが、SB1004の周溝がこの焼土ブロックを切って設けられていることから、SB1003はSB1004に先行する時期の住居址であると考えられる。また、炉址から北西に約1m離れた床面上には台石に用いられたと考えられる長径約40cmの楕円形の扁平な砂岩の礫が置かれていた。

出土遺物 (第12・14図)

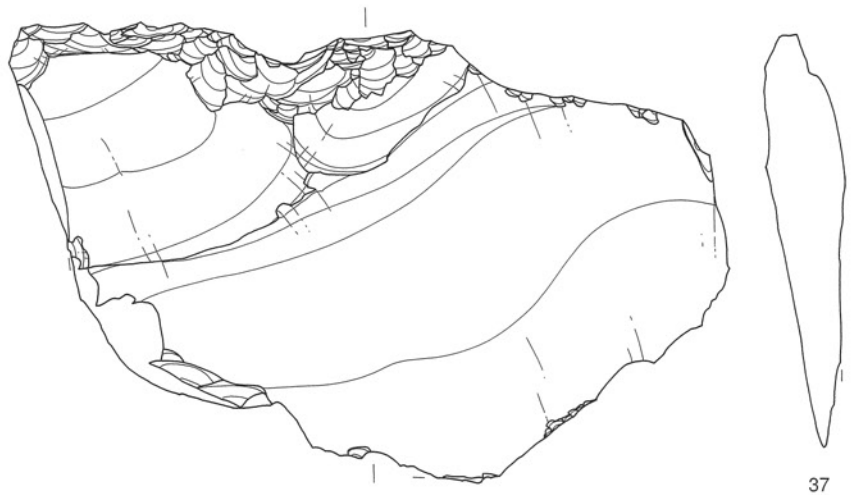
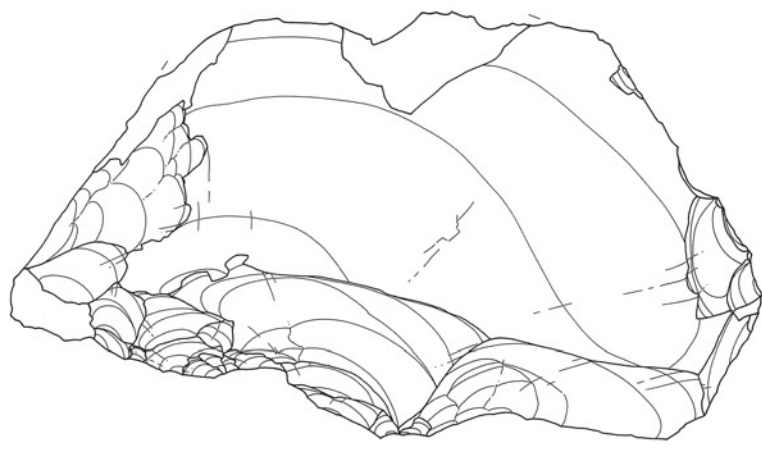
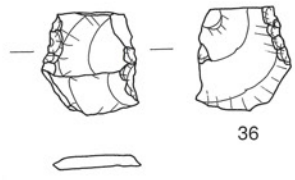
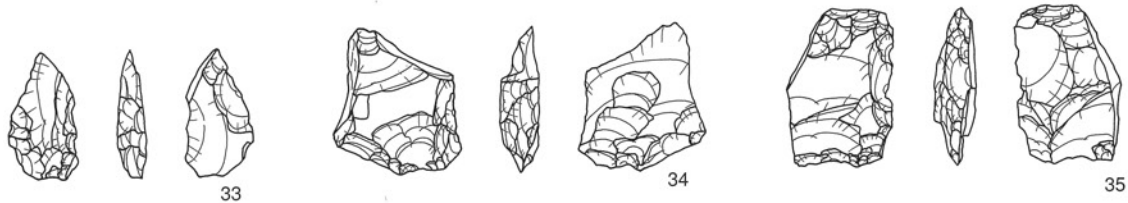
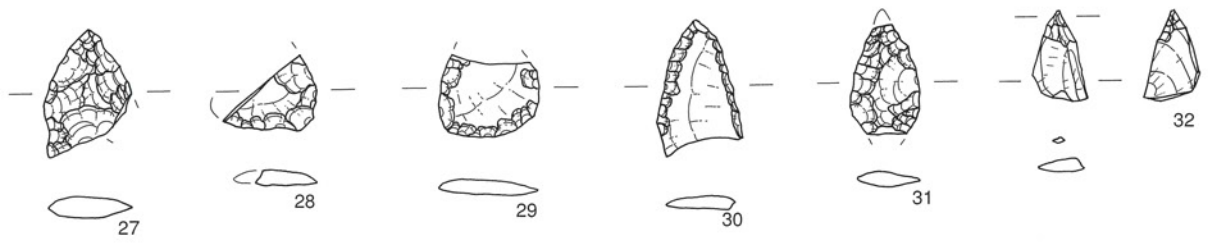
16は頸部が「く」の字に屈曲し外反する短い口縁部と倒卵形の体部を持つ甕である。口縁端部は円く仕上げられ、頸部には横ナデ調整が二段にわたって施されている。17は体部上半に櫛描波状文が施された壺の体部の破片である。石器はサヌカイト製の打製石鏃27~31や細部調整が加えられた剥片、盤状剥片などが出土している。5点出土した打製石鏃で形態がわかるものは4点である。27は凹基無茎式、28・29は平基無茎式、31は凸基有茎式である。32は剥片の縁辺部に調整を加えて尖らせた石錐と考えられる。33~36は細部調整が加えられた剥片である。33~35は剥片を折断し、折断面や剥片の縁辺部に調整を加えて刃部が作り出されている。36は薄い剥片の縁辺部に簡単な調整が施されている。37は横長の大型の盤状剥片である。剥片剥離の際の打面は剥片剥離後に除去されている。



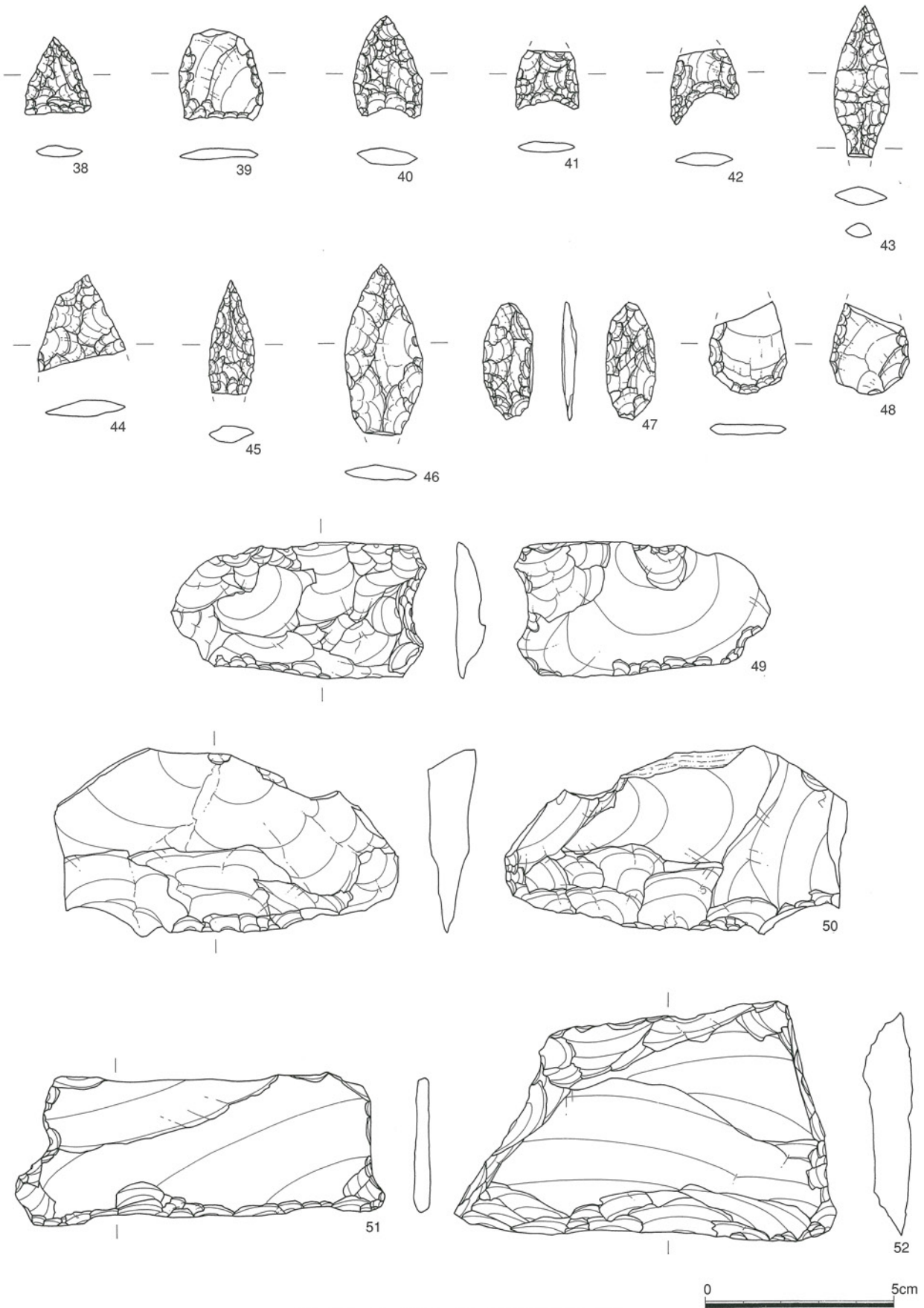
第12図 SB1003 出土遺物実測図(1)



第13図 SB1004 出土遺物実測図(1)



第14图 SB1003 出土遺物実測図(2)



第15图 SB1004 出土遺物実測図(2)



第16図 SB1004 出土遺物実測図(3)

竪穴住居跡 4 (SB1004) (第11図)

SB1003と切り合って検出された竪穴住居である。床面の高さがSB1003とほぼ同じレベルにあったため、側壁は北側の一部しか残されていなかったが、遺構をほぼ一周するように床面に掘り込まれた周溝によって直径3.7m前後の円形の竪穴住居であったことがわかる。この周溝の内側には、削平を受けながらも床面のほぼ中央に長さ約1.3m、深さ30cmの不整楕円形の炉が掘り込まれ、これを囲むように柱穴と考えられるピットが13基検出されたが、SB1003の柱穴と重なっているため配置が不規則でどれがこの住居址に伴うものかは判断出来なかった。炉址内部の覆土は炭化物が若干混入する程度で、他の住居址のように焼土粒や層状の焼土の堆積は検出されなかった。

出土遺物 (第13・15・16図)

20は大きく外反する口縁と上下に拡張された口縁端部を持つ広口壺の口縁である。やや垂れ下がり気味の拡張部には凹線が2条巡らされている。21は細く締まった筒状の頸部と内湾しながら外上方に向か

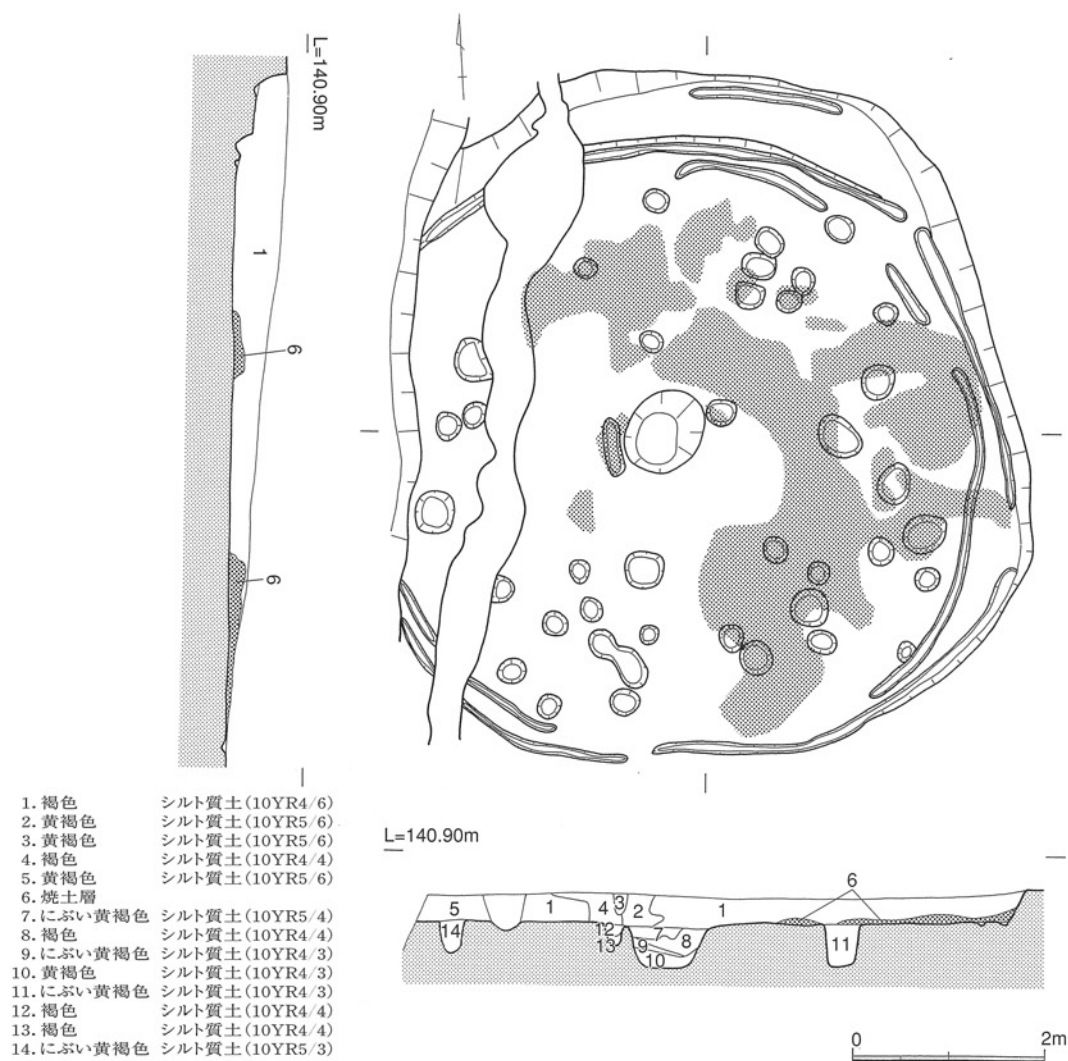
って大きく開く口縁部を持つ壺である。端部が方形に仕上げられる口縁部には、平行する2本の突帯が廻されている。22は倒卵形の体部と「く」の字に外反する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され凹線が1条巡らされている。23も「く」の字に屈曲する頸部から内湾気味に外上方にのびる短い口縁部を持つ甕である。体部は膨らみが強く、口縁端部は上下に拡張されるだけで凹線は施されていない。24～26は何れも高杯の脚部である。24は炉址近くの床面から出土した個体で、外下方に向かって「ハ」の字に開く脚の端部は上方に拡張され、脚柱部や裾部には沈線や連続する刺突文が施されている。25の脚も裾部に連続する刺突文が巡らされている。石器はサヌカイト製の打製石鏃を中心に多くの石器が出土している。38～46はそれぞれ38・39が平基無茎式、40～42が凹基無茎式、43が凸基有茎式の打製石鏃である。45・46は凸基無茎式または凸基有茎式の可能性がある。47は石鏃の側縁に縦に打撃を加えたものである。49は片側に抉りを持つサヌカイト製の打製石庖丁と考えられる石器で、刃部の一部が摩滅している。50はサヌカイトの剥片の縁辺に粗い調整を施して削器としたものである。51は両端にくり込みを設けた結晶片岩製の打製石庖丁で、刃部が著しく摩滅している。52は同じく不整形をした結晶片岩製の大型の打製石庖丁と考えられる石器である。53は片岩製の柱状石斧を敲石に転用したもので、先端部と側縁部の一部に敲打痕が集中している。54は扁平な緑色岩の表面と側縁部を砥石として使用したものである。55は扁平な砂岩礫の周辺に敲打痕が残された敲石である。

竪穴住居跡 5 (SB1005) (第17・18図)

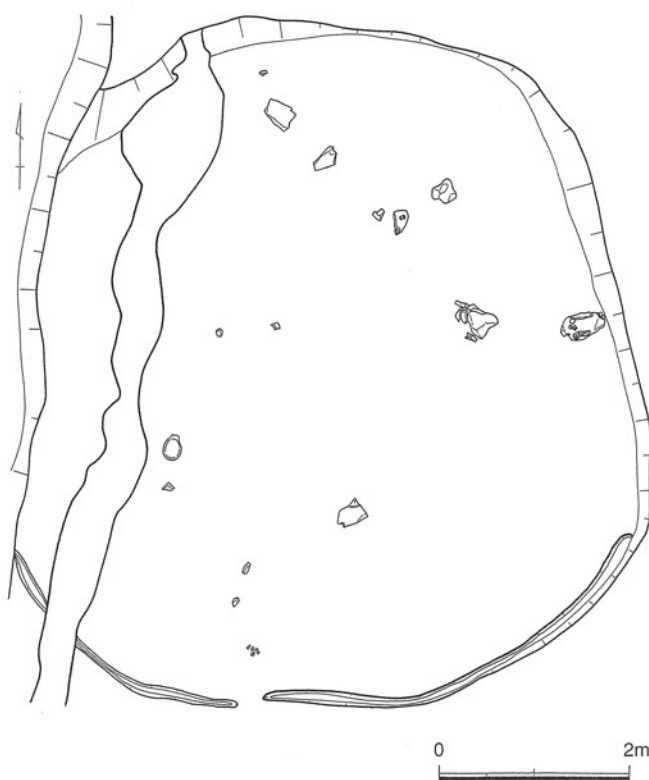
南に向かって緩やかに下る斜面上に築かれた竪穴住居のため、比高の低い南側の壁が失われていることに加え、西側の一部を南北に走る溝によって切られているが、本来は直径約7m以上の規模の不整形の竪穴住居跡であったと考えられる。床面上には断続的ながら二重の周溝が巡らされているうえに周溝外の一段高くなった北側の床面上にも長さ約1.8mの浅い周溝が残されている。周溝内の床面のほぼ中央には直径約0.9m、深さ50cmの円形の炉が1基掘り込まれ、炉内部には下部に炭化物が多量に含まれていた。この炉からやや離れた床面上には炉を円く囲むように柱穴と考えられる多数のピットが検出された。炉址は1基しか検出されなかったが、残されたピットの数と二重に巡らされた周溝の存在から、この住居址は数度の建て替えあるいは拡張が行われたものと考えられる。柱穴や炉址以外にも住居の床面上には最も厚い部分で10cmを超える焼土が広範囲に分布するとともに、最大で長さ60cm、幅10cmの炭化材を含む炭化物がブロック状に検出されたことから、火災住居であった可能性が高い。

出土遺物 (第19～23図)

56・57は外上方への開きの少ない短い口縁部を持つ壺である。何れも口縁端部を平坦に仕上げたうえで上面を凹線状にくぼませている。57の頸部には刻目の施された帯状の貼付け突帯が廻されている。58は直立する体部と内方に拡張された口縁端部を持つ鉢である。頸部には太い凹線が1条巡らされている。59～61は何れも「く」の字に屈曲する頸部と外上方に短く伸びる口縁部を持つ甕である。59の口縁端部は薄く尖らされただけであるが、60・61は口縁端部が拡張されている。60が口縁端部の拡張が上方にのみ行われるのに対して、61では上下に拡張されている。何れも拡張してできた平坦部に2条の凹線を巡らせている。62・63は緩やかに内湾する体部と平坦な口縁端部を持つ高杯または鉢の口縁部である。内外方に拡張された口縁端部直下には凹線が施されている。64・65は壺、66は甕の底部である。64

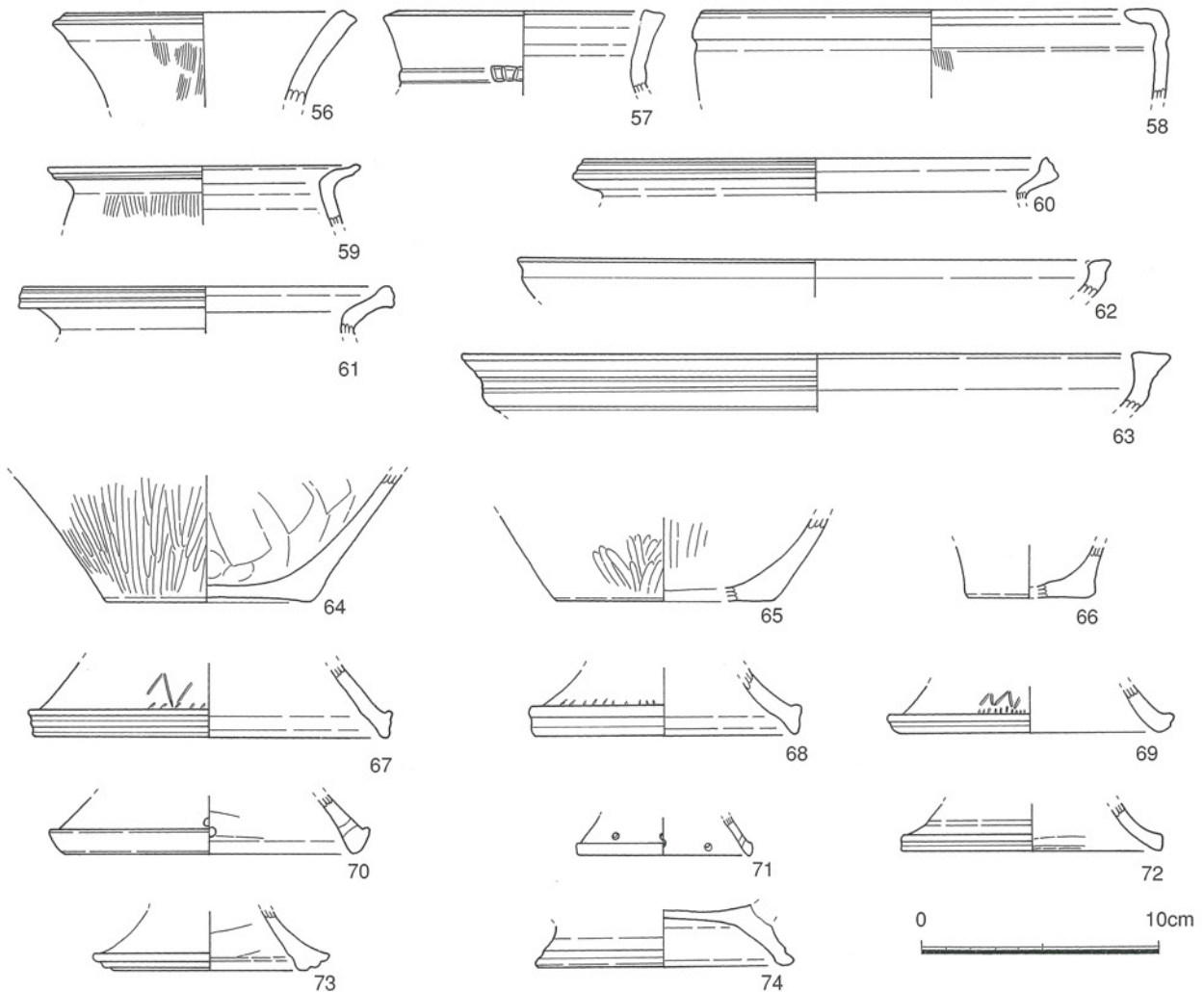


第17図 SB1005 実測図



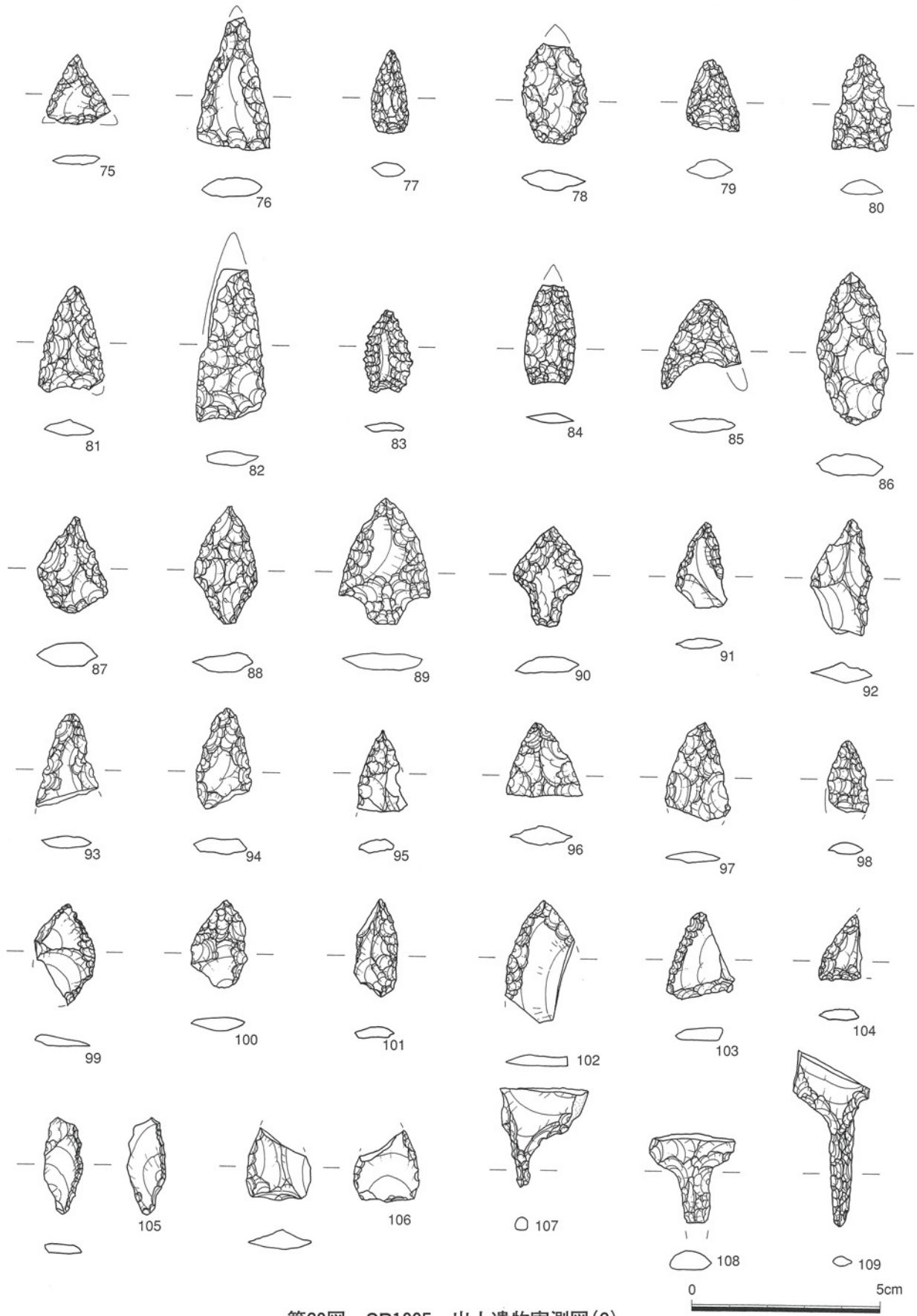
第18図 SB1005 遺物出土状況図

は弱い上げ底で外面はヘラ磨き、内面はヘラ削り調整が施されている。67～73は高杯の脚端部である。外下方に向かって「ハ」の字に開く脚の裾部と、程度の差はあれ上方に拡張された脚端部には凹線が施されるものが多いが、73のように端部を肥厚させて平坦面を作り凹線を巡らせているものもある。72は端部が平坦なまま残されている。裾部にはヘラ先による連続する刺突文や鋸歯文が描かれたものや、円孔がつけられたものがある。74は台付鉢の脚部である。75～90はいずれもサヌカイト製の打製石鏃である。基部の形態によって平基無茎式 (75～78)、凹基無



第19図 SB1005 出土遺物実測図(1)

茎式 (79~85)、凸基無茎式 (86・87)、凸基有茎式 (88~90) に分けられるが、凹基無茎式のなかには基部の挟りが浅く平基式とほとんど変わらないものが多い。91~102も打製石鏃であるが基部が破損しているため形態は不明である。103・104は小さな剥片の縁辺部に調整を加えたものである。106は石鏃の未製品であろうか？107~109は打製石錐である。110・111は尖頭器状の両面加工の石器である。110は打製石鏃の可能性もあるが重量が37gと他の石鏃に比べてかなり重い。112~115は截断面を持つ楔型石器、116も楔型石器の可能性のある両面調整の石器である。調整は粗い階段状で両極打法による可能性がある。117は楔型石器に伴う削片で截断面を打面に調整を加えた痕が残されている。118~122は剥片の一部に調整を加えたものである。120・121は折断面を持つ厚みのある剥片の縁辺に角度の急な調整を加えて刃部とした削器である。118・119・122は剥片の縁辺に簡単な調整を加えている。123は一部に自然面を残す横長の剥片を素材に用いた打製石庖丁と考えられる石器で、端部にはくり込みが作り出されず、背と考えられる部分は縁辺部が潰されている。124~127はいずれも結晶片岩を用いた打製石庖丁である。124は両端にくり込みを持たないが、他はくり込みが作り出されている。128・129・132は大型の太型蛤刃石斧や柱状石斧を敲石に転用したものである。128では表裏面と上下に、また132では頂部から側縁部にかけて細かい敲打痕が残されている。130・131は扁平な自然礫を用いた砥石である。130は敲石としても使用され、縁辺部には敲打痕が残されている。133は礫をそのまま用いた敲石で、礫面には稜線付近を中心に複数の敲打痕が残されている。

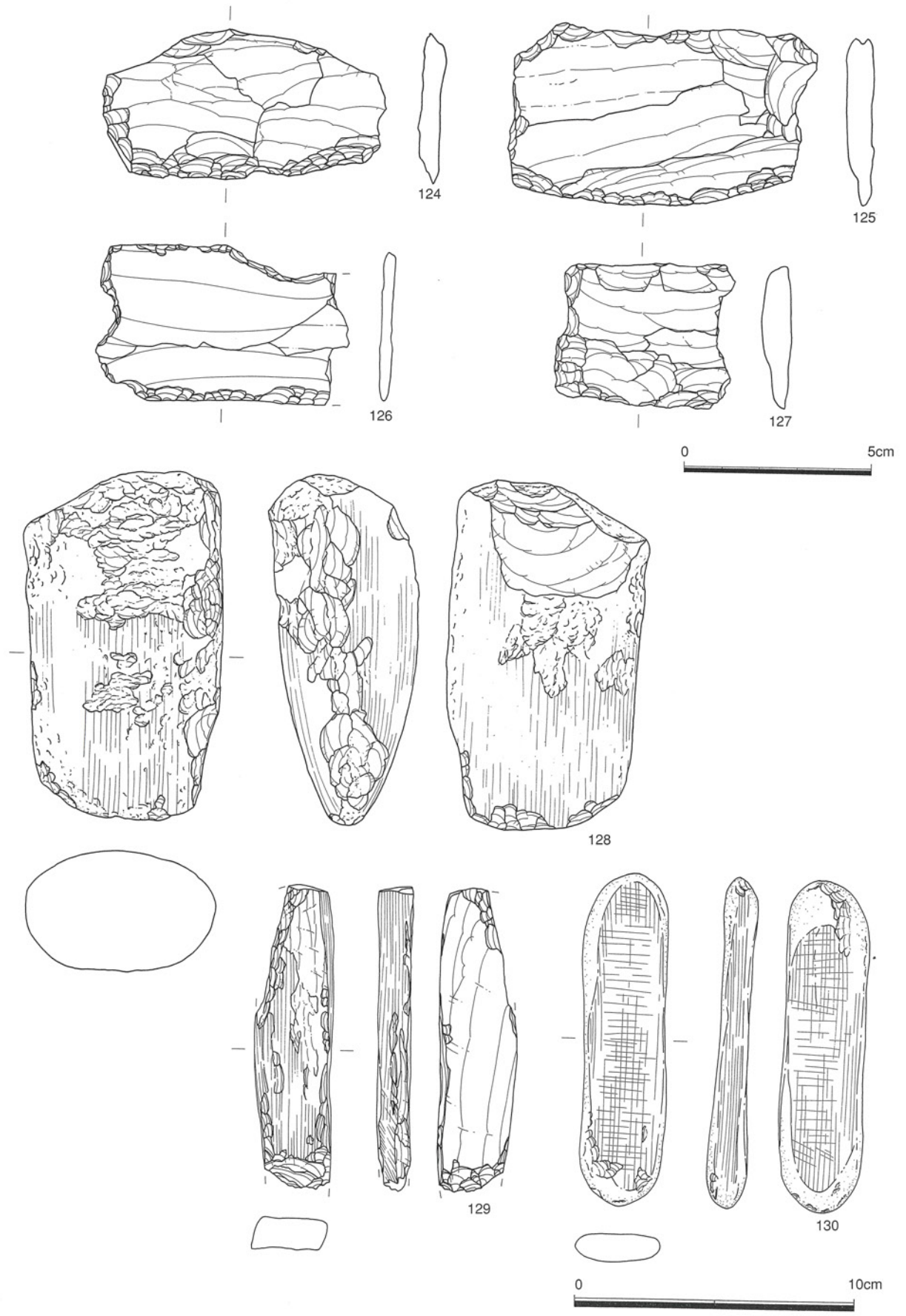


第20图 SB1005 出土遺物実測図(2)

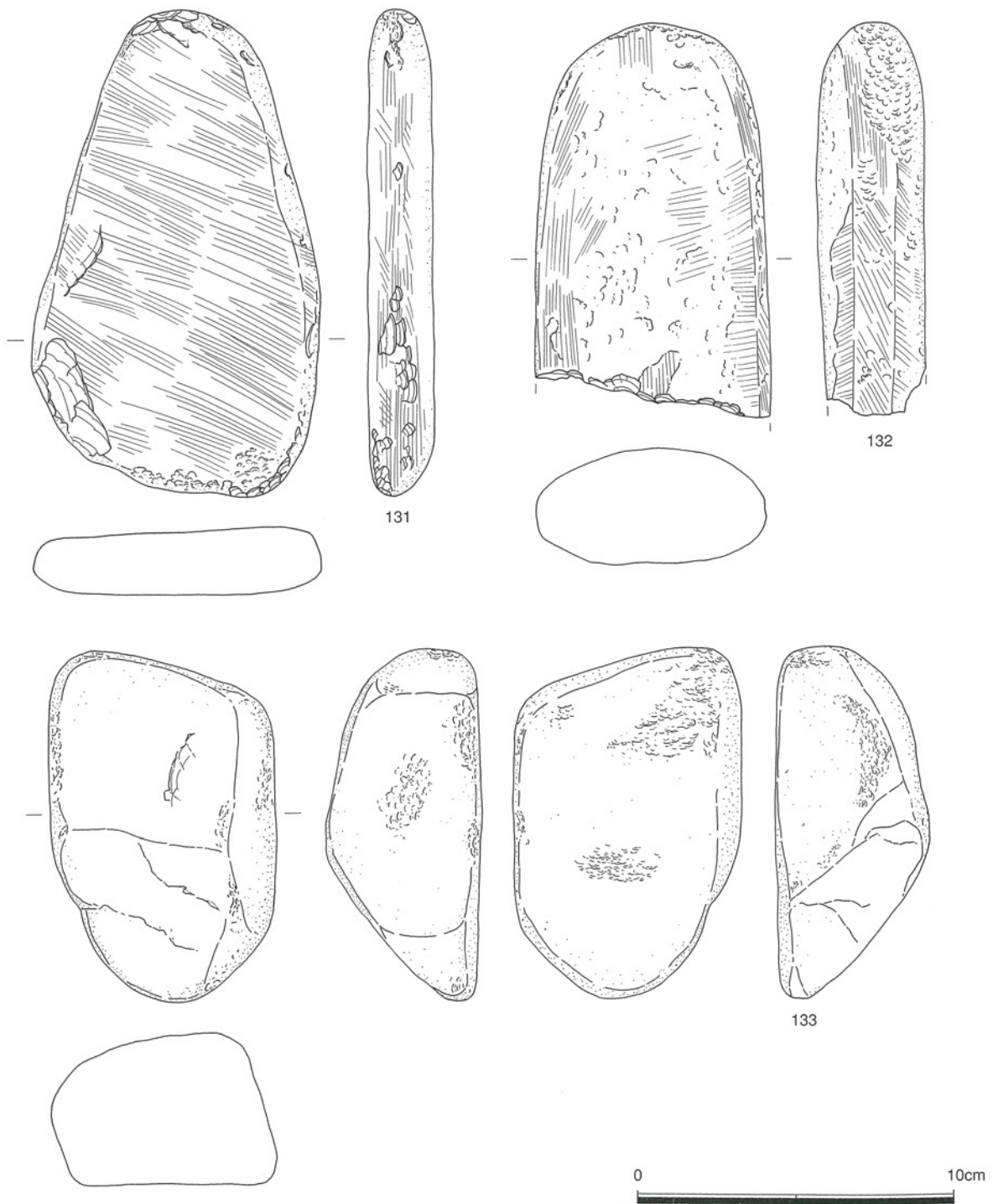


0 5cm

第21图 SB1005 出土遺物実測図(3)



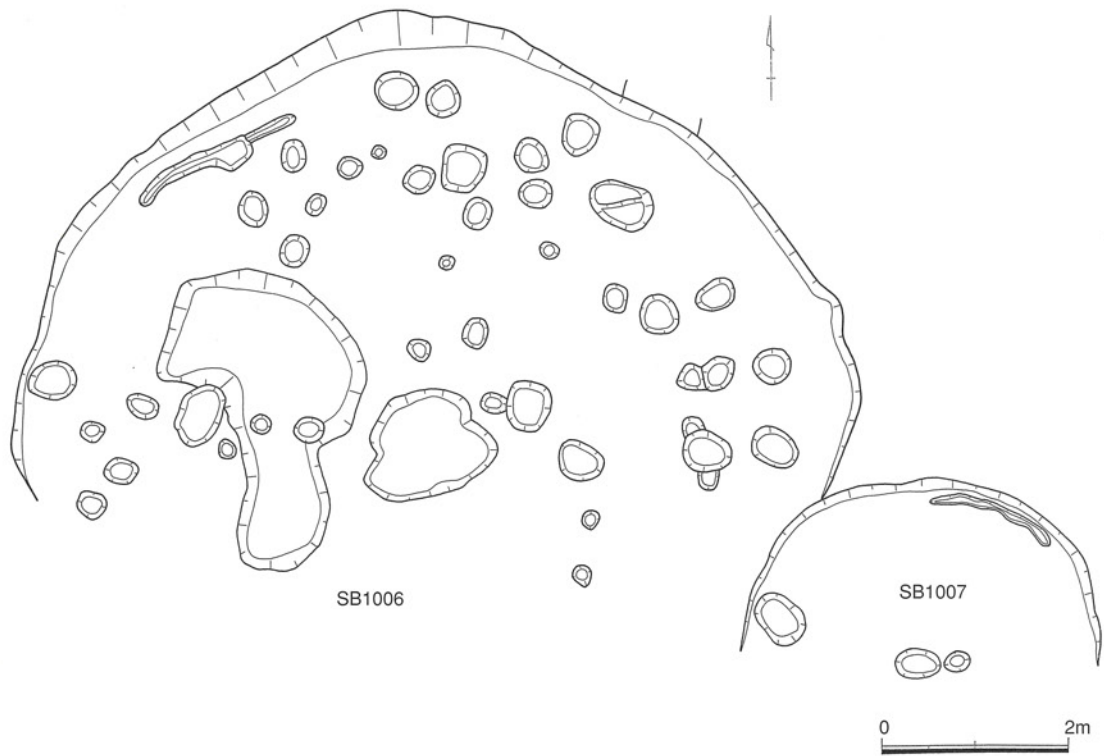
第22图 SB1005 出土遺物実測図(4)



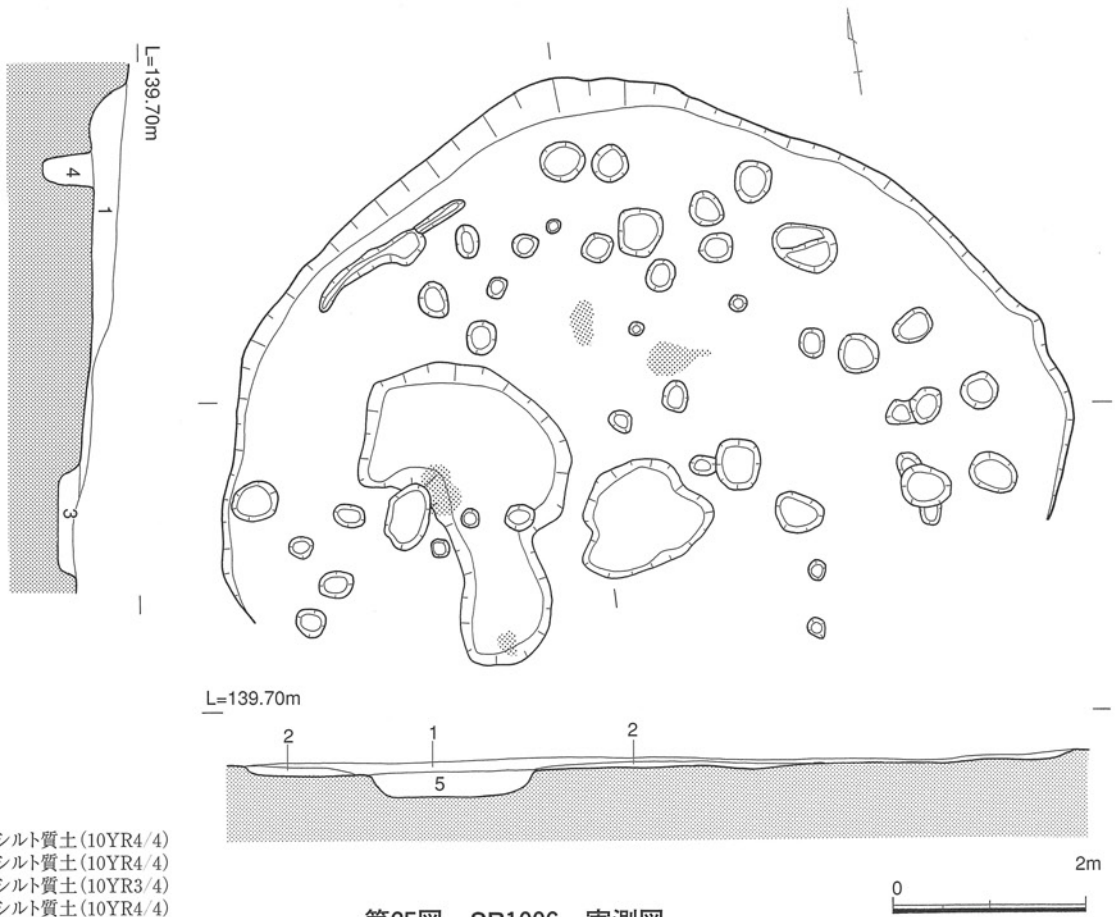
第23図 SB1005 出土遺物実測図(5)

竪穴住居跡 6 (SB1006) (第25図)

他の住居址同様、北から南に下る緩斜面上に掘り込まれているため、遺構の南側は床面まで失われているが、もとは直径8mを越える不整楕円形の大型の竪穴住居跡であったと考えられる。遺構の南西の一部がわずかではあるがSB1006と切り合い関係にある。床面からは大小40基以上のピットが検出され、そのうちの31基がその大きさなどから柱穴の可能性があると考えられる。この柱穴の数から数度の拡張の可能性が考えられるが、検出された炉址は長さ約1.4m、深さ20cm余りの不整形な形態のものが1基



第24図 SB1006・1007 実測図



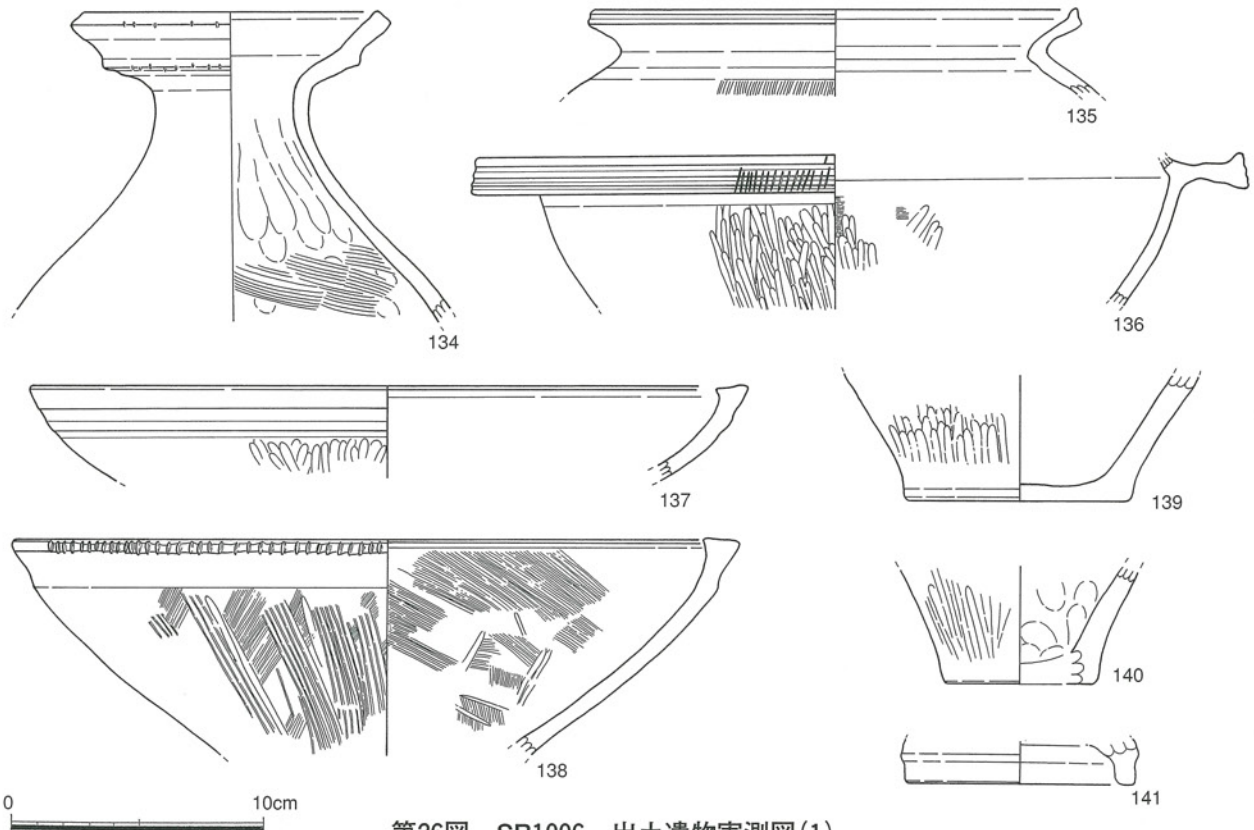
- 1. 褐色 シルト質土 (10YR4/4)
- 2. 褐色 シルト質土 (10YR4/4)
- 3. 暗褐色 シルト質土 (10YR3/4)
- 4. 褐色 シルト質土 (10YR4/4)
- 5. 暗褐色 シルト質土 (10YR3/4)

第25図 SB1006 実測図

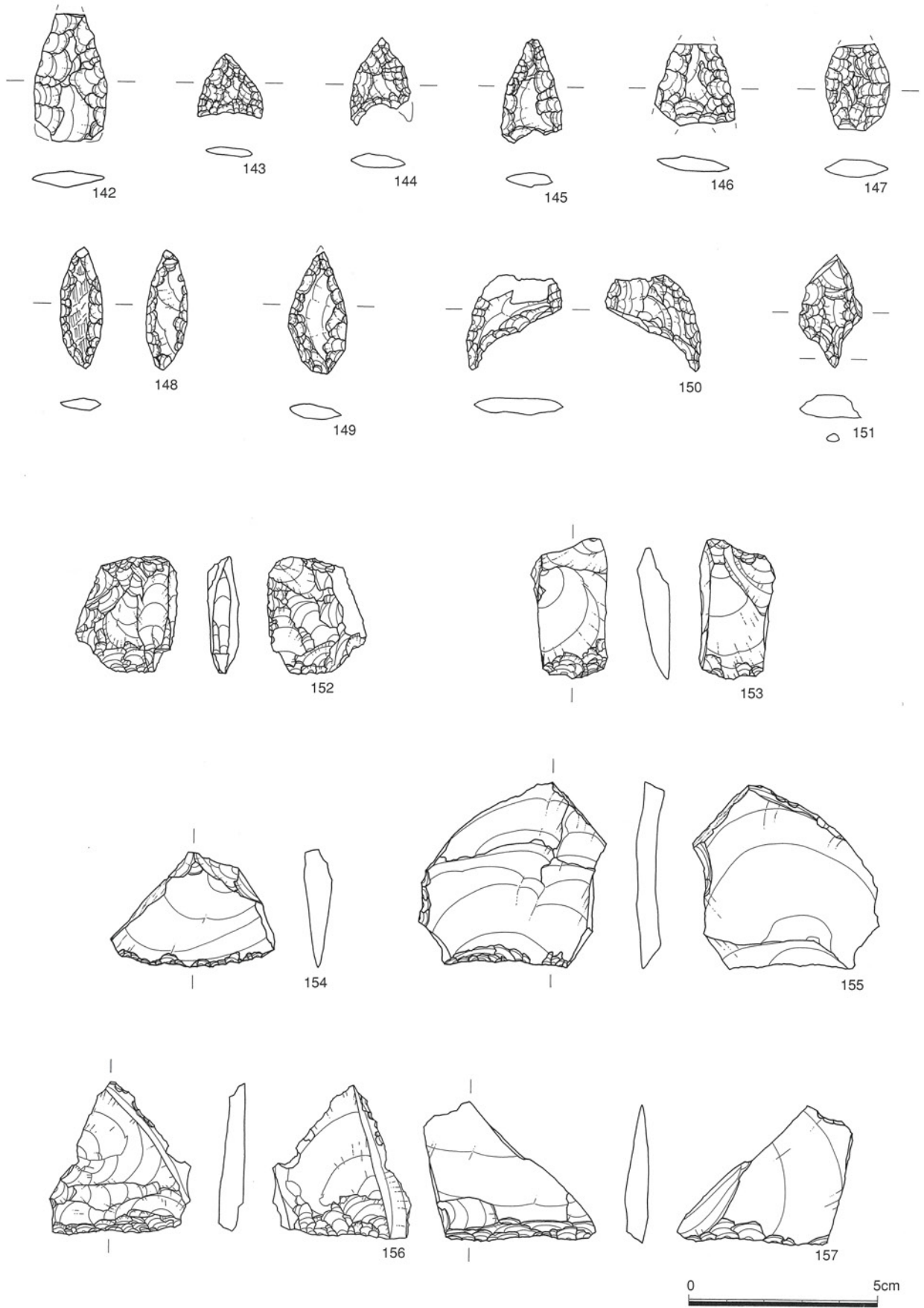
のみであり、周溝についても北西の壁際で検出された長さ約2m余りのものだけで柱穴の数以外に拡張の有無を確認出来るようなものは残されていなかった。炉址内部の堆積は焼土粒や炭化物が混入しているがその量はわずかで層状やブロック状の状態は認められなかった。また住居址内からは焼土ブロックが4カ所検出されているがその大きさはいずれも小さく、遺構の堆積の中にも焼土や炭化物の混入は少ない。炉址の西側には長さ約3m余りの不整形の土坑が検出され、2カ所の焼土ブロックはこの落ち込みの上面で検出されている。

出土遺物（第26～29図）

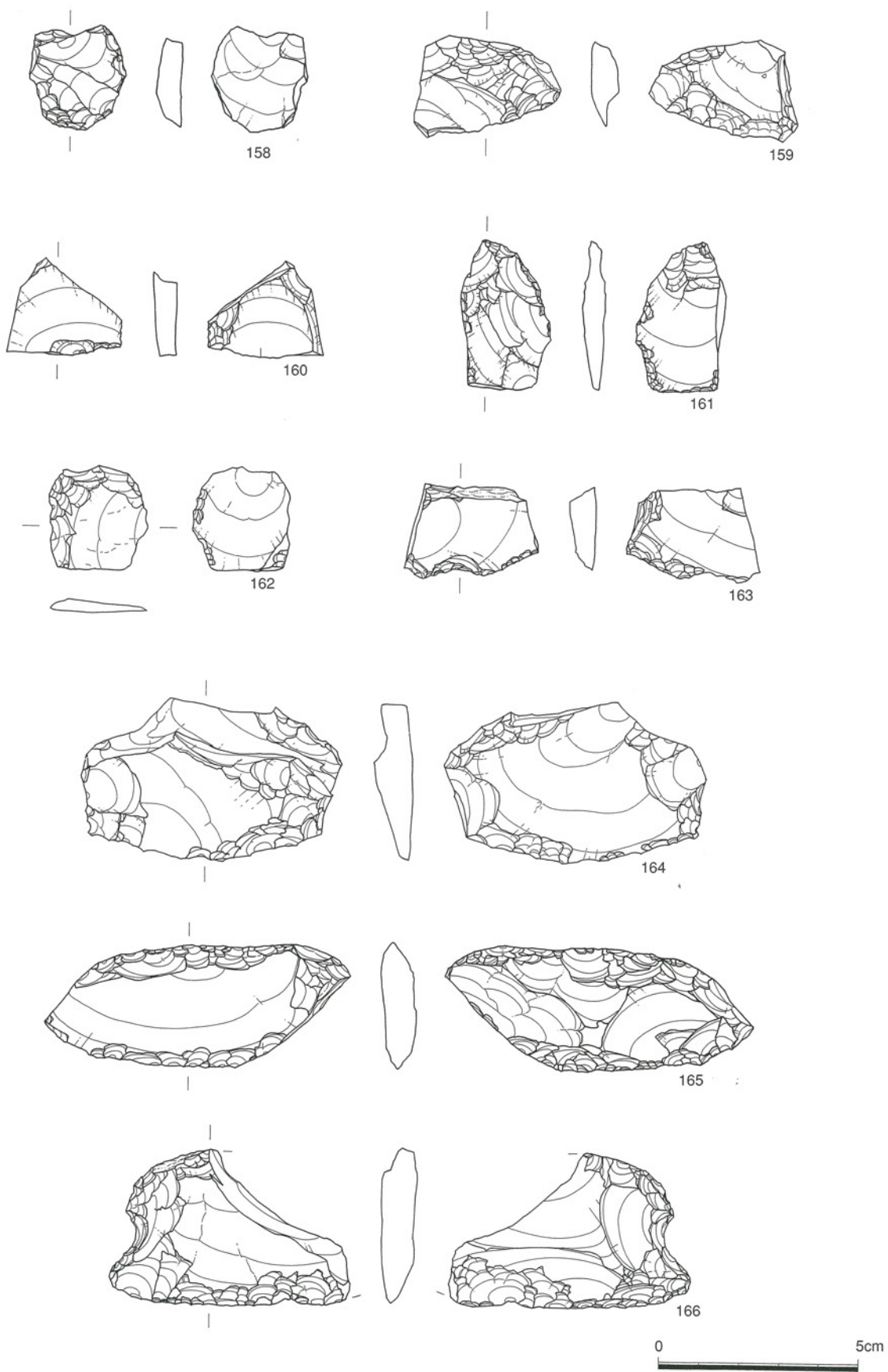
遺構内から出土した遺物は遺構の規模に比べて非常に少ない。134は細く締まった頸部と外上方に大きく広がる口縁を持つ壺である。頸部との境付近には口縁に平行する断面三角形の突帯が廻され、方形に仕上げられた口縁端部とともに刻目が施されている。135は「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と球形の体部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され凹線が1条巡らされている。136は高杯の杯部である。口縁端部を欠くが口縁部には水平方向の幅広い鏝が一周している。鏝の端部は上下に拡張されて平坦面が作り出され凹線が巡らされている。137・138も高杯の杯部と考えられるものである。緩やかに内湾する体部と内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部を持ち、頂部はわずかにくぼんでいる。口縁端部直下には横ナデまたは凹線が施され、138にはさらに刻目が施されている。石器はサヌカイト製の打製石鏃（142～149）や削器の他、打製石庖丁（164～169）や磨製石斧（171～173）、敲石（170・174）、石錘（175）などが出土している。8点出土した打製石鏃の内訳は平基無茎式のもの（142）が1点、凹基無茎式のもの（143～146）が4点、円基式のもの（147）が1点、



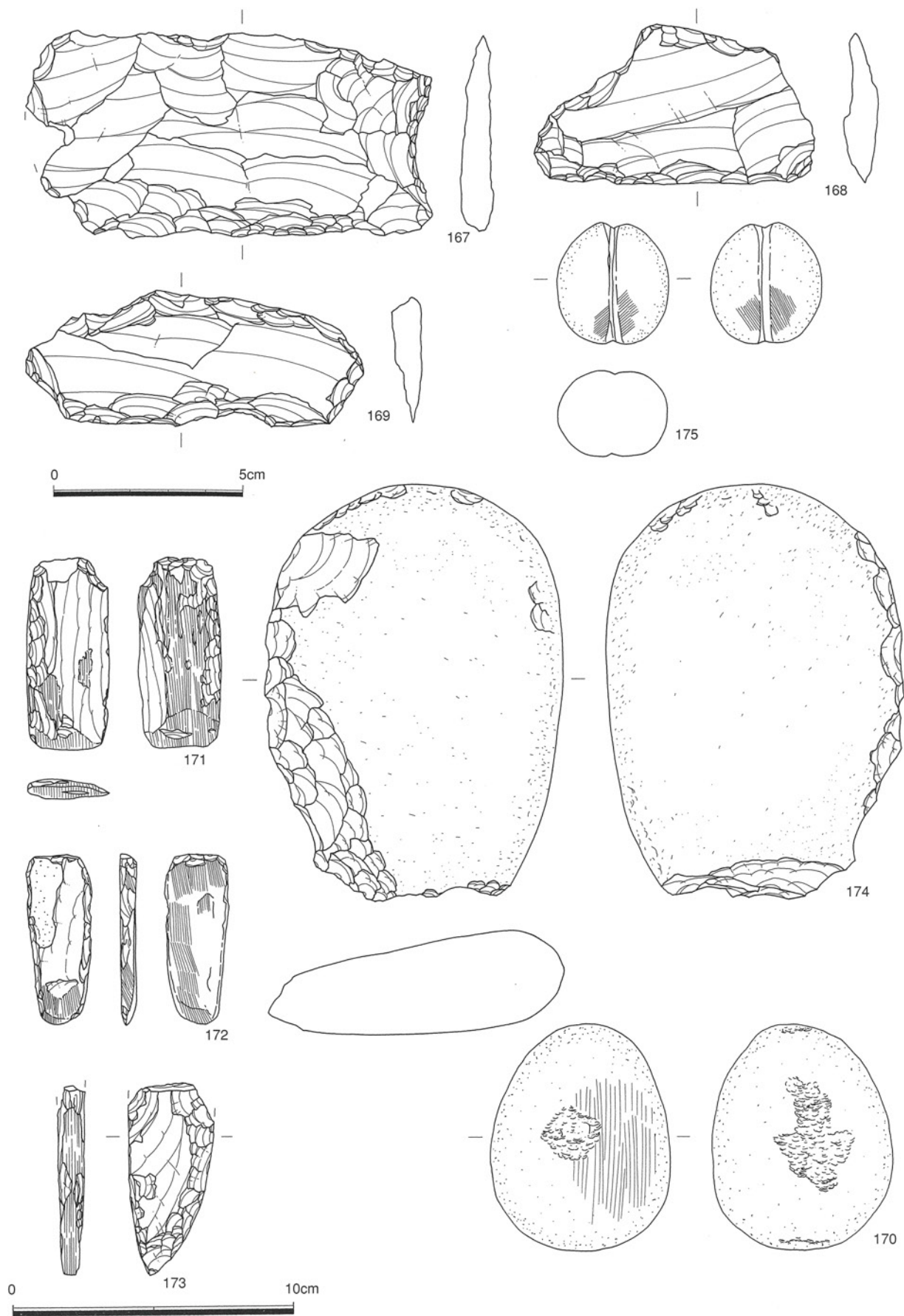
第26図 SB1006 出土遺物実測図(1)



第27图 SB1006 出土遺物実測図(2)



第28图 SB1006 出土遺物実測図(3)

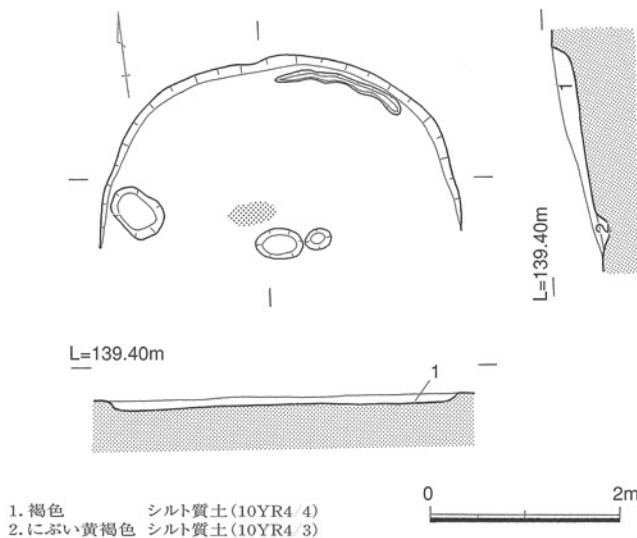


第29图 SB1006 出土遺物実測図(4)

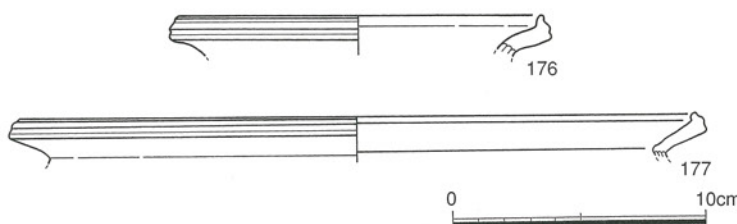
凸基無茎式のもの(148・149)が2点で、148は表面が摩滅している。150は凹基式の石鏃の片方の逆刺を取り去り、残ったもう一方の逆刺を用いた石錐と考えられる石器である。151も同じく打製石錐で素材に厚い剥片を使用している。152は側面に截断面を持つ楔型石器である。153も横長の剥片の中央部付近を方形に折り取り、調整を加えて楔型石器に類似する形態に仕上げたものである。154～163は剥片の縁辺部に簡単な調整を加えて削器としたものである。素材に用いられた剥片の形は様々で、155のように比較的大型の横長剥片の側縁を折り取ったものや、剥片を半截したものなども使用されている。164は横長の剥片の縁辺部に両面から調整を加えて刃部とした削器である。165・166はいずれもサヌカイト製の打製石庖丁と考えられるもので、165は両端が尖らされているのに対して166はくり込みを持っている。165は稜線が摩滅している部分が多い。167～169は結晶片岩製の打製石庖丁であるが、端部にくり込みが付けられたものは167だけで、他の2点は不整形な形態のものである。171は片岩製の扁平片刃石斧である。元々は柱状石斧のような石斧が破損した際に生み出された薄い板状の石片に研磨を加えて石斧としたと考えられる。172も同じく結晶片岩を素材にした扁平片刃石斧であるが、この場合は扁平な自然石の先端と背面に研磨を加えて石斧に仕上げている。173は片岩製の柱状片刃石斧の破片であるが、破損面を再調整している。170は砂岩の円礫を用いた敲石である。それぞれ表面と裏面の中央部に敲打痕が残され、片面は磨石として使用されている。174は扁平な片岩の自然礫の周辺を打ち欠いて刃部を作り出した大型の礫器である。調整は一方の側縁と先端部に集中している。175は砂岩の円礫を一周するように切れ目を入れた切目石錘である。

竪穴住居跡 7 (SB1007) (第30図)

SB1005とわずかに切り合った状態で検出された直径4m前後の円形の竪穴住居跡である。他の住居址同様、北から南に向かう緩斜面上に築かれているため、北側の壁が半円形に残されているだけで比高の低い南側半部は床面まで完全に失われた状態になっている。残された北側の床面からは側壁に沿って周溝が約1.4mしか検出されなかったが、周辺部は削平を受けていないことから、周溝はもともと部分的にしか設置されていなかったものと考えられる。中央には長径約0.6mの楕円形の炉址が築かれているが柱穴らしいものは2基しか検出できなかった。住居址内の床面からは炉址に隣接して焼土ブロックが1カ所検出されているが、それ以外は焼土粒が遺構内の覆土中に少量混入されているだけである。



第30図 SB1007 実測図



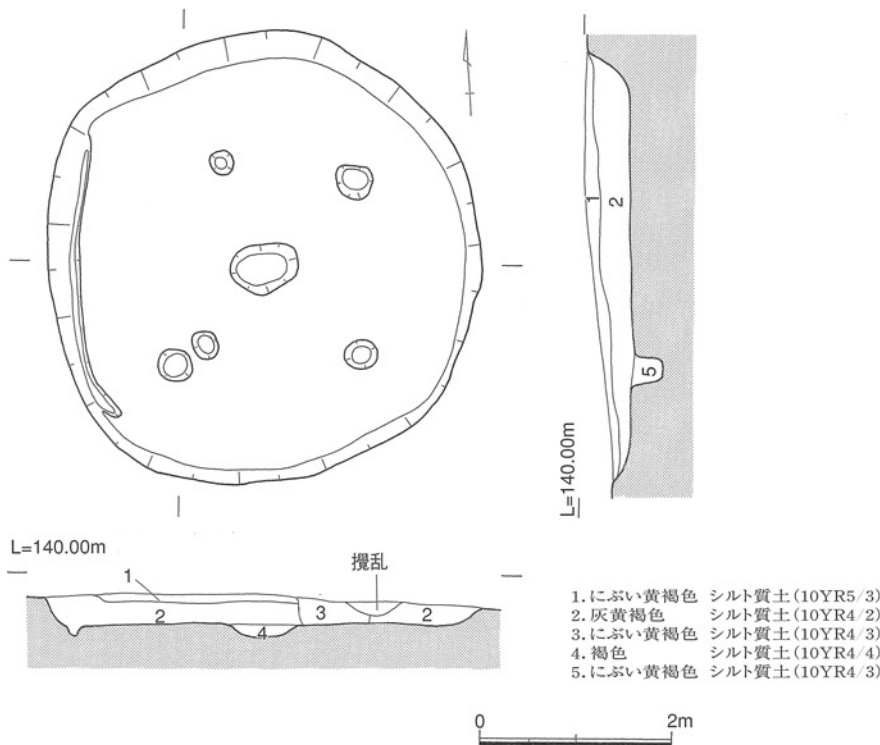
第31図 SB1007 出土遺物実測図

出土遺物 (第31図)

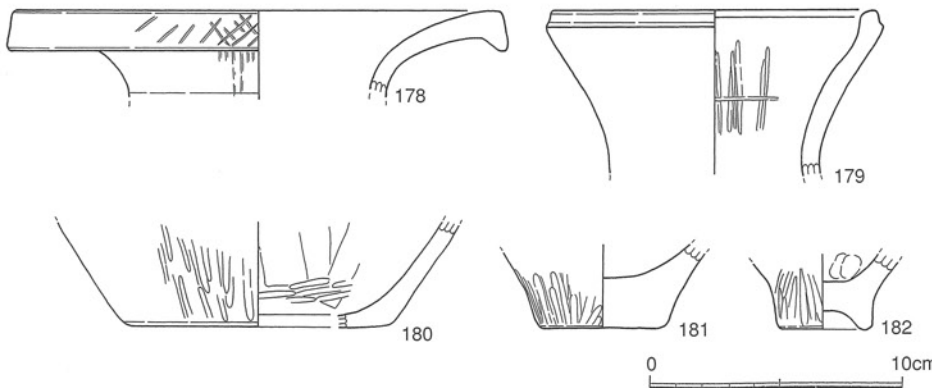
176は外反する口縁の端部を上方に拡張し凹線を巡らせた壺、177は「く」の字に強く屈曲する頸部から直線的にのびる短い口縁の端部を上方に拡張し凹線を巡らせた甕の口縁部である。石器は凹基無茎式の石鎌が1点出土している。

竪穴住居跡 8 (SB1008) (第32図)

直径約4.6mの円形の竪穴住居跡である。遺構の掘り込みは最大50cmと深く、西側の壁に沿って長さ約2.8mの周溝が掘り込まれている。床面のほぼ中央部には長径約0.7m、深さ20cmの楕円形の炉が設けられている。炉の内部の土は多少黒ずんだ色調であるが炭化物や焼土粒が混入される割合は少量である。また、遺構の覆土からも炭化物が検出されているが炉の内部と同じくその量は少ない。床面からは炉址と同溝以外にもピットが5基検出されているが、位置からしてそのうちの4基が柱穴と考えられる。



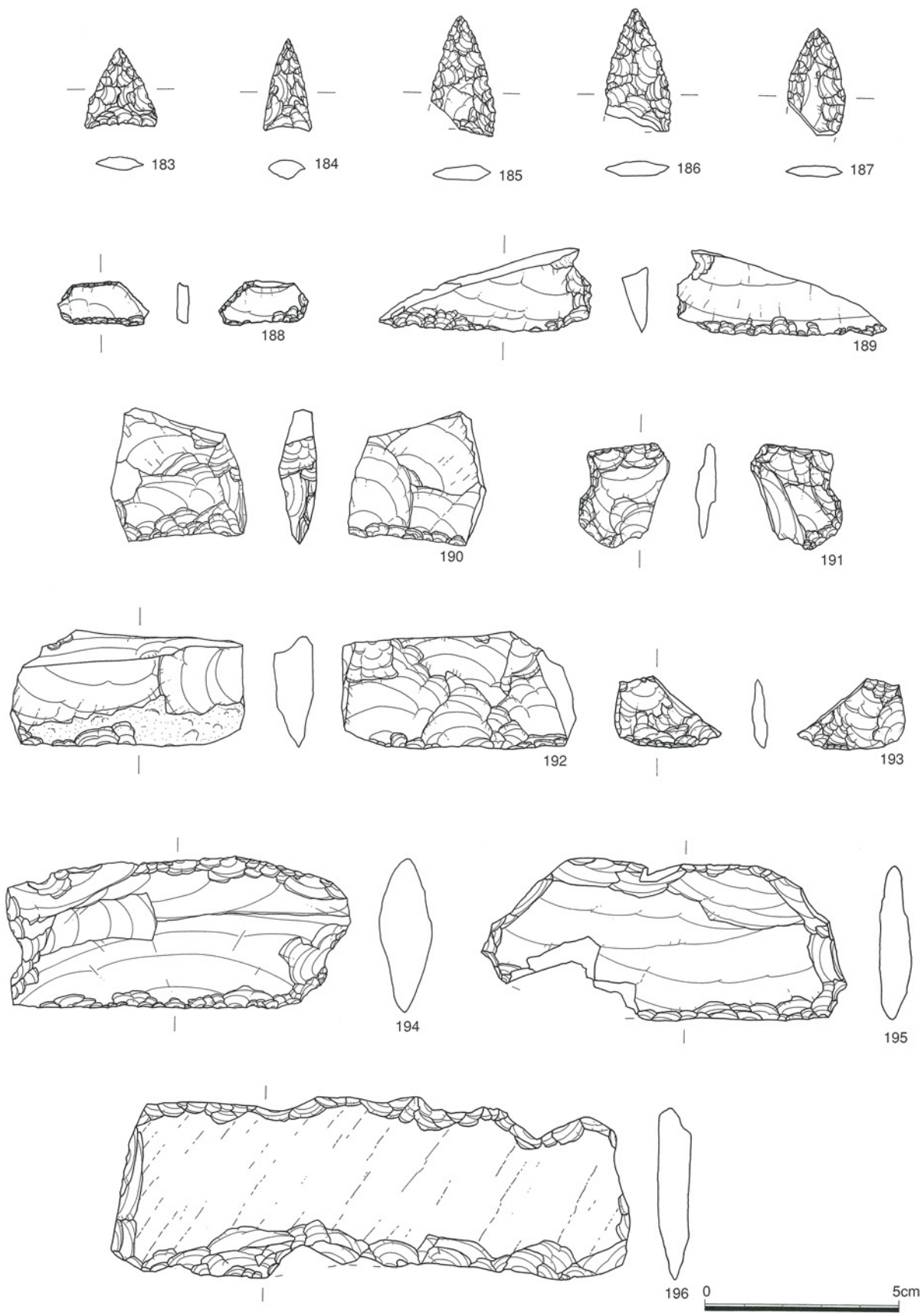
第32図 SB1008 実測図



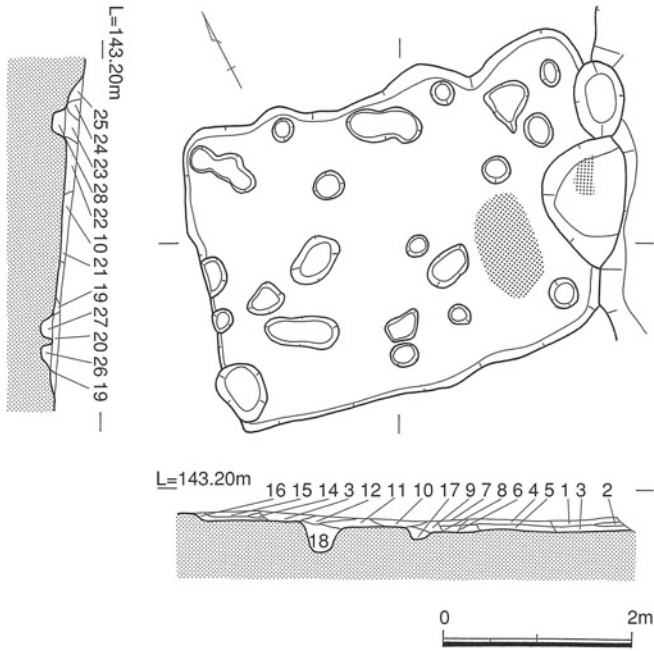
第33図 SB1008 出土遺物実測図(1)

出土遺物 (第33~34図)

178は外上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺である。下方に垂下させて平坦に仕上げられた口縁端部には沈線によって格子目文が描かれている。179は緩やかに内湾しながら上方へのびる口縁部を持つ壺である。口縁端部は円く仕上げられ凹線が1条巡らされている。180は壺、181・182は甕の底部である。石器はサヌカイト製の打製石鎌や片岩製の打製石庖丁が出土している。183~185は凹基無茎式の打製石鎌であるが、いずれも基部の挟りは浅く平基式に近い。186・187も打製石鎌であるが、基部を欠失するため形態は不明である。188~193はいずれも折断面を持つサヌカ



第34图 SB1008 出土遺物実測図(2)



- | | | | |
|-----------|----------------|------------|----------------|
| 1. 暗褐色 | シルト質土(10YR3/4) | 15. 暗褐色 | シルト質土(10YR3/3) |
| 2. にぶい赤褐色 | シルト質土(15YR4/3) | 16. 黄褐色 | シルト質土(10YR5/6) |
| 3. にぶい黄褐色 | シルト質土(10YR4/3) | 17. 暗褐色 | シルト質土(10YR3/4) |
| 4. 暗褐色 | シルト質土(10YR3/3) | 18. にぶい褐色 | シルト質土(10YR5/4) |
| 5. 暗褐色 | シルト質土(10YR3/4) | 19. 黄褐色 | シルト質土(10YR5/4) |
| 6. 黄褐色 | シルト質土(10YR5/6) | 20. 褐色 | シルト質土(10YR4/4) |
| 7. 暗褐色 | シルト質土(10YR3/3) | 21. 褐色 | シルト質土(10YR4/4) |
| 8. 褐色 | シルト質土(10YR4/4) | 22. 褐色 | シルト質土(10YR4/4) |
| 9. 黄褐色 | シルト質土(10YR5/6) | 23. 暗褐色 | シルト質土(10YR3/3) |
| 10. 褐色 | シルト質土(10YR4/4) | 24. 褐色 | シルト質土(10YR4/4) |
| 11. 黄褐色 | シルト質土(10YR5/6) | 25. 暗褐色 | シルト質土(10YR3/4) |
| 12. 褐色 | シルト質土(10YR4/4) | 26. 褐色 | シルト質土(10YR4/4) |
| 13. 暗褐色 | シルト質土(10YR3/3) | 27. にぶい黄褐色 | シルト質土(10YR5/4) |
| 14. 褐色 | シルト質土(10YR4/4) | 28. 暗褐色 | シルト質土(10YR3/4) |

第35図 SB1009 実測図

イトの剥片の縁辺部に調整を加え刃部を作り出した削器である。188は周縁部に微細な調整が加えられた長さ約2.5cmの小型のものである。191は側縁の一部にくり込みが見られる。192・193は両極打法による調整が加えられている。194～196は打製石庖丁である。194は一部に自然面を残す大型のサヌカイトの剥片を素材に使用し、縁辺部に調整を加えたものである。刃部は内湾気味で両端には浅いくり込みが作り出され、背の部分には研磨により刃潰加工が施されている。195・196は結晶片岩製の打製石庖丁である。195が不整台形の形態で2点とも端部にくり込みは作り出されていない。

竪穴住居跡 9 (SB1009) (第35～36図)

長さ4.4m、幅3.3mの不整形の形態の竪穴住居跡である。深さは最も深い所で約20cmと浅く、掘り込みも不明瞭であることから、本来の形はこれとは異なる可能性がある。遺構の東側では溝SD1012に半分



第36図 SB1009 遺物出土状況図

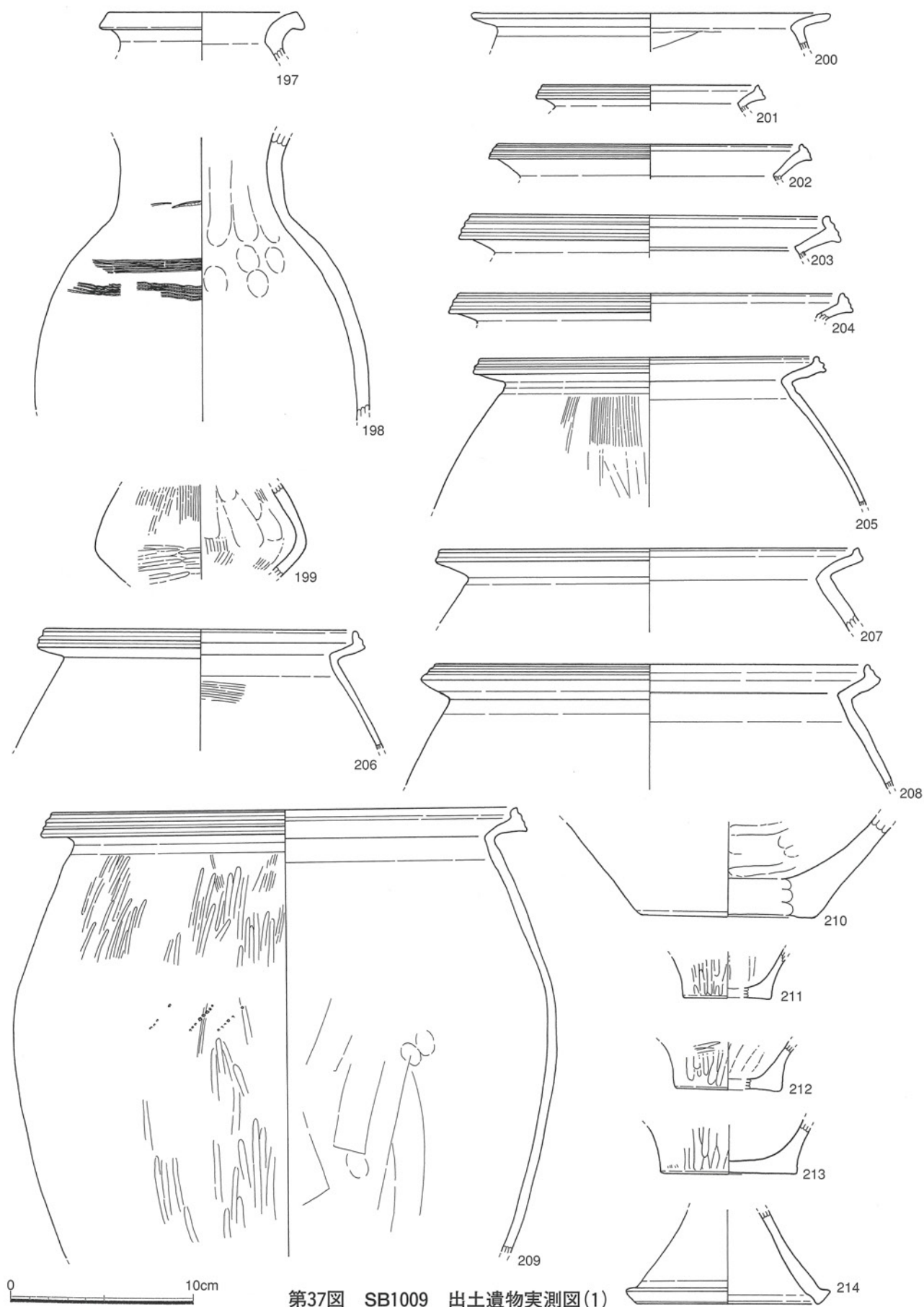
切られた状態で炉址と考えられる直径1m前後、深さ25cmの焼土ブロックが詰まった土坑が検出されている。床面からの柱穴の検出状況はこの遺構の場合、炉址の西側で多数検出されているのに対し、SD1012を挟んだ東側では極端にその数が少なくなっている。他の住居跡の例では炉址は住居のほぼ中央に位置することが多いことを考えると、この住居址に伴う柱穴の数は余り多くはなかったと考えられる。柱穴の多いことや、炉址との位置関係が不規則なことから、この住居址に関係する柱穴を特定することはできない。床面からは北西側で土器片と砂岩の礫が集中して出土している他、炉址の西側の床面からは長さ約1.1m、幅0.3mの範囲に広がる楕円形の焼土ブロックが検出されている。

出土遺物（第37～38図）

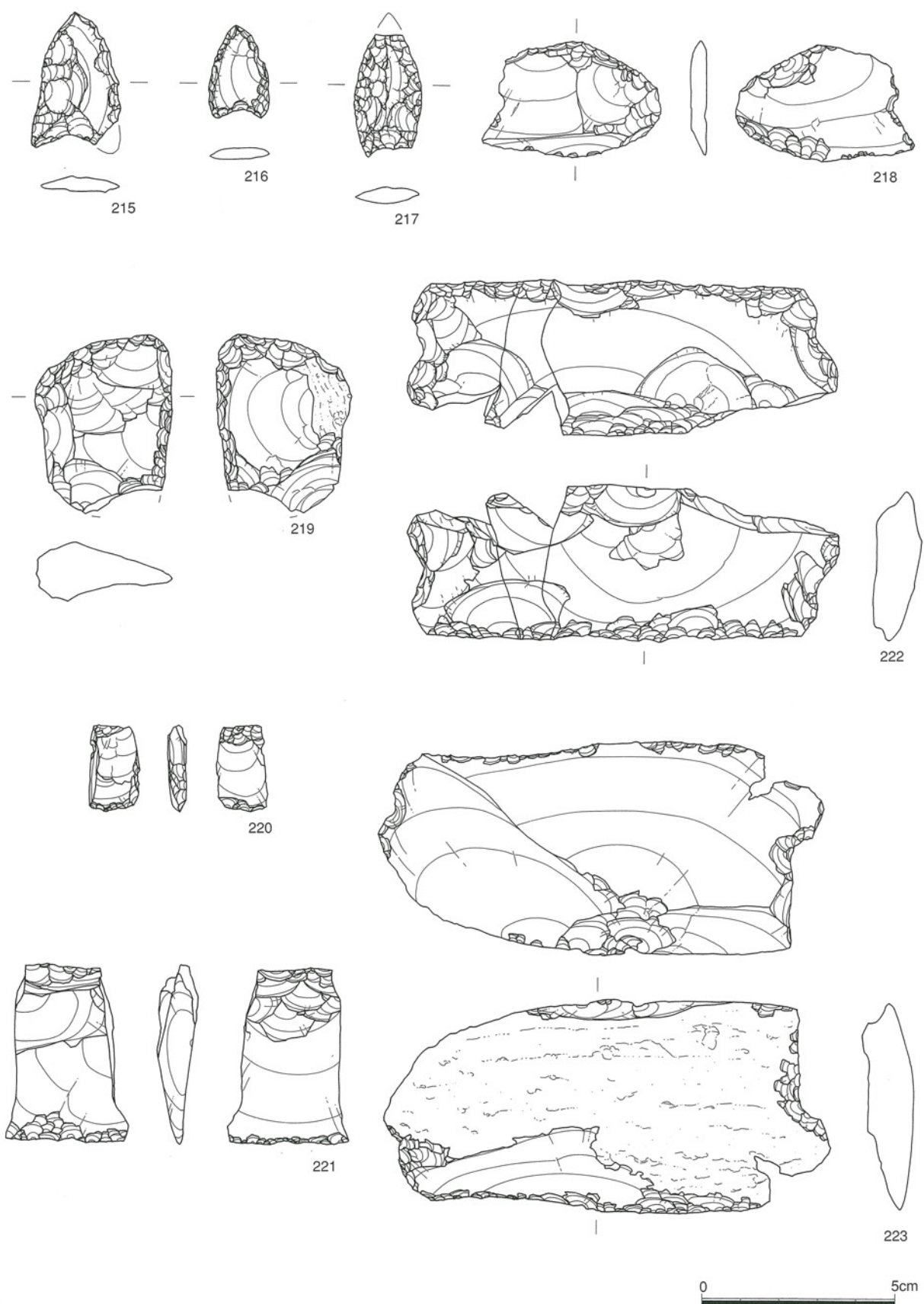
197は外反する短い口縁部を持つ壺である。口縁端部は下方に拡張され平坦に仕上げられている。198は口縁端部を欠くが、筒状の頸部と肩の張りのなだらかな体部とを持つ壺である。頸部には櫛先による連続する刺突文が付けられ、体部上半には櫛描の波状文が描かれている。200は「く」の字に強く屈曲する頸部と大きく開く直線的な口縁部を持つ甕で、口縁端部は拡張されることなく鈍く尖らされている。201～209は「く」の字に屈曲する頸部と、端部が拡張され凹線が巡らされた口縁部を持つ甕である。これらの甕はその大きさや口縁部の形態に少しずつではあるが相違が認められる。201は口径が12cm足らずの小型の個体で、直線的な短い口縁の端部は上下に拡張され凹線が2条巡らされている。202も同じ形態の口縁部を持つが、口径が16.5cmとやや大きく、口縁部の長さも長い。203は口縁端部の上下への拡張、特に上方への拡張が著しいもので拡張部には凹線が3条巡らされている。204は口径と比較して口縁部の長さが著しく短いものである。205も口縁端部が上下に拡張され凹線が巡らされているが、内面に加えられた横ナデにより頸部直下がわずかにではあるが外に向かって膨らんでいる。206は口縁端部が上方にのみ拡張され凹線が巡らされている。207・208も同じように口縁端部が上方のみに拡張されるものであるが、206の口縁部が直線的であるのに対して207・208ではわずかではあるが内湾気味のびている。209も同じく口縁端部が上方に拡張されるものではあるが、頸部の屈曲部からのびる口縁はほぼ水平方向にのびている。207～209は205と同じように頸部直下が内面の横ナデによってわずかに外方に膨らんでいる。214の高杯の脚部は脚端部が上方に拡張され平坦に仕上げられている。石器は打製石鏃と削器・石庖丁が出土している。215～217はサヌカイト製の打製石鏃で、すべて凹基無茎式に分類されるものである。218・219は剥片の縁辺部に調整を加えた削器である。調整は218が主剥離面側の一部に限定されているが、219では縁辺部全体にわたっている。220は小型の剥片の一部を折断し、折断面に調整を加えている。221は両面調整が行われた大型の剥片を折断したものである。222はサヌカイト製の打製石庖丁である。両端には浅いきり込みが設けられ、背の部分は摩滅している。截断と折断によって意図的に3分割されているが、そのうちの2個にはさらに調整が加えられている。223も両端にくり込みが設けられたサヌカイト製の打製石庖丁である。素材には片面に自然面を大きく残した横長の剥片が使用され、縁辺部に細かな調整が加えられるだけで、素材となった剥片の形状をほとんど変えていない。表面には使用痕が認められる。これ以外にも結晶片岩製の打製石庖丁と円礫を使用した敲石が出土している。石庖丁には端部にくり込みが設けられていない。

竪穴住居跡 10 (SB1010) (第39図)

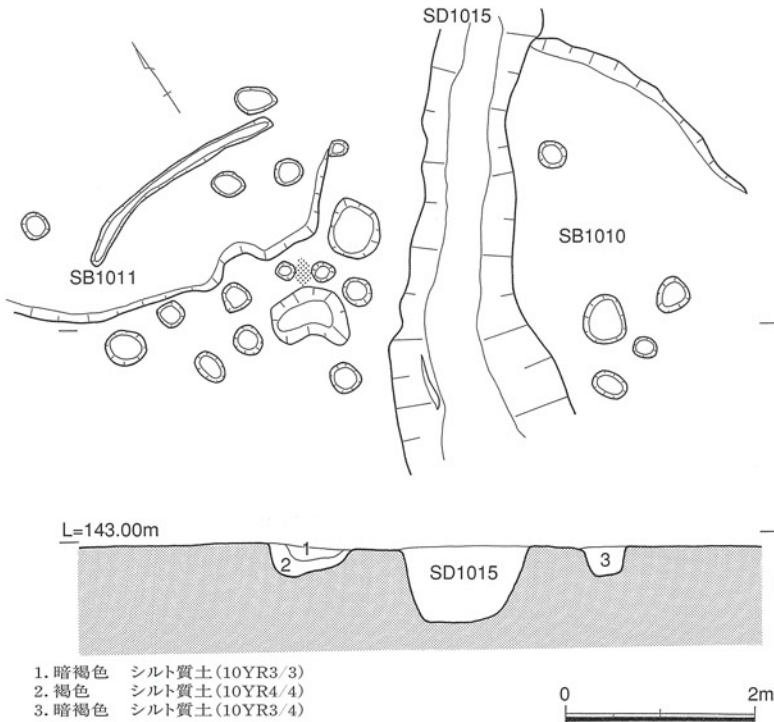
SB1011の南側でSB1011と切り合った状態で検出された竪穴住居跡である。長さ約0.8m、深さ30cm



第37图 SB1009 出土遺物実測図(1)

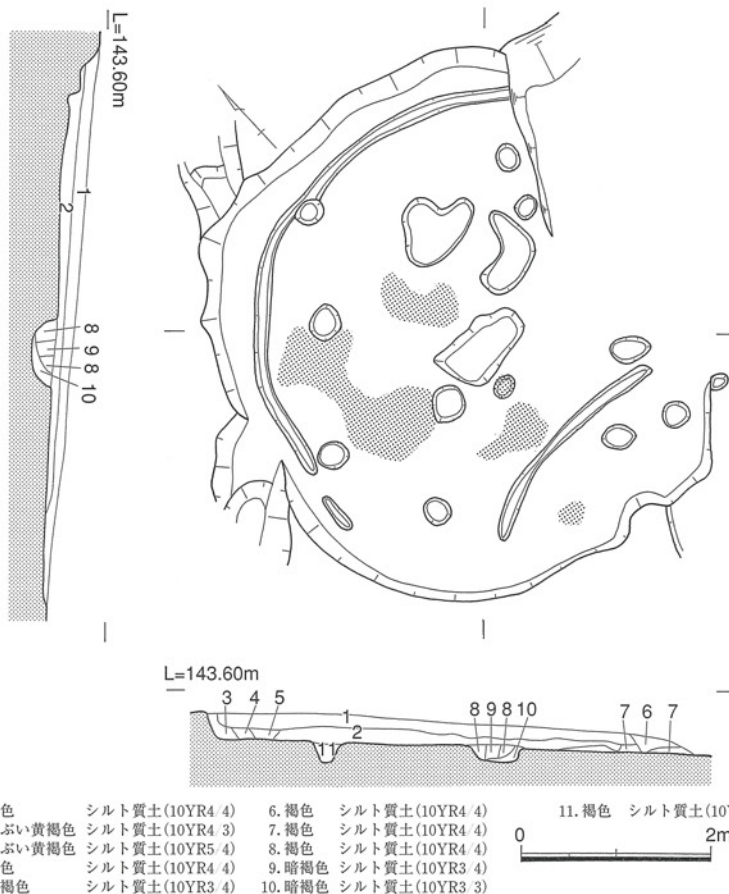


第38图 SB1009 出土遺物実測図(2)

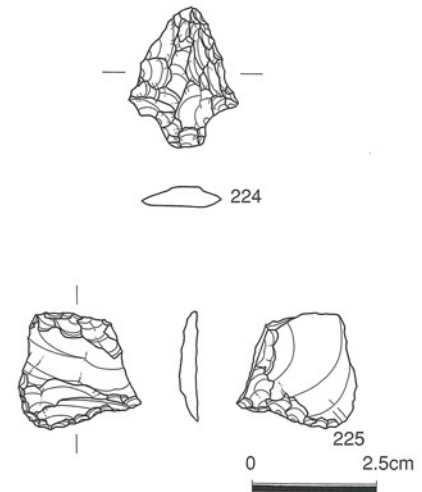


第39図 SB1010 実測図

の大きさの炉址を取り囲むようにSB1011の床面上で検出された長さ約2.4m、幅15cm前後の弧状の周溝と、SD1015を挟んでその周溝の延長線上に残された側壁の一部と考えられる2.8m余りの弧状の掘り込み以外、遺構の大部分が床面まで削平されている。このためその規模や形状は明らかではないが、残された遺構の断片などから推測するとおそらく6m前後の規模を持つ円形に近い形の竪穴住居であった可能性が高い。炉址の周辺からは炉に接するように大きさの異なるピットが検出されたが、この遺構に伴うものかは不明である。遺構全体に削平が著しいため出土遺物で図示できるものはごく少数である。



第41図 SB1011 実測図



第40図 SB1010 出土遺物実測図

出土遺物 (第40図)

224はサヌカイト製の平基有茎式の打製石鏃、225は縁辺部に細部調整が加えられた削片である。

竪穴住居跡 11 (SB1011)

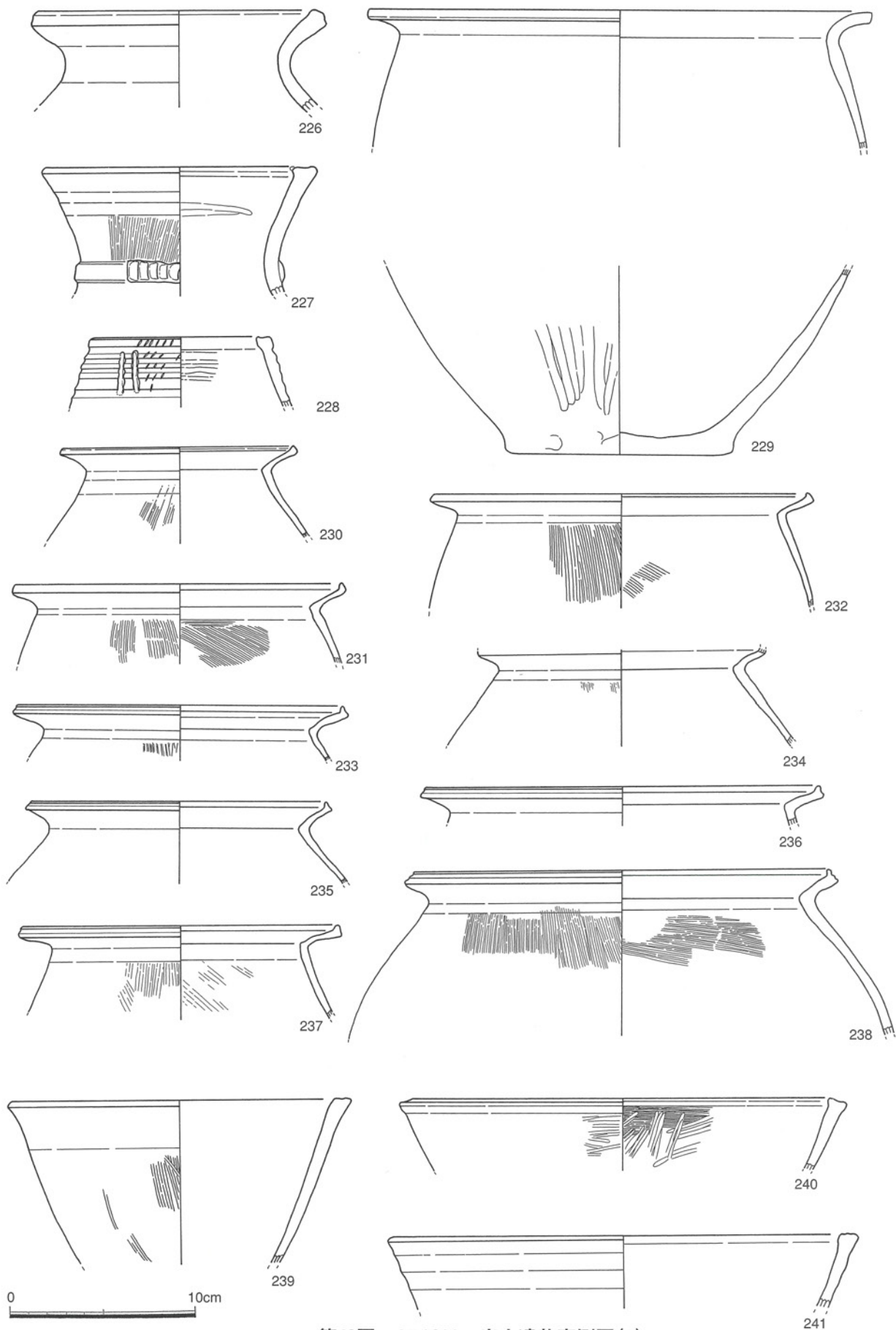
(第41図)

SB1010と切り合った状態で

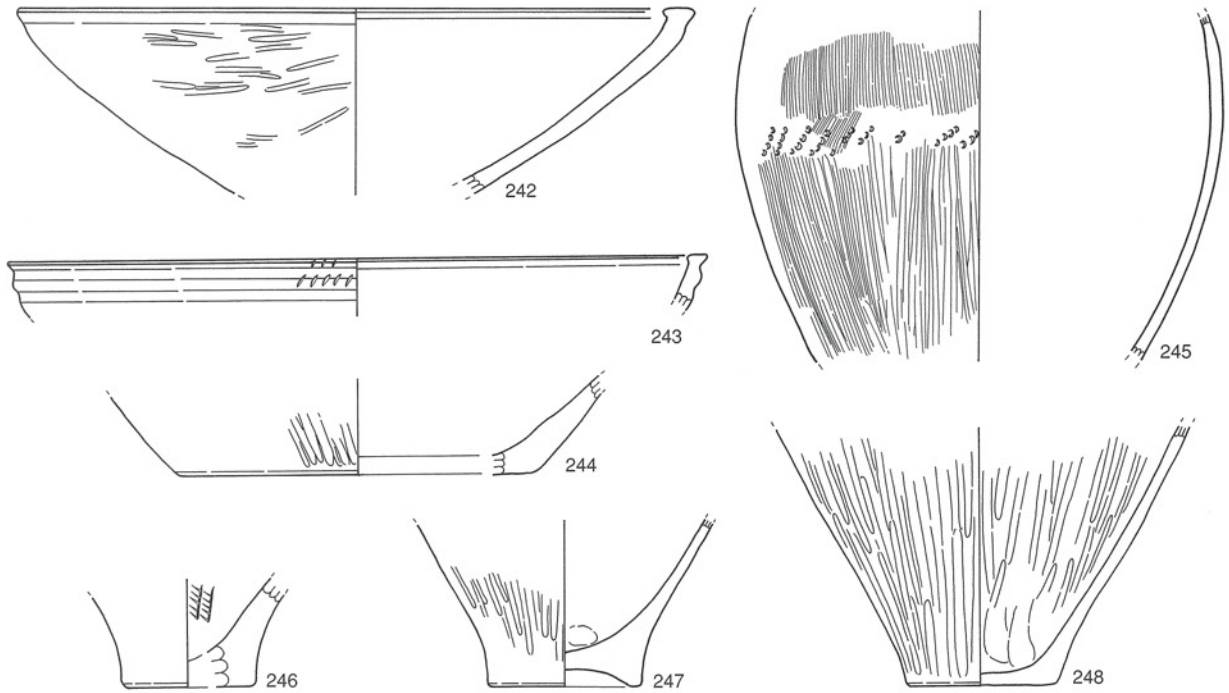


第42図 SB1011 遺物出土状況図

検出された竪穴住居跡である。遺構の東側を2m余り床面まで削平されているが本来は直径が5mを越える不整形円形の形態の竪穴住居であったと考えられる。遺構の北側半分には周溝が残されているが、南側の床面には痕跡が見いだせないことから、当初から遺構内を一周するようには掘り込まれてはいなかったものと考えられる。床面中央部には長さ約1m、幅0.5m、深さ20cmの不整形な形態の炉が掘り込まれ、内部には下部に炭化物が多量に残されていた。また、床面上には大小14基のピットが点在しているが、炉址との距離や各ピットの遺構内での位置からそのうちの5ないし6基がこの竪穴住居に伴う柱穴であったと考えられる。遺構内の覆土からは焼土と炭化物が面的な広がりを持ったブロック状に検出されていることから火災住居である可能性が高い。床面上には至る所で土器片が集中する場所が検出されているが、それ以外にも炉址を挟んだ対角線上に台石として用いられたと考えられる大型の砂岩の礫が一对置かれている。南側の台石は長さ約60cm、幅20cmの長方形の大型の礫で、その脇からは229



第43图 SB1011 出土遺物実測図(1)



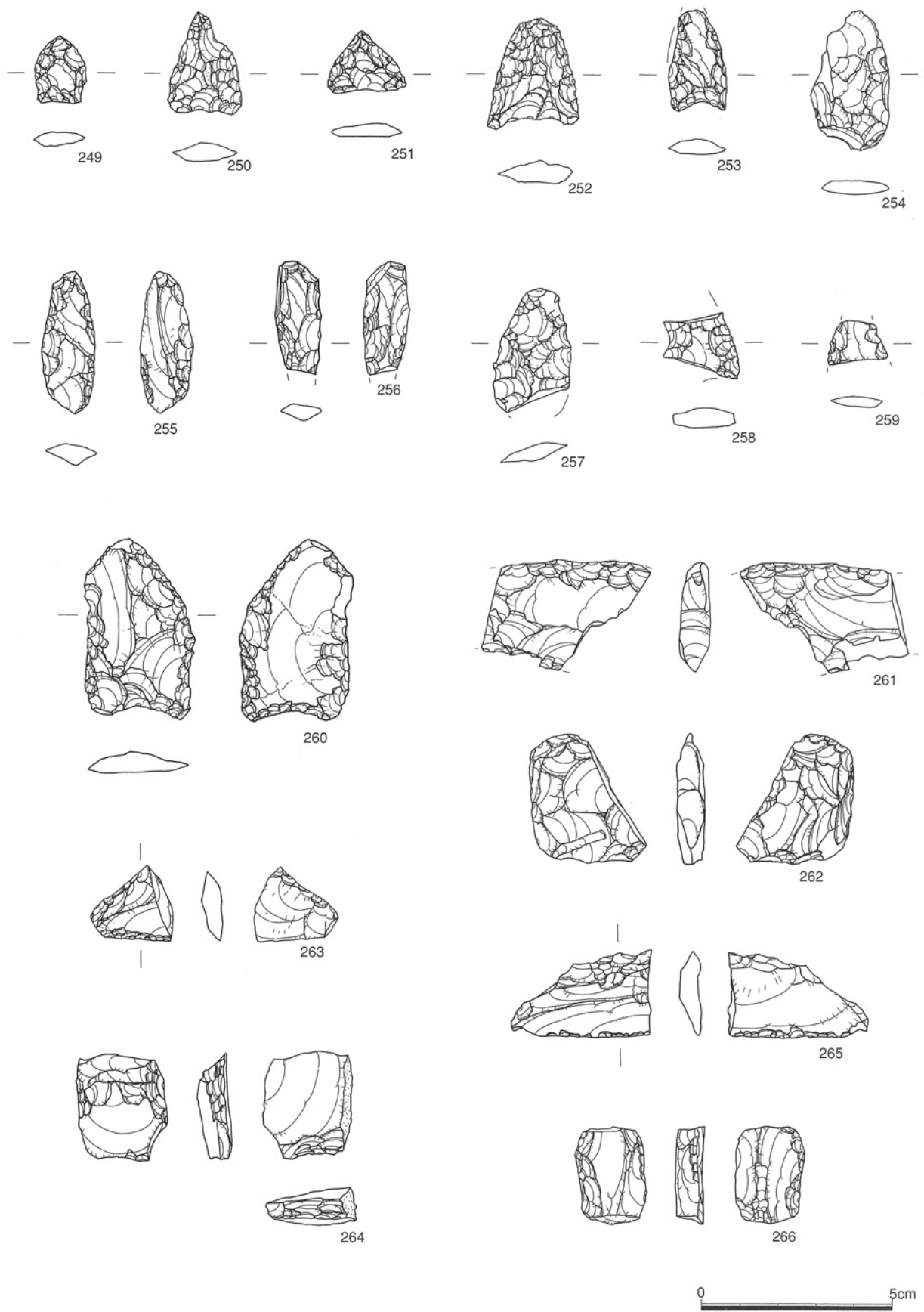
第44図 SB1011 出土遺物実測図(2)

0 10cm

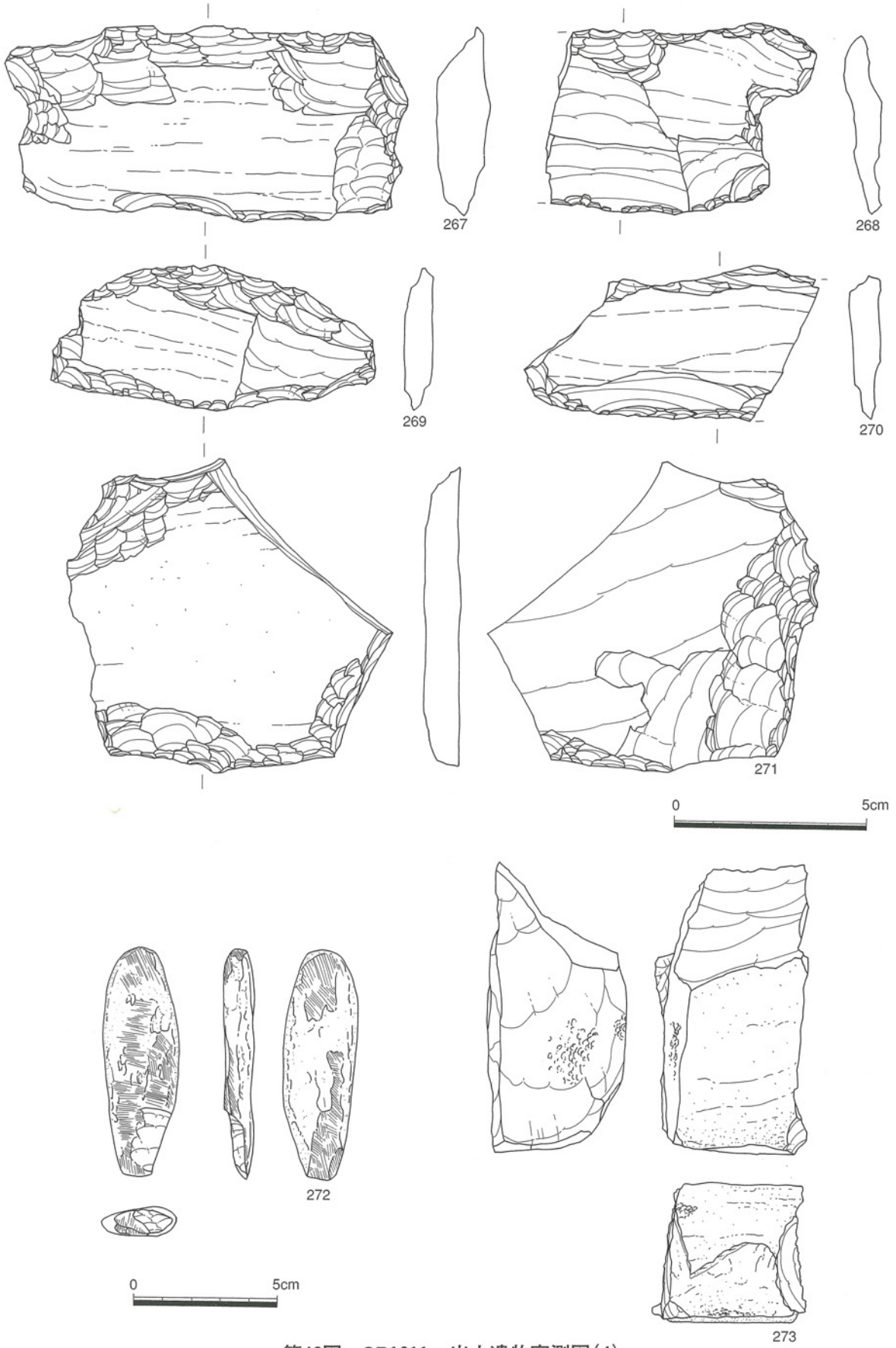
の大型の甕がつぶれた状態で出土している。

出土遺物（第42～46図）

226は外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ広口壺で、口縁端部は肥厚し円く仕上げられている。227は頸部から直線的に外上方にのびる上方への開きの少ない口縁部を持つ壺である。口縁端部は内側に拡張されて平坦面を作りだし、頂部はわずかにくぼんでいる。また頸部には指頭圧痕が施された帯状の突帯が1本廻されている。228は無頸壺の口縁である。内傾する口縁の端部は内側にわずかに拡張され、頂部は凹線状にくぼんでいる。口縁部には複数の凹線が巡らされ刻目が施されるとともに、一对の棒状浮文が縦に貼付けられている。229は強く外反する短い口縁と平坦に仕上げられた口縁端部を持つ大型の甕である。体部はあまり膨らまず、底部は比較的大きい。230～238は「く」の字に屈曲する頸部と端部が上方に拡張された短い口縁部を持つ甕である。拡張された口縁端部には凹線が施されるものと平坦なまま残されるものがある。体部は「ハ」の字に開くものや、膨らみの少ないもの、球形のものなどがある。239～241は直線的に外上方にのびる体部とわずかに外方または内外方に拡張された口縁端部を持つ鉢である。拡張によって生じた平坦面は横ナデによって浅くくぼんでいる。242・243は内外方に拡張された口縁端部を持つ高杯または鉢である。243は口縁部に凹線が巡らされ刻目が加えられている。245は櫛による刺突が加えられた甕の体部である。249～253はサヌカイト製の打製石鏃である。249は平基無茎式で五角形に近い珍しい形態を持っている。250～253は凹基無茎式であるが、基部の挟りが浅く平基式に近い形態のものがある。254は剥片の片方の側縁に調整を加えた打製石鏃の未製品と考えられるものである。255は剥片を折断したものに両面から調整を加えたもので、石鏃の未製品の可能性がある。256は打製石鏃であろうか？ 260は剥片の周縁部に調整を加えたもので、基部には挟りが加えられている。261・262は楔型石器、263～266は細部調整が加えられた剥片である。267～270は結晶



第45图 SB1011 出土遺物実測图(3)



第46図 SB1011 出土遺物実測図(4)

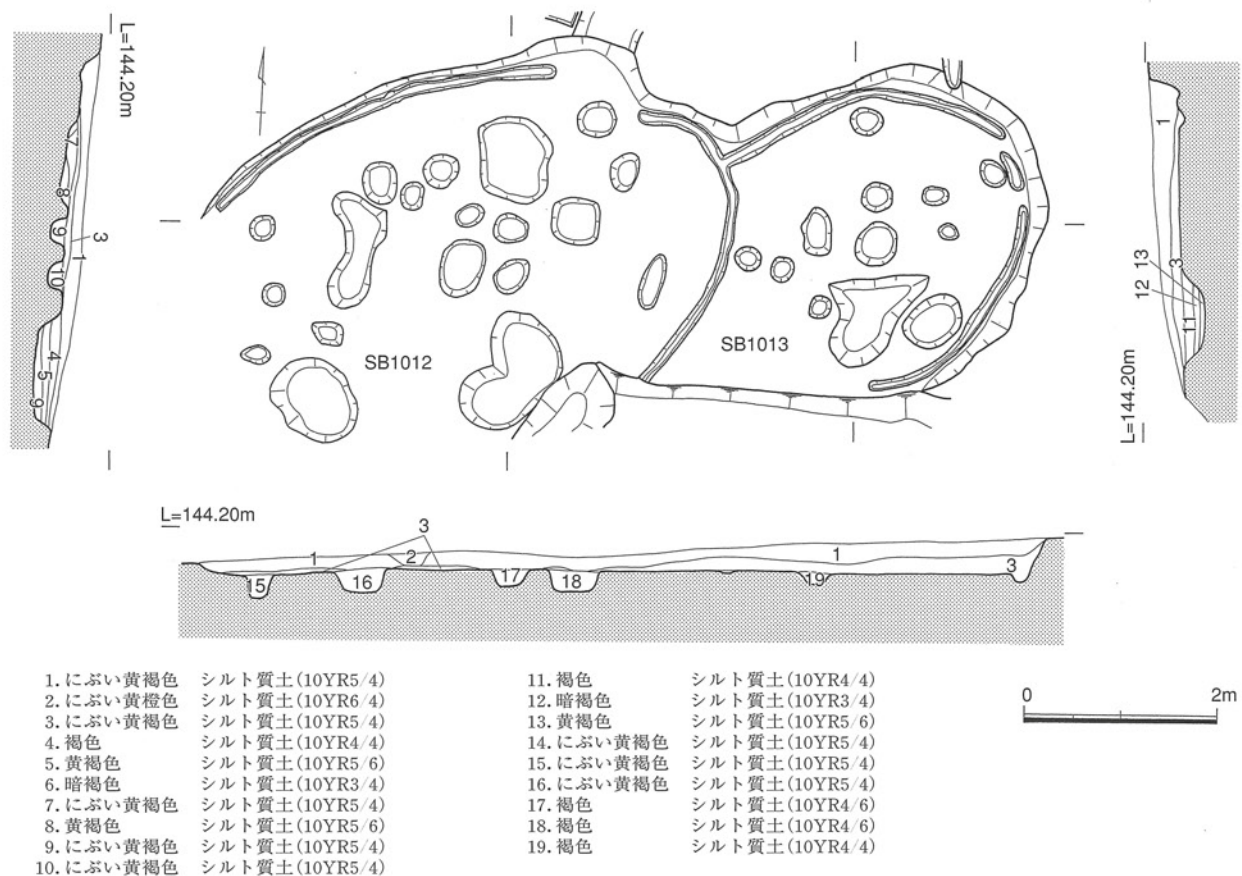
片岩製の打製石庖丁で、267～269の端部にはくり込みが設けられている。両端が残る267と269を比較すると、267は両端にくり込みが設けられているが、269は片方のみでもう一方は尖らされている。270は片面に自然面を残した大型の結晶片岩の剥片の縁辺部に調整が加えられたもので、削器や打製石鋏の可能性はある。272は細長く扁平な礫の一端を打ち欠いたうえに研磨を加え刃部を作り出した磨製石斧である。273は大型の礫をいくつかの塊に分割したものを使用した敲石で、礫の割れ口に細かな敲打痕が残されている。また礫面には研磨の痕跡が残され砥石として使用されていた可能性がある。

竪穴住居跡 12 (SB1012) (第47図)

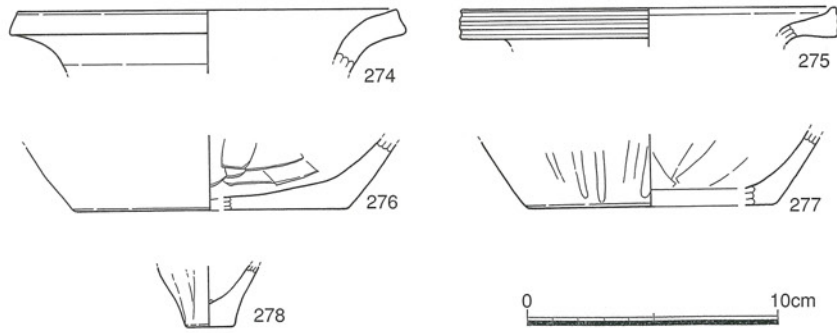
長径約5m、短径4mの楕円形をした竪穴住居跡で東側はSB1013と切り合っている。他の竪穴住居同様、比高の低い南西側は側壁が失われているが側壁が残された北側や東側の床には壁面に沿って周溝が残されている。床面中央部には楕円形の炉址が掘り込まれ、その周辺には柱穴と考えられる直径30～40cm前後の円形のピットやそれよりも規模の大きい不整形な形の土坑が掘り込まれている。ピットの配置は不規則でどれがこの住居址に付随する柱穴か断定出来ない。

出土遺物 (第48～50図)

274は外反する比較的短い口縁部を持つ壺である。口縁端部は幅広で横ナデによって凹線状に浅くくぼんでいる。275も外反する比較的短い口縁部を持つ壺である。上方への拡張によって平坦面が作り出された口縁端部には複数の凹線が巡らされている。276・277は壺の底部である。いずれも底径が大きく、



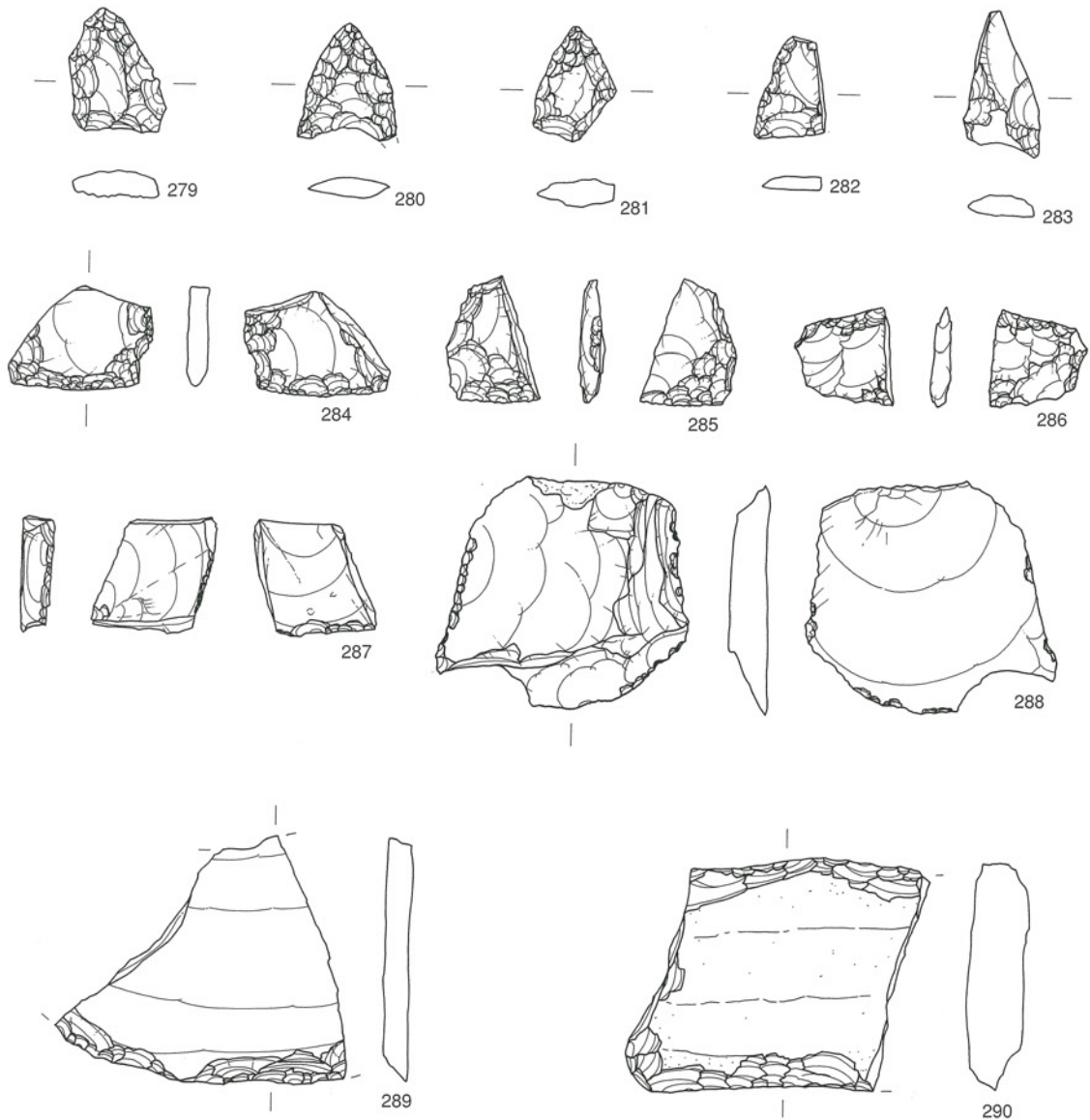
第47図 SB1012・1013 実測図



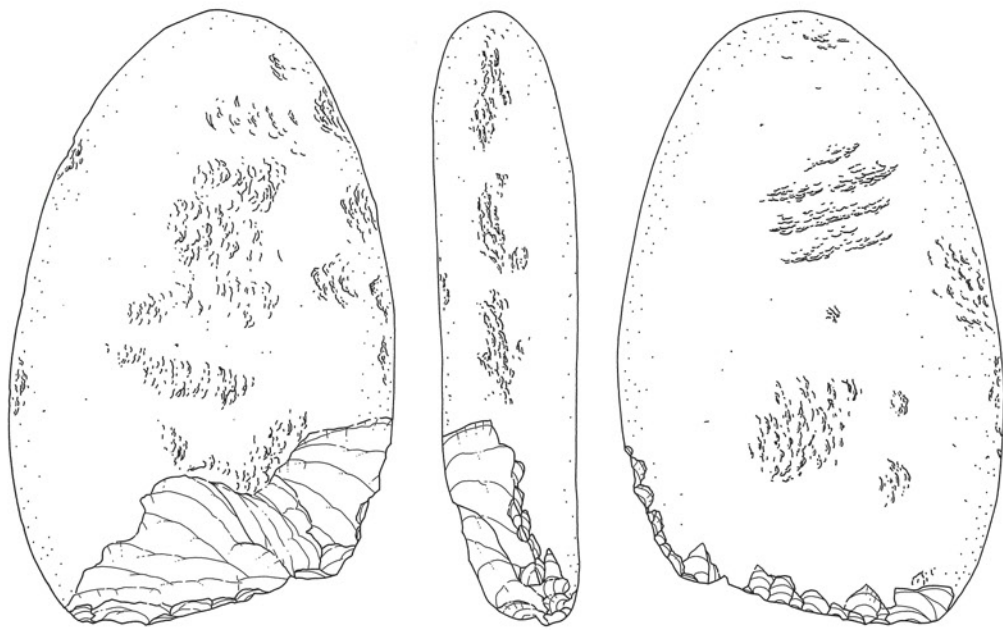
第48図 SB1012 出土遺物実測図(1)

内面にはヘラ削りの痕跡が顕著に残されている。278はミニチュアの甕であるが、体部上半を欠いている。279～283は、サヌカイト製の打製石鏃またはその未製品である。279と280はそれぞれ平基無茎式と凹基無茎式に分類される。284～286は縁辺部に細部調整を加えたサヌカイトの剥片である。287は四方を折断し不整四辺形の形に整えた剥片の折断面に調整を施し刃部を作り出したものである。289・290は結晶片岩製の打製石庖丁である。両者とも端部を欠くた

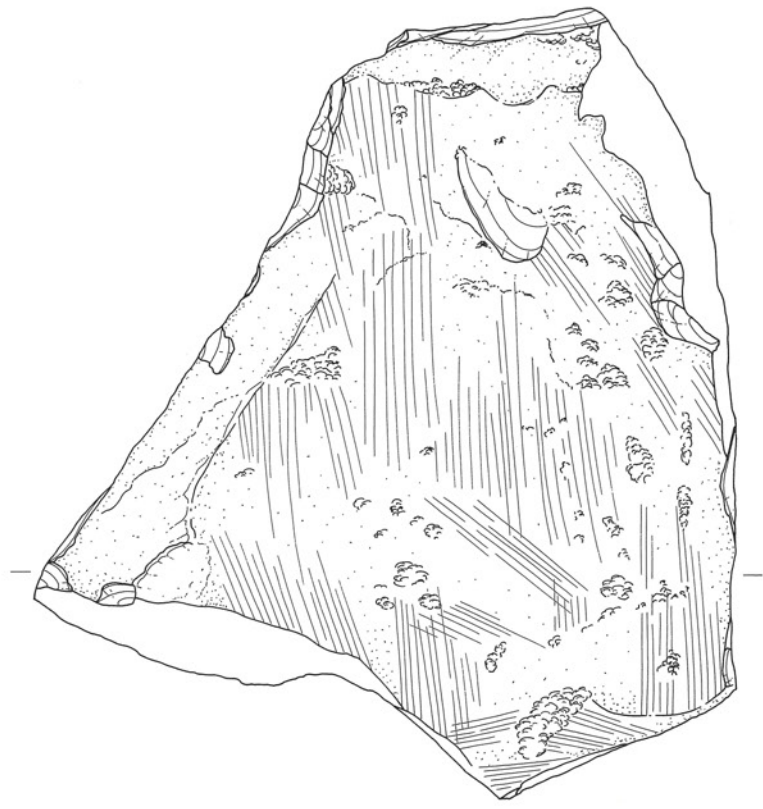
内面にはヘラ削りの痕跡が顕著に残されている。278はミニチュアの甕であるが、体部上半を欠いている。279～283は、サヌカイト製の打製石鏃またはその未製品である。279と280はそれぞれ平基無茎式と凹基無茎式に分類される。284～286は縁辺部に細部調整を加えたサヌカイトの剥片である。287は四方を折断し不整四辺形の形に整えた剥片の折断面に調整を施し刃部を作り出したものである。289・290は結晶片岩製の打製石庖丁である。両者とも端部を欠くた



第49図 SB1012 出土遺物実測図(2)



291



292



第50図 SB1012 出土遺物実測図(3)

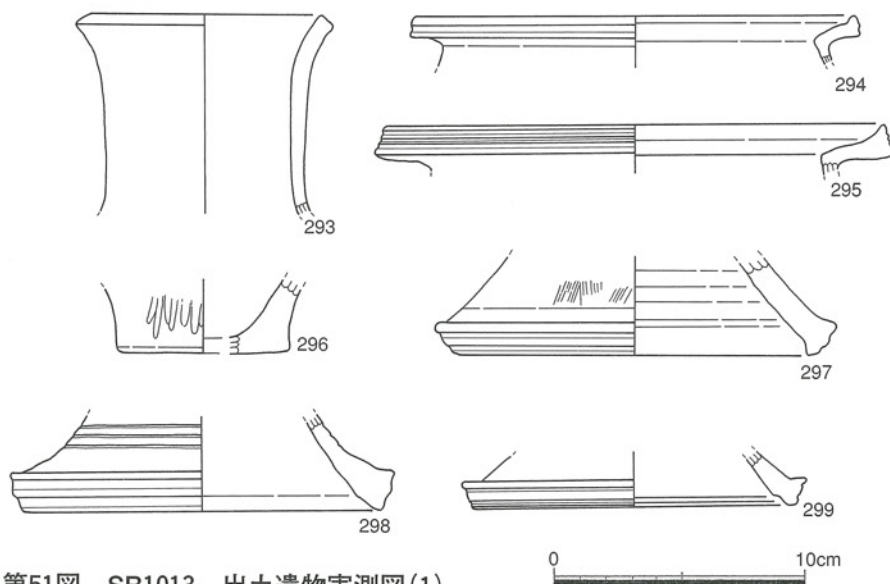
め、くり込みの有無は不明である。291は扁平な楕円形の礫の一端を粗く打ち欠き、刃部を作り出した石器であるが、表裏両面と側縁部いずれにも敲打痕が残され敲石としても使用されている。292は大型の礫の平坦面を用いて砥石としたものであるが、台石としても用いられたと考えられ、所々に敲打痕が残されている。

竪穴住居跡 13 (SB1013) (第47図)

SB1012の東側で一部がSB1012と切り合った状態で検出された竪穴住居跡である。遺構の南西側がSB1012と切り合い、周溝を欠くため正確な大きさは明らかではないが、長径4m以上、短径3.4m前後の楕円形のプランを持つ遺構であったと考えられる。土層ではSB1012との前後関係を明らかには出来なかったが、側壁に沿って東から北に巡らされた周溝がSB1012の周溝と重なる場所で収束しているところからSB1012に先行する可能性がある。床面には一部で途切れているが側壁に沿って周溝が巡らされ、中央部に炉址が設けられている。また、炉の周囲には柱穴と考えられる大きさの異なるピットが掘り込まれているがその配列は不規則である。

出土遺物 (第51～53図)

293は、長い筒状の頸部とわずかに外反する口縁を持つ長頸の壺で、口縁端部は拡張されることなく平坦に仕上げられている。294・295は頸部との境で強く「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ甕である。いずれも口縁端部が上方に拡張されて平坦面を作り、凹線が巡らされている。297～299は外下方に向かって「ハ」の字に開く高杯の脚台部である。脚端部は外上方に拡張されて平坦面を作り、凹線が巡らされている。298の裾部には平行沈線が3本つけられている。300～305はサヌカイト製の打製石鏃である。300・301は平基無茎式、302・303は凹基無茎式に分類される。304・305も打製石鏃であるが基部を欠くため形態は不明である。306～309はサヌカイトの剥片に調整を加えた削器である。309は側縁に抉りが施されている。311はサヌカイトの大型の盤状剥片である。打面には複数の打面調整が行われている。310は結晶片岩製の打製石庖丁である。両端は直線的でくり込みは作られていない。312は打製石鏃の先端部の破片と考えられるもので、片面には自然面が残され剥離の稜線は摩滅している。313は磨



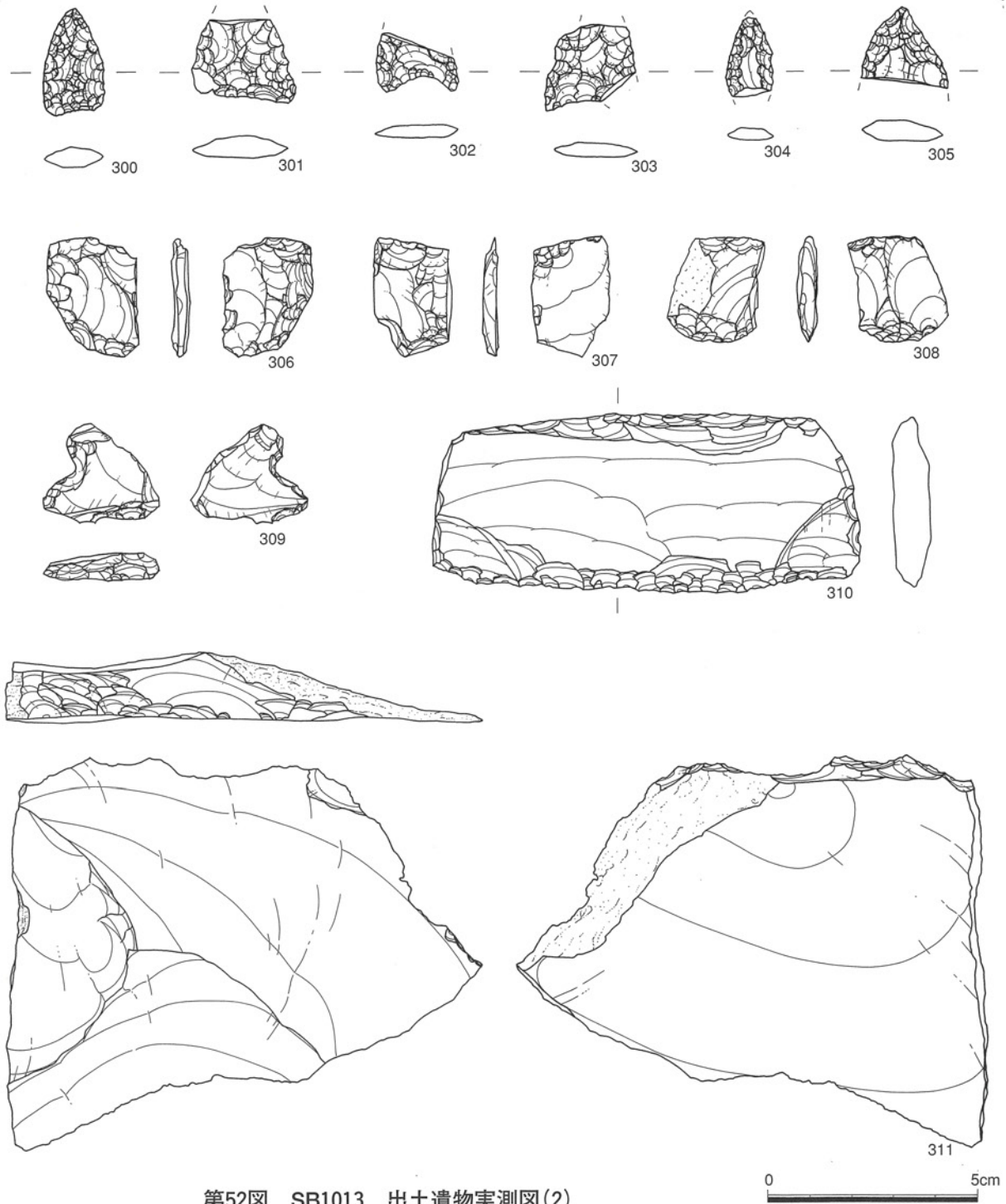
第51図 SB1013 出土遺物実測図(1)

製石斧を敲石に転用したもので、頭部や側面を中心に細かな敲打痕が残されている。

竪穴住居跡 14

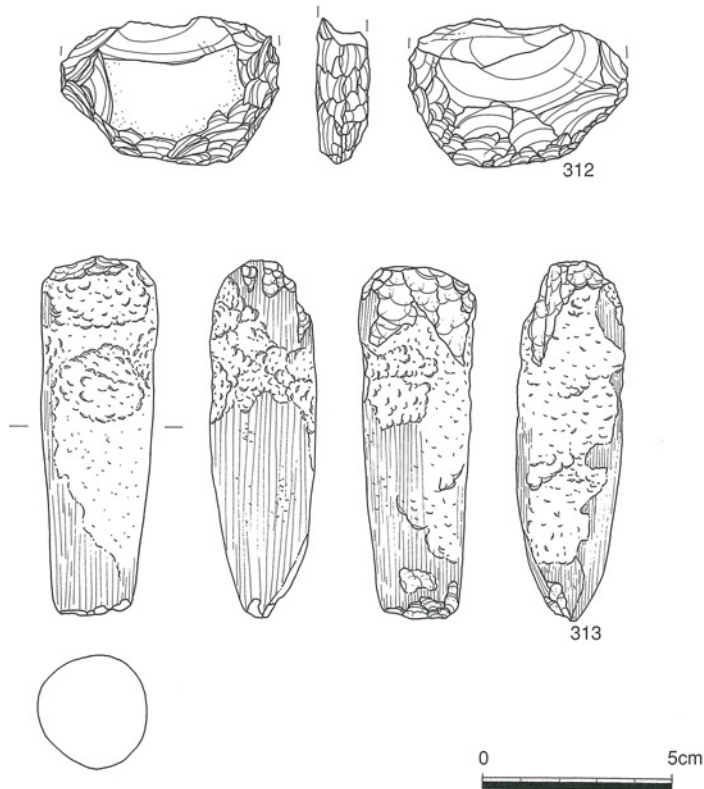
(SB1014) (第54図)

他の多くの住居址同様、北から南に向かって下る緩斜面上に掘り込まれているため、遺構の南側の側壁や床の一部が削平された状態で検出され

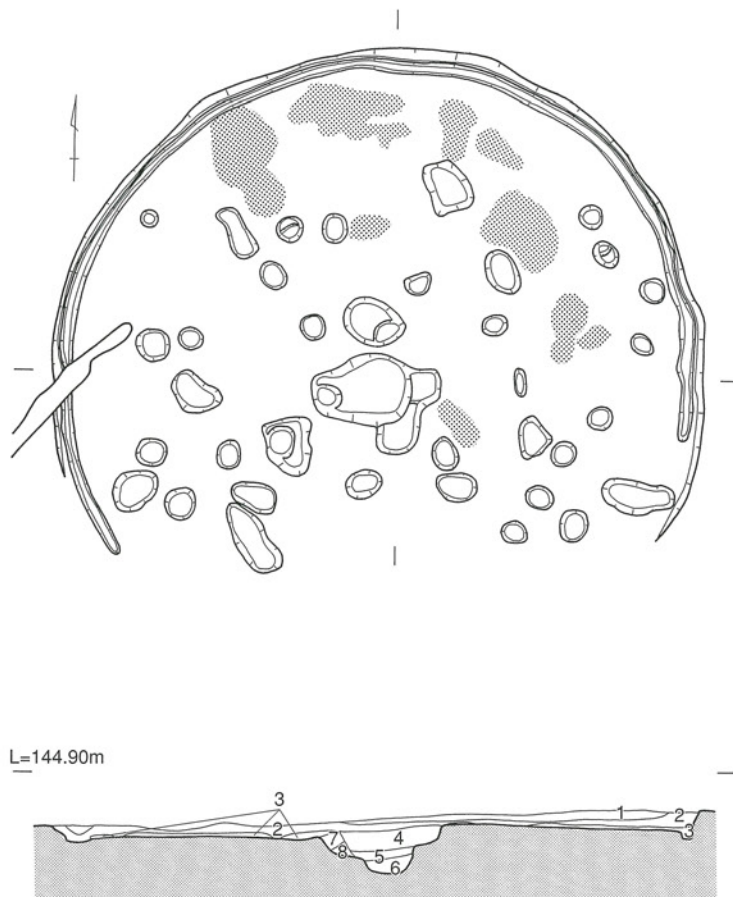


第52図 SB1013 出土遺物実測図(2)

ている。遺構の平面はきれいな円形で直径が7 mを越える大型の住居である。残された側壁に沿った床面には周溝がきれいに巡らされ、ほぼ中央部には長径1 mを越える不整形の炉が掘り込まれている。炉の周囲の床からは柱穴と考えられる円形のピットが多く検出されているが、その配置は不規則でどのピットがこの竪穴に伴う柱穴になるかは不明である。遺構の覆土からはかなりの範囲で焼土と炭化物がブロック状に検出されている。



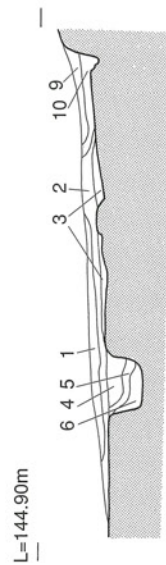
第53図 SB1013 出土遺物実測図(3)



第54図 SB1014 実測図

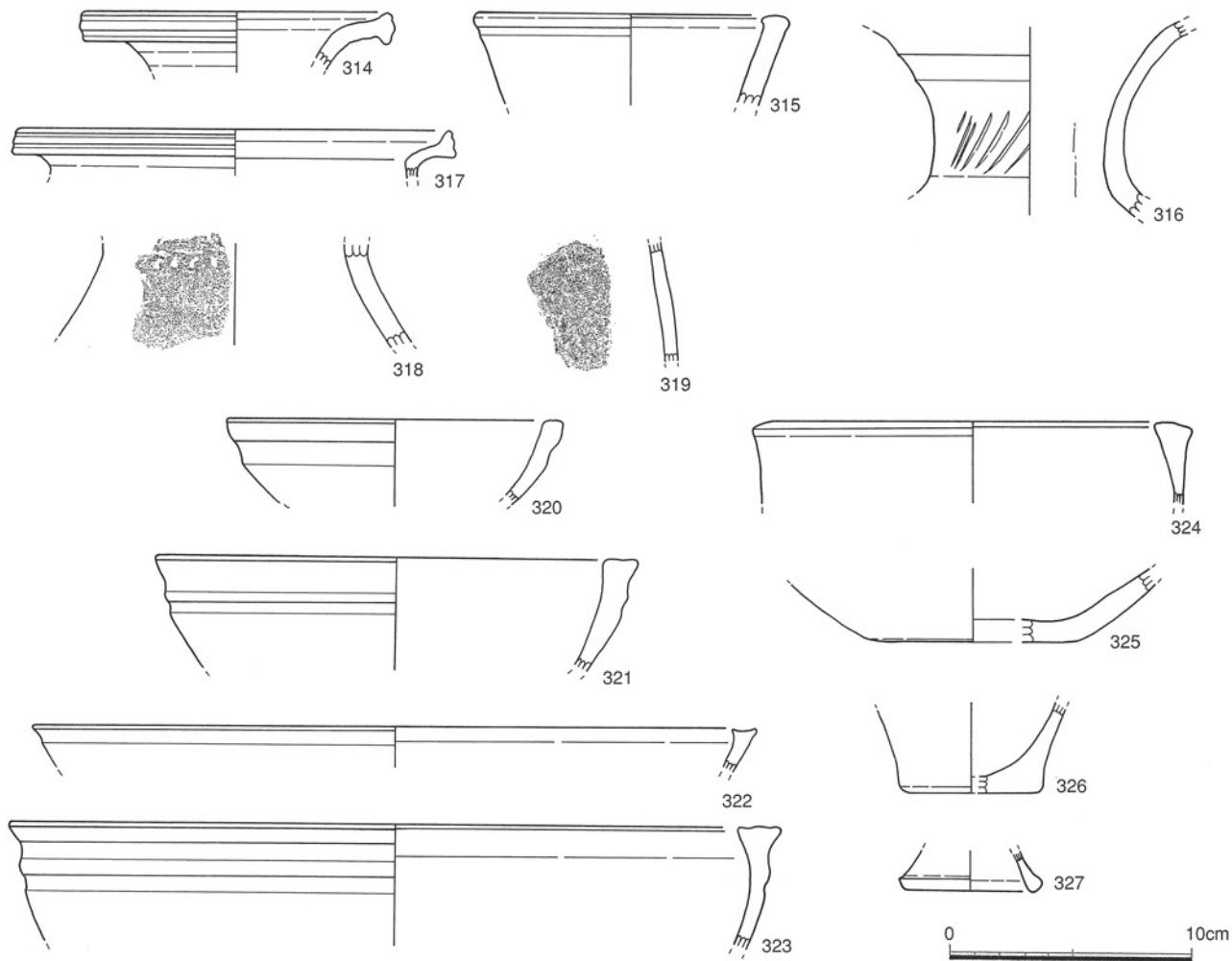
出土遺物 (第55~58図)

314は細く締まった頸部と大きく外反する口縁部を持つ広口壺中型の壺である。口縁部は内外面ともに丁寧な横ナデ調整が加えられ、上下に拡張された口縁端部には凹線が2条巡らされている。315は外上方に向かってのびる直線的な口縁部を持つ壺である。口縁端部は内側にわずかに拡張され横ナデによって円く仕上げられている。316も314同様、細く締まった頸部と外上方に向かって大きく開くラップ状の口縁部を持つ壺である。口縁端部を欠くため、凹線の有無は確認できないが口縁端部直下には丁寧な横ナデが施され、頸部にはヘラ先による斜行する刺突が連続して加えられている。318・319も



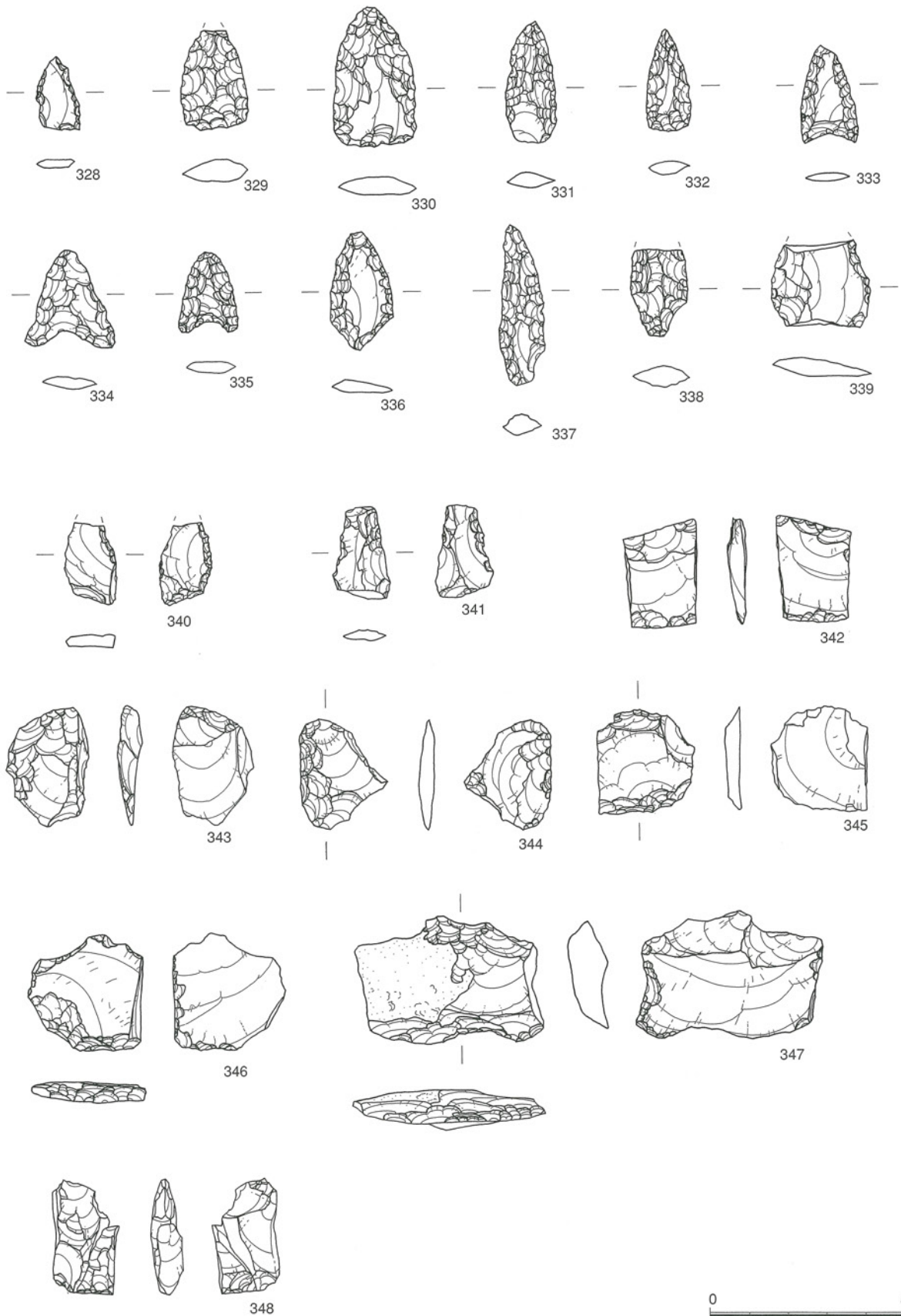
- | | |
|-----------|-----------------|
| 1. にぶい黄褐色 | シルト質土 (10YR5/4) |
| 2. 明黄褐色 | シルト質土 (10YR6/6) |
| 3. 明黄褐色 | シルト質土 (10YR6/6) |
| 4. にぶい黄褐色 | シルト質土 (10YR4/3) |
| 5. 黒褐色 | シルト質土 (10YR2/2) |
| 6. 褐色 | シルト質土 (10YR4/6) |
| 7. 暗褐色 | シルト質土 (10YR3/4) |
| 8. 褐色 | シルト質土 (10YR4/6) |
| 9. 褐色 | シルト質土 (10YR4/4) |
| 10. 暗褐色 | シルト質土 (10YR3/4) |



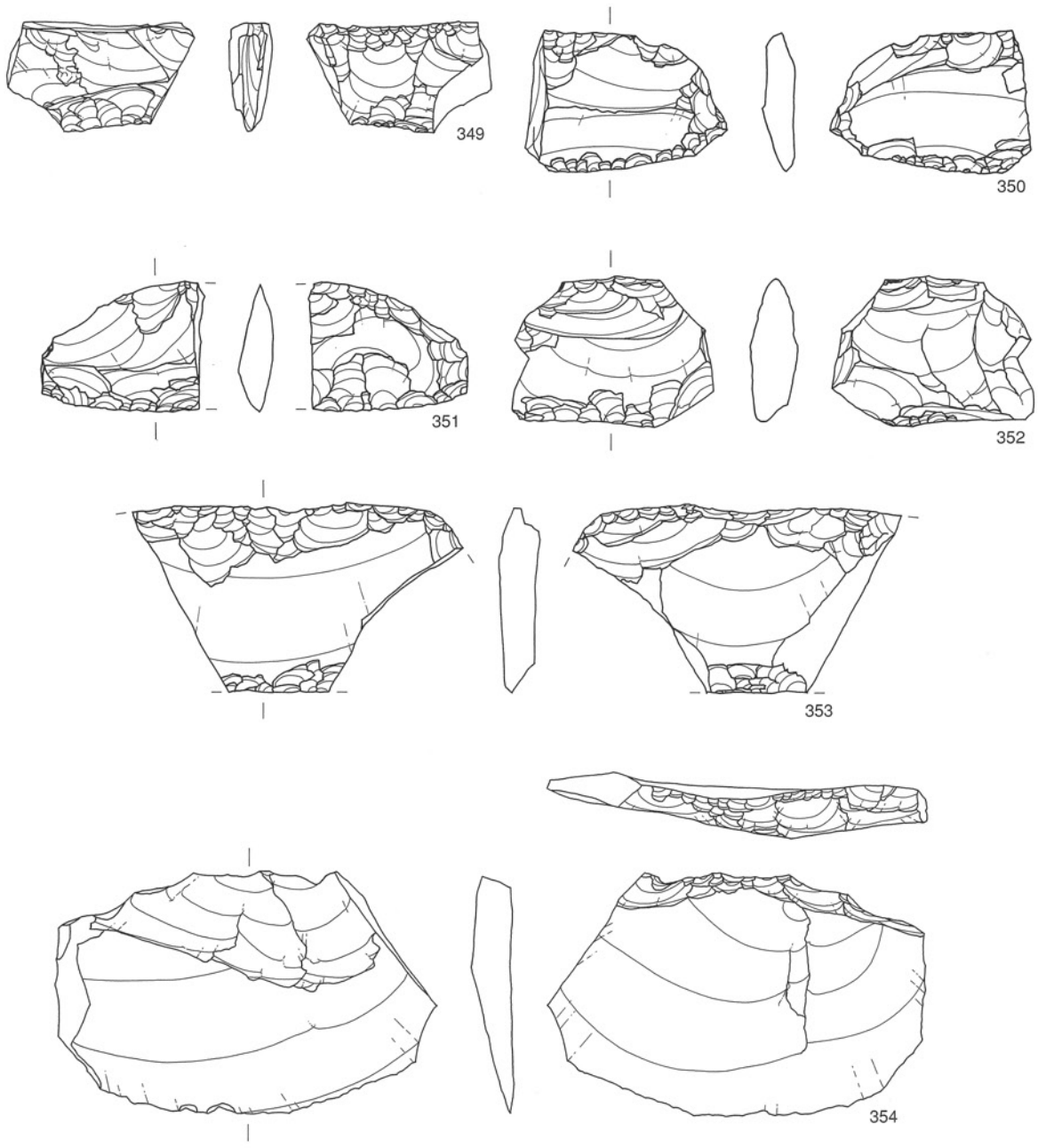


第55図 SB1014 出土遺物実測図(1)

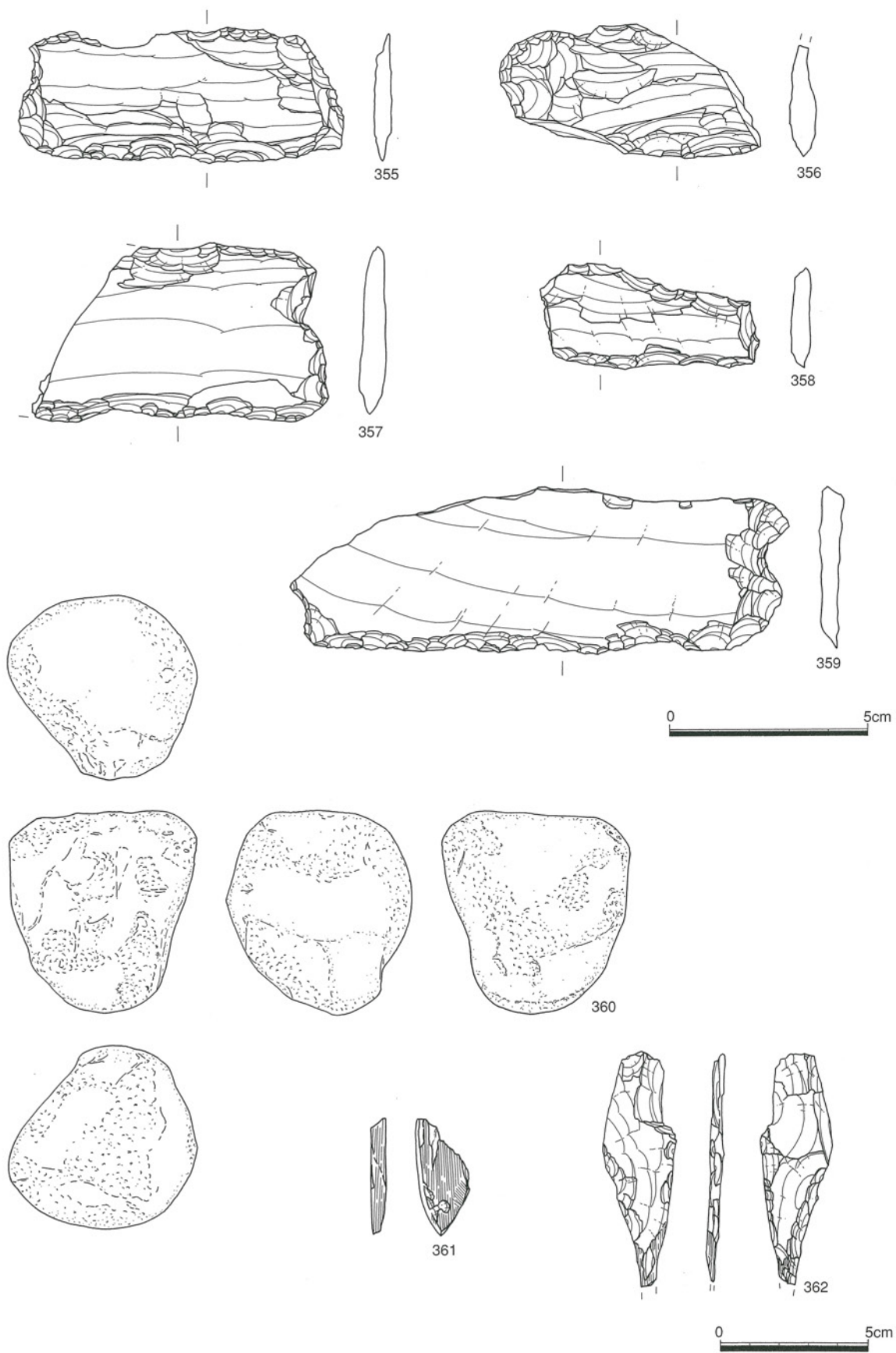
壺の破片である。317は「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる短い口縁部を持つ甕である。上方への拡張によって幅広の平坦面が作り出された口縁端部には、凹線が2条巡らされている。320・321は徐々に肥厚しながら緩やかに内湾する体部と、平坦に仕上げられた口縁端部をもつ高杯の杯部である。口縁部には丁寧な横ナデ調整が行われ、1条ないし2条の幅広で不明瞭な凹線が巡らされている。322・323は高杯の杯部、または鉢と考えられるものである。体部は緩やかに内湾し、内外方に拡張されて作り出された口縁端部の平坦面と、口縁部直下にはそれぞれ凹線が巡らされている。324も高杯の杯部または鉢と考えられるものである。直立する体部と肥厚し平坦に仕上げられた口縁端部を持っている。327は外下方に向かって「ハ」の字に広がる高杯の脚台部である。脚端部は肥厚し円く仕上げられている。328～339はサヌカイト製の打製石鏃である。石鏃は基部の形態によって328～332が平基無茎式、333～335が凹基無茎式、336～338が凸基有茎式にそれぞれ分類される。339も打製石鏃と考えられるが基部と先端を欠失している。340～347はそれぞれ縁辺部に細部調整が加えられた剥片である。346・347には角度の急な調整が施されている。348・349は楔型石器である。348の截断面には削片が接合する。350～353はサヌカイト製の打製石庖丁である。350・351の端部にはくり込みは作られていない。354は翼状剥片である。355～359はいずれも結晶片岩製の打製石庖丁である。355・357・359は端部にくり込みが設けられている。357は一方の端部を欠失するため不明だが、355では片側、359では両端にくり込み



第56图 SB1014 出土遺物実測図(2)



第57图 SB1014 出土遺物実測図(3)



第58図 SB1014 出土遺物実測図(4)

みが作られている。360は石英の礫を素材にした敲石である。他の敲石と異なるのは敲打が加えられる場所が礫の稜線部分を中心に行われていることである。361は柱状片刃石斧の先端部の破片である。362は一端の尖った片岩の剥片の先端部を部分的に研磨したものであるが、用途は不明である。

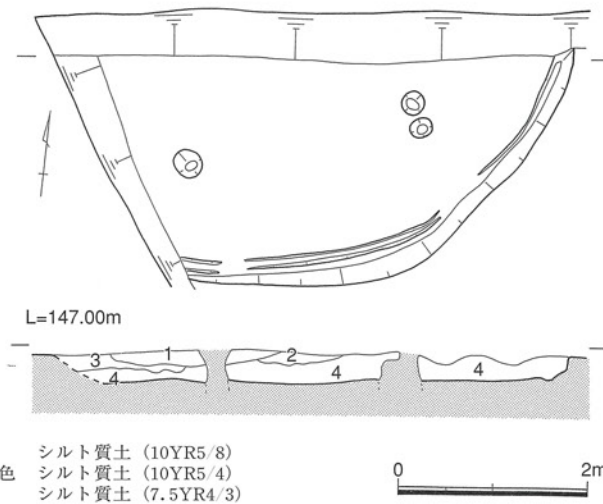
竪穴住居跡 15 (SB1015) (第59図)

遺構の大部分が調査区外にのびているため規模や形態が正確には把握出来ないが側壁に沿って検出された周溝から竪穴住居と確認出来た遺構である。遺構内からは周溝以外は柱穴の一部と考えられるピットが3基確認されただけで炉址などは調査区外にあるものと考えられる。

出土遺物 (第60～62図)

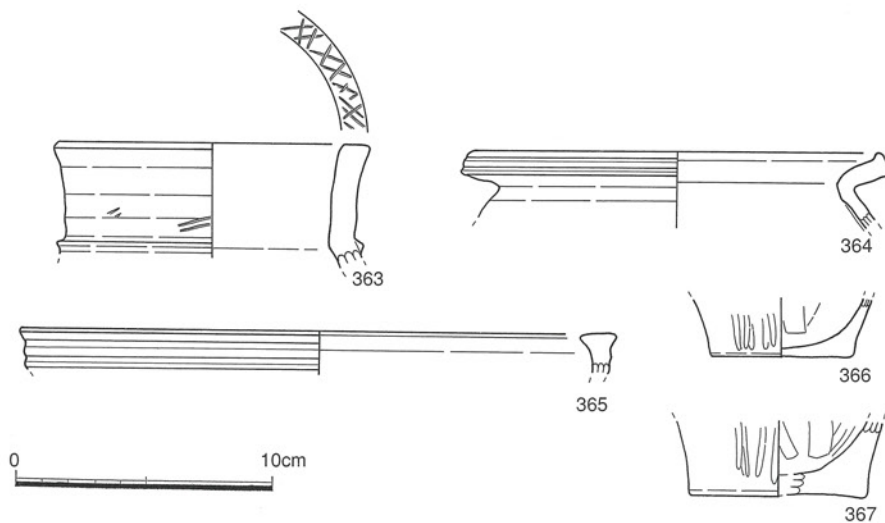
363は筒状の口頸部を持つ直口壺である。平坦に仕上げられた口縁端部には沈線により斜格子目文が描かれ、頸部の屈曲部には断面三角形の隆帯が一本廻らされている。364は強く「く」の字に屈曲する

頸部と外上方にのびる直線的な短い口縁部を持つ甕である。わずかに上下に拡張され平坦面が作り出された口縁端部には凹線が2条巡らされている。365は高杯の杯部または鉢と考えられるものである。わずかに内湾する口縁の端部は内外方への拡張により平坦面が作り出され、口縁部には複数の凹線が巡らされている。368～383はサヌカイト製の打製石鏃である。基部の



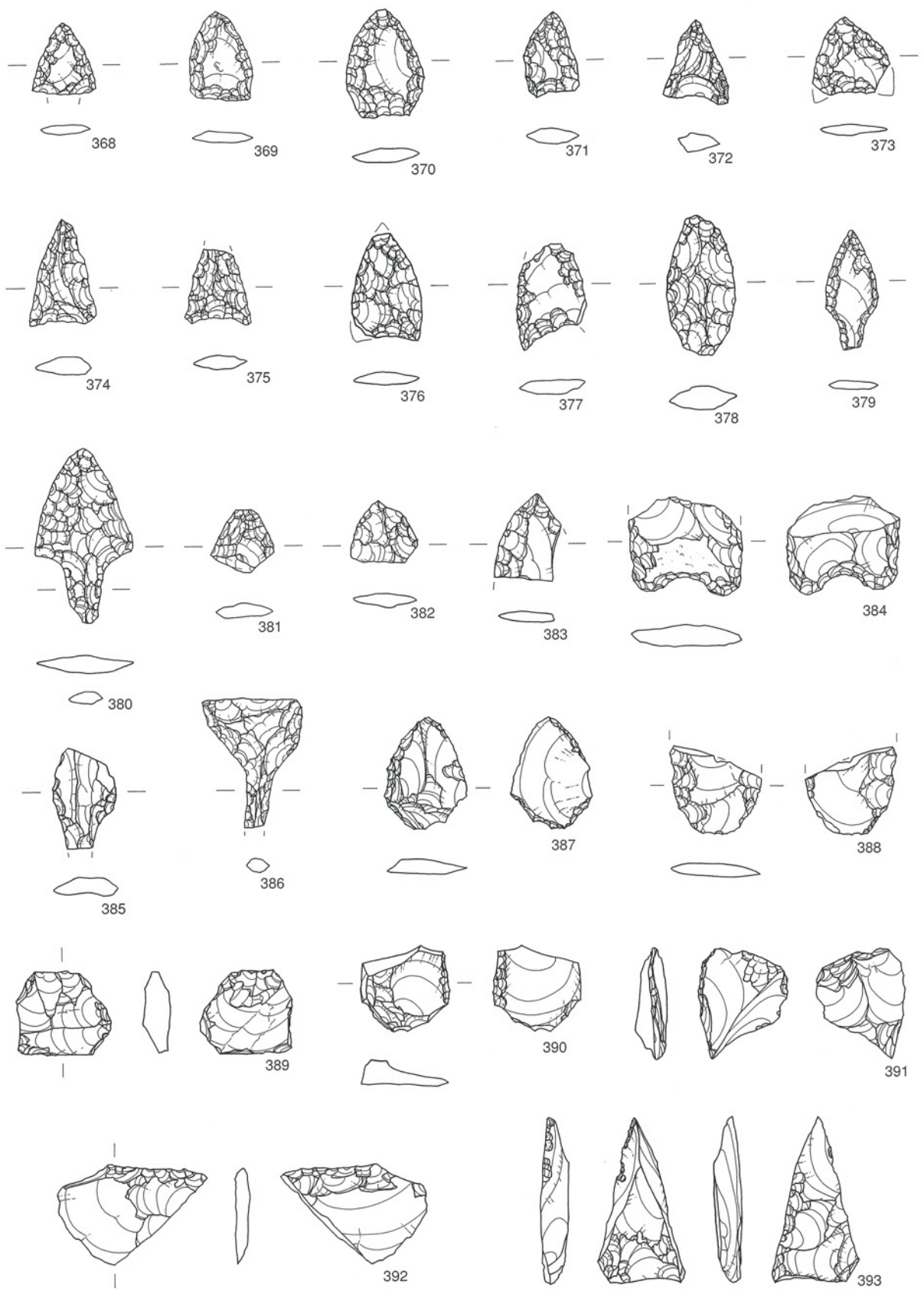
- 1. 木炭層
- 2. 黄褐色 シルト質土 (10YR5/8)
- 3. にぶい黄褐色 シルト質土 (10YR5/4)
- 4. 褐色 シルト質土 (7.5YR4/3)

第59図 SB1015 実測図

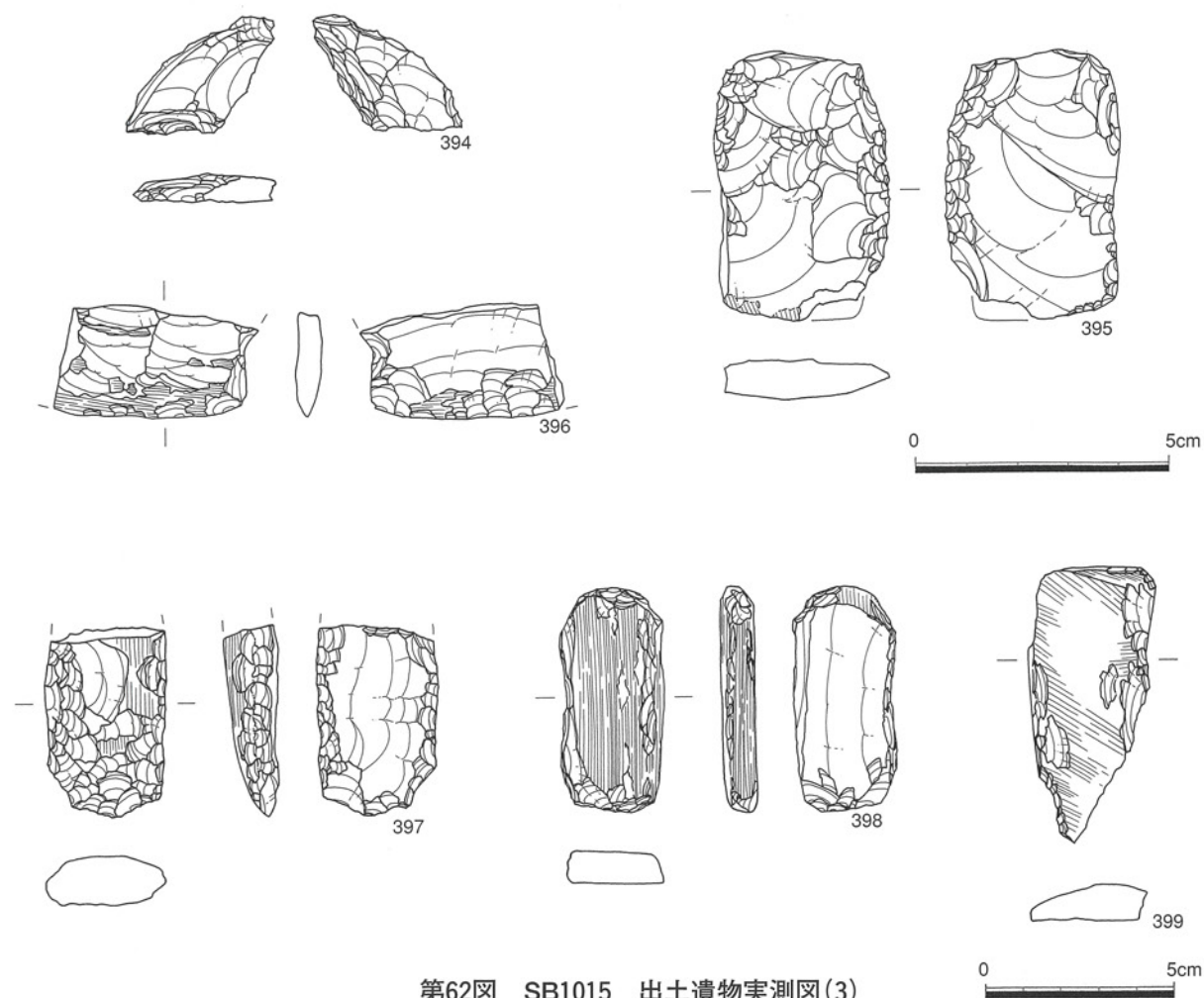


第60図 SB1015 出土遺物実測図(1)

形態によってそれぞれ平基無茎式 (368～370)、凹基無茎式 (371～377)、凸基無茎式 (378)、凸基有茎式 (379・380) に分類できる。384は縁辺部の一部に抉りが加えられた石鏃の可能性のある石器である。385・386はサヌカイト製の打製石鏃で385は頭部が非常に小さい。387はチャート製の削器と考えられるもの



第61图 SB1015 出土遺物実測図(2)

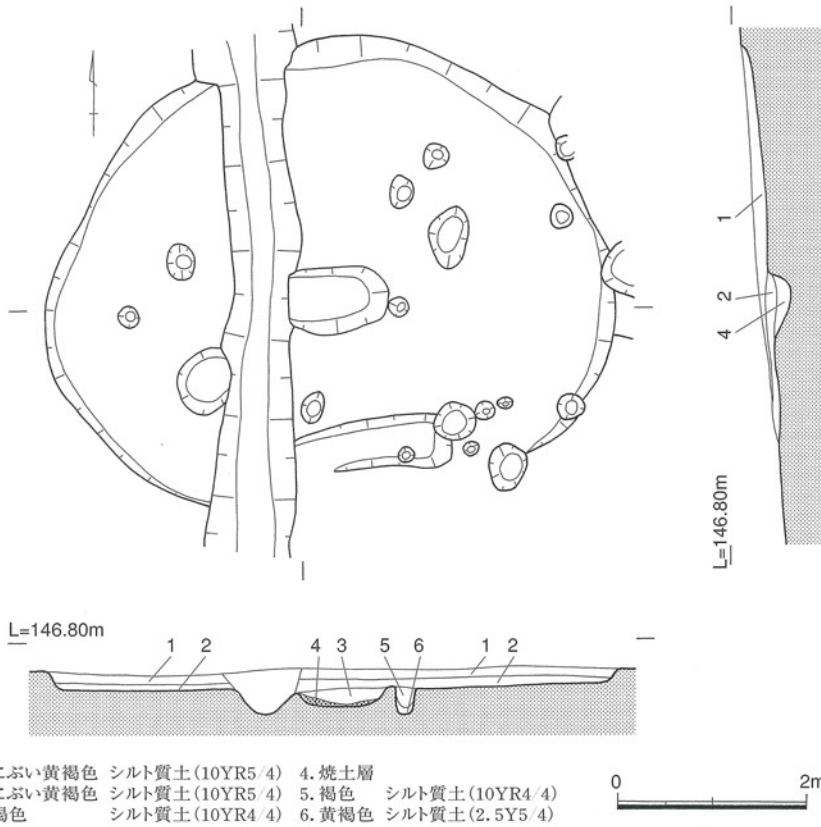


第62図 SB1015 出土遺物実測図(3)

で、剥片の縁辺部には簡単な調整が加えられている。388～392も同じく縁辺部に簡単な調整が加えられたサヌカイトの剥片である。388・389は石鏃の未製品の可能性もある。393は折断によって得られた三角形の形状の剥片の折断面に簡単な調整を加えている。395は剥片を折断と両極打法により方形の形状に整えた後、残された元の剥片の縁辺部に研磨を加えて刃部を作り出した石器である。396は結晶片岩製の打製石庖丁の破片である。端部にくり込みが作られた石庖丁は表裏両面とも部分的に刃部が磨かれている。397は磨製石斧の破片の周縁部に調整を加え、新たに磨製石斧を作り出そうとする途中のものか、小型の石鋏としたものであろうか。398・399も磨製石斧の破片だが、398には上下両端を研磨して形を整え新たに磨製石斧を作り出そうとした痕跡が残されている。

竪穴住居跡 16 (SB1016) (第63図)

SB1015の南東に隣接して検出された東西方向に長軸を持つ長径約6m、短径5mの楕円形のプランを持つ竪穴住居で、遺構の一部を土坑SK1114に切られている。床面中央部には長さ約1.2m、幅0.8m、深さ30cmの不整楕円形の炉址が検出され、周囲には不規則に配置されたピットと不整形な浅い掘り込みが残されていたが、周溝は検出されなかった。遺物は石器が比較的多く出土しているが、弥生土器は小片のものが多い。

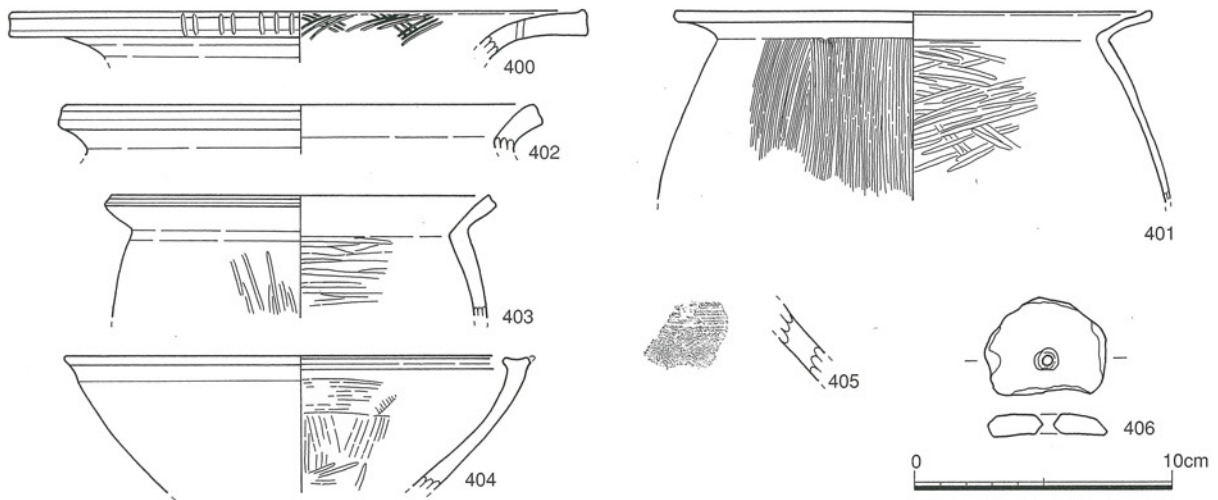


第63図 SB1016 実測図

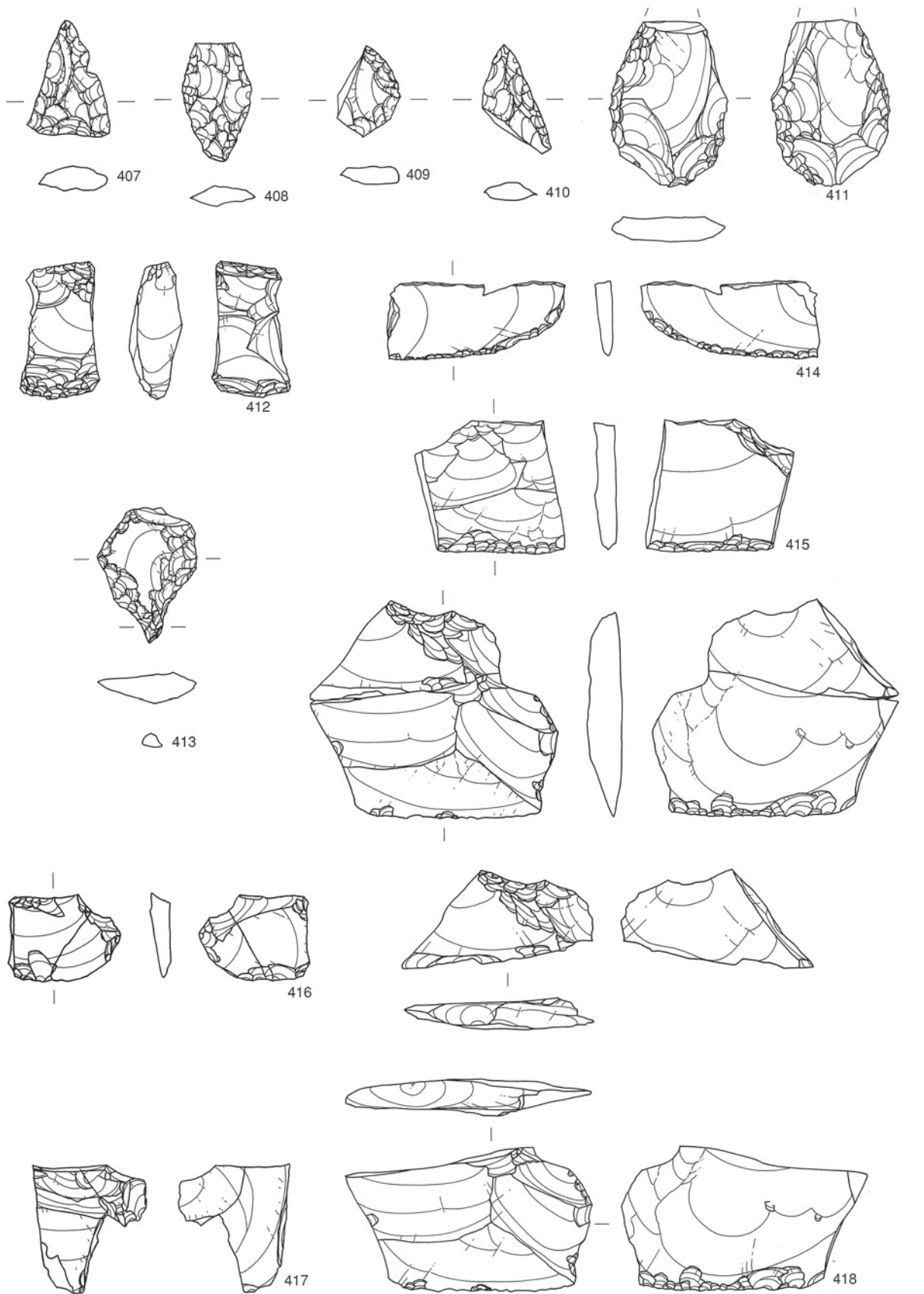
に大きく開く体部と、内外方に拡張された口縁端部を持つ高杯の杯部である。口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。407～410はサヌカイト製の打製石鏃である。407・408とも基部の形態が平基無茎式のもので、408は身部の形態が五角形をしている。411は先端部を欠失するが、厚い剥片の縁辺部に粗い調整を加えてアーモンド型の形状に仕上げた両面調整の尖頭器状の石器である。412は截断面が残された楔型石器である。截断される前は両面調整の石器であった可能性が高い。413は厚い剥片を使用した打

出土遺物 (第64～66図)

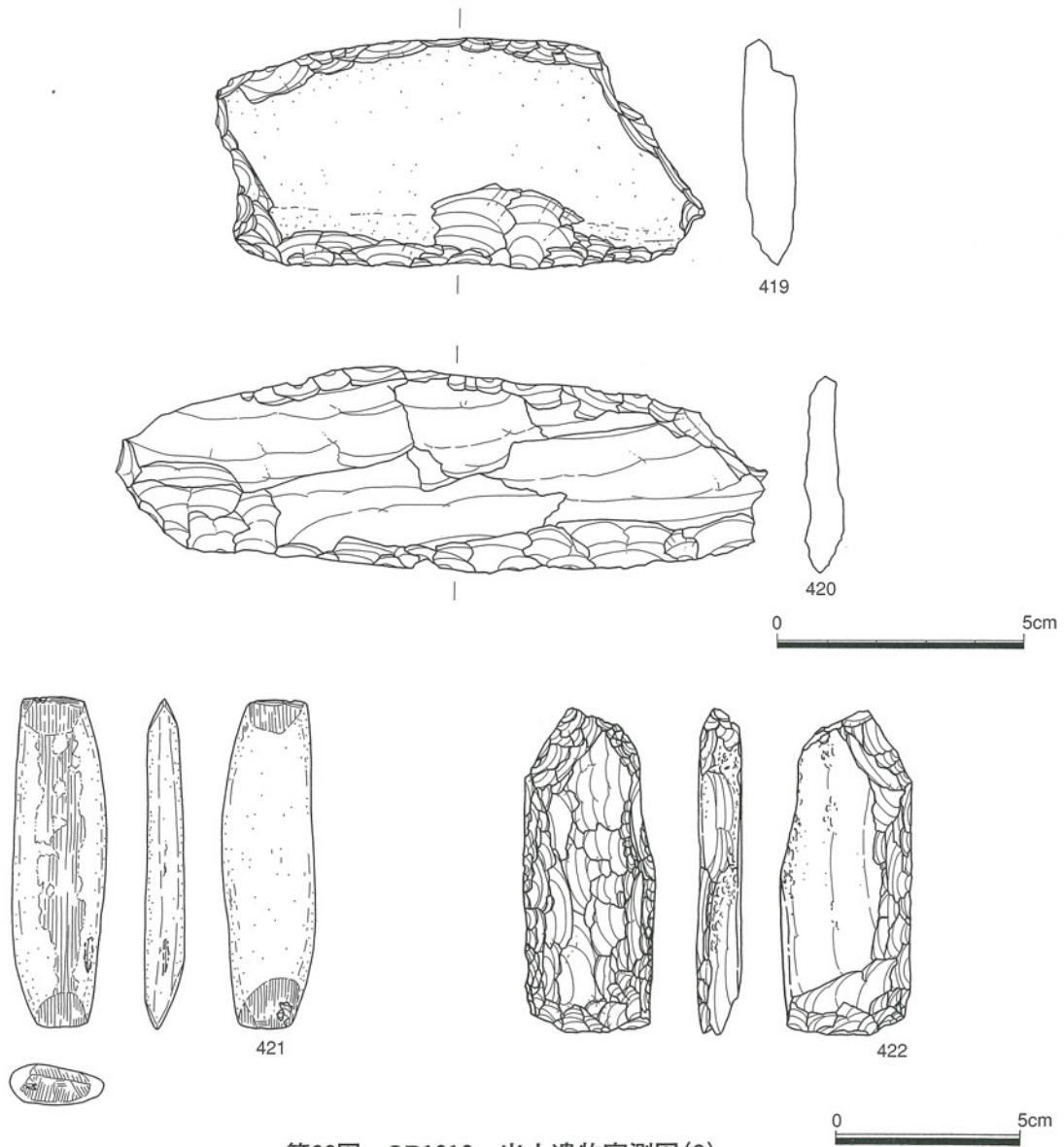
400は外上方に大きく開く口縁部を持つ壺である。上方に向かってわずかに拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には刻目が加えられ、内面には格子目文が描かれている。401は「く」の字に屈曲する頸部と円く仕上げられた口縁端部を持つ甕で、体部の外方への膨らみは小さい。402・403は「く」の字に屈曲する頸部と肥厚する口縁端部を持つ甕である。口縁端部にはそれぞれ凹線が巡らされている。404は緩やかに内湾しながら上方



第64図 SB1016 出土遺物実測図(1)



第65图 SB1016 出土遺物実測図(2)



第66図 SB1016 出土遺物実測図(3)

製石錐で、錐部は短い。414・415は縁辺部に両面から細かい調整を加えた剥片である。415は横長の剥片を2カ所で折断して不整形に整えたものを使用している。416～418は剥片の接合例である。416は周囲に簡単な調整を加えた剥片を2つに折断している。418は遠端部縁辺に調整を加え刃部を作り出した剥片を横に折断し大小2つの剥片に分割したものである。大きい剥片には分割後、調整が加えられた痕跡は認められないが、小さい剥片には折断面を打面にして調整が加えられている。419・420は結晶片岩製の打製石庖丁である。419は表面に自然面を残す剥片を素材に使用している。片方の端部にくり込みを作り出し、刃部はわずかに内湾している。420は両端に向かって徐々に細くなる鱗節型の形態をしている。421は細長い棒状の自然石の両端に両面から研磨を加え刃部を作り出した磨製石斧で、研磨は表面にも行われている。422は片岩の剥片の周囲に調整を加え、細長い短冊状の形態に仕上げた打製石斧である。側縁の一部には細かい敲打痕が残されている。

竪穴住居跡 17 (SB1017) (第67図)

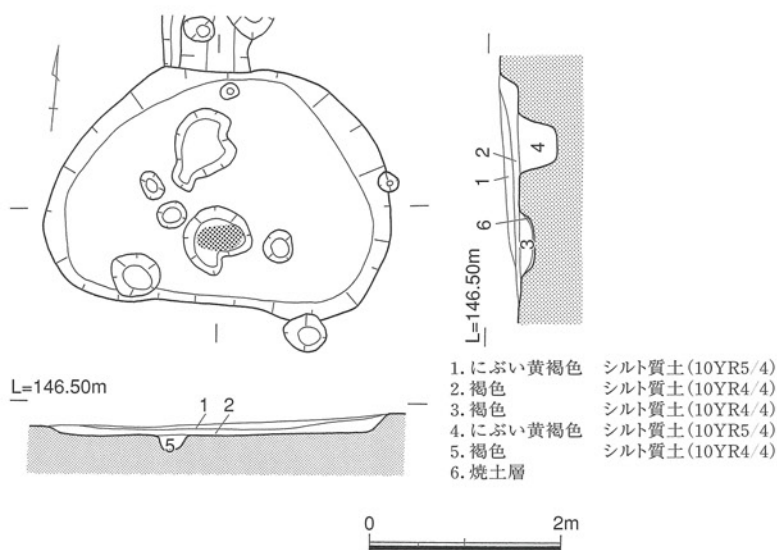
SB1016の東側に隣接して検出された直径約3.8mの不整楕円形の小型の竪穴住居跡である。床面には比較的規模の大きな不整形な穴が2基南北方向に並んで掘り込まれ、そのうちの一基には壺の体部下半部が埋め込まれていた。

出土遺物 (第68～69図)

423は比較的長い筒状の頸部と外反する短い口縁を持つ壺で、口縁端部は円く仕上げられている。424も筒状の頸部と緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ壺である。口縁部の上方への開きは小さく、口縁端部は鈍く尖らされている。425は球形の体部と外反する短い口縁部を持つ甕である。上下に拡張された口縁端部は、横ナデによって凹線状にくぼんでいる。426は内湾しながら上方に向かって緩やかに開く体部と「く」の字に屈曲する口縁部を持つ高杯の杯部である。431～437はサヌカイト製の打製石鏃である。431・434は平基無茎式、432・433・435は凹基無茎式、436は凸基無茎式に分類される。438・439もサヌカイトの剥片を使用した石器である。438は横長の剥片の両端を折断し、縁辺部に簡単な調整を加えて刃部を作り出している。439も折断によって横方向に分割した剥片の縁辺部に調整を加えて刃部を作り出している。440は片面に自然面を残す厚い棒状の結晶片岩の縁辺部に細かい調整を加えた石器である。441・442は自然礫を使用した砥石である。441は礫の縁辺部に敲打痕が集中し、表面はあまり使用した痕跡は認められない。443は扁平な大型の砂岩礫の平らな部分をそのまま研磨面として使用した大型の砥石である。

竪穴住居跡 18 (SB1018) (第70図)

長径約5.8m、短径4.6mの南北方向に主軸を持つ不整楕円の形態の竪穴住居である。中央部には不整形の炉址が設けられているほか、床面には大型の方形の土坑が掘り込まれている。北側の壁に沿って周溝が巡らされているがその長さは1.7mとごく短いものである。また、床面からはこれ以外にピットが4基検出されているがその配置は不規則ではたして柱穴として機能していたか疑わしい。炉の内部には壁に沿って厚さ約5cmの炭化物の堆積がみられた。方形の土坑は深さ約80cmの大型のもので、炉の一部を切って掘り込まれているが土層断面にはその掘り込みは発見出来なかった。遺構の覆土は非常に締まりが強く、他の住居址に多くみられた焼土や炭化物はほとんど混入されていない。床面からは台石または砥石として使用されたと考えられる砂岩の扁平な角礫が4個分散した状態で出土している。

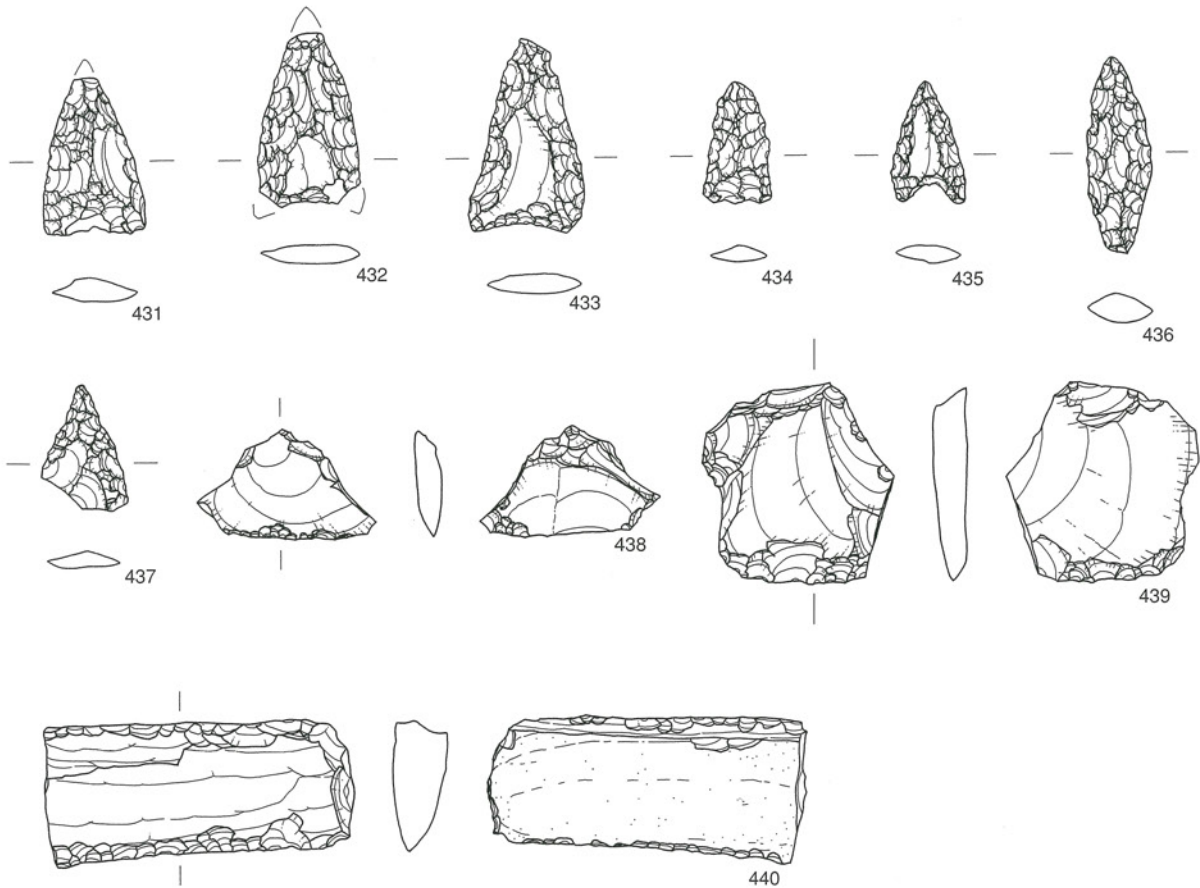
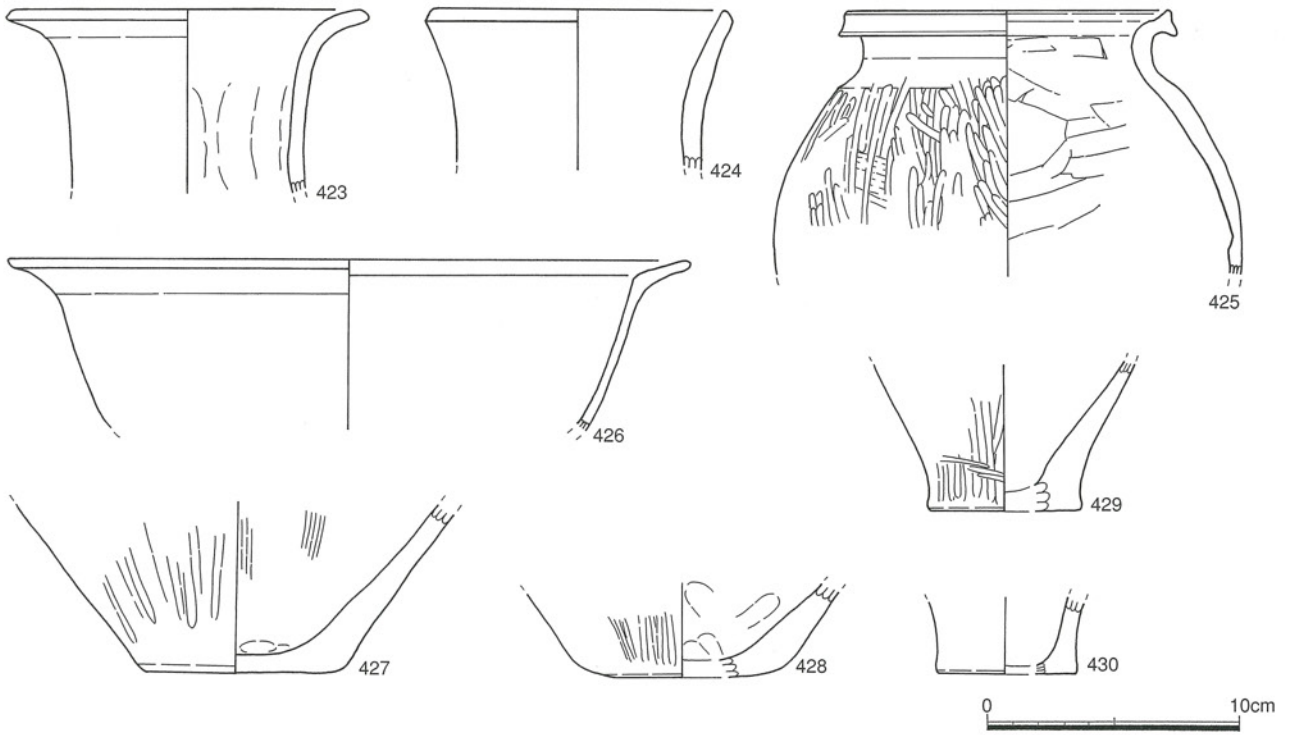


第67図 SB1017 実測図

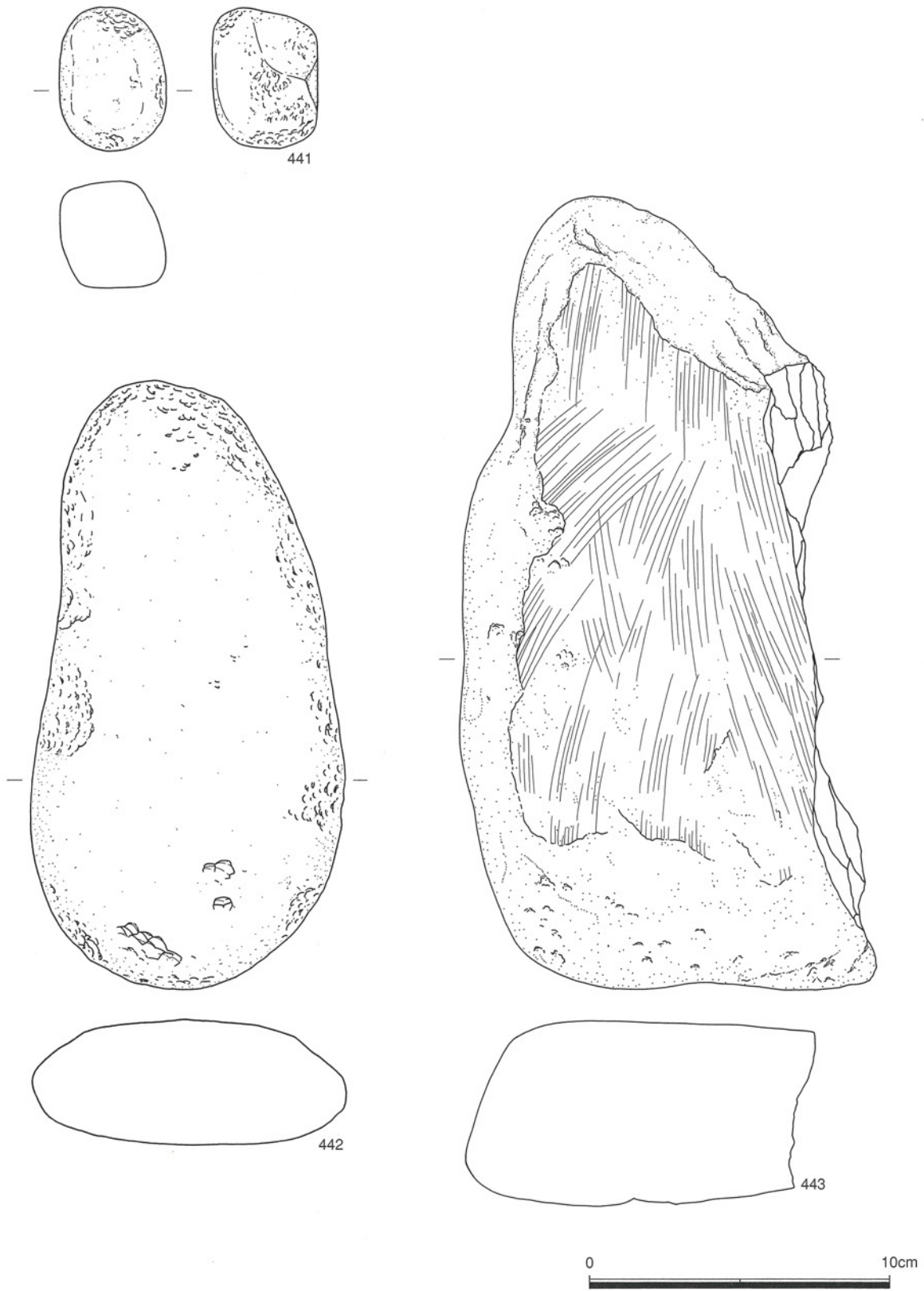
一部を切って掘り込まれているが土層断面にはその掘り込みは発見出来なかった。遺構の覆土は非常に締まりが強く、他の住居址に多くみられた焼土や炭化物はほとんど混入されていない。床面からは台石または砥石として使用されたと考えられる砂岩の扁平な角礫が4個分散した状態で出土している。

出土遺物 (第71～74図)

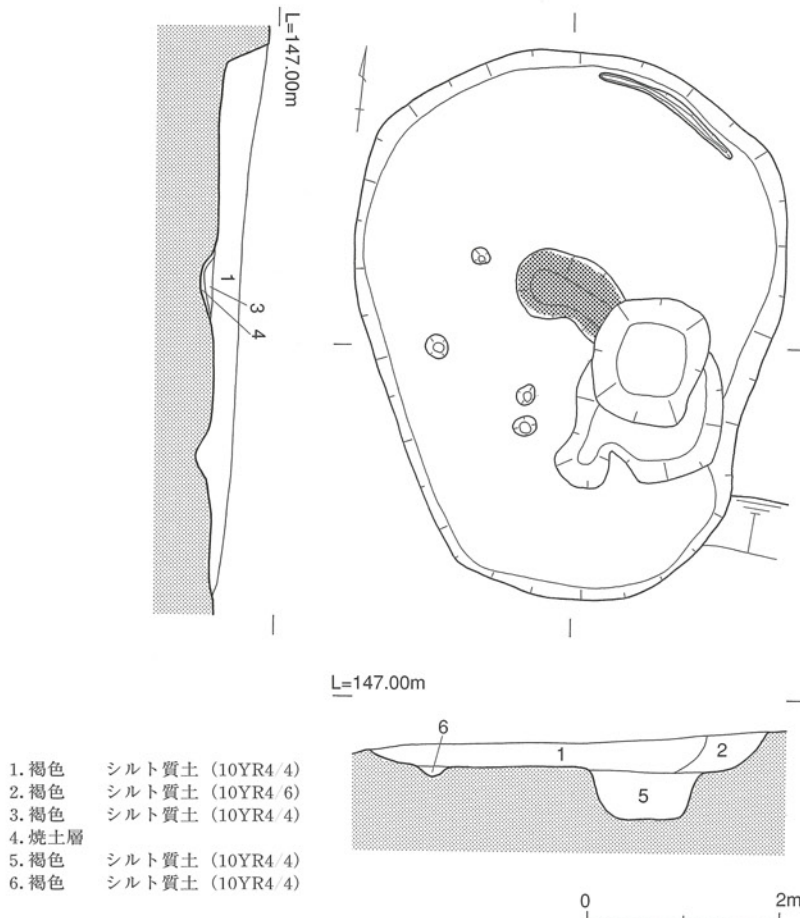
444～447は「く」の字に屈曲する頸部と短く外上方にのびる口縁



第68图 SB1017 出土遺物実測図(1)



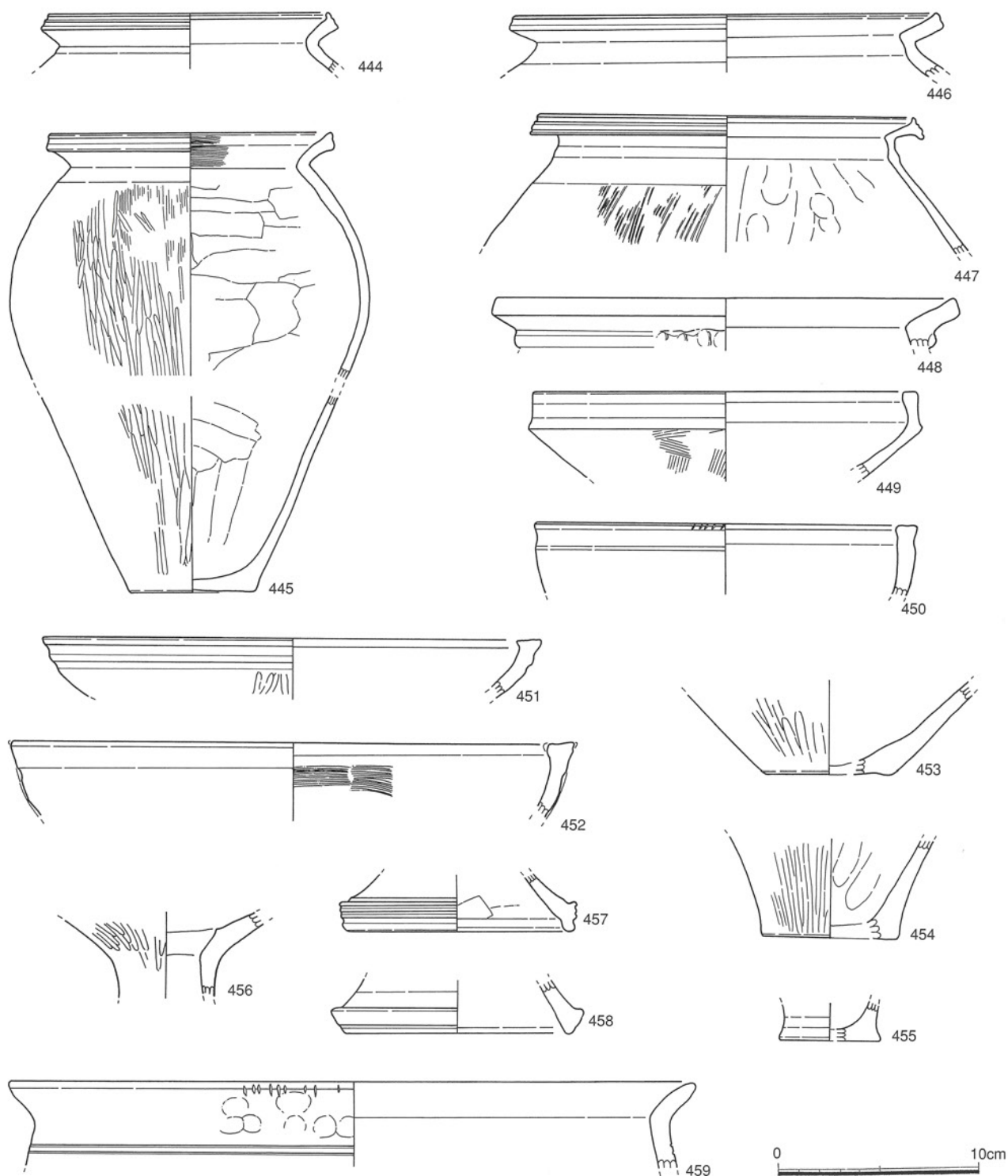
第69図 SB1017 出土遺物実測図(2)



第70図 SB1018 実測図

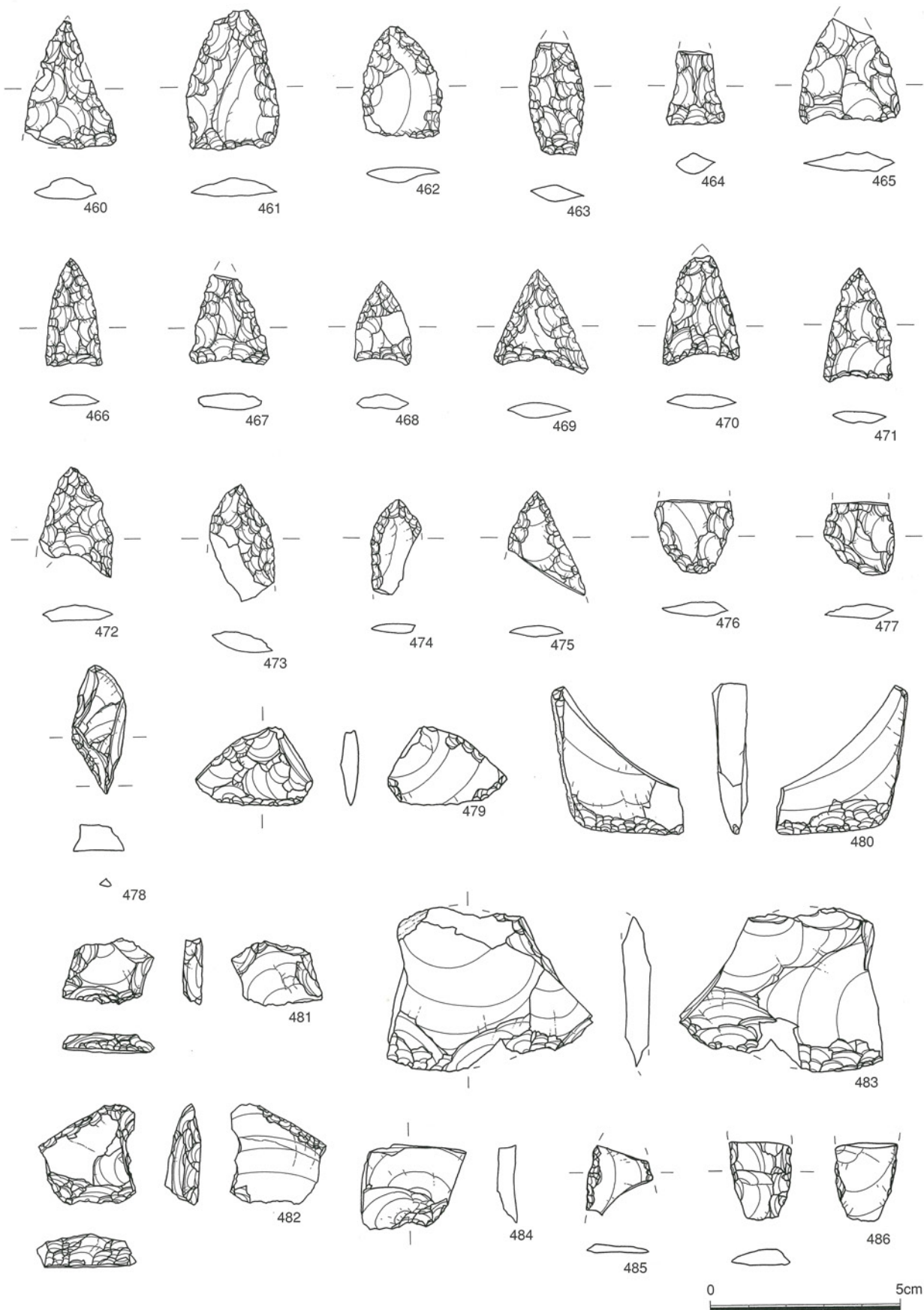
いずれも口縁頂部がわずかにくぼみ口縁直下には凹線が巡らされたものがある。456は円盤充填が施された高杯の脚柱部である。457・458は同じく高杯の脚端部である。端部は上方に拡張され凹線が巡らされている。459は頸部で外反する短い口縁部を持つ甕である。鈍く尖らされた口縁端部には刻目が付けられ頸部には平行する沈線が2本引かれている。時期的に他の土器に先行するものである。460～477はサヌカイト製の打製石鏃である。基部の形態から460～464が平基無茎式、465～472が凹基無茎式、476が凸基無茎式に分類される。しかし、凹基式のなかには基部の挟りが浅くほとんど平基式と差がないものが多い。478は一端が尖る剥片の折断面に調整を加えて石鏃としたもので、素材となった剥片は折断によって分割された厚みのあるものが使用されている。479は小型の剥片の縁辺部に調整を加えて刃部を作り出している。480は比較的大きな剥片を折断し、縁辺部に両面から細かな調整を加えて刃部を作り出している。481・482は折断した剥片の折断面に角度の急な調整を加えて刃部を作り出し、削器としたものである。483は横長の剥片の両端を折断し、残された剥片の縁辺部に両面から調整を加えて刃部とした石器である。485・486は小型の剥片の縁辺部に微細な調整が加えられたもので石鏃の未製品の可能性が考えられる。487は截断と折断により不整形の形に整えられた剥片の折断面を打面にして両極打法による剥離が行われた楔型石器である。488も同じく楔型石器と考えられる石器で、石器の周辺部には両極剥離の痕が残されている。489はサヌカイト製の打製石庖丁である。大型の横長剥片は縁辺部に加えられた調整によって方形に整えられ、両端には浅いくり込みが作り出されている。刃部はわずかに内湾するが、それとは反対に外湾する背の部分は縁辺部が潰れている。490は結晶片岩製の打製石庖丁で

部を持つ甕である。口縁部は直線的または外反するもの以外に、446のようにわずかに内湾するものもある。口縁端部は上方または上下に拡張されているが、上方のみのは拡張の度合いが小さい。いずれの個体も拡張部には凹線が巡らされている。448も「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる口縁部を持つ甕であるが、口縁端部は拡張されず平坦なままである。また、頸部には指頭圧痕の施された貼付け突帯が廻されている。449～452は高杯または鉢である。449は体部との境に屈曲部を持ち内傾気味に上方に立ち上がる口縁部を持つ高杯の杯部で、口縁端部はわずかに肥厚し平坦に仕上げられている。450～452は内湾する体部と内外方に拡張された口縁端部を持つ杯または鉢である。い

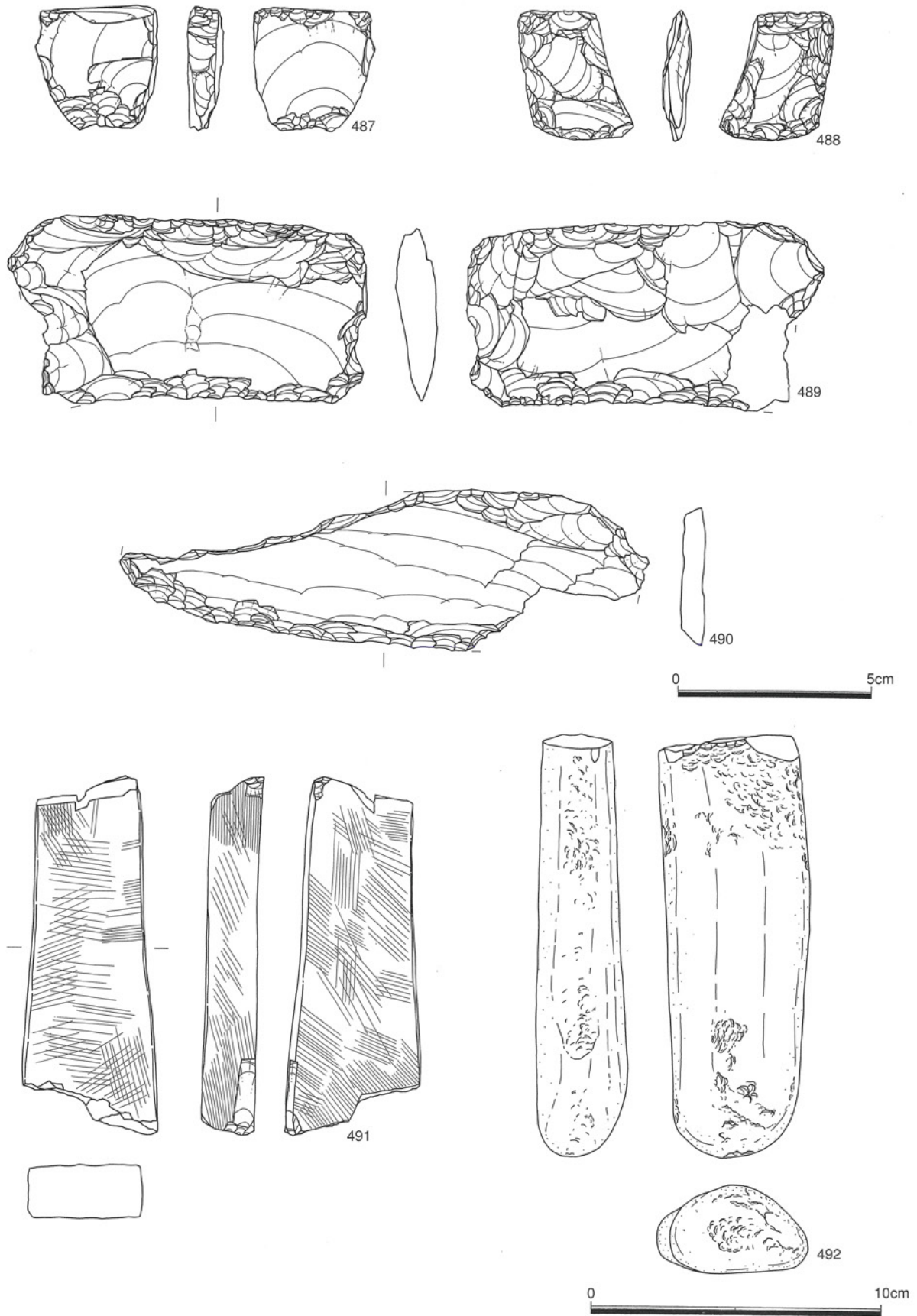


第71図 SB1018 出土遺物実測図(1)

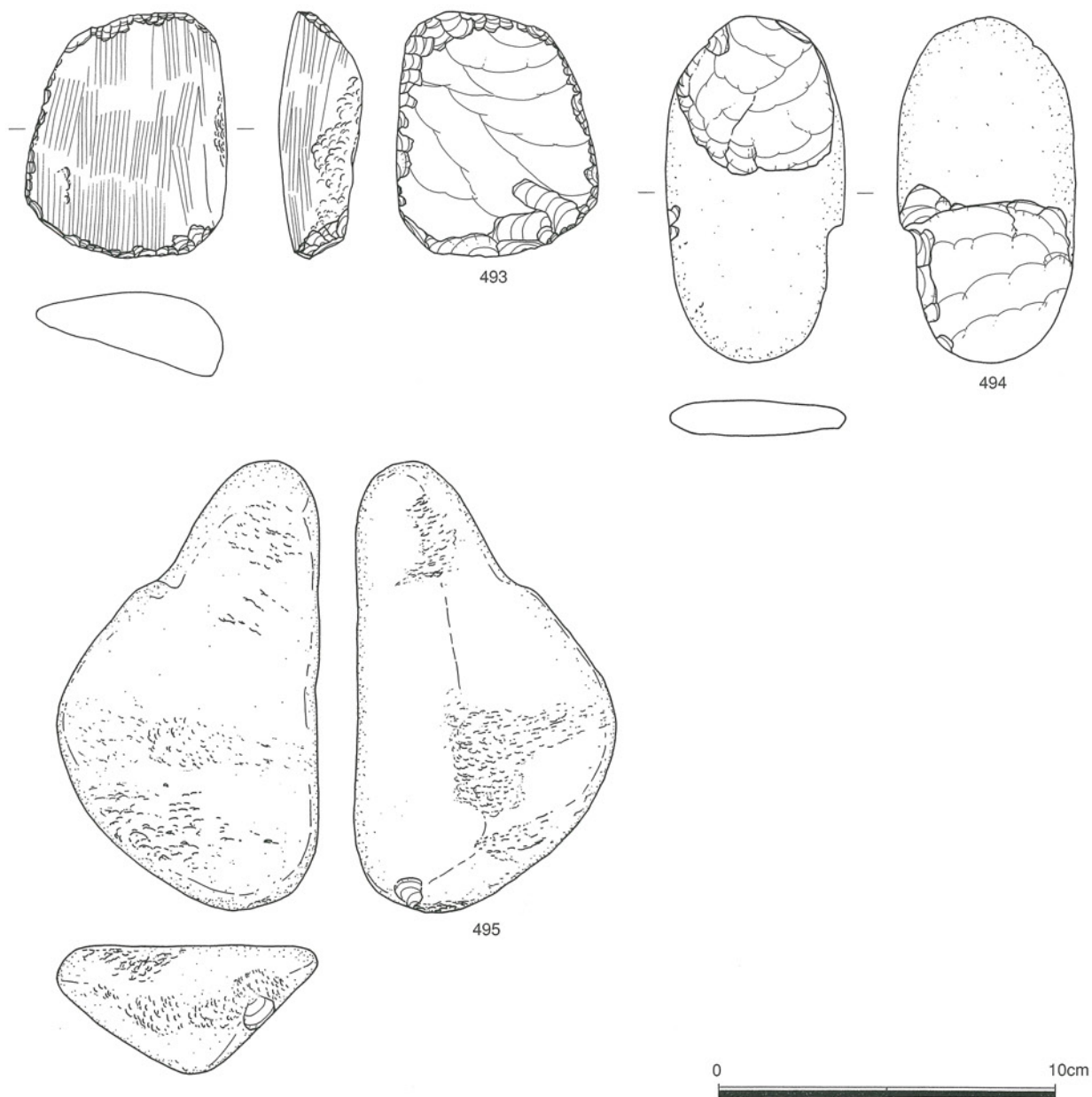
あるが、両端を欠くためくり込みの有無は不明である。491は一端がもう一端よりわずかに広い不整形の形をした砥石である。断面は方形で砥面には方向の一定しない使用痕が残されている。492は一端が平らな棒状の結晶片岩をそのまま使用した敲石である。敲打痕は平らな片側の端部の周辺に集中しているが、もう一方の円みを持つ端部にも残されている。493・495も敲石である。493は磨製石斧の破片を敲石に転用したもので、楕円形の石の周囲は全体に敲打痕が残されている。495は不整形な自然礫を



第72图 SB1018 出土遺物実測図(2)



第73図 SB1018 出土遺物実測図(3)

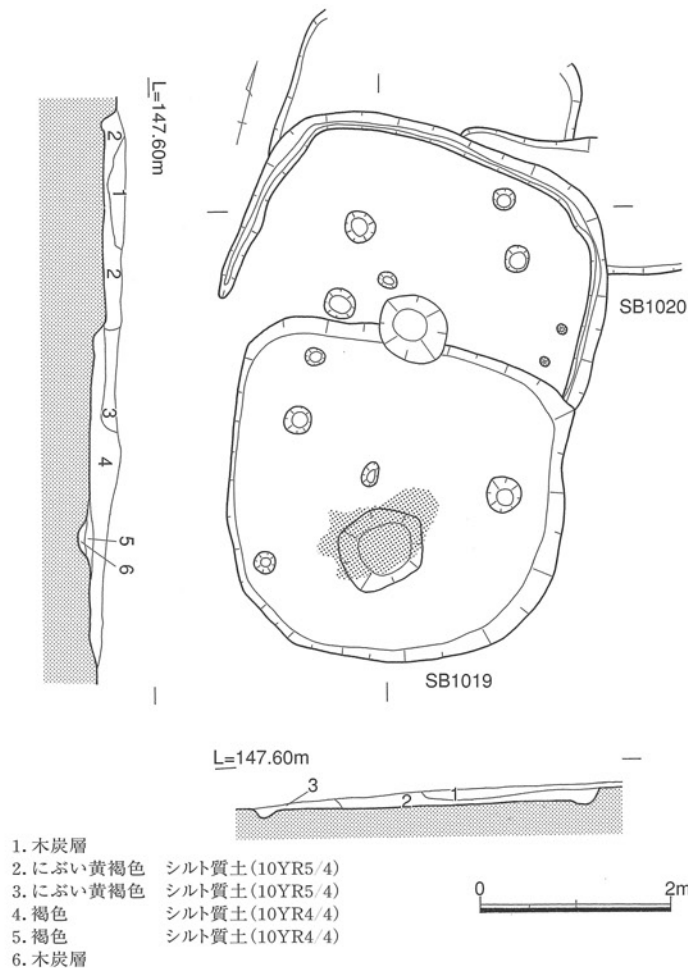


第74図 SB1018 出土遺物実測図(4)

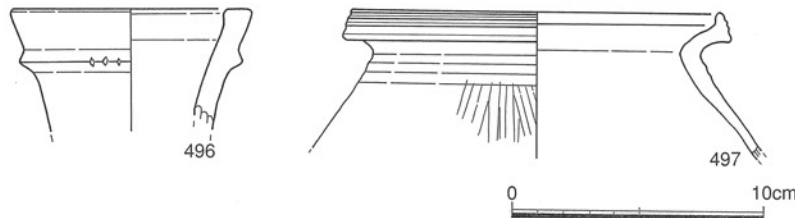
そのまま使用している。

竪穴住居跡 19 (SB1019) (第75図)

長軸の長さ約3.6m、短軸の長さ3.7mの隅円方形に近い形態の竪穴住居跡であるが、北側の側壁は直線的であるのに対して南側は緩やかに弧を描いている。中央部やや南よりの床面には長さ約0.9m、幅0.8m、深さ20cmの不整楕円の炉が設けられている。炉の中は2層に分かれ下層には炭化物が厚いところでは10cm近く堆積しているが、炉の周囲の床面にも厚い炭化物の集積が検出されている。また、炉址以外にも床面上からは柱穴と考えられるピットが5基検出されたが、何れも配置や大きさが不揃いである。覆土中には炭化物や焼土が混入しているが、その量はわずかである。周溝は全く検出されなかった。



第75図 SB1019・1020 実測図



第76図 SB1019 出土遺物実測図(1)

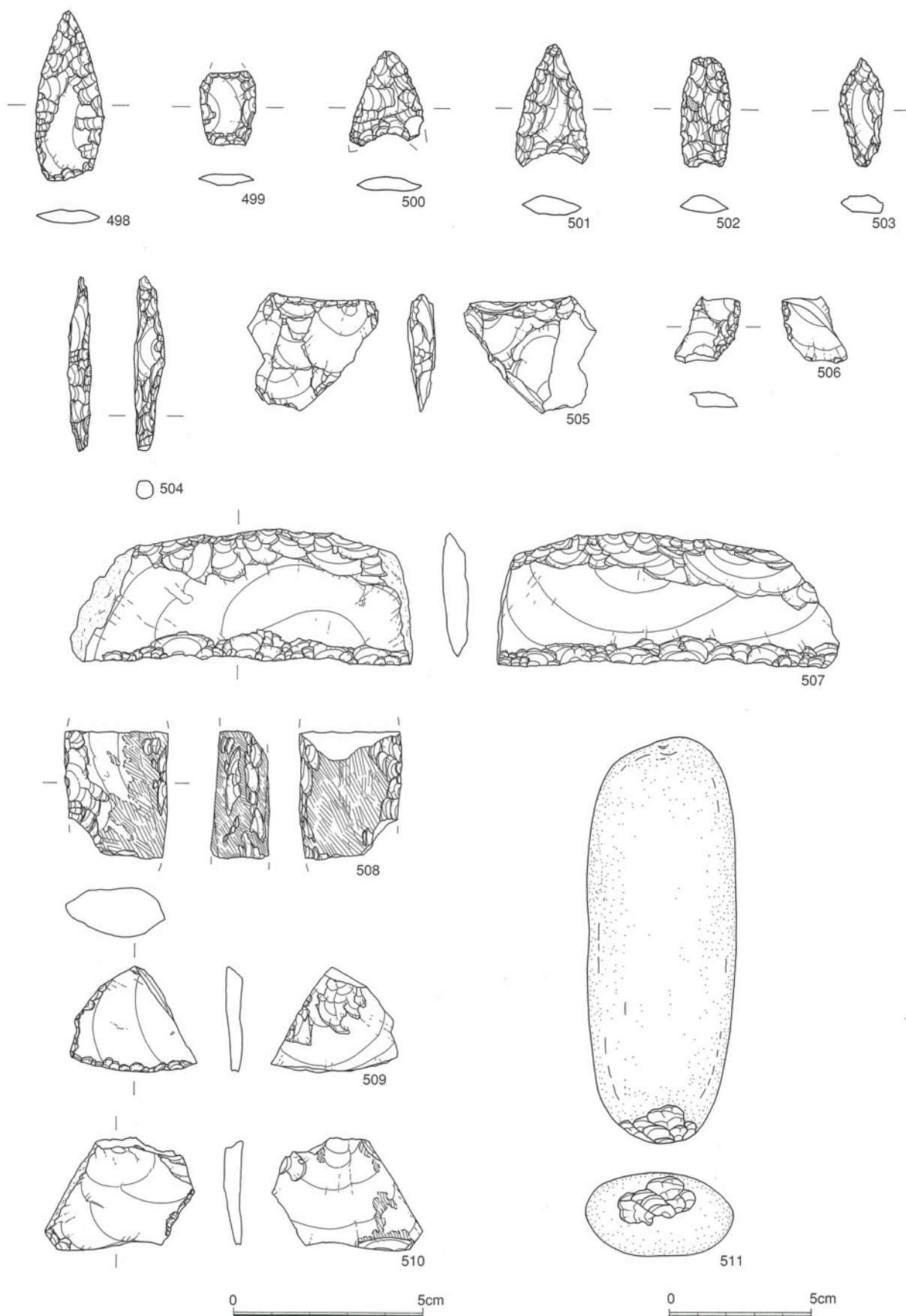
は両端に自然面の残る横長の剥片を使用したサヌカイト製の打製石庖丁で、刃部はわずかに内湾している。508は厚いレンズ状の断面を持った石剣の破片である。身の中央部と側縁部は細かな調整の後で研磨されている。509・510はそれぞれ縁辺部にわずかに調整がおこなわれている剥片である。510の剥片は表面に部分的に研磨が加えられている。511は長楕円形の自然礫を使用した敲石である。礫の一端に敲打痕が集中して残されている。

竪穴住居跡 20 (SB1020) (第75図)

SB1019に重なるように掘り込まれた竪穴住居である。南側半分がSB1019の覆土中に掘り込まれているためプランは検出出来なかったが、残されたセクションから長軸方向の長さ約4m、短軸方向では約3.4mの隅円方形の形態の竪穴住居と考えられる。住居の覆土中には焼土と炭化物の混入が多く認めら

出土遺物 (第76~77図)

496は直線的に外上方にのびる筒状の口縁を持つ壺である。口縁部には端部からやや下がった位置に刻目が施された1本の断面三角形の突帯が廻されている。また、口縁端部は内方に拡張され、平坦に仕上げられている。497は「く」の字に屈曲する頸部からのびる短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上下に拡張され、拡張部には凹線が2条巡らされている。頸部は内面に丁寧な横ナデ調整が加えられたため、外面が盛り上がっている。498~503はサヌカイト製の打製石鏃である。498・499は平基無茎式、500~502は凹基無茎式、503は凸基無茎式である。499は身の中程で折れているが、破損した部分に調整を加え再使用した痕跡がある。また、502の石鏃には部分的に研磨の痕が残されている。504は折断によって得られた細長い剥片の周囲に調整をおこない石錐としたものである。505は両極打法による剥離痕を残す剥片の側縁部に片面から調整を加え刃部を作り出したものである。506は折断された小さな剥片に微細な調整が加えられている。507

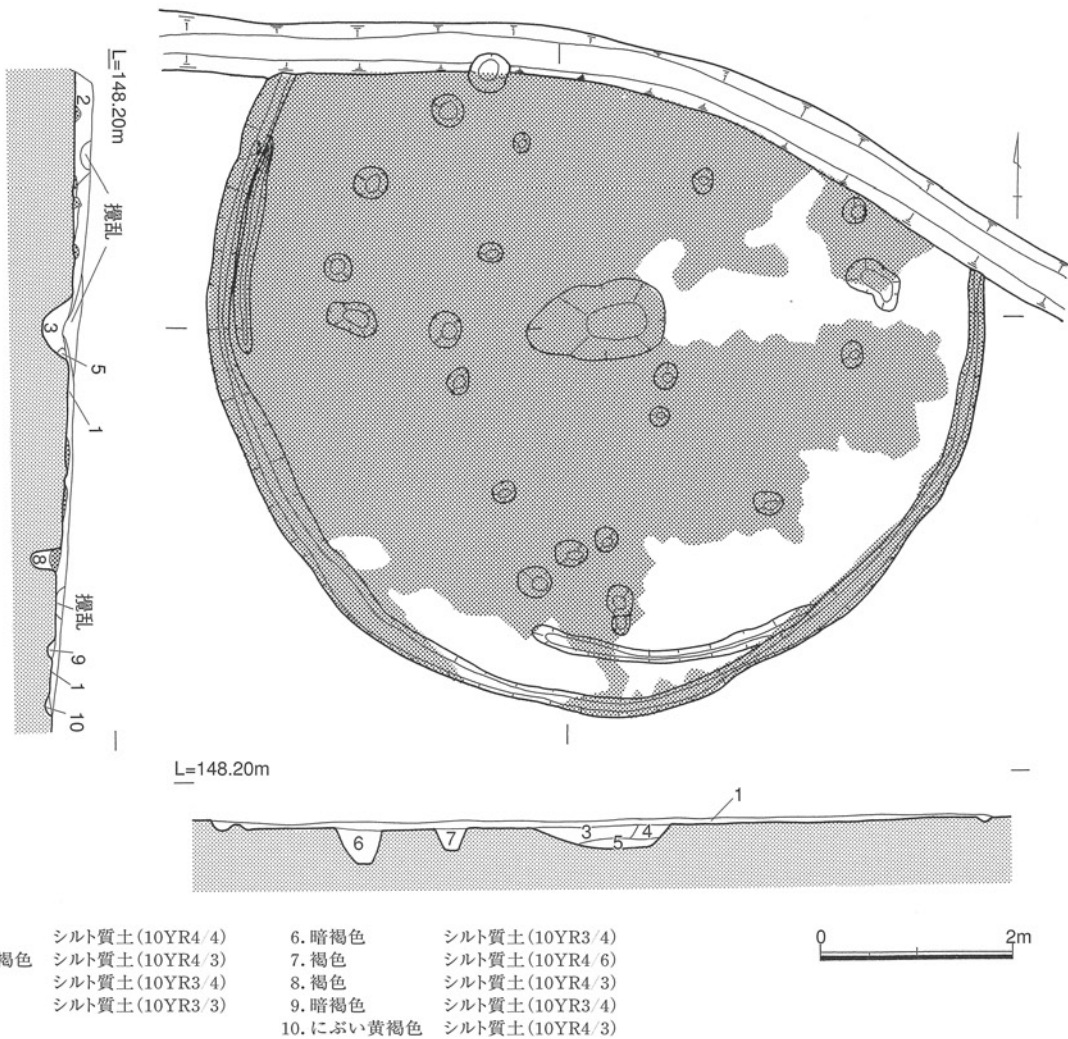


第77図 SB1019 出土遺物実測図(2)

れるがブロックでは検出されなかった。残された床面からは炉址と考えられる直径0.7mの円形の掘り込みの他、大小7基のピットが検出されたが大きさも配置も不揃いで柱穴かどうかは不明である。深さ約15cmの炉址内部は2層に分けられ、上層には炭化物と焼土が多く含まれていた。このほか残された北側半分の床面には側壁に沿って周溝が「コ」の字状に巡らされていた。遺構内からは図示できるような遺物は出土していない。

竪穴住居跡 21 (SB1021) (第78図)

遺構の北側の一部が調査区外にのびているため全形を検出出来なかったが残されたプランから推測して直径約8m以上の大きさになると考えられる円形の大型の竪穴住居である。検出した時点で耕作のため側壁と覆土がほとんど残されていないが、床面直上ではほぼ全面に炭化物と焼土の堆積が検出されたことから火災住居と考えられる。床面の中央部には長さ約1.6m、幅0.8m、深さ30cmの不整楕円の形態の炉が1基設けられ、その周囲には大小22の柱穴と考えられるピットが検出されている。炉内の堆積は3層に分層されたが、各層とも焼土と炭化物が多量に検出されている。ピットは深さが10cm前後の浅いものが5基ある以外掘り込みは深く、なかには60cm以上に達するものがある。側壁は全く検出できなかったが、床面上には一部重複するような格好で周溝が二重に巡らされている。このことから検出された炉は1基だけだが、少なくとも1回の拡張が行われたことが伺えるが、残された柱穴の数から

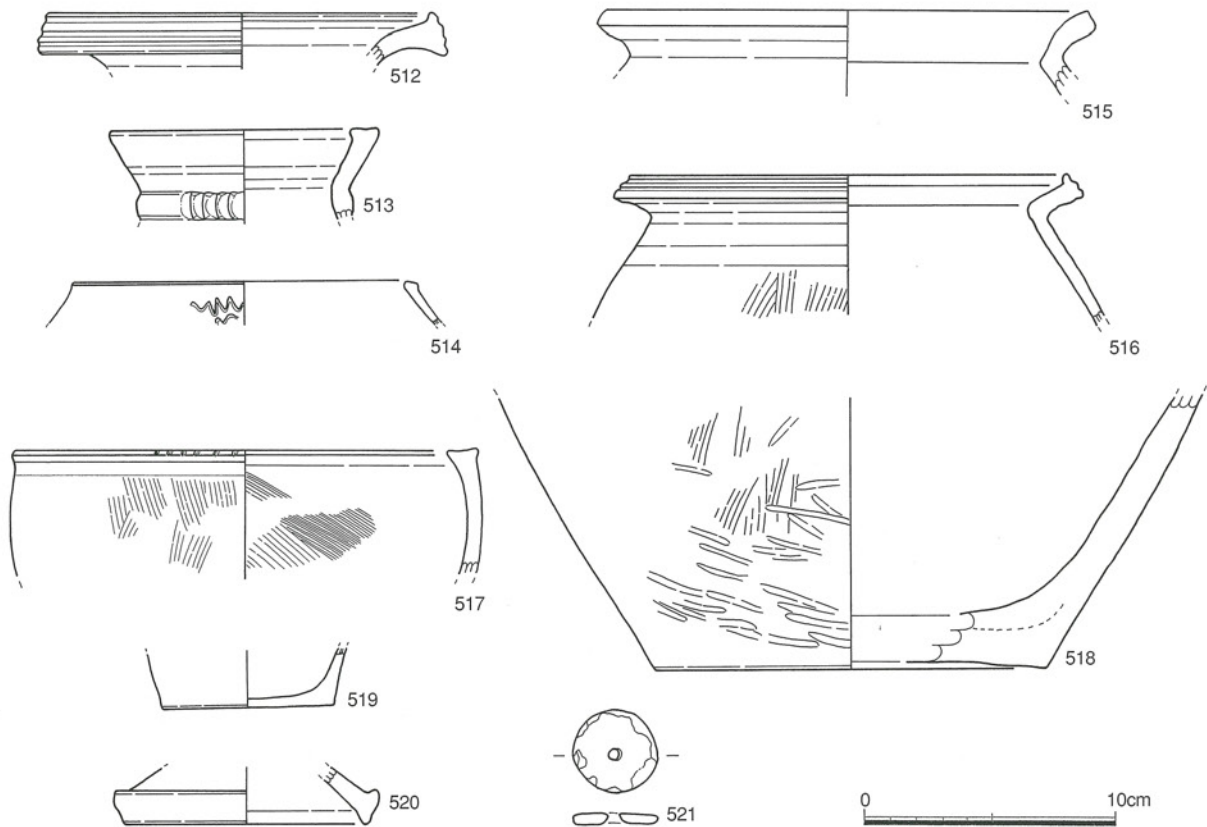


第78図 SB1021 実測図

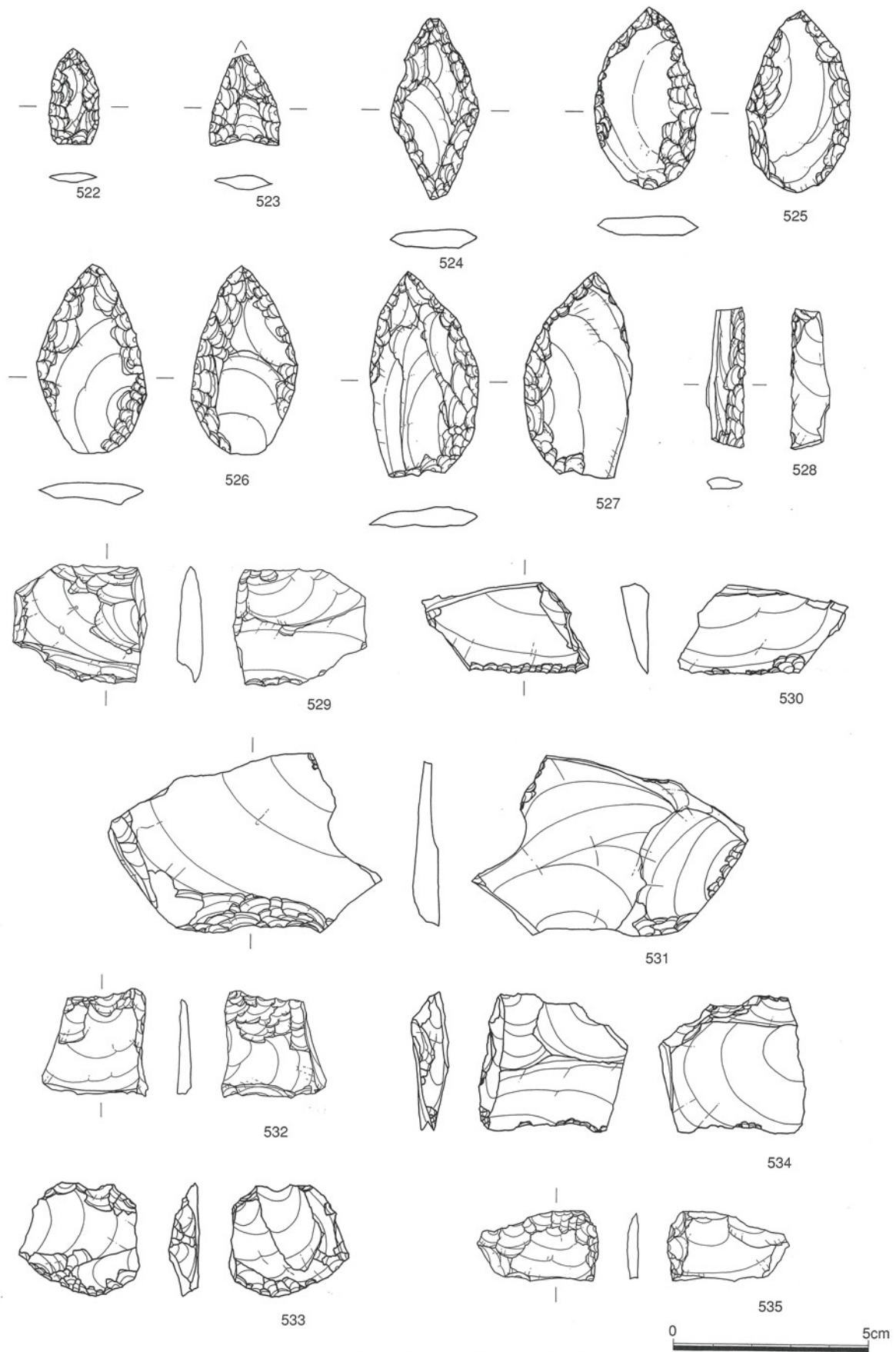
はそれ以上の可能性もある。遺構の覆土の削平が全面にわたって行われているため、出土遺物の点数は遺構の規模と比較すると少数である。

出土遺物（第79～80図）

512は端部が上下に拡張された大きく外反する口縁部を持つ壺である。拡張部には凹線が3条巡らされている。513は直線的に外上方にのびる口縁部を持つ壺である。口縁端部は内方のみ拡張され平坦に仕上げられた頂部はわずかにくぼんでいる。また、頸部には指頭圧痕が加えられた突帯が廻されている。514は無頸壺と考えられるもので、内屈する口縁は端部がわずかに肥厚し、外面には波状文が描かれている。515は「く」の字に屈曲する頸部と外反する短い口縁部を持つ甕である。口縁端部はわずかに肥厚し平坦に仕上げられている。516も「く」の字に屈曲する頸部と外上方にのびる短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上下に拡張され、凹線が2条巡らされている。517は内湾する体部と、内外方に拡張される口縁端部をもつ高杯または鉢と考えられるもので、拡張された口縁の頂部はわずかにくぼんでいる。また、口縁端部外面には刻みが加えられ、直下には横ナデが施されている。520は高杯の脚端部である。外下方に大きく開く直線的な脚は、端部が上方に拡張され横ナデ調整が施されている。521は土器片利用の紡錘車である。周辺部を打ち欠いた後、円形に磨いて形を整えている。522～524はサヌカイト製の打製石鏃で、それぞれ522が平基無茎式、523が凹基無茎式、524が凸基有茎式に分類される。525～527は厚い横長の剥片の周囲に細かい調整を加え、一端を尖らせた尖頭器状の石器である。いずれも剥片の打点は調整によって除去されている。528～535は素材に様々な形態の剥片を使用して細部調整が施されている。529は剥片の折断面に残されたヒンジフラクチャーに調整を加えている。530は剥片の



第79図 SB1021 出土遺物実測図(1)



第80图 SB1021 出土遺物実測図(2)

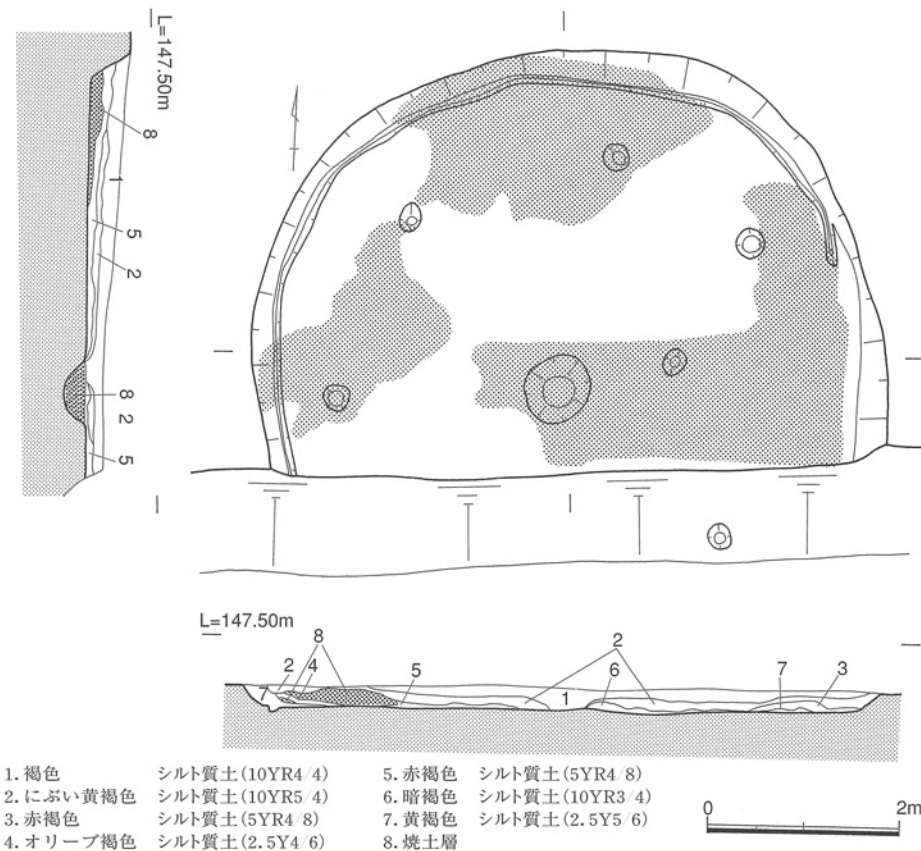
三方を折断し、残された縁辺部に微細な調整を加えて刃部としている。531もやや大型の剥片を折断した後、折断面に角度の急な調整を加えて刃部を作り出している。

竪穴住居跡 22 (SB1022) (第81~82図)

遺構の南側約3分の1を削平によって失われているが残された部分から推定すると直径6.8m前後の円形の竪穴住居と考えられる。床面まで最も深い部分で40cm余りある。覆土の中からは多量の焼土や炭化物が大きなブロック状に検出されたが、床面直上で検出されたものはほとんどなく、住居址廃絶後に投棄されたものと考えられる。また、遺物もこの焼土ブロック中やその上面からの出土がほとんどであることから住居址廃絶後に投棄されたものと考えられる。床面からは側壁に沿って（西から北にかけて）浅い周溝が検出されたが、東側は途中で途切れている。住居址中央からは直径約0.7m、深さ20cmの円形の炉址が検出されているが、この炉址を中心とした半径約2.4mの円周上の床面からはピットが4基検出され、南側の削平部分でも同じ円周上にピットが1基検出されている。遺構内での配置から5基のピットが住居跡に伴う柱穴と考えられるが、各柱穴の間隔からは、削平のために検出できなかった南西部分にも柱穴がもう1基存在した可能性が高い。

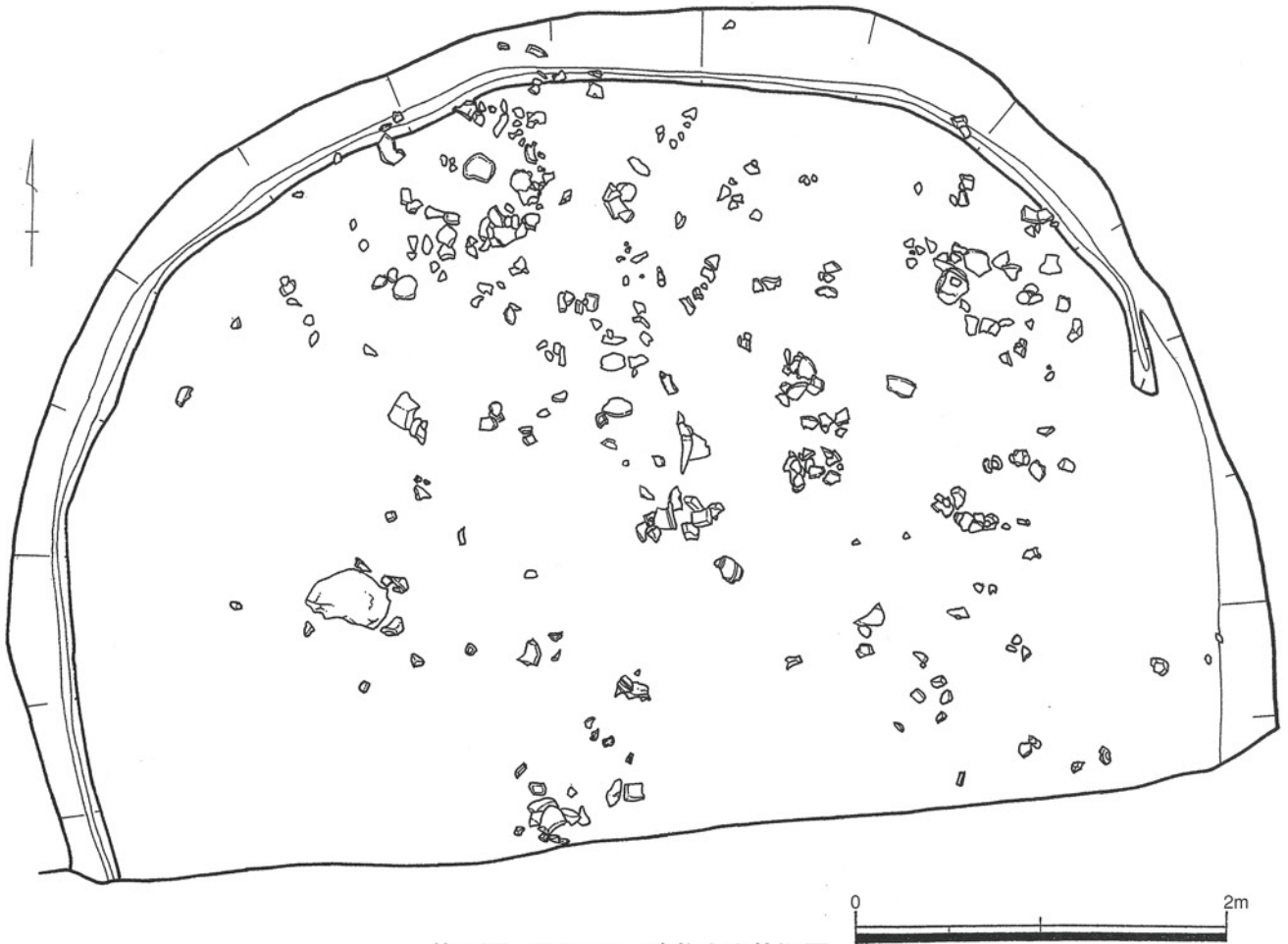
出土遺物 (第83~89図)

536~543は外上方に大きく開く口縁部を持つ広口壺である。いずれも口縁端部が上方に向かってわずかに拡張されている。拡張部は横ナデによってわずかにくぼんだままのものがあるが、これにさらに連続する刺突文や凹線文を施したものもある。また、口縁部内面にも斜格子目文が描かれているものがある。



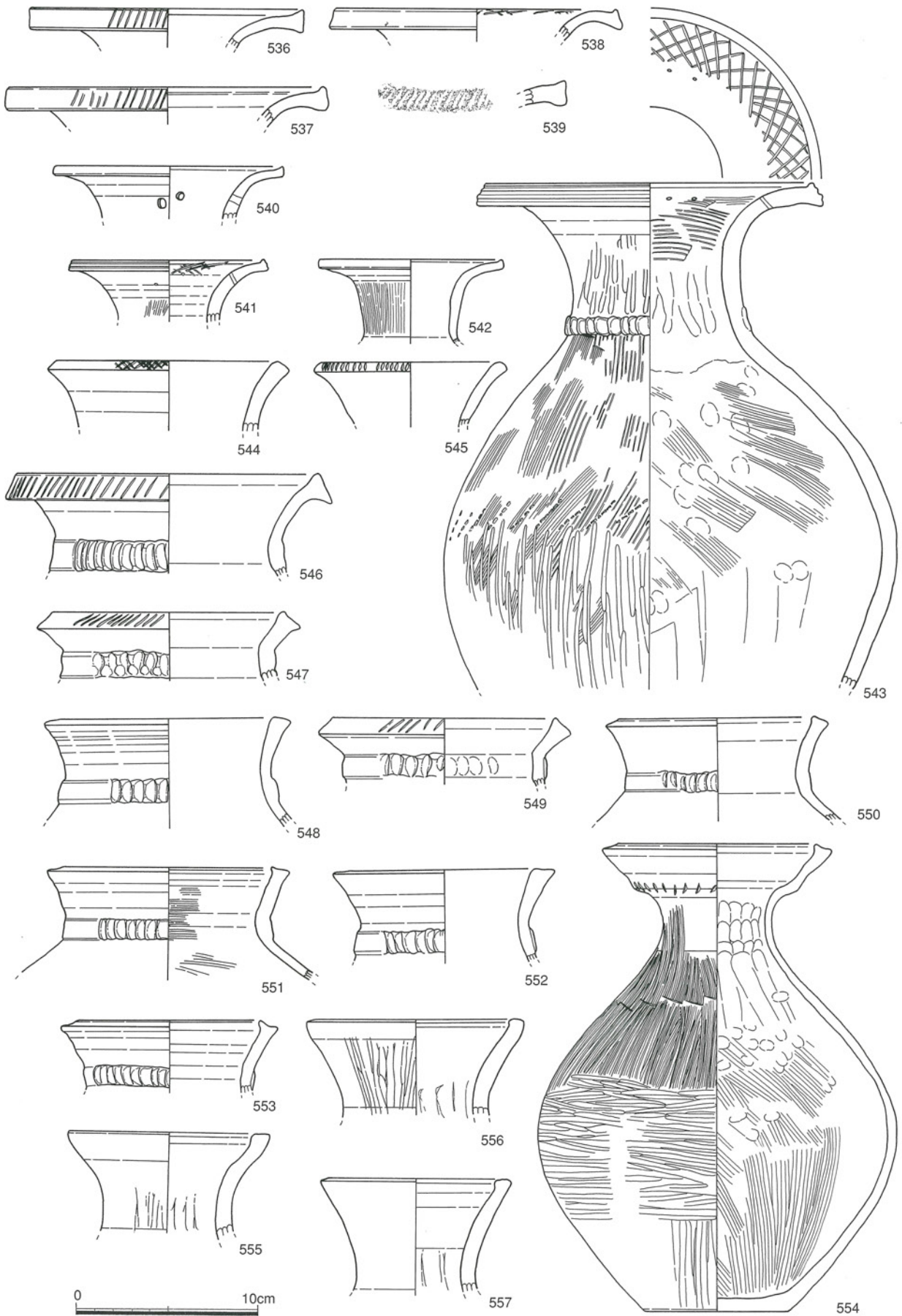
543は口縁端部に凹線文や斜格子目文が描かれている。また、頸部には指頭圧痕の加えられた突帯が廻され、体部には櫛により連続する刺突が施されている。544・545も外反する口縁部を持つ壺であるが、口縁部は前者に比べて短く外反の度合いも少ない。また、端部は拡張されことなく平坦または円く仕上げられ、斜格子目文や刻目が施されている。546~553は外反する短い口縁部と拡張された口縁端部を持つ

第81図 SB1022 実測図

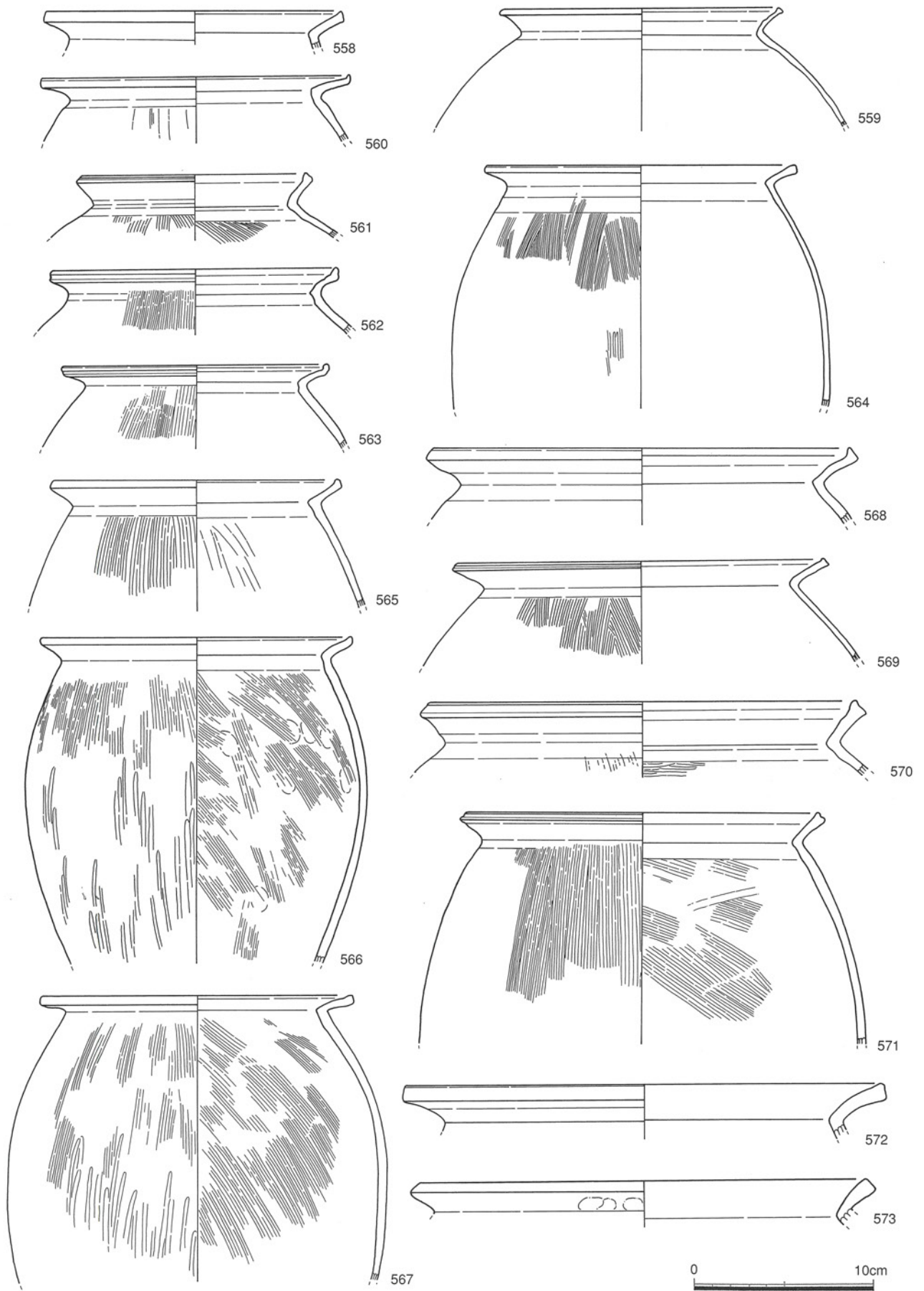


第82図 SB1022 遺物出土状況図

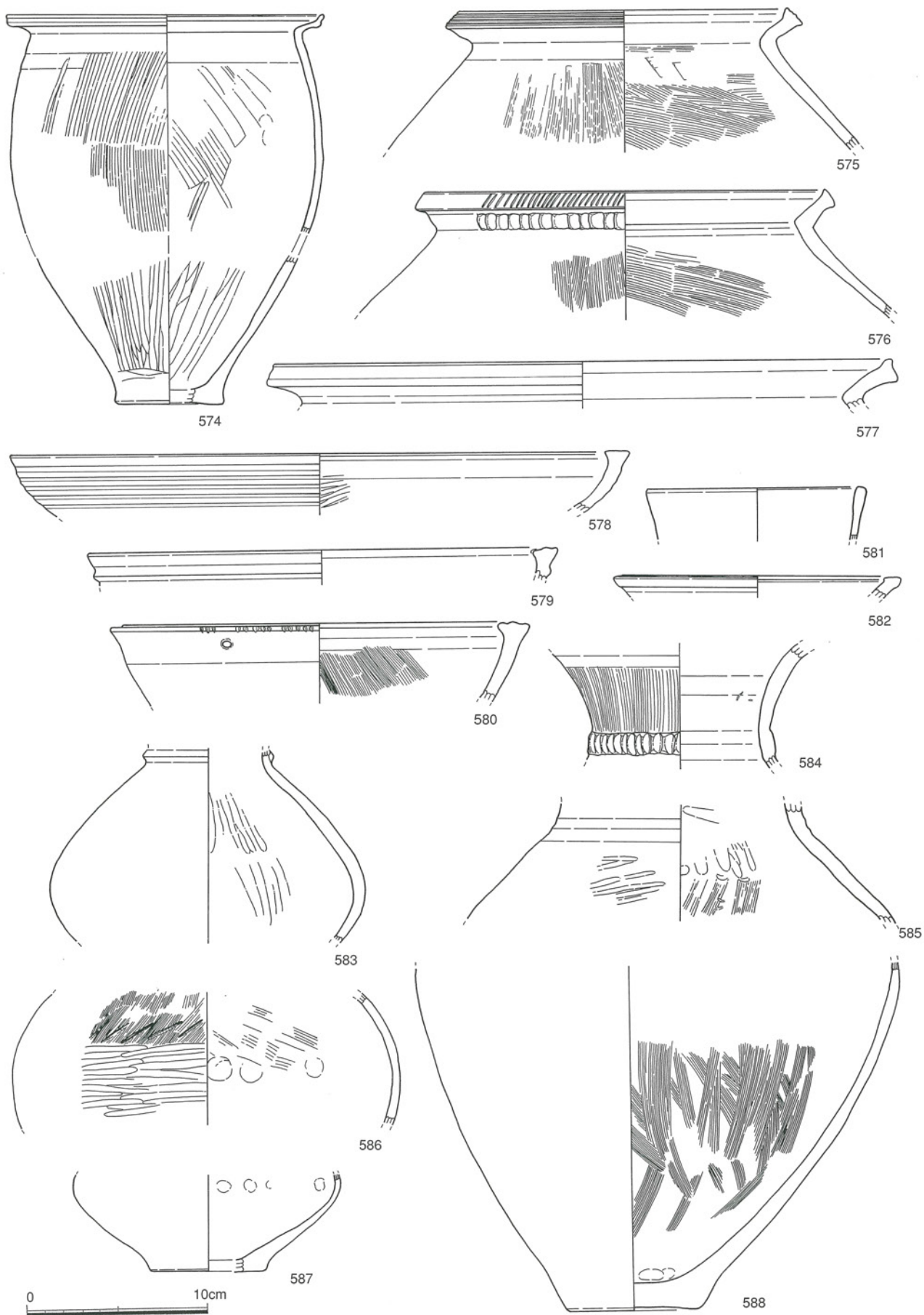
壺で、頸部には指頭圧痕の施された突帯が付けられている。また、547・549などのように一部のものには頸部に弱い屈曲部を持つものもある。546・547は口縁端部が上下に拡張され、刻目が施されている。549～551・553は拡張が上方のみのもので、拡張された頂部はわずかにくぼんでいる。548・552は外方に拡張される例である。554は細く締まった頸部から屈曲部を持ちながら外上方に大きく開く受け口状の口縁部を持つ壺である。口縁端部は上方に拡張され、頂部はくぼんでいる。また、頸部との境の屈曲部には刻目が施されている。554は胎土・焼成とも他の土器とは異質で他地域からの搬入品と考えられる個体である。555～557は外上方に向かって開く直線的または緩やかに内湾する短い口縁部を持つ壺である。この壺の形態は台付鉢の脚部に類似するものがあり、壺との区別が付かない場合が多い。558～571は何れも「く」の字に屈曲する頸部から直線的または内湾気味にのびる口縁部と、よく膨らんだ倒卵形の体部を持つ甕である。口縁端部は肥厚するかわずかに上方に拡張され拡張部は横ナデによって凹線状にくぼむものがある。572・573は同じく頸部が「く」の字に屈曲する甕であるが、口縁部は肥厚するだけで拡張は行われていない。575～577も同じく「く」の字に屈曲する頸部と直線的な口縁部を持つ甕で、口縁端部は上下に拡張され、凹線や刻目が施されている。さらに576の頸部には貼付け突帯が廻されている。578～580は高杯または鉢と考えられるものである。何れも内湾しながら外上方に大きく開く体部と内外方に拡張される口縁端部を持つもので、578・579の口縁部には複数の凹線文が巡らされている。584は583同様、頸部に指頭圧痕の施された突帯が廻される広口壺と考えられる個体である。603～611はサヌカイト製の打製石鏃である。平基無茎式や凹基無茎式の他に、凸基有茎式のものが3点出



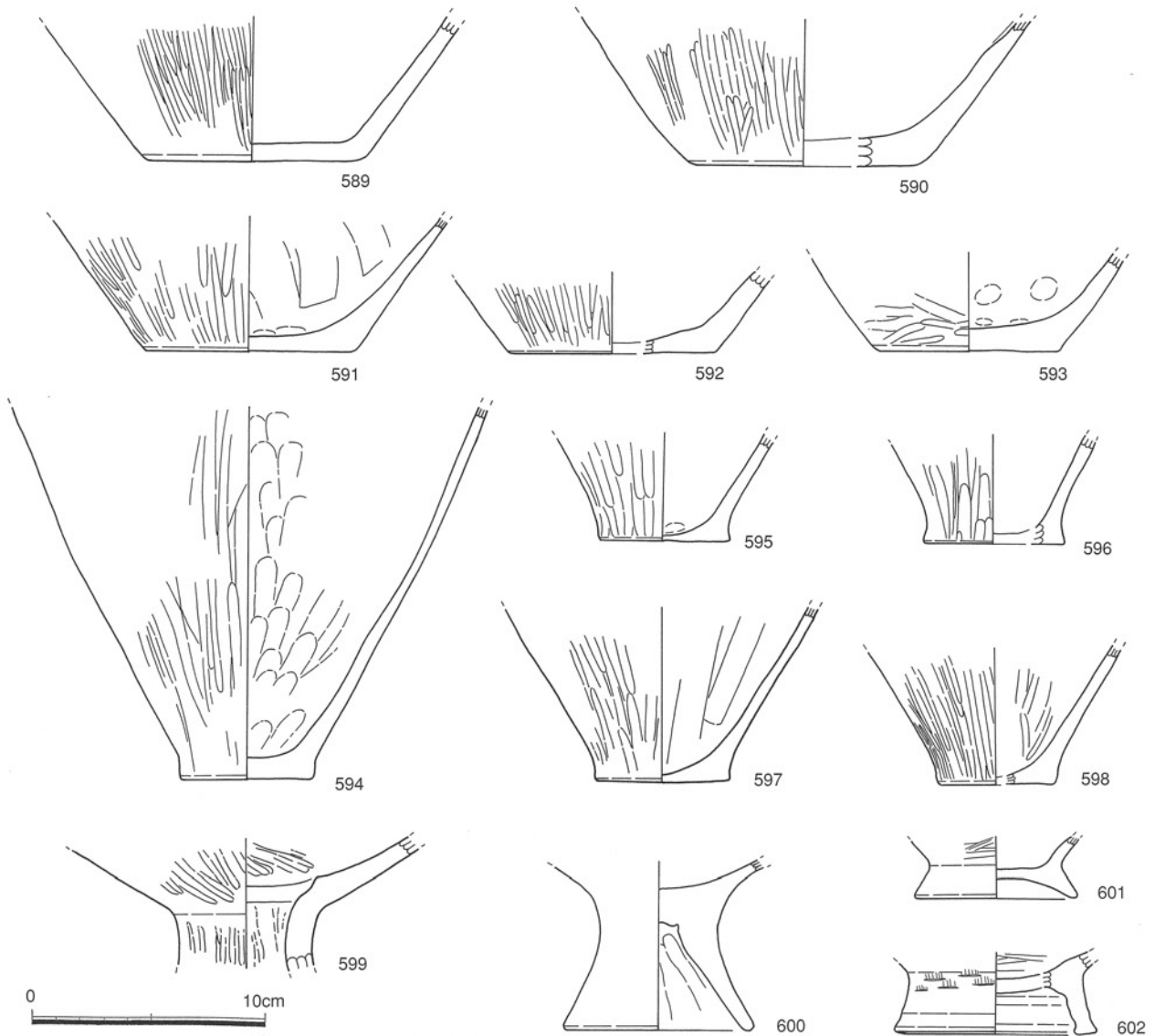
第83图 SB1022 出土遺物実測图(1)



第84图 SB1022 出土遺物実測図(2)

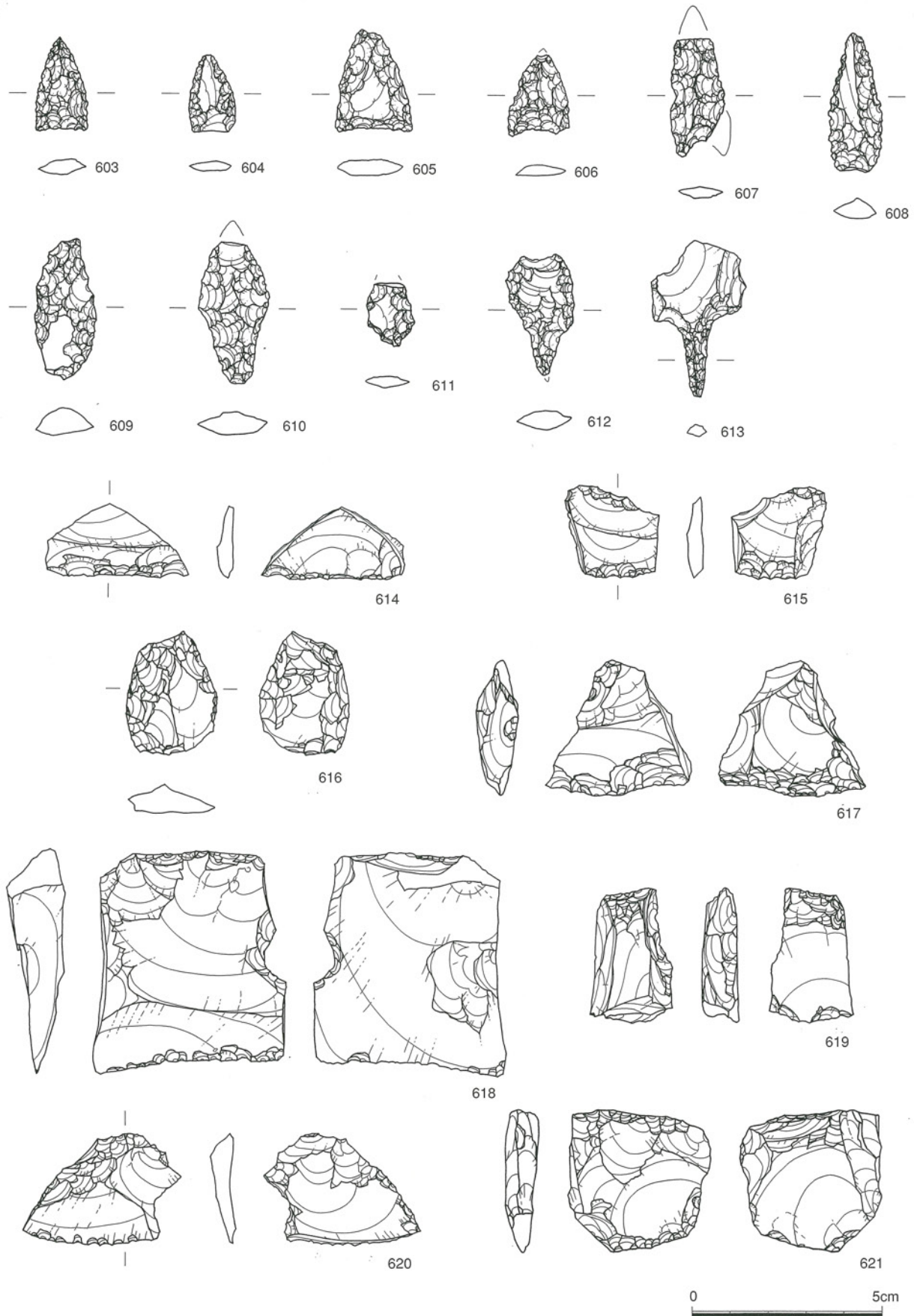


第85図 SB1022 出土遺物実測図(3)

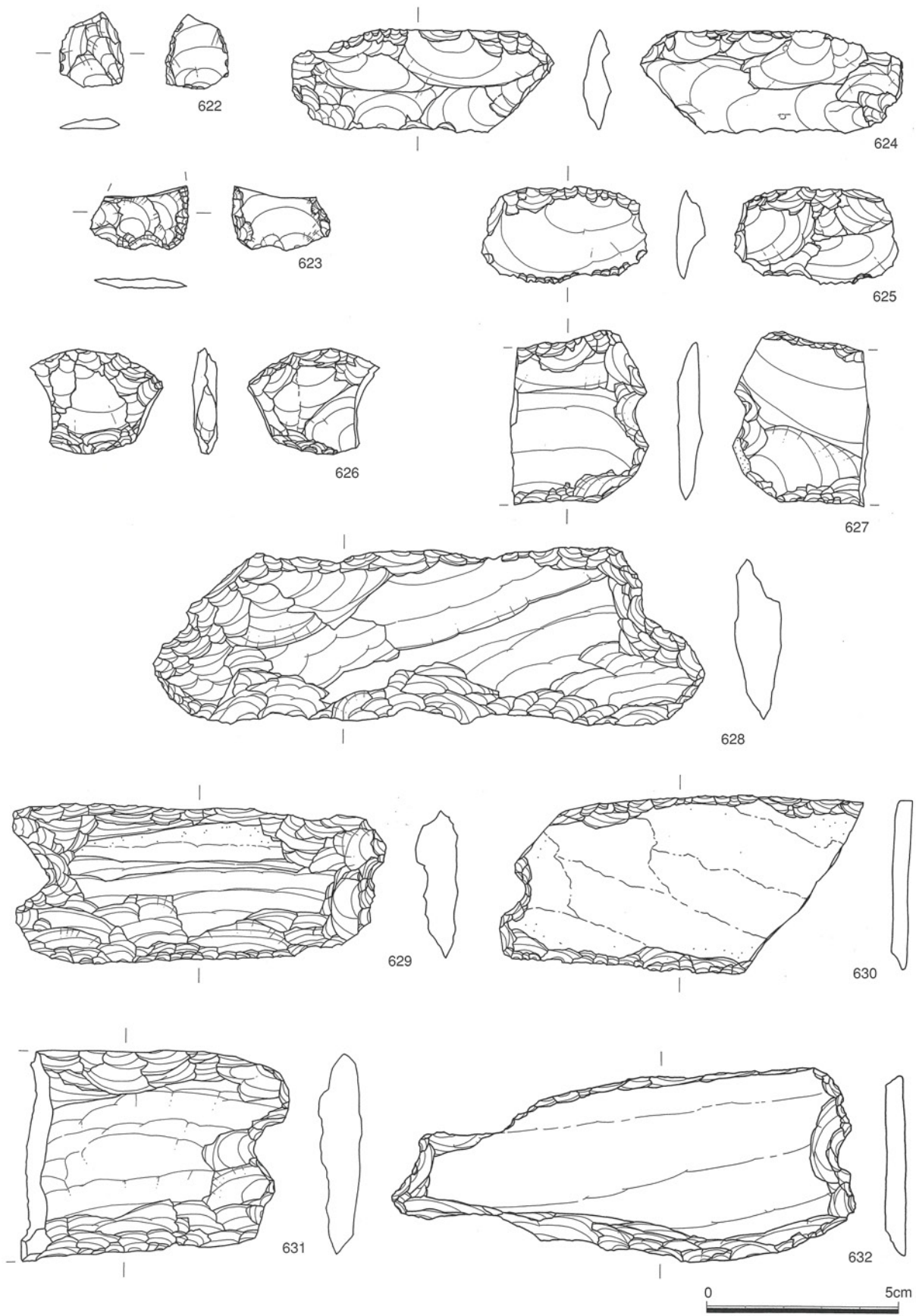


第86図 SB1022 出土遺物実測図(4)

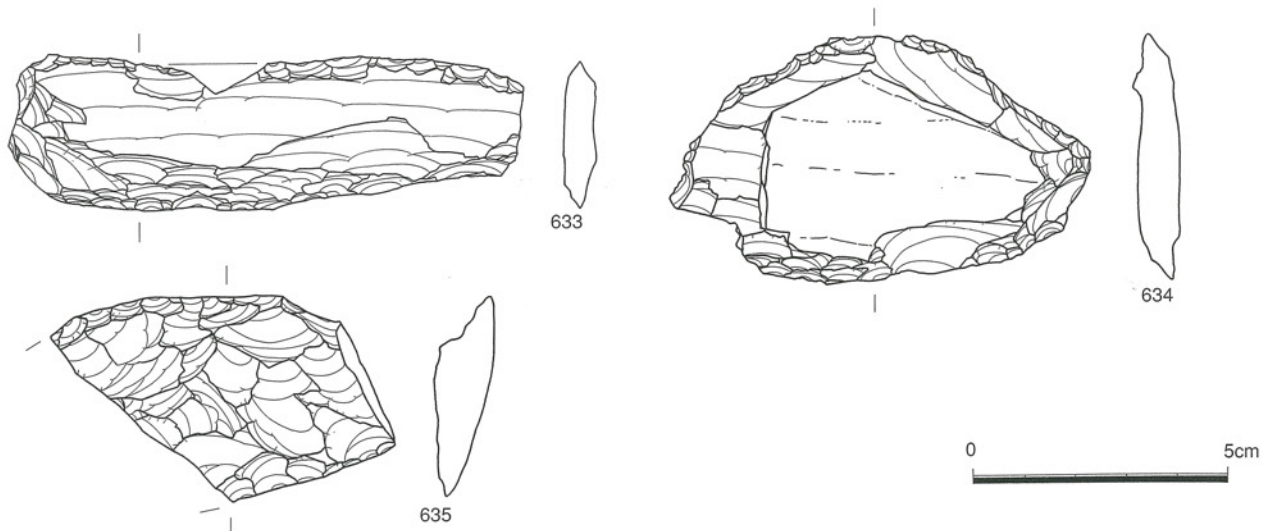
土している。612・613は打製石鏃であるが、612は凸基有茎式の打製石鏃を再加工した可能性が高い。614・615は剥片を折断し、残された縁辺部に調整を加えて刃部を作り出した削器である。616は縁辺部に両極打法による調整が加えられた削器である。617は615のように折断によって台形の形状に整えられた剥片の基部に、両面調整を加えて刃部を作り出した削器である。618も大型の剥片を折断して方形に加工し残された縁辺部に微細な調整を加えて刃部を作り出したもので、折断面を打面にして両極打法をおこなっている。619は折断によって方形に整えられた剥片の折断面に調整を加え刃部を作り出している。620は縁辺部に簡単な調整が加えられた剥片である。621は側面に截断面を持ち両極剥離の痕跡が残された楔型石器である。622・623は薄い剥片の縁辺部に微細な調整が施された打製石鏃の未製品と考えられるものである。624は両面調整の大型の石器から両極打法によって剥離された剥片である。625は横長の剥片の打面と末端辺に調整が加えられ、刃部を作り出したものである。626は断面レンズ状の楕円形の両面調整の石器を截断した楔型石器である。627はサヌカイト製の打製石庖丁である。端部にはくり込みが作られ、表面の剥離の稜線は摩滅している。628～635は結晶片岩製の打製石庖丁である。628～633は端部にくり込みが作られたもので、628・629のように両端にくり込みが作られるものと、633の



第87图 SB1022 出土遺物実測図(5)



第88図 SB1022 出土遺物実測図(6)



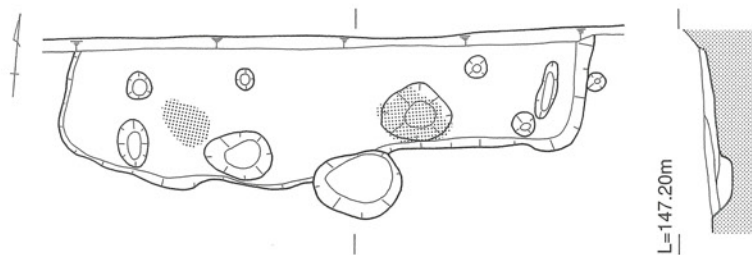
第89図 SB1022 出土遺物実測図(7)

ように片側しか認められないものがある。634は不整形な形態のものである。

竪穴住居跡 23 (SB1023) (第90図)

遺構の大部分が調査区外のため竪穴住居跡という確証はないが、遺構のプランや検出されたピットの掘り込みが明瞭で、覆土中に焼土や炭化物が多量に混入され、部分的にブロック状の焼土を伴っていることや、一部で周溝の可能性のある浅い溝状の掘り込みが検出されていること、床面上から台石が出土していることなどから住居跡として報告することとする。

出土遺物 (第91図)



636は壺の体部である。肩のよく張った器形で頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部直下には強い横ナデ調整が加えられている。

竪穴住居跡 24 (SB1024)

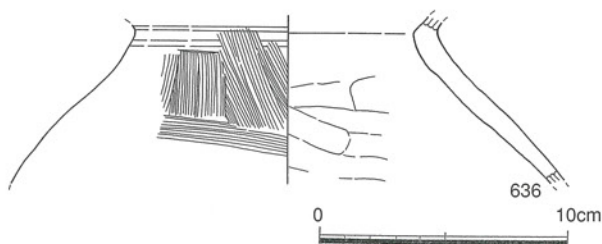
(第92図)

調査区の中で最も東側に位置する

住居址で、東側は段丘崖に面している。一部に調査の際の側溝掘削による攪乱を受けているが、直径約3.8mの円形のプランを持った住居跡である。床面のほぼ中央には長さ約1m、幅0.7m、深さ10cmの不整形な炉が掘り込まれている。また、攪乱部分を除く住居内の側壁沿いには浅い周溝が残されていることから、周溝が住居址内を一周していたものと考えられる。

- 1. にぶい黄褐色 シルト質土(10YR5/4)
- 2. 黄褐色 シルト質土(10YR5/6)
- 3. 褐色 シルト質土(7.5YR4/4)

第90図 SB1023 実測図

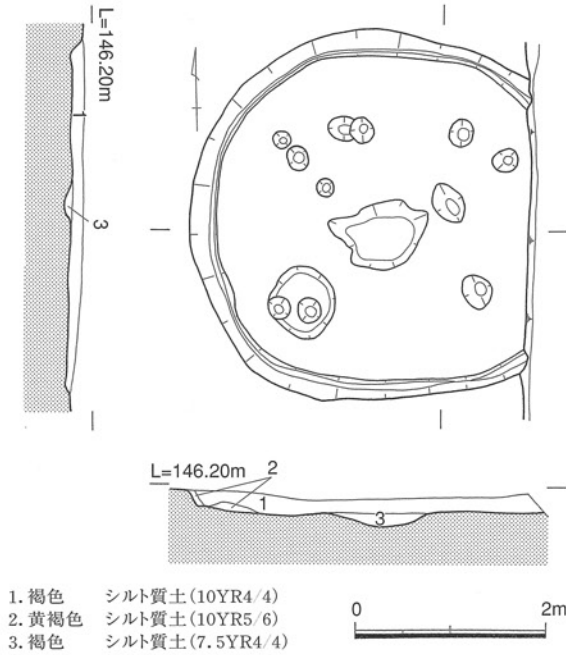


第91図 SB1023 出土遺物実測図

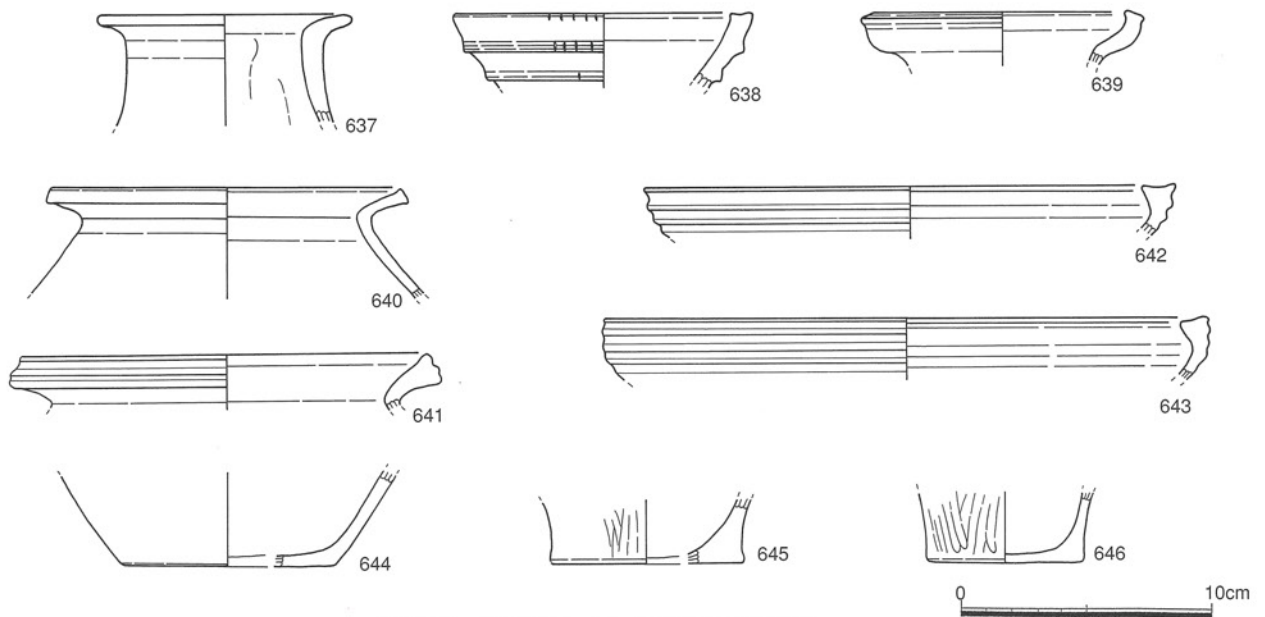
出土遺物 (第93~95図)

637は筒状の頸部と大きく外反する短い口縁部を持つ壺である。口縁端部は円く仕上げられている。638・639は細い頸部と大きく開く受け口状の口縁部を持つ壺である。638は内湾する口縁部に刻目を施した突帯が上下二段に廻されている。刻目は口縁端部にも加えられている。640は「く」の字に屈曲する頸部と直線的な口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方に向かってわずかに拡張され、平坦に仕上げられている。641も同じく「く」の字に屈曲する

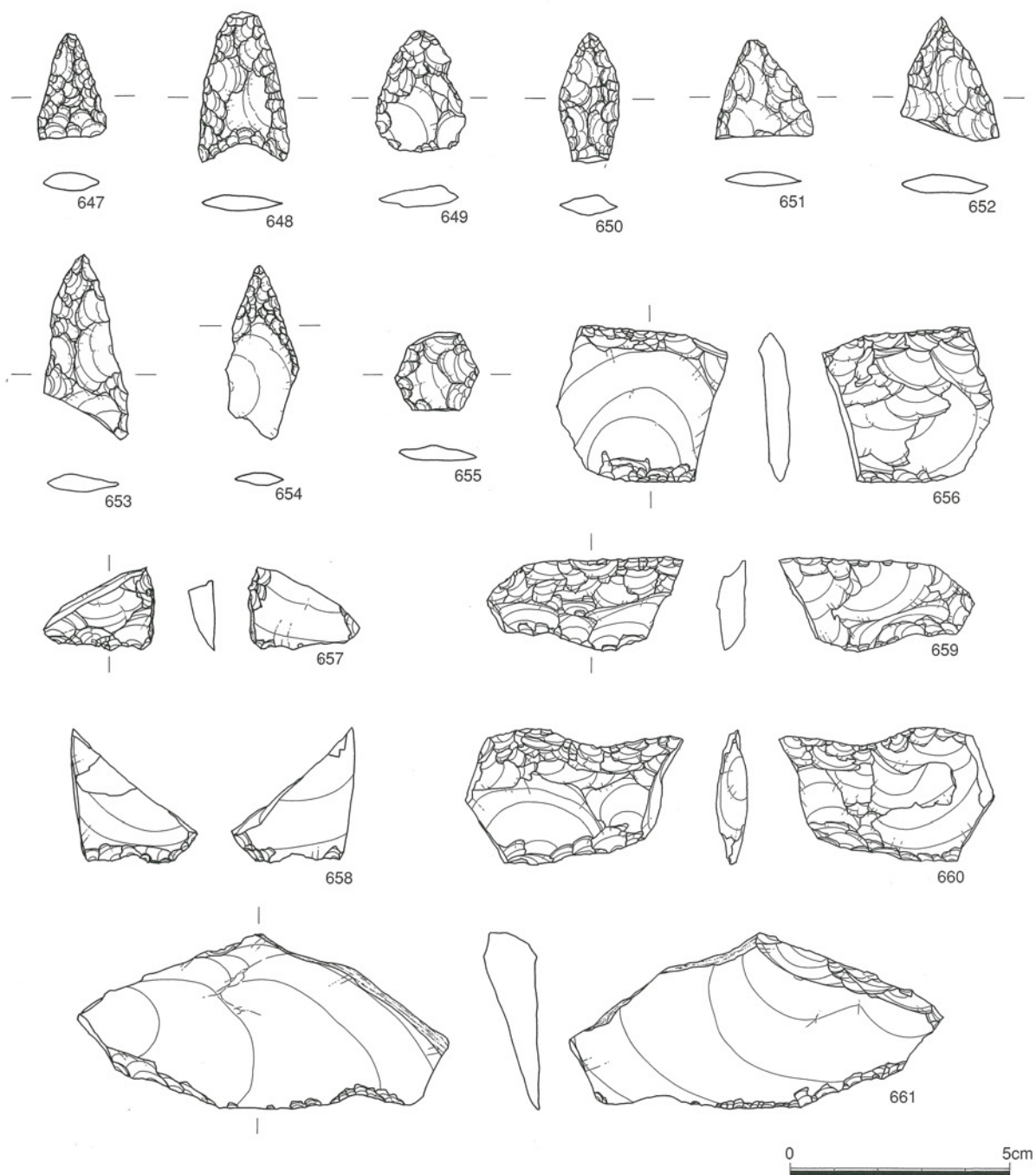
頸部と直線的な口縁部を持つ甕で、口縁端部は上方に拡張され凹線が2条巡らされている。642・643は内湾する体部と外方に拡張される口縁端部を持つ高杯または鉢である。拡張された口縁端部の頂部は凹線状にくぼみ、口縁部には複数の凹線が巡らされている。647~655はサヌカイト製の打製石鏃である。647・649が平基無茎式、648が凹基無茎式、650が凸基有茎式に分類される。また、654は未製品の可能性がある。655は先端部と基部をそれぞれ欠くが、側縁部が外方に突出している。656・657は折断面を持つ剥片の縁辺部に、微細な調整を加えたものである。659は上下に両極打法の痕が残された楔型石器である。660は縁辺部に両極剥離による階段状剥離が残された両面調整の石器である。削器として使用されたものだろうか？661はサヌカイト製の横長剥片の縁辺部



第92図 SB1024 実測図



第93図 SB1024 出土遺物実測図(1)

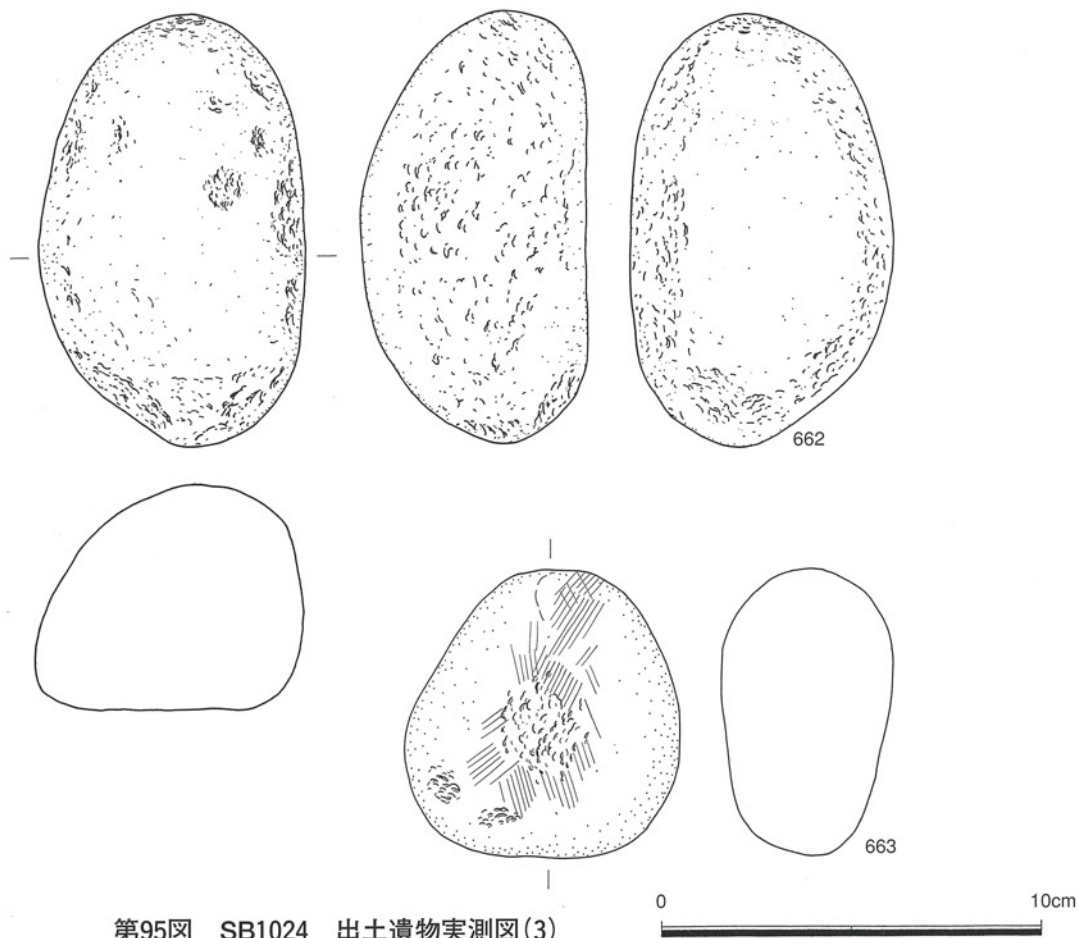


第94図 SB1024 出土遺物実測図(2)

に両面から簡単な調整を加えて刃部を作り出したものである。662・663は砂岩の自然礫を使用した敲石である。662は主として礫の縁辺部に敲打痕が多く残されているのに対して、663では表面中央部分に集中し、磨いた痕跡も認められる。

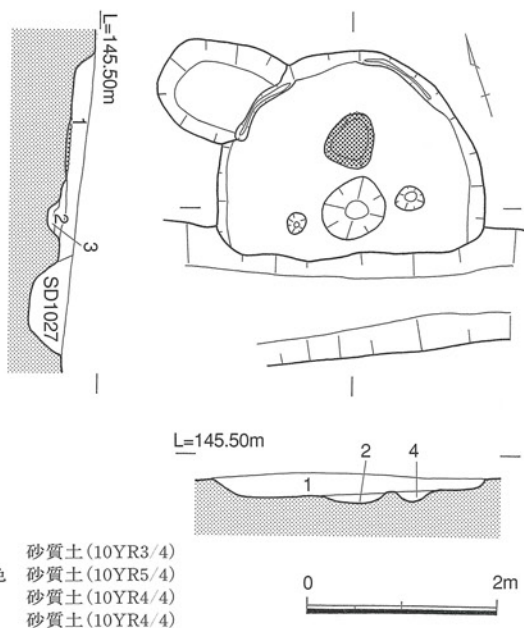
竪穴住居跡 25 (SB1025) (第96図)

直径約2.8mの円形のプランを持つと考えられる竪穴住居跡で、遺構の南側約3分の1は溝SD1027と切り合って床面まで失われている。最も深いところで約20cmの深さを持つ覆土には焼土と炭化物が多く含まれている。北側の側壁沿いに浅い周溝が2カ所検出されたほか、床面の中央部と考えられる場所



第95図 SB1024 出土遺物実測図(3)

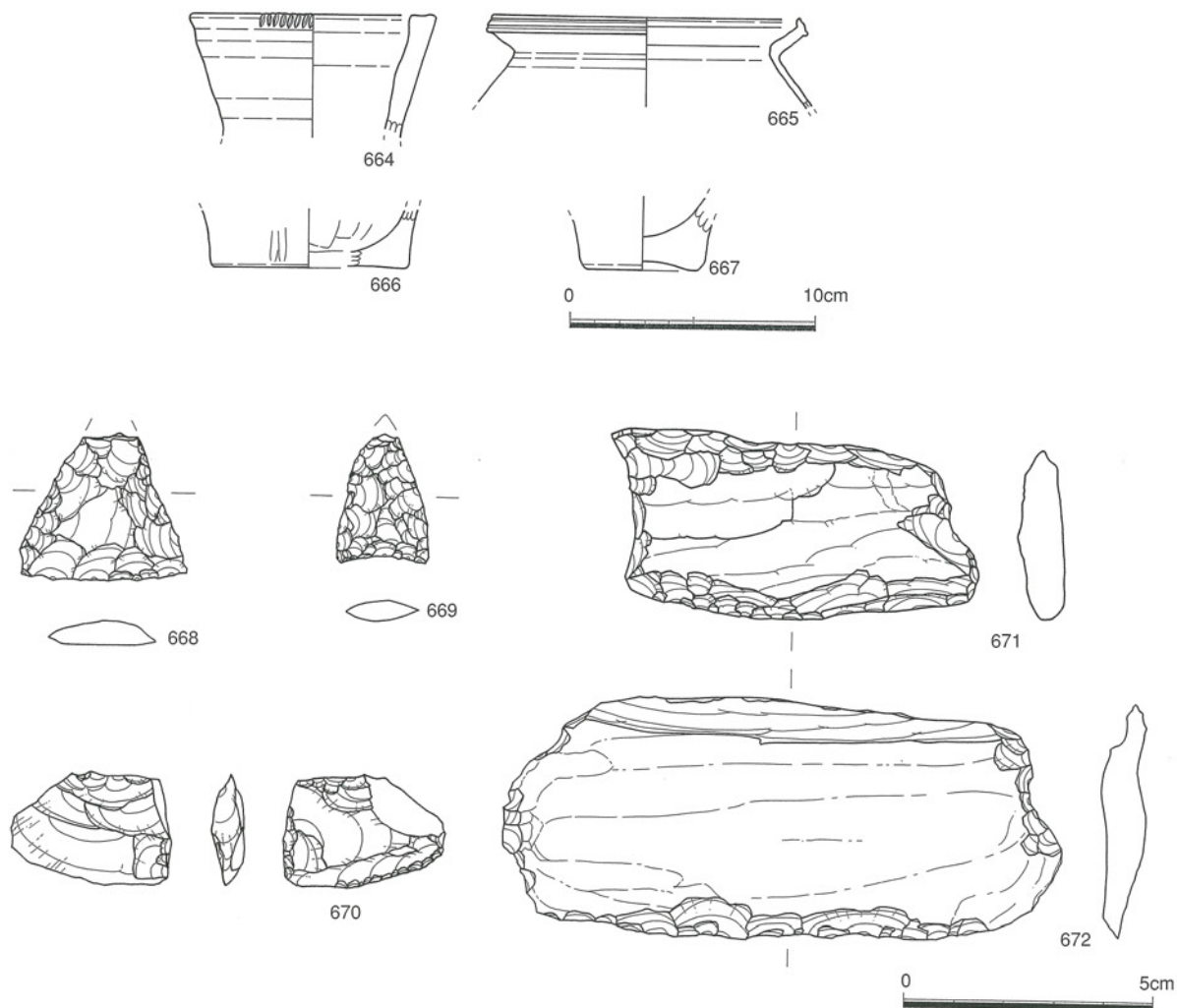
には長さ約0.7m、幅0.6m、深さ5cmの楕円形の浅い炉が掘り込まれている。炉の中央部はさらに直径30cm、深さ15cmほど掘り込まれ、中には厚さ10cm余りの炭化物の層が残されている。また、北西の床面上には台石に使用されたと考えられる長さ約40cmの扁平な砂岩の礫が2個置かれた状態で出土している。



第96図 SB1025 実測図

出土遺物 (第97図)

664は上方に向かってわずかに開く直線的な口縁部を持つ壺である。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼみ外面には刻目が連続して施されている。665は「く」の字に屈曲する頸部から直線的にのびる短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上下に拡張され、凹線が2条巡らされている。668は

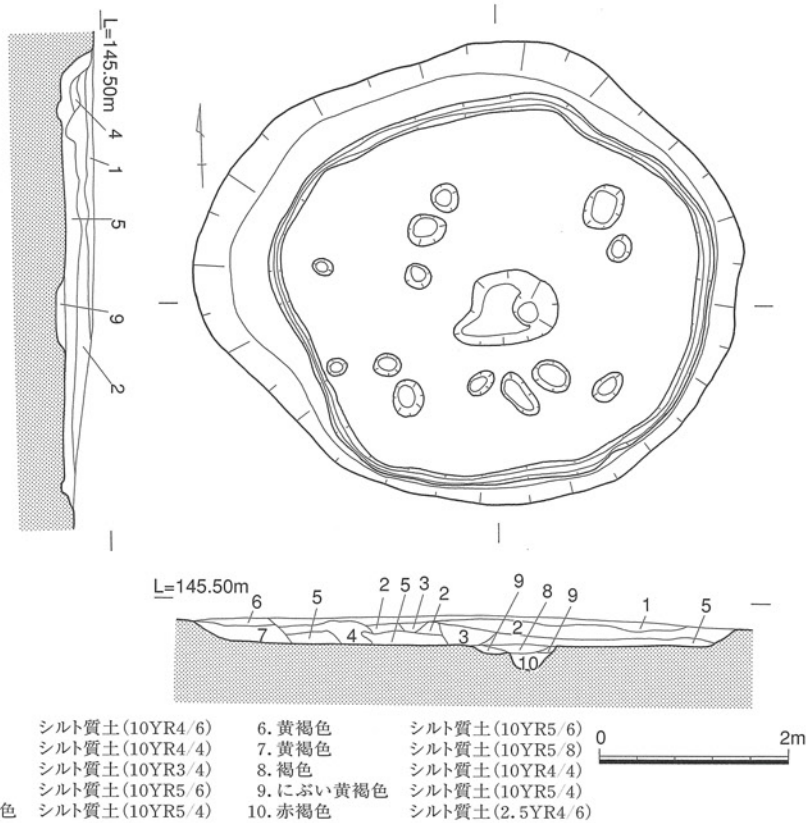


第97図 SB1025 出土遺物実測図

平基無茎式、669は凹基無茎式に分類されるサヌカイト製の打製石鎌である。668は先端部を欠くが三角形の形態に近い平基無茎式の大型の製品である。670はサヌカイト製の楔型石器の縁辺部に微細な調整を加えて刃部を作り出した削器である。671・672は両端に抉りの加えられた結晶片岩製の打製石庖丁である。何れも背に当たる部分が著しく摩滅している。

竪穴住居跡 26 (SB1026) (第98～99図)

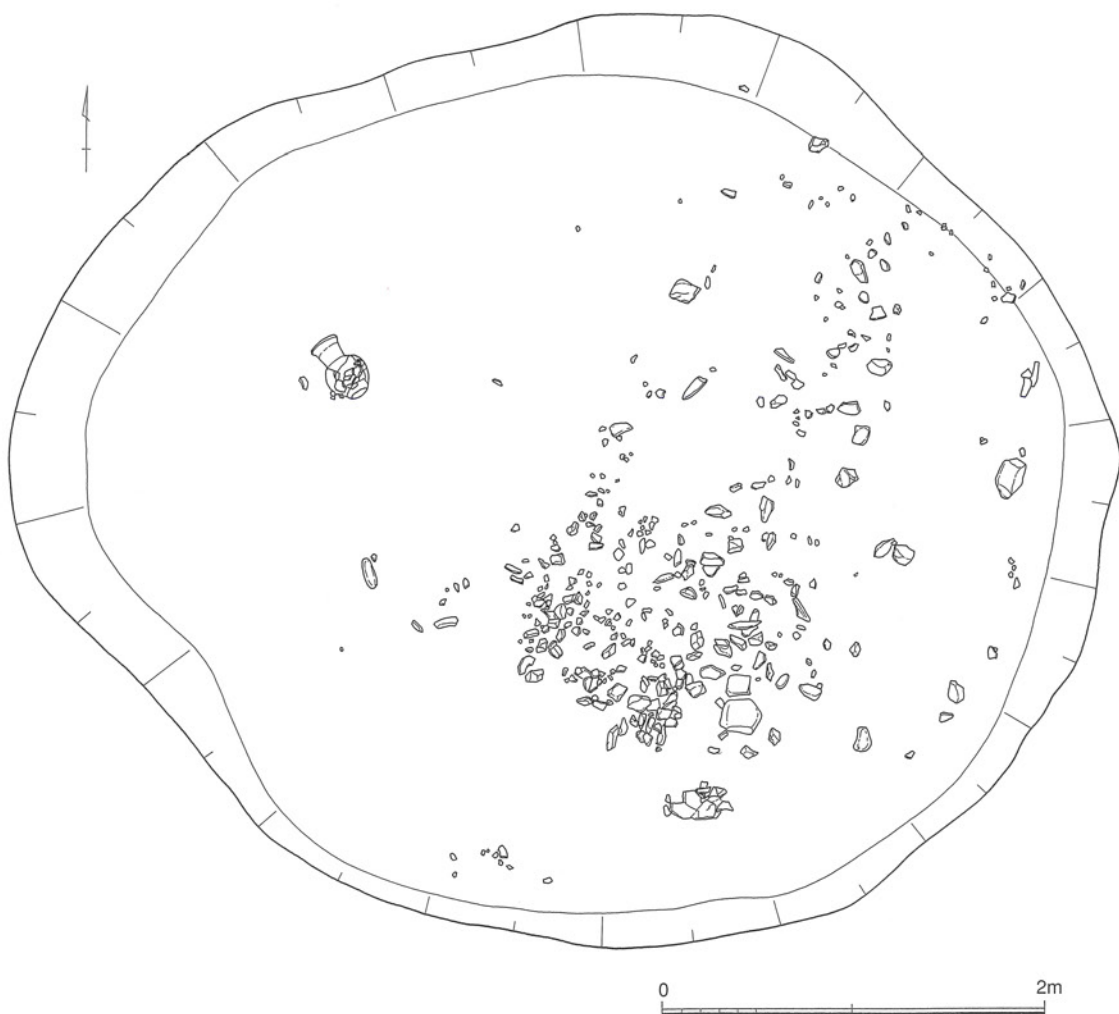
SB1025の東側で検出された長径約4.8m、短径5.0mの不整楕円の形態の竪穴住居址である。住居の側壁に沿って周溝が一周し、床面の中央部付近には東西方向に長軸を持つ長さ約1.2m、幅0.8m、深さ50cmの不整形な形態の炉址が掘り込まれ、東側の一部はさらに円形に掘り下げられている。炉内部には焼土粒や炭化物が多く含まれ、なかにはブロック状の焼土が検出された部分がある。床面上からはこの炉址を中心としてピットが13基検出されている。4基を除いては何れも深さが20cm前後の浅いもので、比較的掘り込みの深い4基の配置についても住居址の西側に集中しているため、どのピットがこの住居の柱穴かは特定出来ない。遺構の覆土中からは砂岩の角礫や土器の小片が多量に検出されているが、これらの出土状況をみると特に炉址とその周辺部を中心とする区域から集中して検出されている。



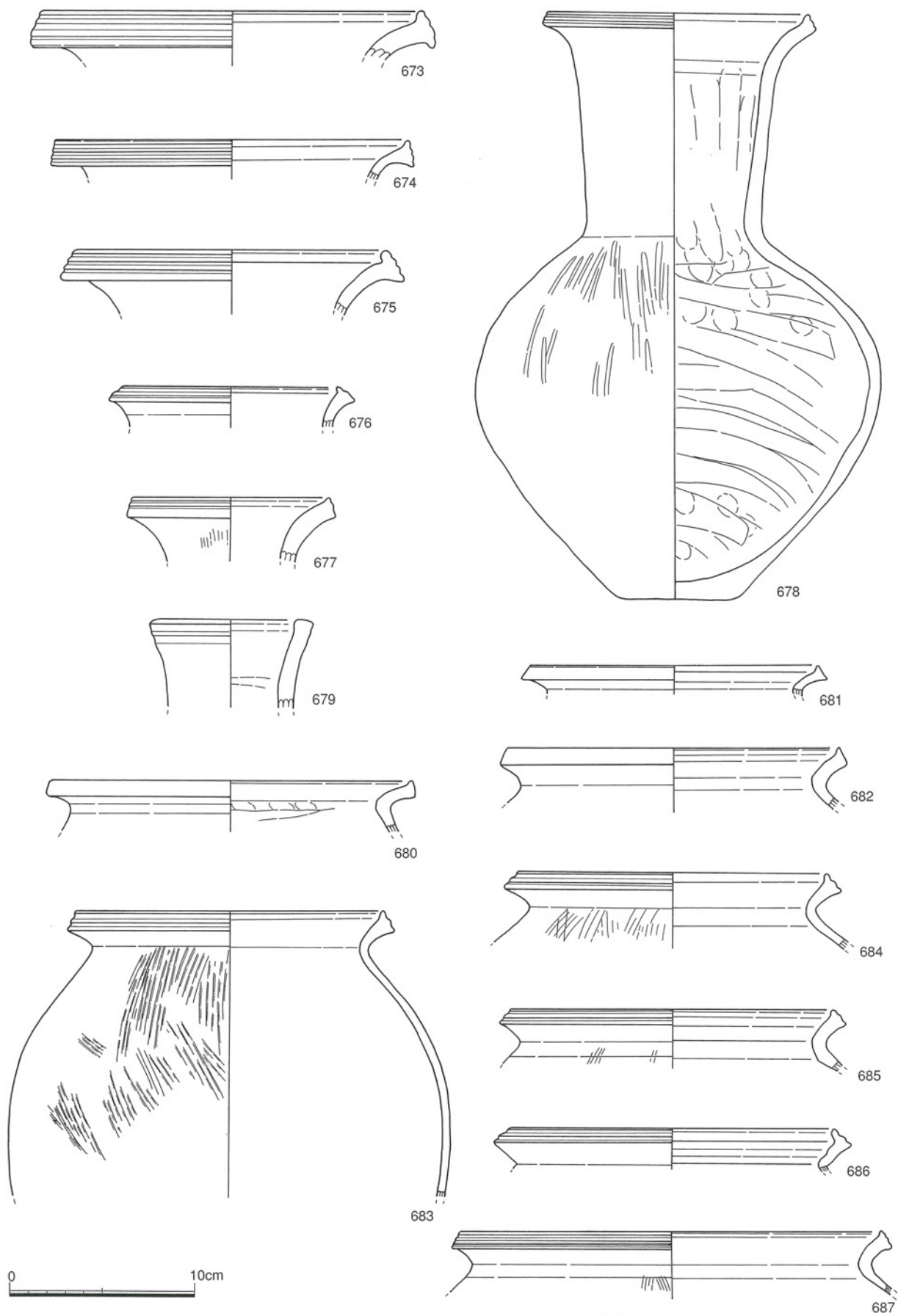
第98図 SB1026 実測図

出土遺物 (第100~104図)

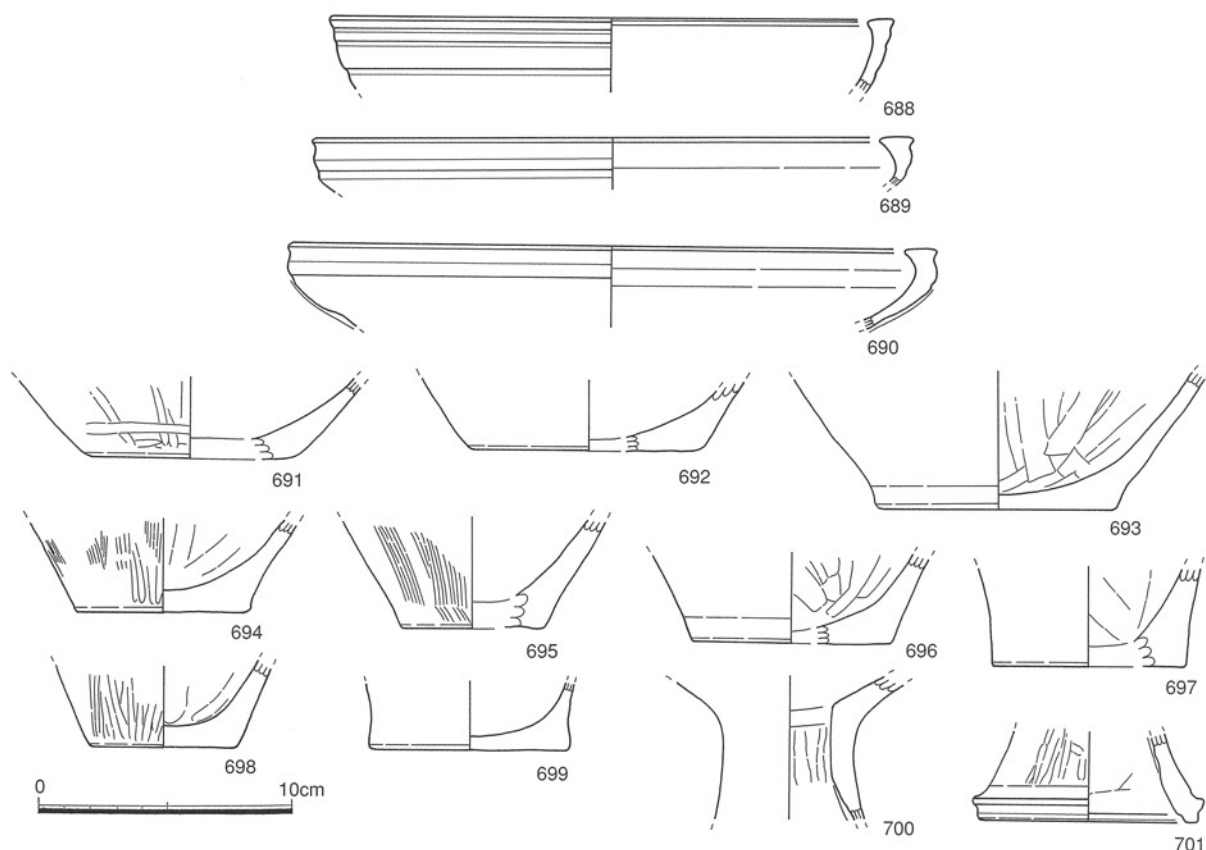
673~675は外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺である。何れも口縁端部は上下に拡張され、拡張部の平坦面には複数の凹線文が巡らされている。676は短頸壺と考えられる個体で口縁部の外反は673~675より緩やかで、口縁端部の拡張の度合いも小さい。677は細く締まった頸部と外反する口縁部を持つ壺である。上方へわずかに拡張されるだけの口縁端部には凹線が2条



第99図 SB1026 遺物出土状況図

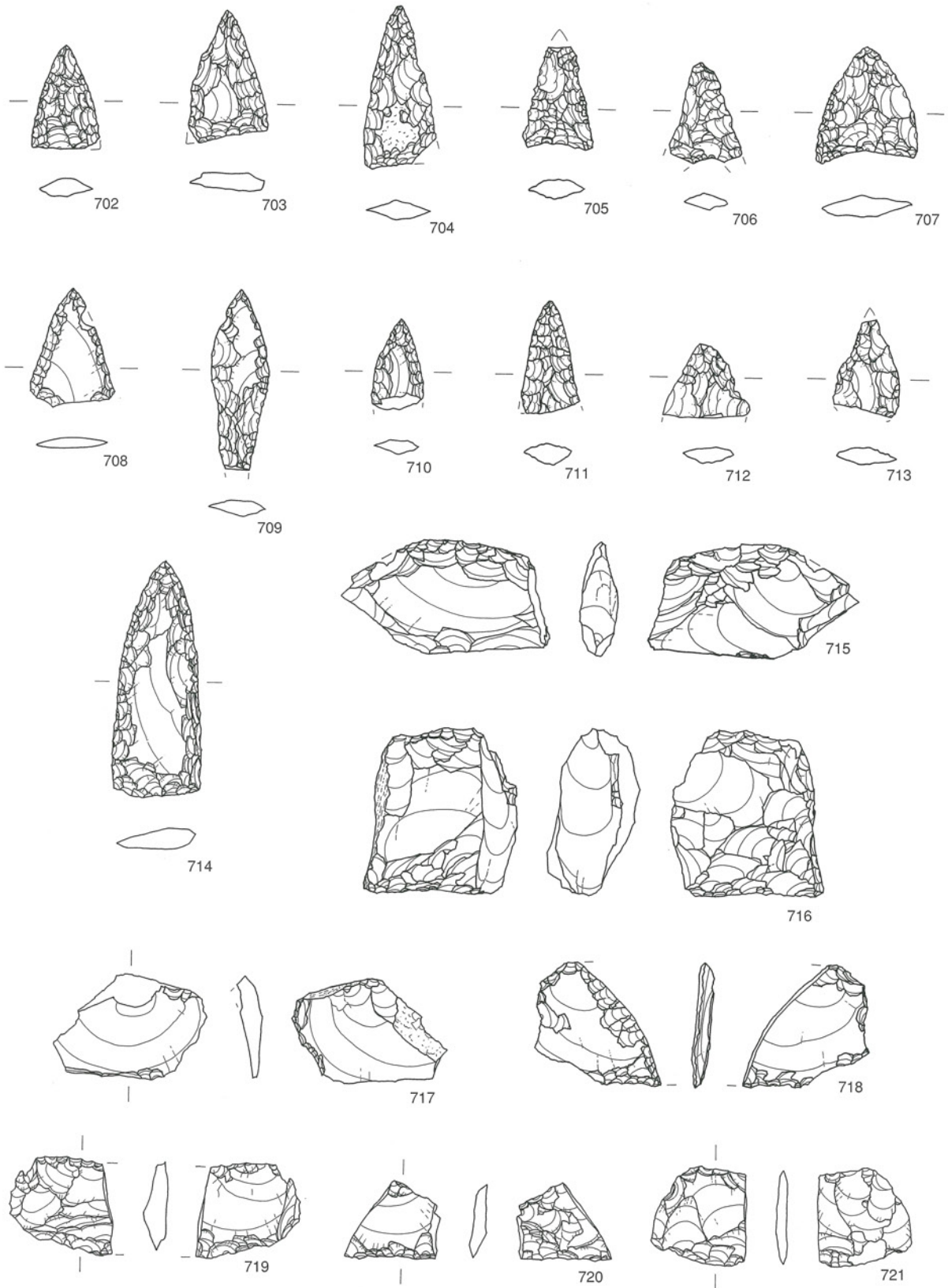


第100图 SB1026 出土遺物実測図(1)



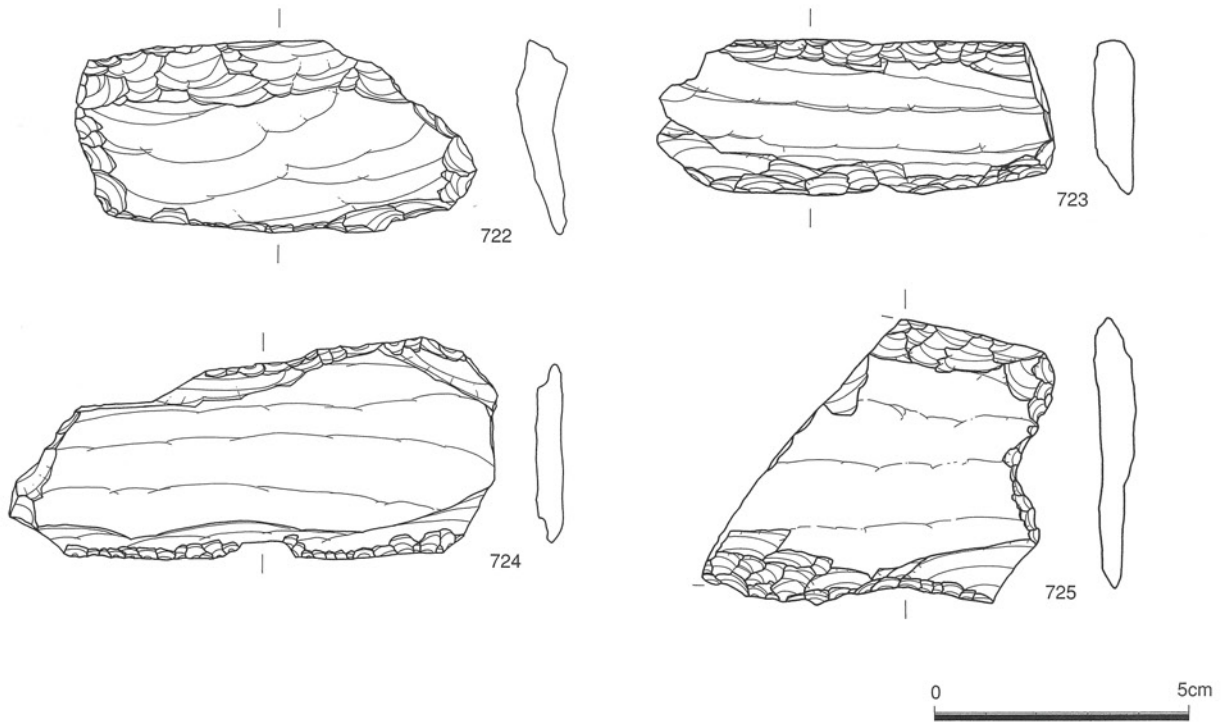
第101図 SB1026 出土遺物実測図(2)

巡らされている。678はこの遺構から出土した土器の中で唯一の完形品である。出土状況は遺物が集中する地点から離れた位置で口縁部を下にして斜めに流れ込むような状態で出土している。球形の体部と、筒状にのびる長い頸部から外反しながら外上方に短くのびる口縁部を持つ長頸壺で、上方に拡張された口縁端部には凹線が2条巡らされている。679は頸部から上方に向かって直線的にのびる口縁部を持つ直口壺である。口縁端部は平坦に仕上げられ、端部直下には凹線が巡らされている。680は強く「く」の字に屈曲する頸部と外上方に大きく開く短い口縁部を持つ甕である。わずかに外反する口縁は端部が円く仕上げられ、体部の膨らみは少ない。681・682は短く外反する口縁部をつ甕である。口縁端部は上方に拡張され平坦に仕上げられている。頸部の屈曲は680と比較すると鈍い。683～687は外反する短い口縁の端部が上方または上下に拡張され、複数の凹線を巡らせた甕である。頸部が強く「く」の字に屈曲するものは少ない。688～690は高杯の杯部、700・701は脚部である。688は緩やかに内湾しながら外上方に大きく開く体部を持つ高杯の杯部である。いずれも口縁端部は内外方に拡張されて平坦に仕上げられ、頂部がわずかにくぼんでいる。689・690も高杯の杯部である。緩やかに内湾しながら外上方に大きく開く体部は、途中、口縁部との境付近で内側に向かって大きく内湾しているが明瞭な屈曲部は認められない。口縁端部は内外方に拡張され、頂部はわずかに盛り上がっている。688・689の口縁部には凹線文が巡らされている。700は杯の底部に円盤充填法が用いられている。701は外下方に向かって「ハ」の字に開く脚の端部が外上方に拡張され、拡張部に凹線が巡らされている。702～714はサヌカイト製の打製石鏃である。702～704・714は平基無茎式、705～707は凹基無茎式、708・709が凸基有茎式に分けられる。714は長さ6.0cm、幅2.2cmを計る大型のものである。715・716は楔型石器である。715は横長剥片を素材に使用した木葉形の両面調整の石器の両端を截断したもので、調整に両極打法が使用されて

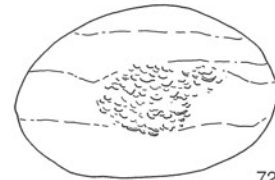
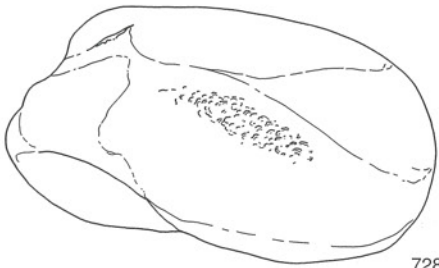
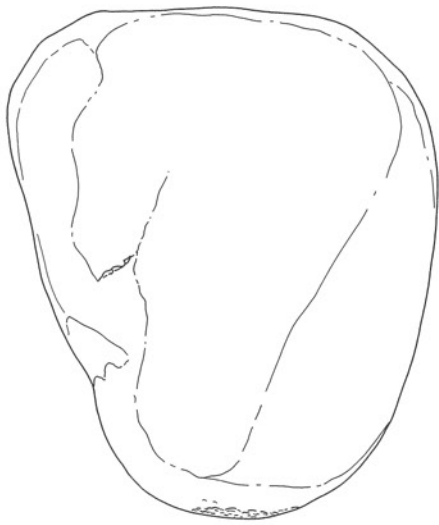


0 5cm

第102图 SB1026 出土遺物実測图(3)

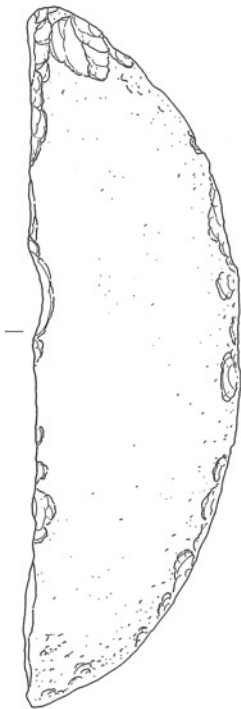


第103図 SB1026 出土遺物実測図(4)

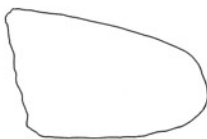


728

729



730



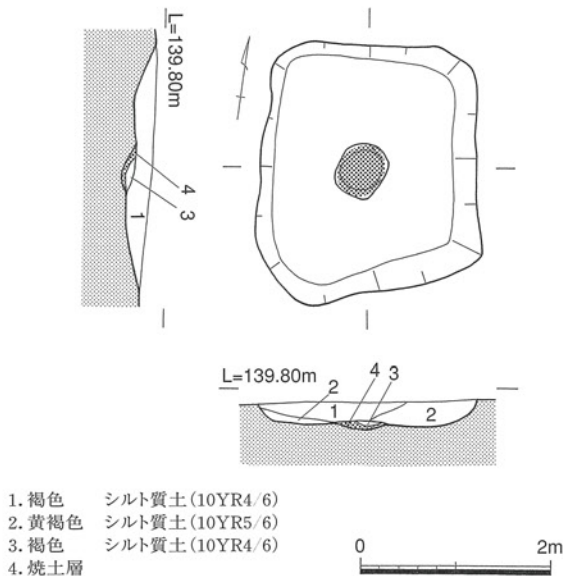
第104图 SB1026 出土遺物実測図(5)

いるため、縁辺部が部分的に潰れている。716は両極打法により縁辺部が著しく潰れている。717～721は剥片の縁辺部に簡単な調整を加え刃部を作り出した石器である。718は剥片の折断面を打面にして両極打法による細部調整を行っている。720・721も同様に細部の調整に両極打法が使用されている。722～725は結晶片岩製の打製石庖丁で、端部にくり込みが作り出されるものは725だけである。722は刃部と背の部分が、また725では背の一部がそれぞれ著しく摩滅している。726は柱状磨製石斧を敲石に転用したものである。両側縁の一部に敲打痕が集中し円形に深くくぼんでいる。727は破損した柱状磨製石斧の破片の一端を研磨して磨製石斧に再加工したものである。728～730は礫を使用した敲石である。728・729は硬質の結晶片岩の端部を敲打面として使用しているが、730は縁辺部全体が使用されている。

竪穴住居跡 27 (SB1027) (第105図)

長さ約2.8m、幅2.2mで、長軸の方向を南北方向に持つ隅円方形の竪穴住居である。遺構内からは周溝や柱穴などが全く検出されなかったにもかかわらず、床面のほぼ中央部から直径0.6m、深さ10cmの

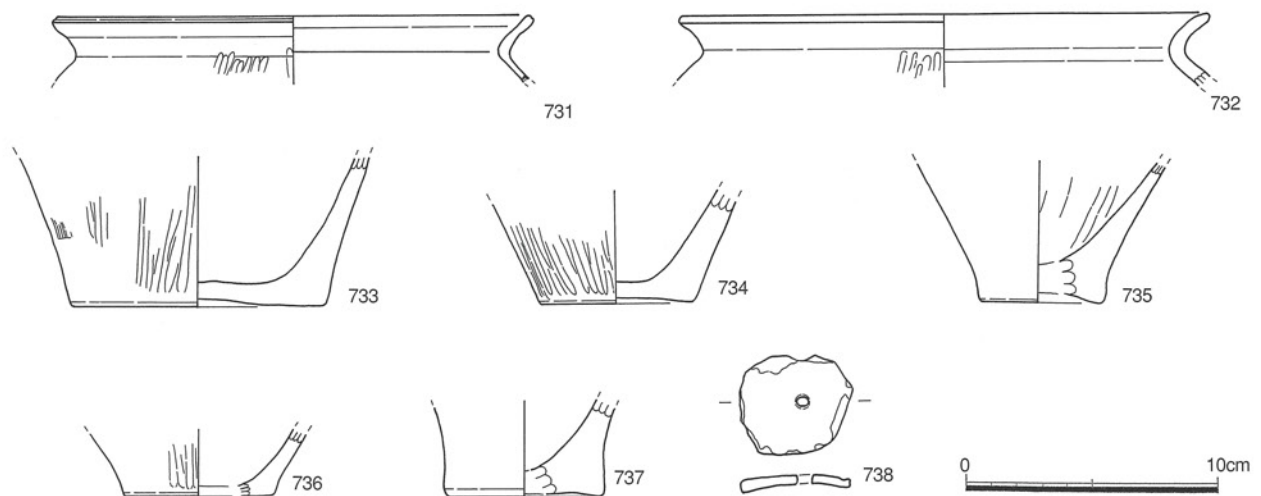
明瞭な掘り込みを持った円形の炉址が検出されている。炉の内部の堆積は2層に分かれるが、下層は焼土層を形成し、ところによっては約6cmの厚さを持っている。遺構内からは土器片などとともに大型の砂岩の角礫が多く検出されている。



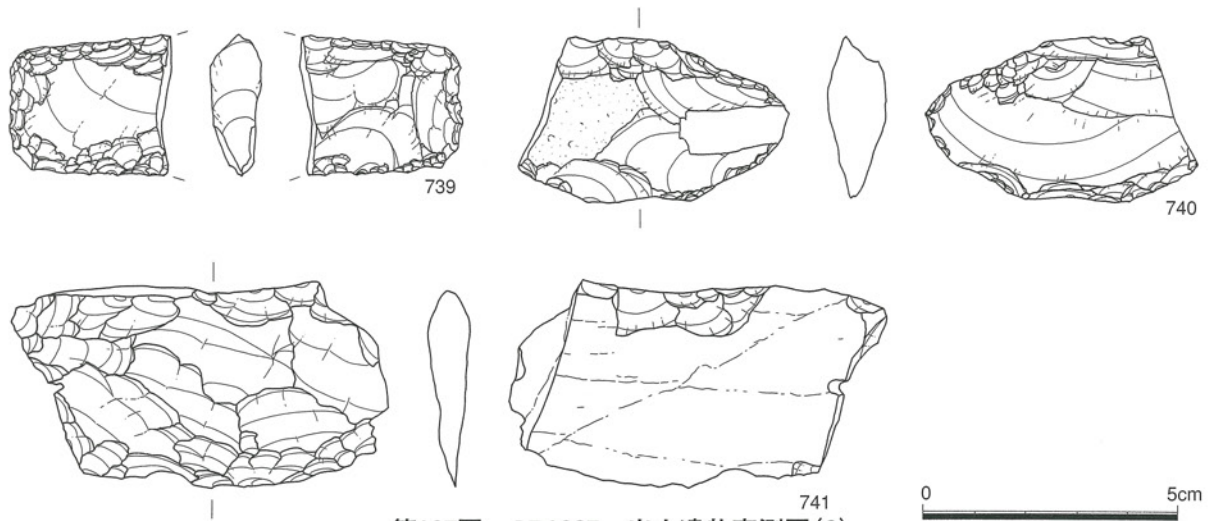
第105図 SB1027 実測図

出土遺物 (第106～107図)

731は「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ甕である。口縁端部は拡張されことなく円く仕上げられている。732も口縁端部が円く仕上げられる甕であるが、頸部の屈曲は弱く円みを持って外反するだけである。738は土器片を利用した紡錘車である。739はサヌカイト製の打製石庖丁、



第106図 SB1027 出土遺物実測図(1)



第107図 SB1027 出土遺物実測図(2)

または打製石剣の基部を截断した石器である。740は横長剥片の主剥離面側の縁辺に調整を加え木葉形の形態に整えたものを、長軸と直交する方向に截断している。741は片面に自然面を残す結晶片岩を用いた打製石庖丁である。一端を欠くが、残された端部にはくり込みは作り出されていない。

掘建柱建物跡

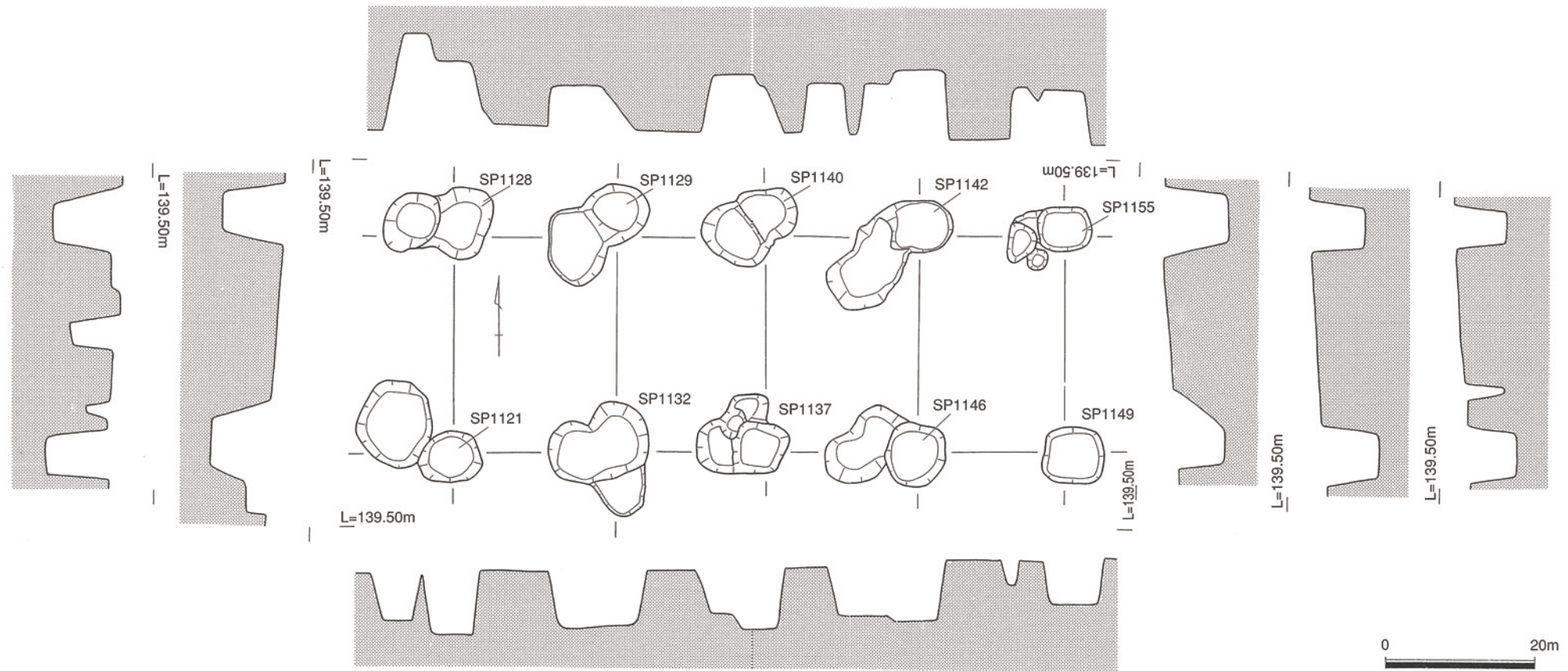
掘建柱建物跡 1 (SA1001)

後述する掘建柱建物跡SA1002と重複して検出された梁間1間、桁行4間の東西棟の掘建柱建物跡で、柱穴間の切り合い関係から時期的にSA1002に先行する遺構であることが確認されている。柱間の間隔が真心間で、梁間が約3.2m、桁行が2～2.2mを計る大型の掘建柱建物で、柱穴の掘り込みも四角いものでは一辺0.8m、深さも深いものでは1mに達するものがある。検出された柱列は梁間が1間しかないが、遺構の検出された場所が調査区の南の境界線に近く、南側の桁行で境界から最も遠い位置にある柱穴でも2.1mしか離れていないことから、柱列が南側の調査区外にさらに1間以上のびる可能性も考えられる。

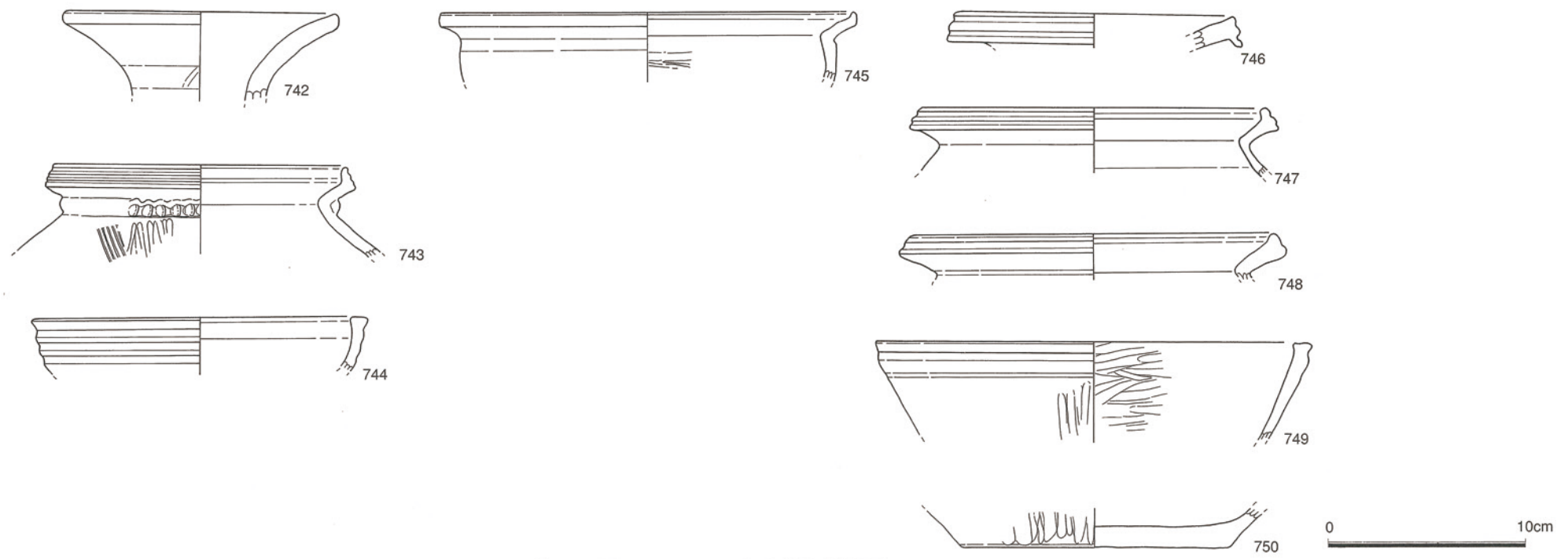
出土遺物

柱穴 128 (SP1128)

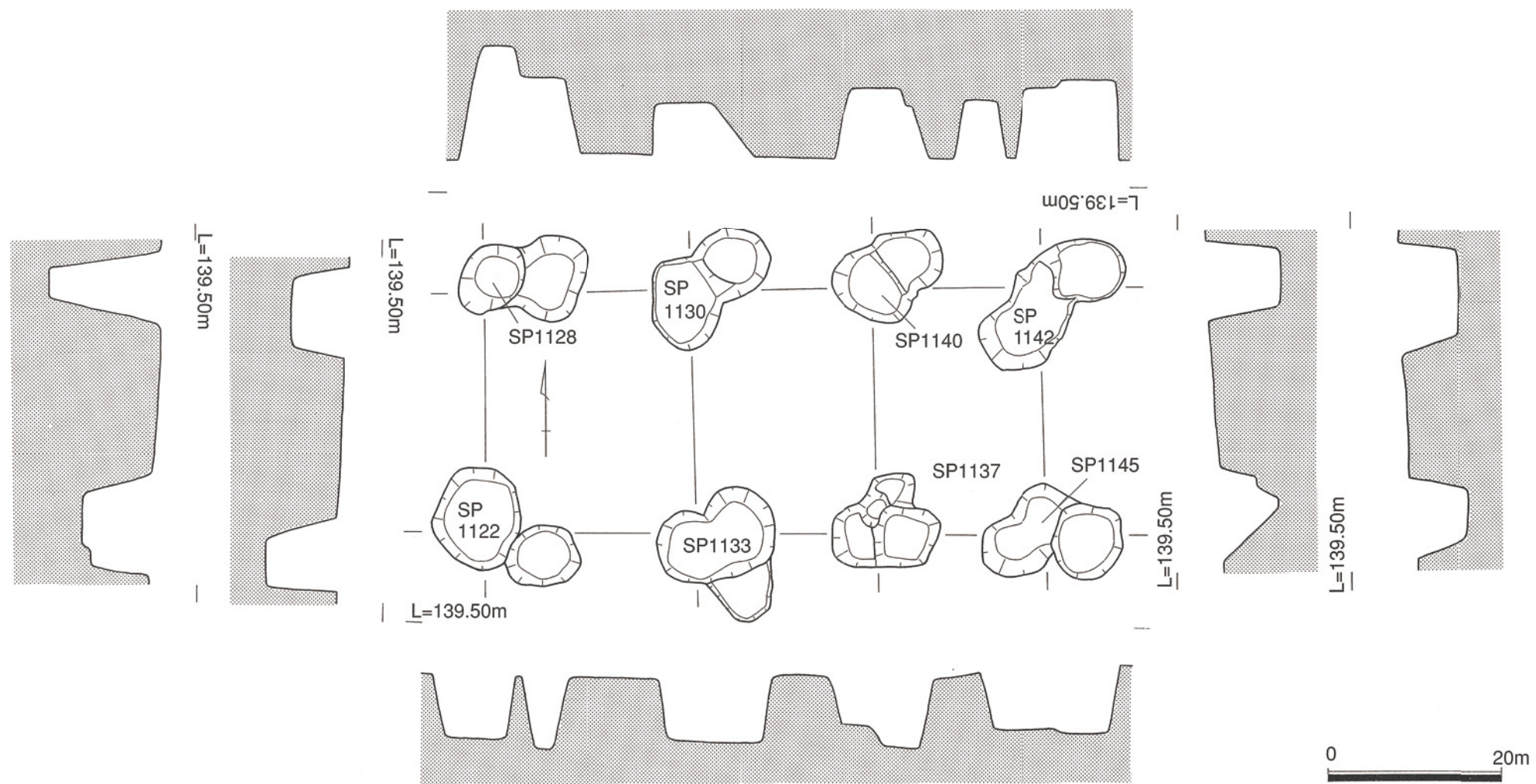
742はよく締まった細い頸部と、外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ壺である。口縁端部は横ナデ調整が施され円く仕上げられている。743は「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ甕である。上方に拡張されて平坦面が作り出された口縁端部には複数の凹線が巡らされている。また、「ハ」の字に開く体部と、頸部との境には指頭圧痕の加えられた貼付け突帯が1条廻されている。744は内湾する体部と、内外方に拡張された口縁端部を持つ高杯の杯部である。口縁端部からやや下がった位置には凹線が2条巡らされている。753は大型のサヌカイトの横長剥片の縁辺部に両面から調整を加えて刃部を作り出した削器である。調整は縁辺部だけに限らず、打面にも及んでいる。



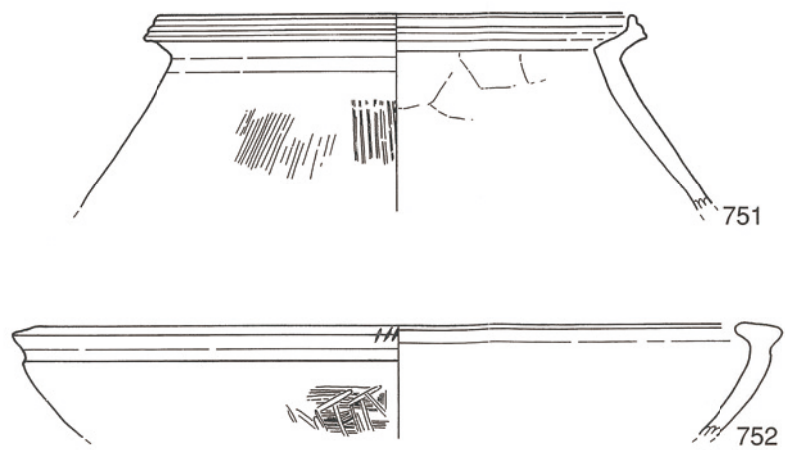
第 108 图 SA 1001 实测图



第 109 图 SA 1001 出土遺物实测图



第110図 SA 1002 実測図



第111図 SA 1002 出土遺物実測図

柱穴 129 (SP1129)

745は緩やかに内湾する上方への開きの小さい体部と、「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な口縁部を持つ鉢である。口縁端部は上方に拡張され平坦に仕上げられている。763はサヌカイト製の打製石鏃であるが基部を欠くため形態は不明である。764は三方を折断したサヌカイトの剥片に折断面を打面にして両極打法による剥離が加えられたものである。

柱穴 142 (SP1142)

746は外上方に大きく開く壺の口縁部である。下方に拡張された口縁端部には凹線が2条巡らされている。747は「く」の字に屈曲する頸部から外上方に直線的にのびる短い口縁部を持つ甕である。上方への拡張により作り出された口縁端部の平坦面には凹線が2条巡らされている。748も「く」の字に屈曲する頸部と直線的な口縁部を持つ甕である。上方に拡張された口縁端部には凹線が1条めぐらされている。749は外上方に向かってのびる上方への開きが大きい直線的な体部と、わずかに内外方に拡張される口縁端部を持つ鉢である。口縁端部は頂部がわずかにくぼみ、直下は横ナデによって幅広くくぼんでいる。755～757はサヌカイト製の打製石鏃、758は打製石錐である。そのうち755・756は平基無茎式に分類される。

柱穴 149 (SP1149)

762はサヌカイト製の打製石鏃である。凹基無茎式に分類されるタイプで正三角形に近い形態を持ち、基部はわずかにくぼんでいる。

掘建柱建物跡 2 (SA1002)

SA1001に続いて重複して建てられた梁間1間、桁行3間の東西棟の掘建柱建物跡である。SA1001同様、柱間の間隔が梁間で2.6～2.9m、桁行で1.8～2.5mを計り、柱穴も深いものでは1m近いものがある大型の掘建柱建物である。SA1001と同じく、掘建柱建物跡の南側に調査区の境界線が隣接しているため、この柱列がさらに南に延びる可能性も十分考えられる

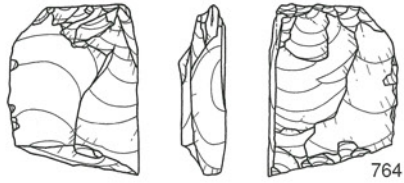
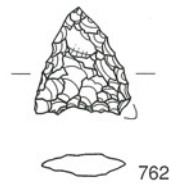
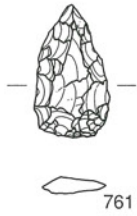
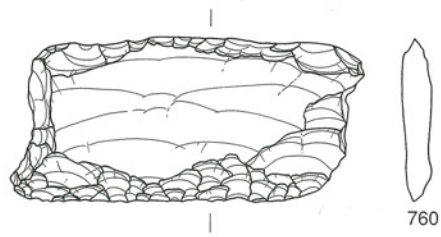
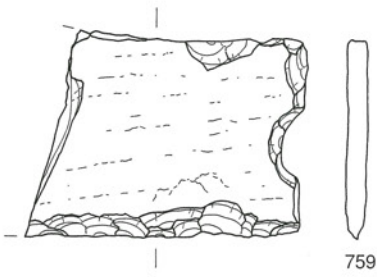
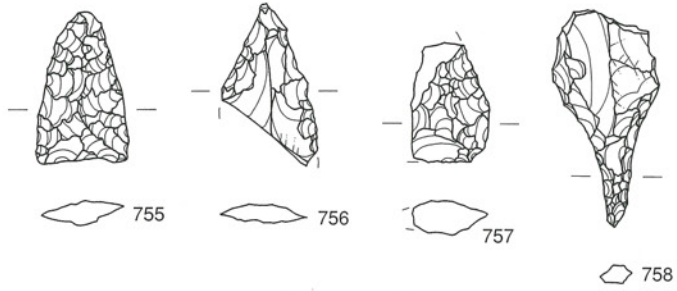
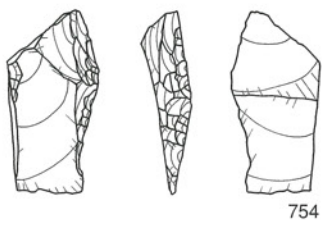
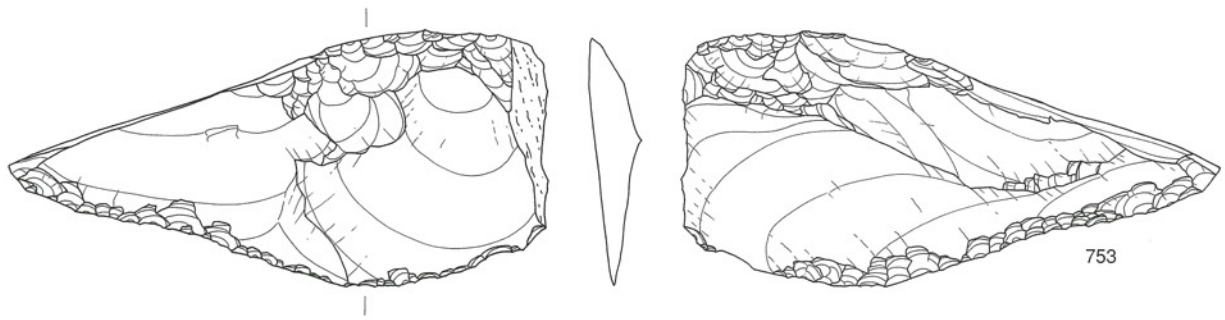
出土遺物

柱穴 133 (SP1133)

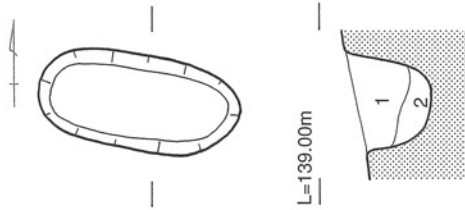
754はサヌカイトの剥片を折断によって不整形の形態に整え、折断面に調整を加えて削器にしたものである。

柱穴 145 (SP1145)

751は「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的で短い口縁部と、「ハ」の字に大きく開く体部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され拡張部には凹線が2条巡らされている。752は内湾する浅い体部と内外方に拡張される口縁端部を持つ高杯である。口縁端部は平坦に仕上げられ、連続する刻目が施されている。

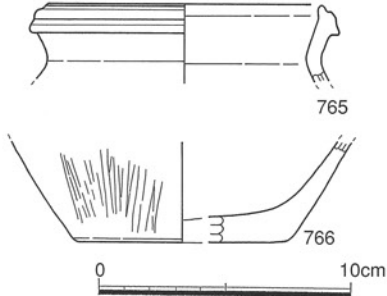


第112图 SA1001·1002 出土遺物実測図

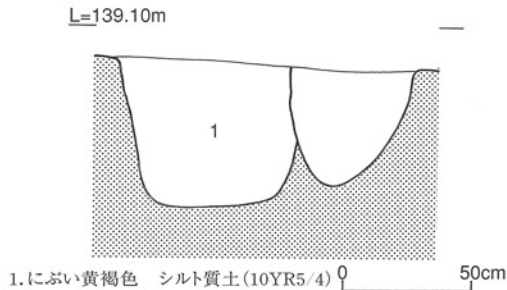
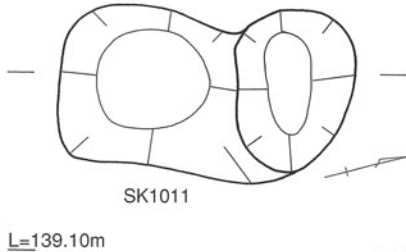


1. におい黄褐色 シルト質土(10YR5/4)
 2. におい黄褐色 シルト質土(10YR5/3)

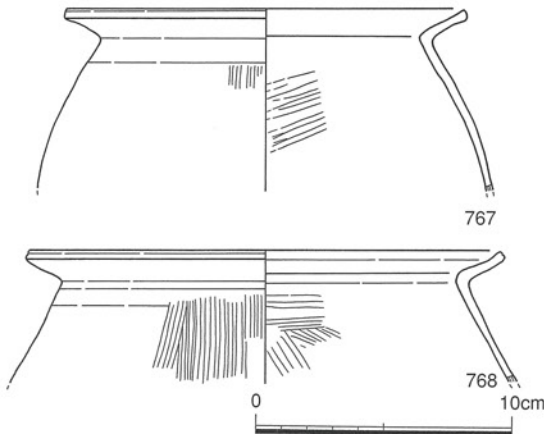
第113図 SK1006 実測図



第114図 SK1006 出土遺物実測図



第115図 SK1011 実測図



第116図 SK1011 出土遺物実測図

土 坑

土坑 6 (SK1006) (第113図)

F-10グリッドで検出された長さ約0.8m、幅0.4m、深さ30cmの長楕円形の形態の小土坑である。遺構内の覆土は2層に分かれているが色調の差はわずかである。

出土遺物 (第114図)

765は外反する短い口縁部をもつ短頸壺である。口縁端部は上下に拡張され凹線が2条巡らされている。

土坑 11 (SK1011) (第115図)

F-11・12グリッドで検出された長さ約1.2m、幅0.6m、深さ50cmの不整楕円の形態をした土坑である。遺構内にはにおい黄褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物 (第116図)

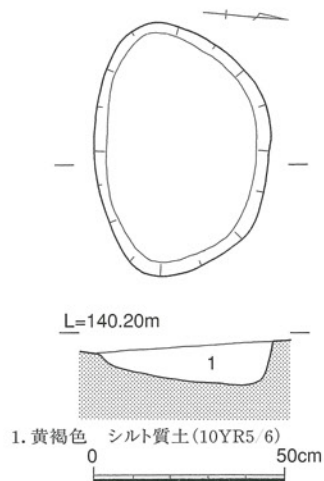
767は倒卵形の体部と、「く」の字に屈曲する頸部から直線的にのびる短い口縁部を持つ甕である。器壁は薄く、口縁端部は拡張されず平坦に仕上げられている。768は「く」の字に屈曲する頸部とわずかに内湾する短い口縁部を持つ甕で、体部は下方に向かって「ハ」の字に開いている。767同様、口縁端部は拡張されず、平坦に仕上げられている。

土坑 22 (SK1022) (第117図)

G-16グリッドで検出された長さ0.7m、幅0.5m、深さ10cmの不整楕円の形態の浅い土坑である。遺構内には黄褐色シルト質土が堆積している。

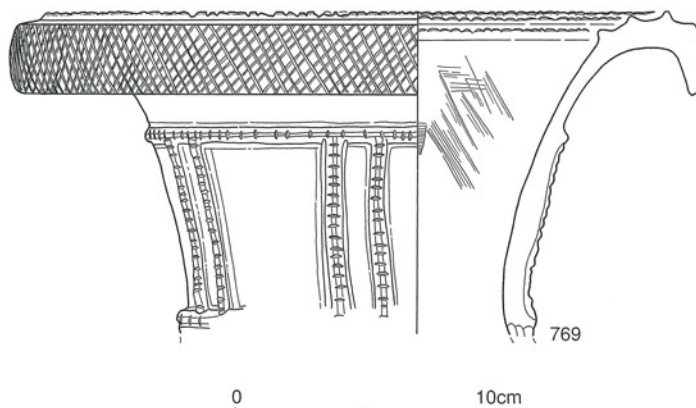
出土遺物 (第118図)

769は外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ壺である。下方に向かって大きく垂下し広い平坦面が作り出された口縁端部には斜格子目文が描かれている。また、頸部から口縁部にかけては刻目が施された口縁に平行する隆帯によって区切られ、これをさらに垂下する2本1組の隆帯で方形に区画している。

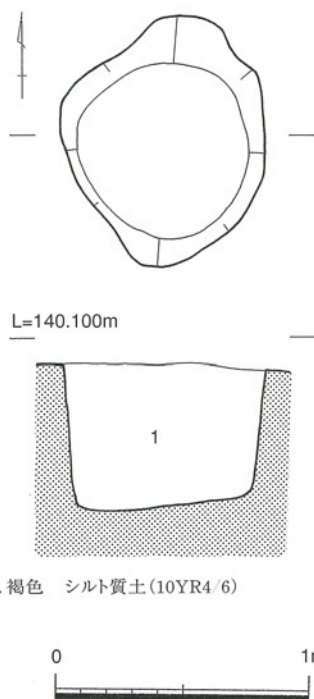


第117図 SK1022 実測図

1. 黄褐色 シルト質土(10YR5/6)



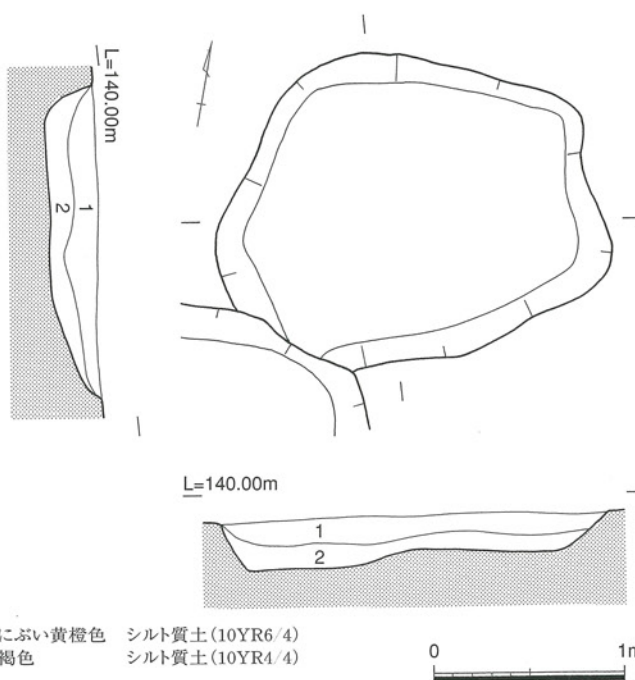
第118図 SK1022 出土遺物実測図



第119図 SK1024 実測図

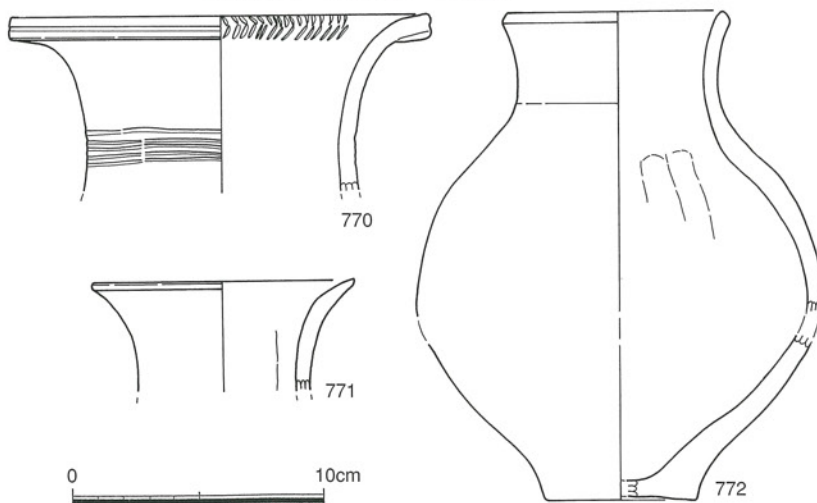
土坑 24 (SK10214) (第119図)

G-18グリッドで検出された長さ1m、幅0.8m、深さ60cmの土坑である。遺構の北側はSX1003とわずかに切り合い、東側は中世の溝SD1005に削平されている。出土遺物に乏しくサヌカイト製の打製石鏃以外出土していない。

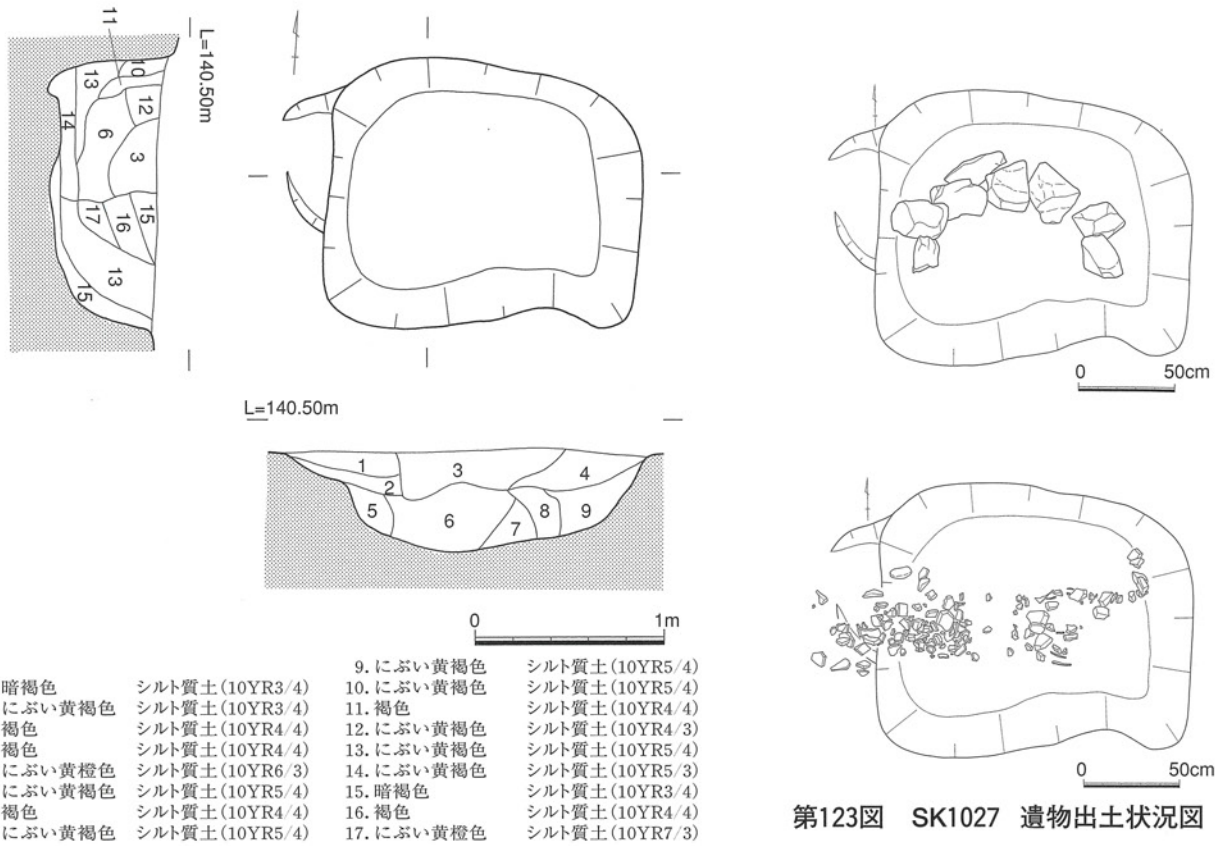


1. にぶい黄橙色 シルト質土(10YR6/4)
2. 褐色 シルト質土(10YR4/4)

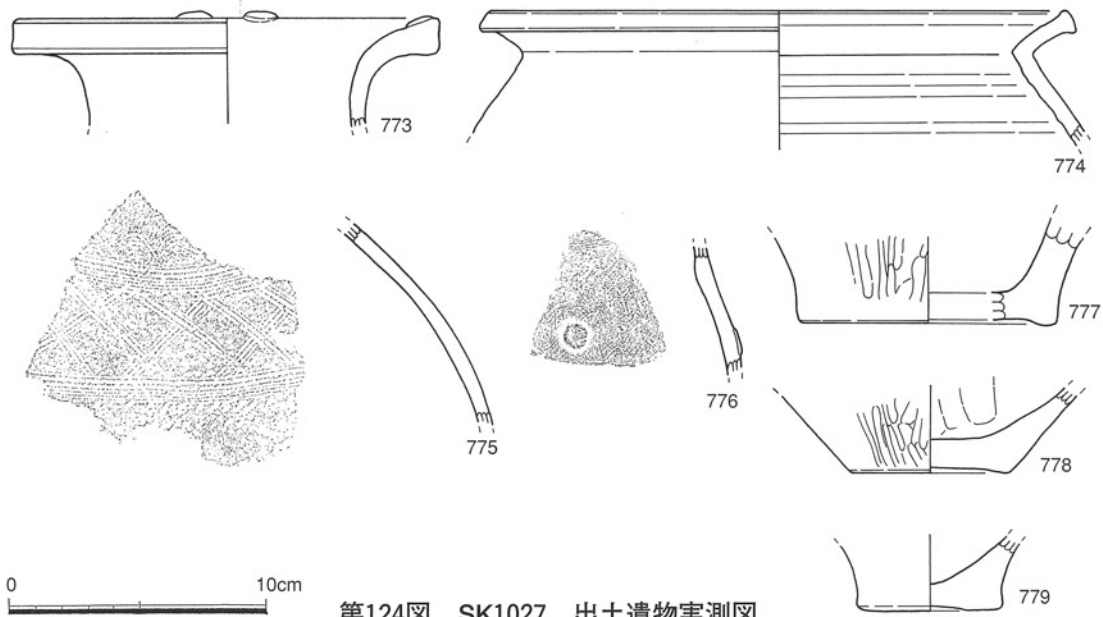
第120図 SK1026 実測図



第121図 SK1026 出土遺物実測図



第122図 SK1027 実測図

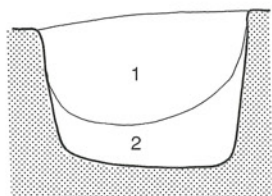
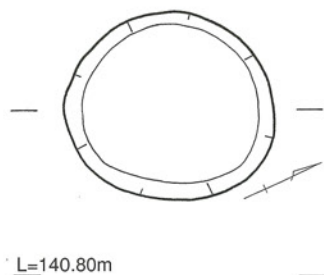


出土遺物 (第119図)

841~843はサヌカイト製の打製石鏃である。842・843は基部を欠失しているため形態は不明だが、841は凸基有茎式に分類される。

土坑 26 (SK1026) (第120図)

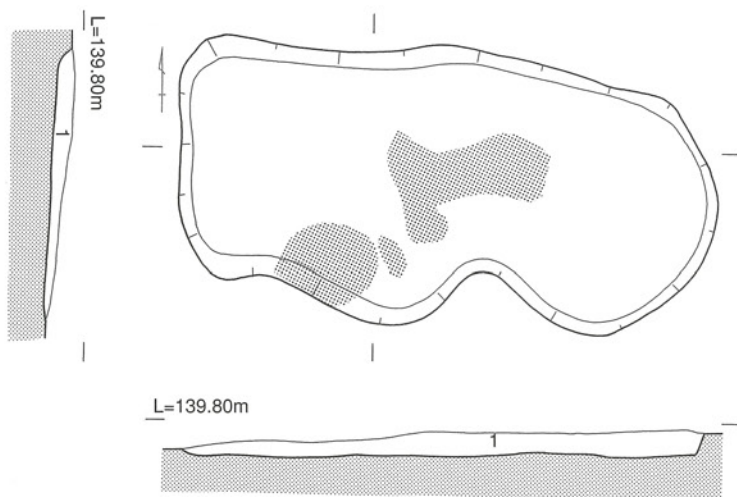
G-17・18グリッドにまたがって検出された長さ約2m、幅1.6m、深さ20cmの不整形な形態をした遺



1. 褐色 シルト質土(10YR4/4)
2. にぶい黄褐色 シルト質土(10YR5/4)



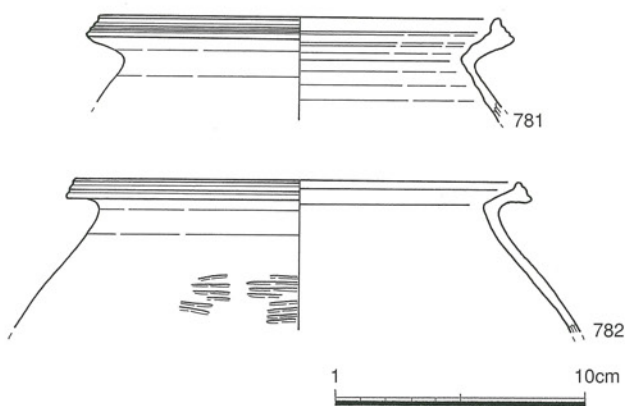
第125図 SK1029 実測図



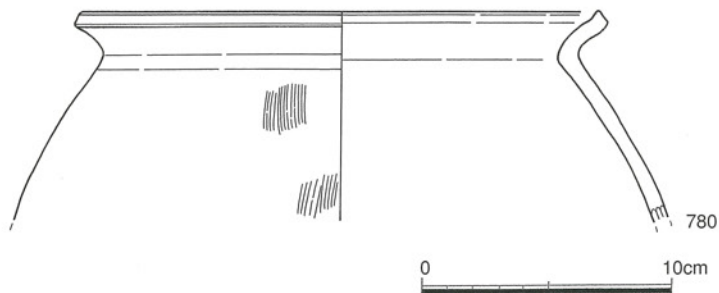
1. にぶい黄橙 シルト質土(10YR6/4)



第127図 SK1034 実測図



第128図 SK1034 出土遺物実測図



第126図 SK1029 出土遺物実測図

構である。

出土遺物 (第121図)

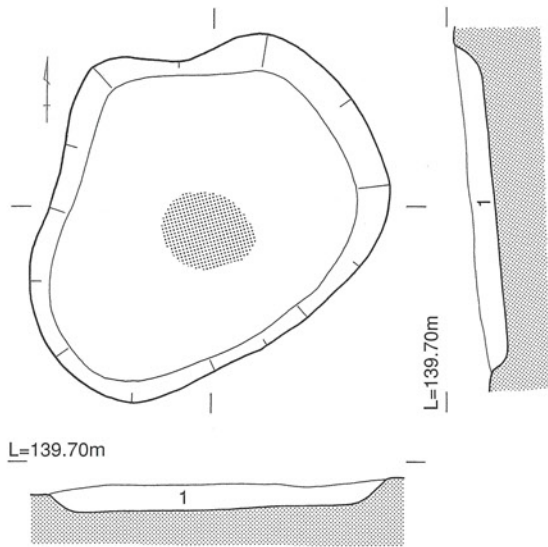
770は上方に大きく開く口縁部を持つ広口壺である。口縁部外面には粘土帯が貼り付けられて平坦に仕上げられ、凹線が1条巡らされている。また、口縁部内面には綾杉文が、頸部外面には平行線文がそれぞれ描かれている。口縁部に加えられた粘土帯の貼り付けから土佐からの搬入品と考えられる。771は筒状の頸部と外反する口縁部を持つ壺で、口縁部は尖らされている。772は直立する筒状の口縁部を持つ直口壺である。口縁部は円く仕上げられ、体部は球状に膨らんでいる。

土坑 27 (SK1027) (第122・123図)

H-17グリッドで検出された長さ1.65m、幅1.5m、深さ50cmの東西方向に長軸をもつ不整形の形態の土坑である。遺構検出の際、覆土上面には東西方向にのびる帯状の集石が検出されたが、これはこの遺構を切って作られた他の遺構に伴うものと考えられる。これとは別に遺構内の北側半分の床面上には砂岩の角礫が弧状に積み上げられた状態で検出されている。

出土遺物 (第124図)

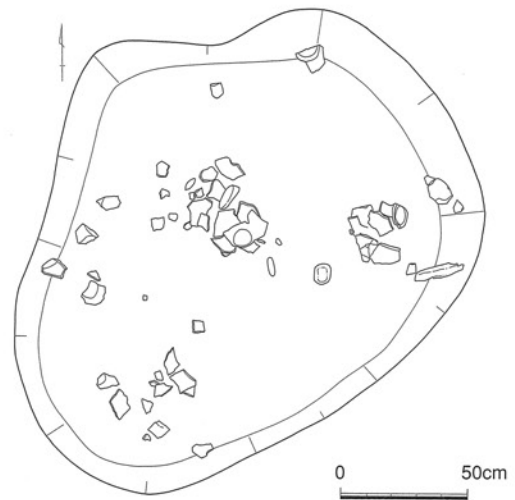
773は外反しながら上方に大きく開



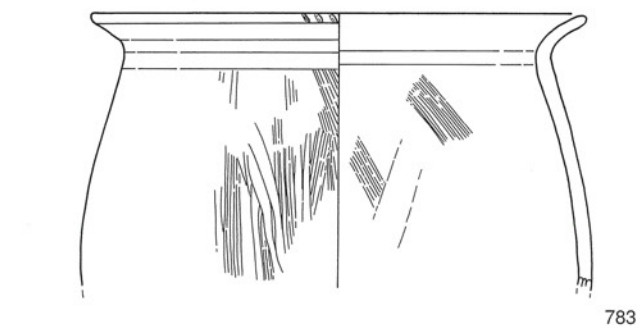
1. 褐色 シルト質土(10YR4/4)



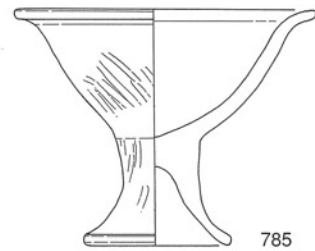
第129図 SK1035 実測図



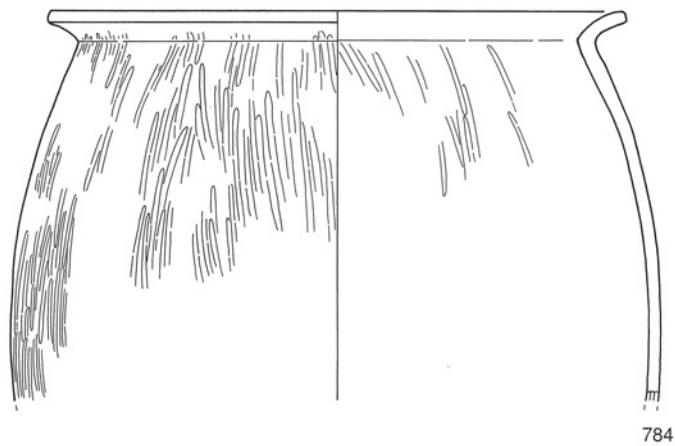
第130図 SK1035 遺物出土状況図



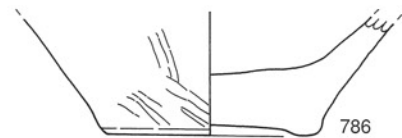
783



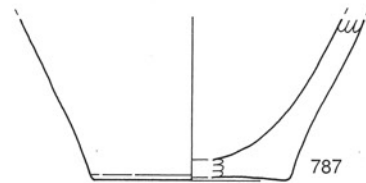
785



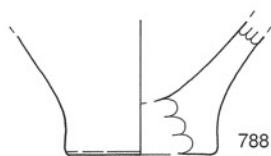
784



786



787



788



789



790

第131図 SK1035 出土遺物実測図



く口縁を持つ広口壺である。口縁端部は肥厚して平坦面が作り出されわずかにくぼんでいる。また、内面には粘土がボタン状に貼り付けられている。775・776は壺の体部上半部の破片である。775は水平方向に引かれた平行する半截竹管による区画の中に同じ竹管により斜格子目文が描かれている。また、区画の上下には櫛描の波状文やヘラ先による連続刺突が加えられている。776には櫛描線状文や波状文とともに773の壺で用いられているボタン状の貼り付けが施されている。774は「く」の字に屈曲する頸部から直線的にのびる口縁部を持つ甕である。わずかではあるが上下に拡張される口縁端部は平坦に仕上げられている。865はサヌカイトの剥片を使用した小型の削器である。剥片の下辺部に細かい調整が加えられている。867は扁平な楕円形の礫を使用した敲石である。敲打痕が上下端と縁辺部中央付近に残され、側面の一部は磨いた痕跡も残されている。

土坑 29 (SK1029) (第125図)

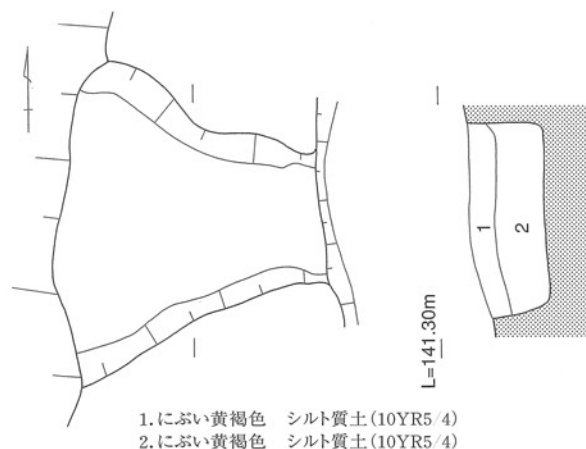
H-16グリッドで検出された直径約0.85m、深さ60cmの円形の土坑である。遺構内の堆積は2層に分けられ、上層には炭化物とともに土器片がふくまれている。

出土遺物 (第126図)

780はよく膨らんだ体部と外反する短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方にわずかに拡張され、拡張部は凹線状にくぼんでいる。

土坑 34 (SK1034) (第127図)

E-21グリッドで検出された長さ約2.9m、幅1.5mの不整形の大型土坑である。遺構の深さは深いところでも約10cm余りと浅いが、遺構の立地する場所が斜面上のために上部をかなり強く削平された可能性が高く、本来は長楕円形の形態であったとも考えられる。遺構内の堆積は1層で、床面上からはかなり大きなブロック状の焼土の広がり2カ所で認められ、他にも遺物の集中する地点が1カ所検出されている。



1. にぶい黄褐色 シルト質土(10YR5/4)
2. にぶい黄褐色 シルト質土(10YR5/4)

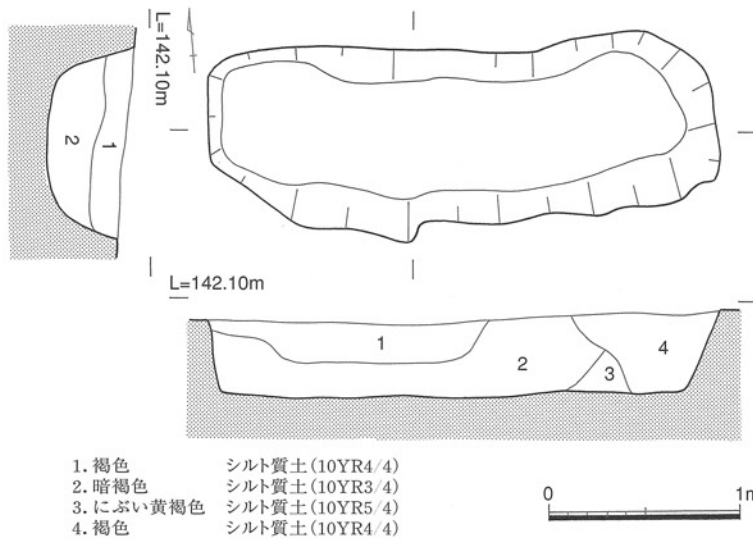
第132図 SK1040 実測図

出土遺物 (第128図)

781・782とも「く」の字に屈曲する頸部から外上方に直線的にのびる短い口縁部を持つ甕である。いずれも口縁端部は上方に拡張され、拡張部には複数の凹線が巡らされている。782の体部には平行タタキが施されている。

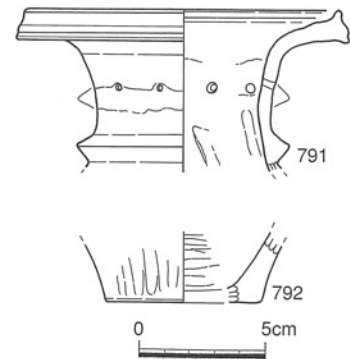
土坑 35 (SK1035) (第129・130図)

D・E-23グリッドで検出された長さ約2m前後の不整形楕円の土坑である。遺構の深さは最も深いところでも約15cmと浅く、中央部から直径約40cmの焼土の広がりが検出されている。また遺構の床面からは弥生土器や砂岩の礫が集

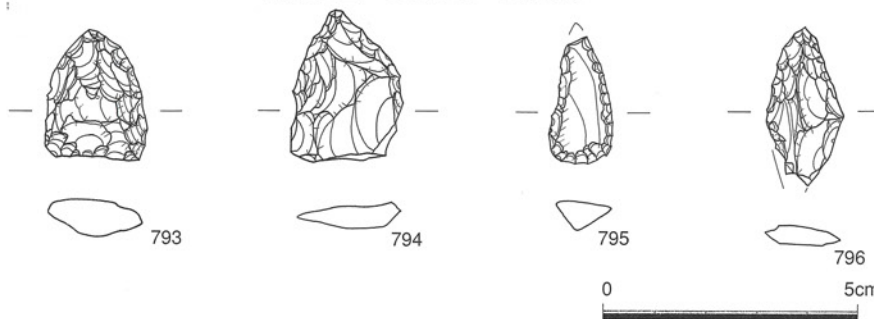


- 1. 褐色 シルト質土(10YR4/4)
- 2. 暗褐色 シルト質土(10YR3/4)
- 3. にぶい黄褐色 シルト質土(10YR5/4)
- 4. 褐色 シルト質土(10YR4/4)

第133図 SK1047 実測図



第134図 SK1047 出土遺物実測図(1)



第135図 SK1047 出土遺物実測図(2)

中して出土している。

出土遺物 (第131図)

783は外方へ膨らみの小さい長胴形の体部と外反する短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は円く仕上げられるだけで拡

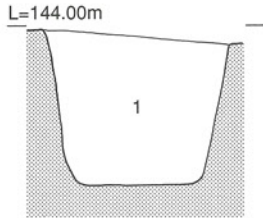
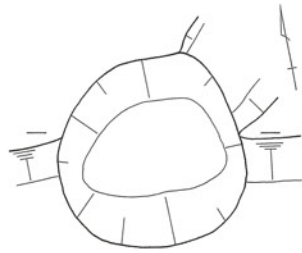
張は一切行われず、連続する刻目が施されている。784も783と同じような特徴を持つ形態の甕であるが、体部の膨らみがやや大きいことや、頸部の外反の度合いが強く屈曲部を持っていることなどが若干異なっている。785は緩やかに内湾しながら上方に大きく開く体部と外反する口縁部を持つ高杯で、脚部は短く脚端部は平坦に仕上げられている。846はサヌカイト製の打製石庖丁である。片方の端部を欠くが残されたもう一方にはくり込みが作り出されている。刃部は使用のため摩滅している。868は長楕円形の礫を使用した小型の磨製石斧である。礫の一端が両面から磨かれ刃がつけられている。869はやや扁平な円礫を使用した敲石である。敲打痕は礫の下端部に集中して残されている。

土坑 40 (SK1040) (第142図)

遺構の東西を溝によって切られているため正確な形や大きさは不明であるが、I-19グリッドで検出された長さ1.3m以上、幅1.7m、深さ40cmの不整形な形態の遺構である。出土遺物は少なく、サヌカイト製の石器が若干出土しているだけである。

出土遺物 (第164図)

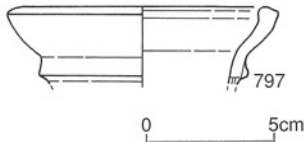
848はサヌカイト製の平基無茎式の打製石鏃である。849は長さ約2cmのサヌカイトの剥片に細かい調整を加えて刃部を作り出している。850は縁辺部に両極打法による調整を加えた剥片を折断し不整形の形態に仕上げたものである。851は横長剥片を横に折断し、折断面を打面にして両極打法による調整を加えたものである。



1. 褐色 シルト質土(10YR4/4)



第136図 SK1076 実測図



第137図 SK1076 出土遺物実測図

土坑 47 (SK1047) (第133図)

J-23グリッドで検出された長さ約2.7m、幅1m、深さ40cmの長楕円形の大型土坑である。遺構内のシルト質土の堆積は大きく2層に分けられ、小礫が多く混入するが炭化物はわずかししか検出されなかった。

出土遺物 (第134・135図)

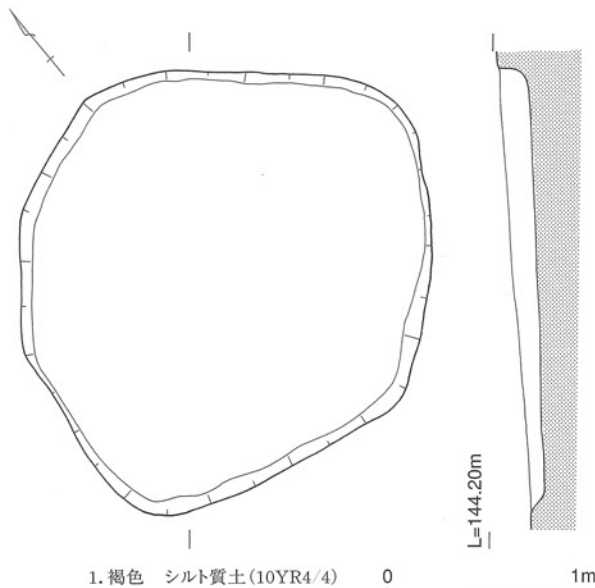
791は筒状の頸部から外上方に向かって大きく開く口縁部を持つ壺である。水平方向にのばされた口縁は端部が上方に拡張され、複数の凹線が巡らされている。頸部には水平方向にタガ状の貼付け突帯が2本廻され一部には穿孔が施されている。793~796サヌカイト製の打製石鏃である。

土坑 76 (SK1076) (第136図)

M-26グリッドで検出された直径約1.0m、深さ90cmの円形の土坑である。遺構内の堆積は粒子の細かい褐色のシルト質土で、上部には炭化物や土器片を少量混入している。

出土遺物 (第137・166図)

797は内湾しながら上方に向かって開く口縁部を持つ壺である。口縁端部は内方に拡張され、平坦に仕上げられ、口縁部と頸部との境には断面三角形の粘土帯の貼付けが1本廻されている。870はやや扁平な楕円形の石英の礫を使用した敲石である。敲打痕は礫の側面にも若干残されているが両端に集中している。



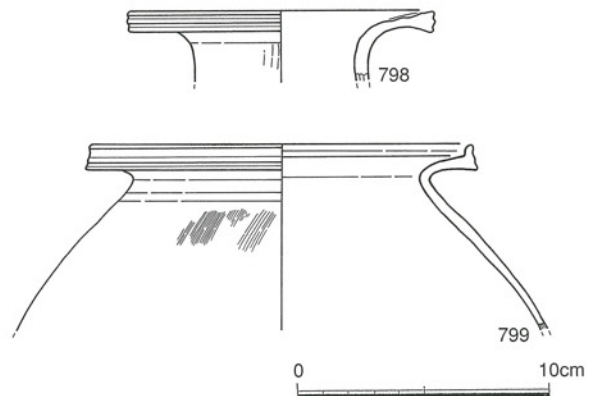
1. 褐色 シルト質土(10YR4/4)



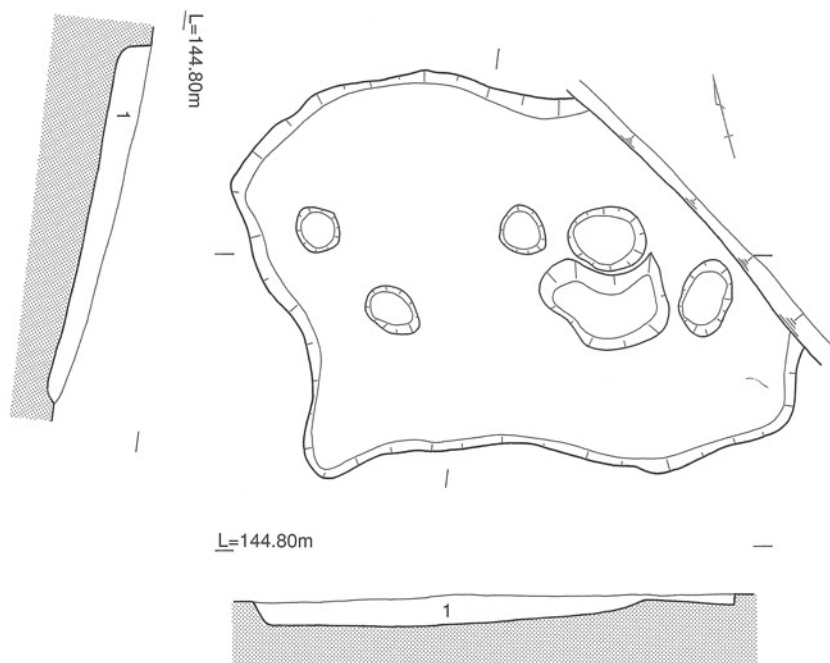
第138図 SK1077 実測図

土坑 77 (SK1077) (第138図)

M・N-25・26グリッドにまたがって検出された直径約2.3mの不整円形の土坑である。遺構

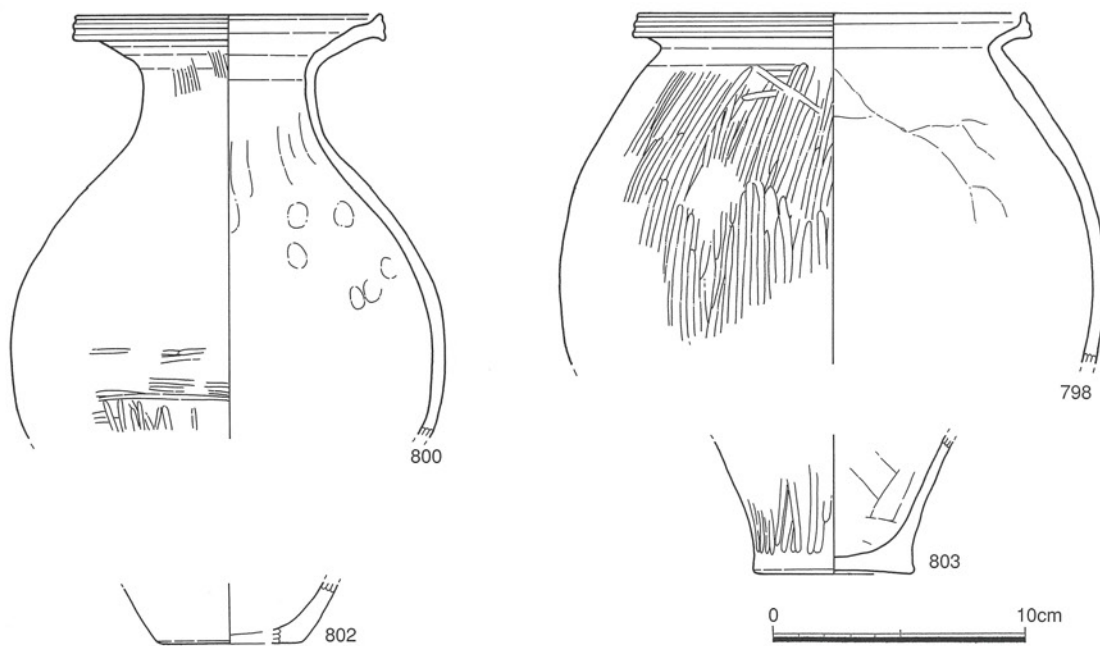


第139図 SK1077 出土遺物実測図



1. 褐色 シルト質土 (10YR4/4)

第140図 SK1079 実測図

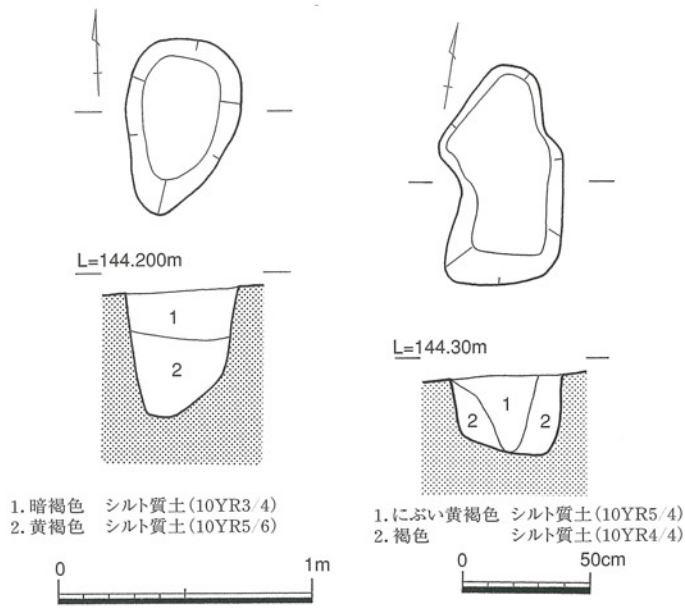


第141図 SK1079 出土遺物実測図

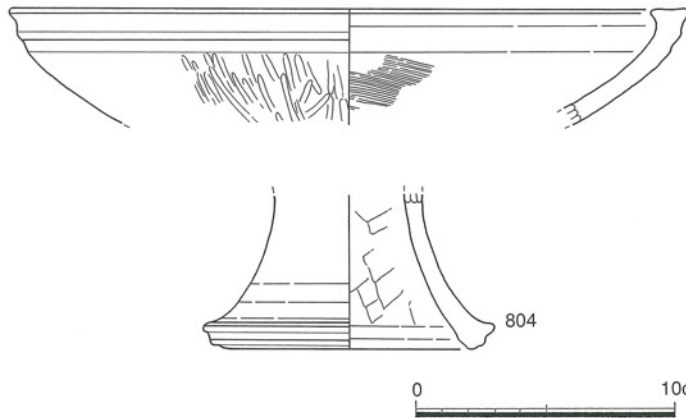
の立ち上がりは明瞭だが、深さは最も深いところでも約15cmと浅い。覆土中に焼土や炭化物の混入が少なく、遺物の集中する場所も検出されなかった。

出土遺物 (第139図)

798は筒状の頸部から外上方に向かって大きく開く口縁部を持つ壺である。肥厚する口縁端部には複数の凹線が巡らされている。799は肩部のよく張った体部と「く」の字に屈曲する頸部から外方に向かって水平方向にのびた口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され、拡張部には複数の凹線が巡



第142図 SK1080 実測図 第143図 SK1082 実測図



第144図 SK1082 出土遺物実測図

らされている。

土坑 79 (SK1079) (第140図)

M-25グリッドで検出された長軸方向の長さ約2.5m、幅2mの不整形の大型の土坑である。遺構の一部に攪乱をうけ、深さは最も深いところでも15cmと浅く、炭化物の混入はごくわずかである。床面からはピットが6基検出されているが何れも10cm前後と浅く、この遺構と関係するものではないと考えられる。北よりの床面上で砂岩礫の集積が検出されている。

出土遺物 (第141・165図)

800は筒状の頸部から外上方に向かって大きく開く口縁部を持つ壺である。口縁部内外面は丁寧な横ナデ調整が施され、上下に拡張され平坦面が作り出された口縁端部には凹線が2条巡らされている。801は外方に向かって張り出した球形に近い体部と「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され凹線が2条巡らされている。853・854は結晶片岩製の打製石庖丁である。いずれも薄い剥片を素材に

使用しているためか一方の端を欠くが、残された端部には浅いくり込みが作り出されている。

土坑 80 (SK1080) (第142図)

N-24グリッドで検出された長さ0.7m、幅0.4m、深さ50cmの不整楕円の形態の遺構である。遺構内に堆積したシルト質土は2層に分けられ、上層には炭化物と土器片が混入している。

出土遺物 (第166図)

871はやや扁平な楕円形の石英の礫を使用した敲石である。敲打痕は礫の周縁部全面に残されているが、かなり強い力が加えられる機会があったためか部分的に大きな剥離痕が残されている。遺構内からはこの他に大型の結晶片岩の剥片も出土している。

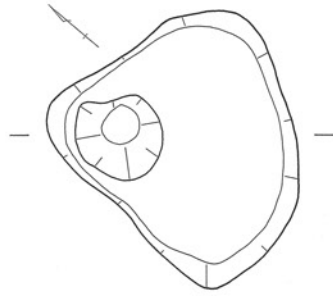
土坑 82 (SK1082) (第143図)

N-26グリッドで検出された直径約0.9m、幅0.5m、深さ30cmの不整形な土坑である。2層に分かれ

る遺構内の堆積はそれぞれ少量の炭化物を含み、上層にはブロック状の暗褐色土が混入している。

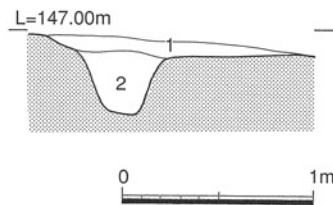
出土遺物 (第144図)

遺構内からは高杯の杯部と脚部 (804) が出土している。接合はしなかったが胎土、色調、焼成などから同一個体と考えられるものである。緩やかに内湾する体部は口縁部付近で角度を変え上方に内湾する。口縁端部は内外方に拡張され頂部が浅くくぼんでいる。また、口縁部には端部直下に施される横ナデ調整を挟んで凹線が巡らされている。脚部は緩やかに外反しながら外下方に向かってのび、脚端部は外方に拡張されて凹線が巡らされている。



土坑 112 (SK1112) (第145・146図)

最も長いところで約1.5mをはかる不整形の土坑である。遺構の深さは約10cmと浅く北西よりの床面からピットが1基検出されている。遺物はこのピットを取り巻くような状態で出土している。

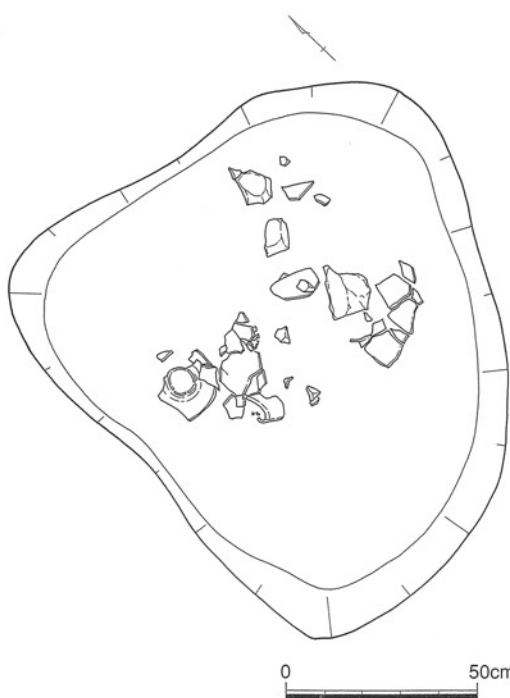


- 1. にぶい黄褐色 シルト質土 (10YR5/4)
- 2. 黄褐色 シルト質土 (10YR5/6)

第145図 SK1112 実測図

出土遺物 (第147図)

805はよく締まった頸部と喇叭状に大きく開く口縁部を持つ壺である。口縁端部は垂下している。全体に加飾の著しい個体で垂下した口縁端部と内面には格子目文や櫛による刺突文が加えられ、頸部には貼付け突帯が口縁と平行するように多段に廻されている。807は805の体部と考えられる土器であるが、体部にも同じように櫛描の線状文や波状文、格子目文などが施されている。806もよく締まった頸部と外上

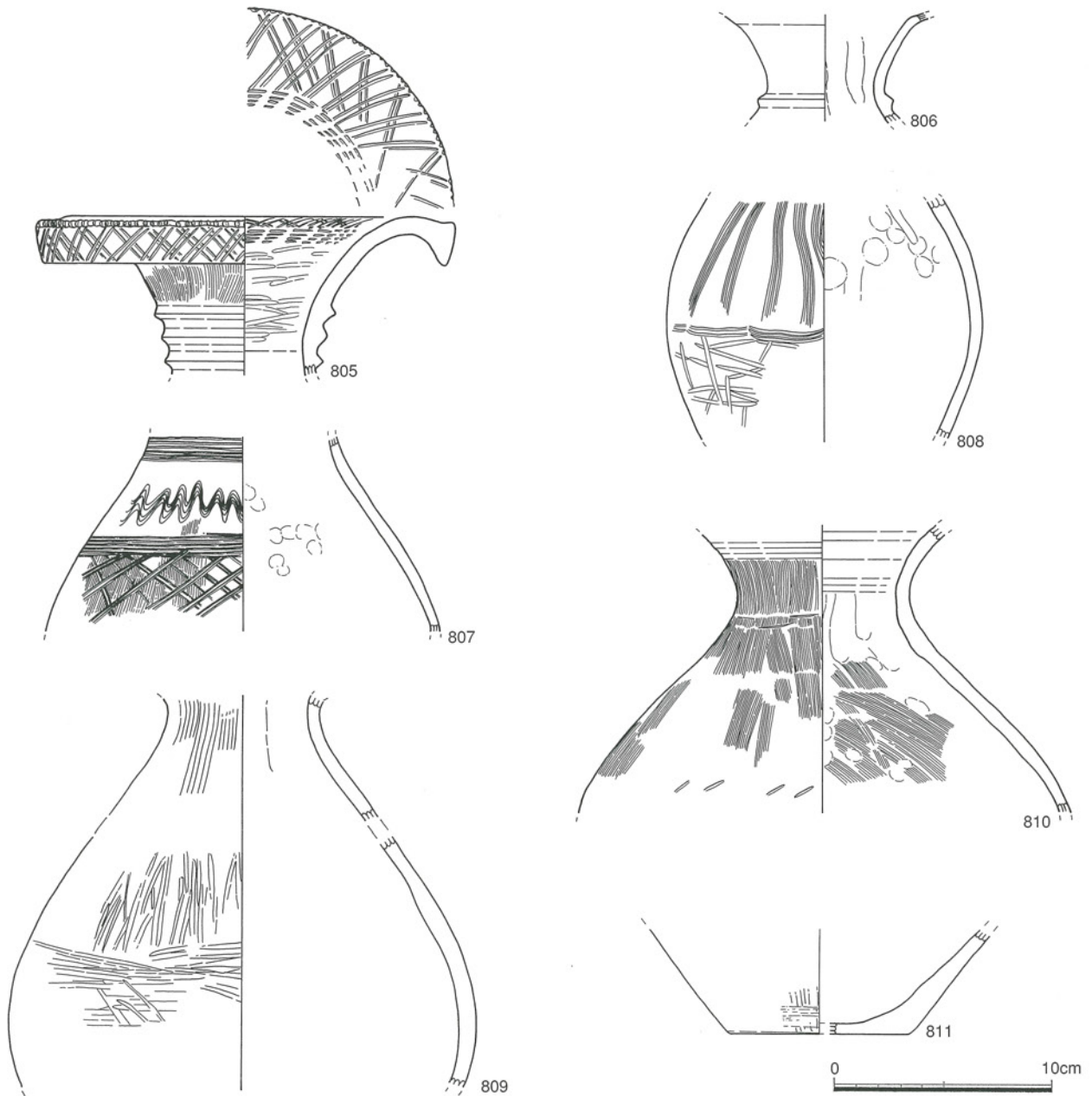


第146図 SK1112 遺物出土状況図

方に向かって大きく開く口縁部を持つ壺である。口縁端部付近を欠くため口縁部への加飾の有無は不明であるが、頸部には805同様、断面三角形の貼付け突帯が1本廻されている。808は806の体部と考えられるものであるが、外面全体は丁寧に磨かれ上半部には櫛により緩やかな曲線の波状文が縦方向に連続して描かれている。809・810の壺も同じようによく締まった頸部と外上方に大きく開く口縁部を持つ壺である。外面は810の体部にヘラ先による連続刺突が加えられる以外はヘラ磨きと刷毛目調整が施されているだけで807や808の個体とは大きく異なっている。

土坑 114 (SK1114) (第148・149図)

遺構の一部を竪穴住居址SB1016と切り合っている土坑である。SB1016と重なる部分には床面が張られていた痕跡などは認められなかったが、土層の観察か

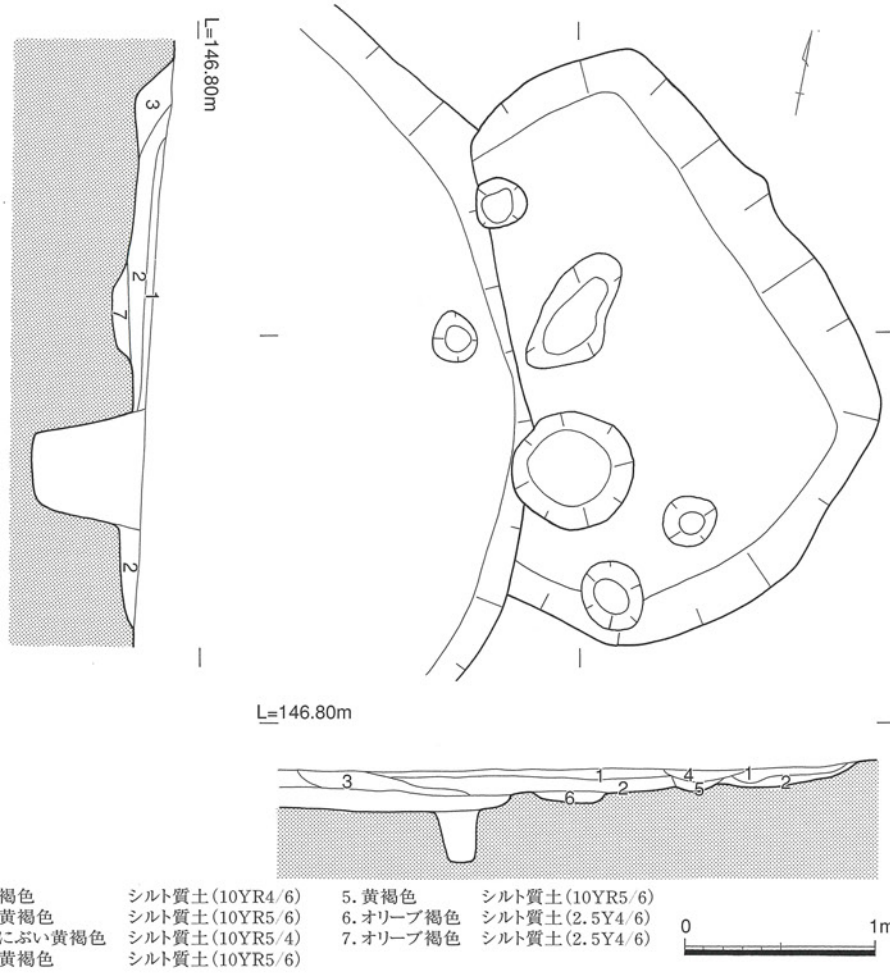


第147図 SK1112 出土遺物実測図

ら土坑が住居址より新しい遺構であることが明らかになった。竪穴住居と重複する部分は遺構の約3分の1ないしは4分の1と推測され、その平面形は不整形円形に近いと考えられる。床面にはピットが5基検出され、そのうちの直径約0.5m、深さ50cmの1基のピットから翡翠製の勾玉834が1個出土しているが、このピットはこの土坑に伴うものではなく後から掘り込まれたものである。

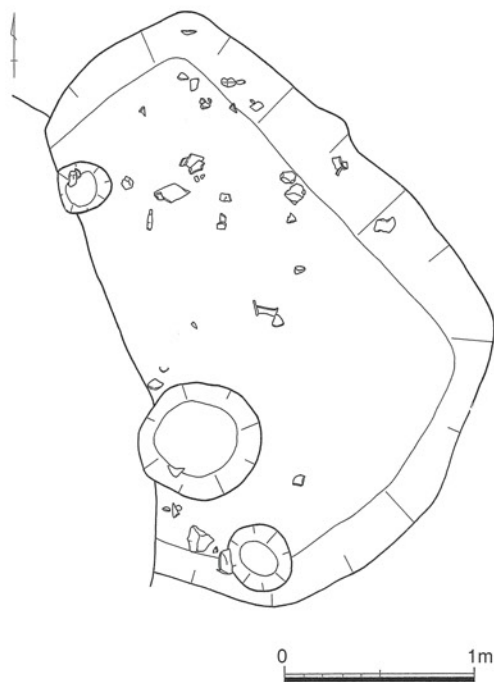
出土遺物（第150～152図）

812・813は外反する口縁部と上下に拡張された口縁部を持つ壺である。拡張部には複数の凹線が巡らされている。814は外反する短い口縁部と肩部が「ハ」の字に開く甕である。口縁端部は上方に拡張され狭い平坦面が作り出されている。815は膨らみの小さい体部と2段に屈曲する頸部から水平方向にのびる口縁を持つ甕である。口縁端部は平坦に仕上げられている。816は「く」の字に屈曲する頸部と



第148図 SK1114 実測図

直線的な短い口縁部を持つ甕である。体部は球形で、口縁端部は肥厚し平坦に仕上げられている。817~822は口縁部に凹線文が巡らされる甕である。頸部に明瞭な屈曲部を持たず外反させただけで、口縁端部が拡張されない817以外は頸部が「く」の字に著しく屈曲し、口縁端部は上方に拡張されて複数の凹線が巡らされている。体部は「ハ」の字に開くものと球形または倒卵形の形態のものがみられる。823は高杯の杯部と考えられるもので、内湾する体部と直立する口縁部からなり、体部と頸部の境の屈曲は不明瞭である。口縁端部は外方にのみ拡張され頂部はわずかにくぼんでいる。828~830はサヌカイト

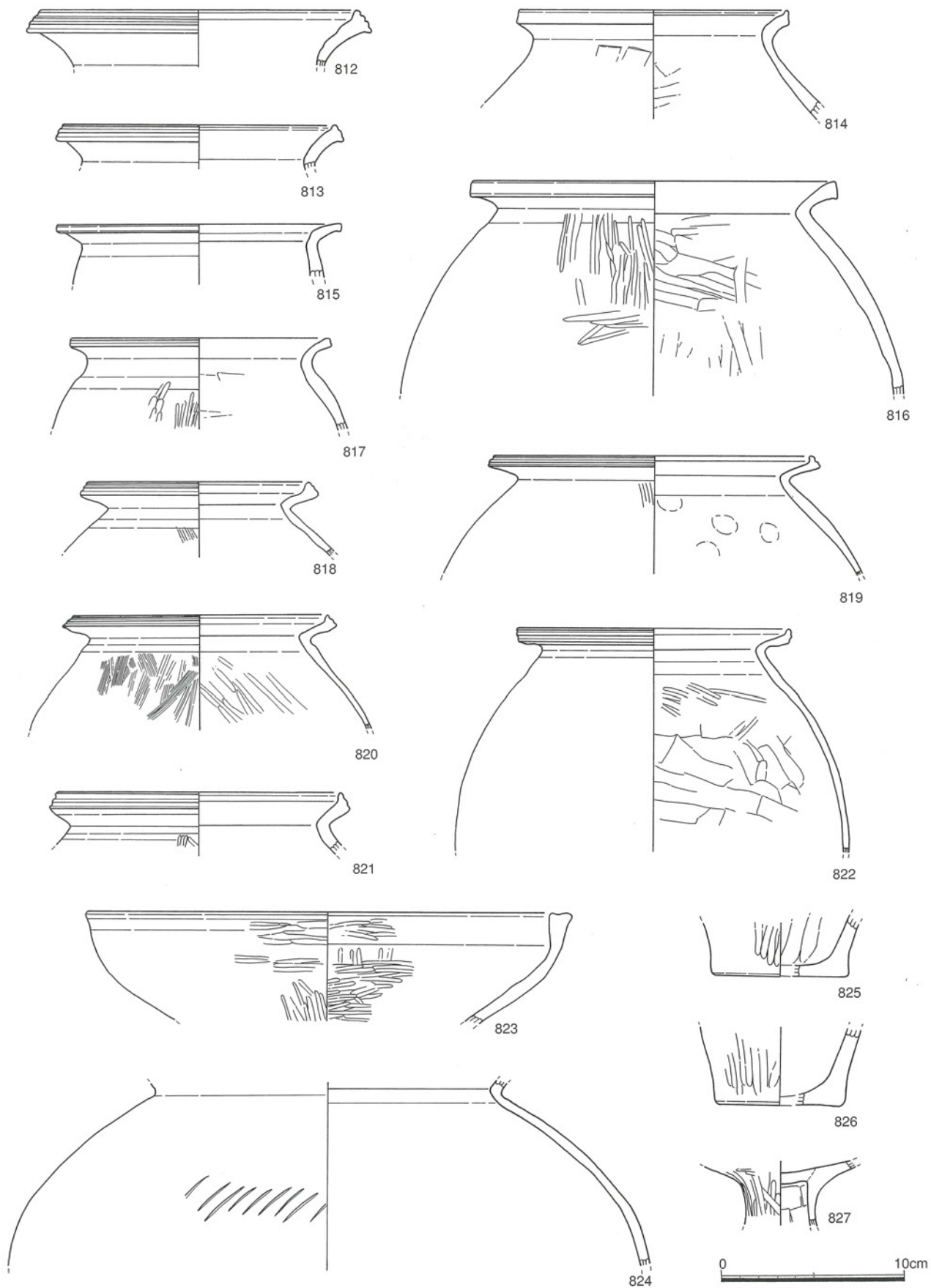


第149図 SK1114 遺物出土状況図

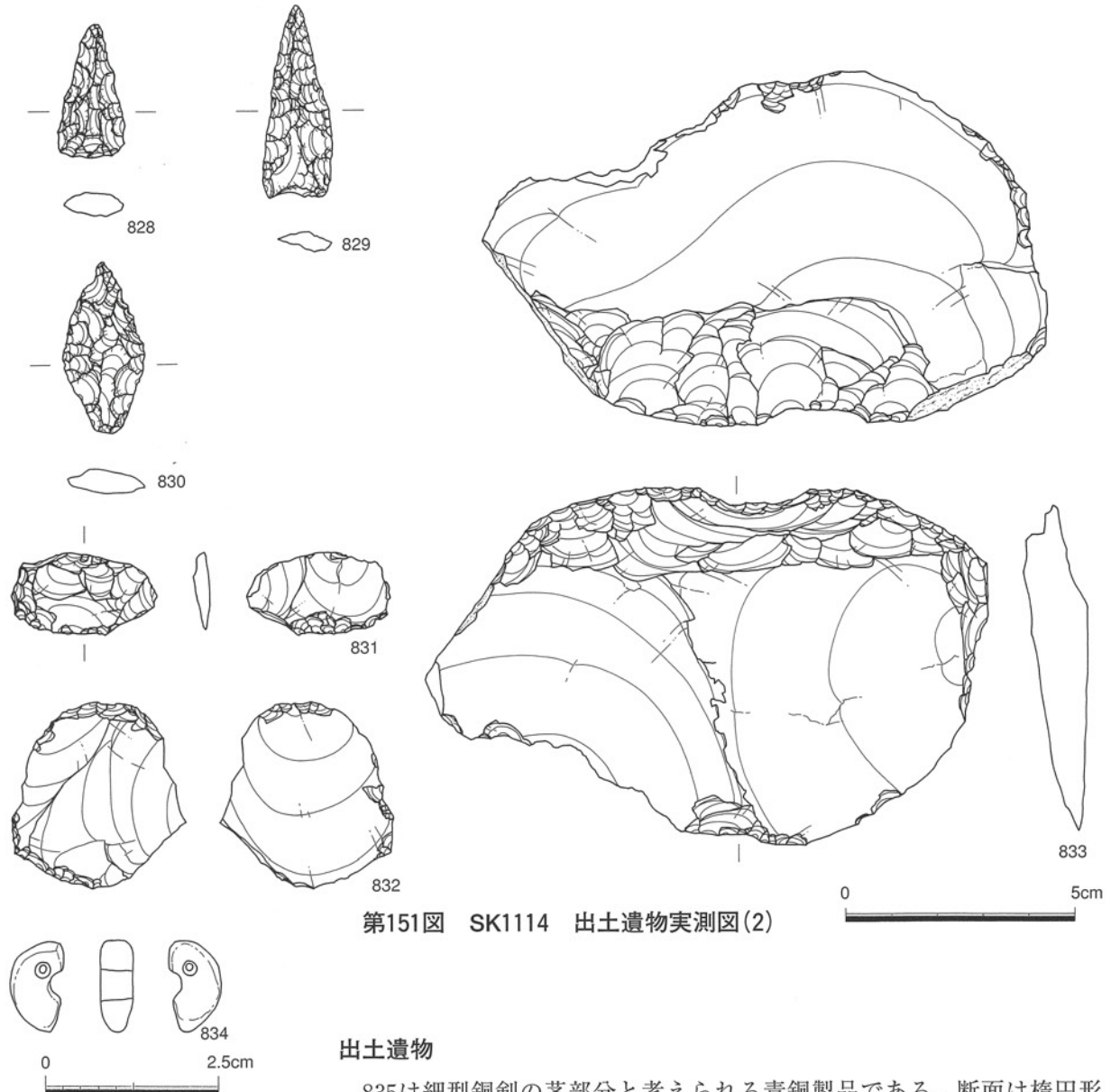
製の打製石鏃である。それぞれ順に平基無茎式、凹基無茎式、凸基有茎式に分類される。831・832はいずれも縁辺部に簡単な調整が加えられたサヌカイトの剥片刃部を作り出した削器である。831は複数の折断面を持つ剥片で、両極打法による調整がおこなわれている。833はサヌカイトの大型の盤状剥片である。主剥離面側に加えられた剥離作業によって打点が除去されている。

土坑 116 (SK1116) (第153図)

S-28グリッドで検出された長さ約3mの遺構である。深さ10cmと浅く、遺構の南側を竪穴住居SB1020に切られているため、遺構の正確な形は不明だが、残された遺構から本来は隅円方形の形態であった可能性が高い。



第150图 SK1114 出土遗物实测图(1)



第151図 SK1114 出土遺物実測図(2)

第152図 SK1114
出土遺物実測図(3)

出土遺物

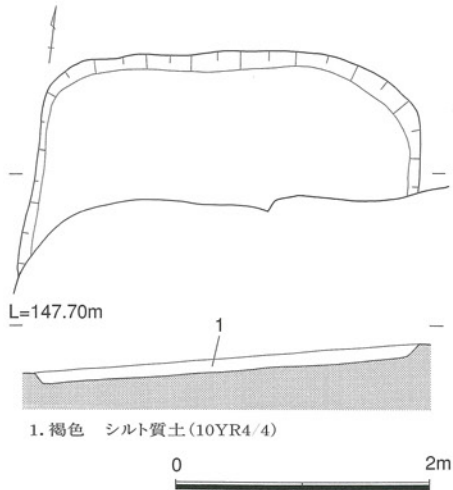
835は細型銅剣の茎部分と考えられる青銅製品である。断面は楕円形で端部は円く仕上げられている。破損部分はそのままで加工の痕跡はなんら認められない。856はサヌカイトの剥片を不整形に折断し、尖った端部に主剥離面側から調整を加えて刃部を作り出した削器と考えられる石器である。

土坑 117 (SK1117)

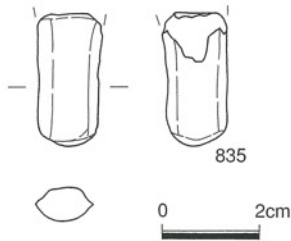
遺構の南側半分を削平によって失われているため本来の遺構の規模や形態を明らかにすることは出来ないが、現存する部分は東西方向の長さが約0.8m、幅0.6m、深さ30cmの弧状の部分だけである。

出土遺物

836は「く」の字に屈曲する頸部と緩やかに内湾する受け口状の短い口縁部を持った甕である。口縁端部は上方に拡張され凹線が2条巡らされている。837は「ハ」の字状に外下方に開く脚端部をもつ高杯の脚部である。脚端部はわずかに外方に拡張され、裾部には横ナデ調整が加えられている。857は結



第153図 SK1116 実測図



第154図 SK1116 出土遺物実測図

晶片岩製の打製石庖丁である。

土坑 118 (SK1118)

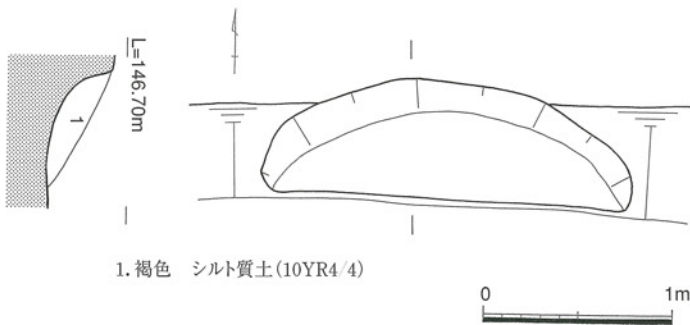
SK1117の北東で検出された長さ約1.1m、幅径0.9m、深さ15cmの楕円形のレンズ状の堀り込みを持つ土坑である。周辺の遺構の多くが上部を削平された状態で検出されていることからこの土坑も本来はもっと深い堀り込みを持つ遺構であったと考えられる。遺構内には砂岩の小礫を多く含むシルト質の土壤が堆積していたが焼土粒や炭化物などは含まれていなかった。

出土遺物

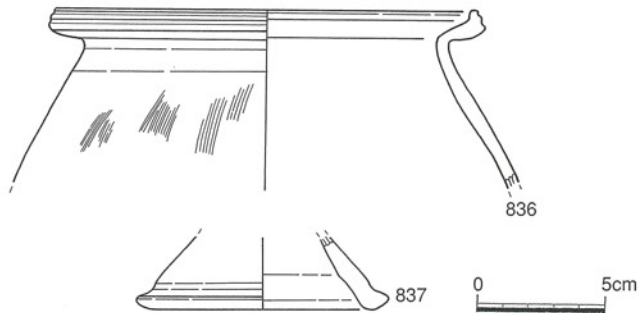
835は両面が平らで縁が円く仕上げられた厚い円盤状の土製品である。表面には幾何学模様が描かれたような痕跡が認められる。

土坑 122 (SK1122)

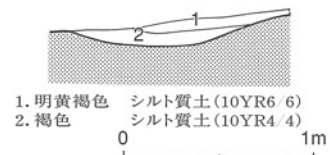
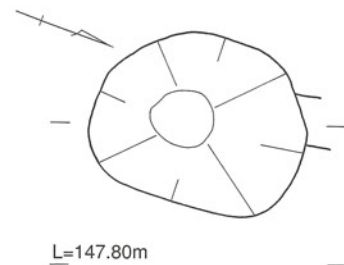
遺構の一部が調査区外にのびているため、正確な形や大きさは不明だが、長さ約1.7m、深さ20cmの不整



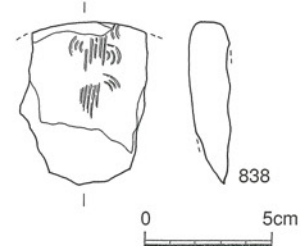
第155図 SK1117 実測図



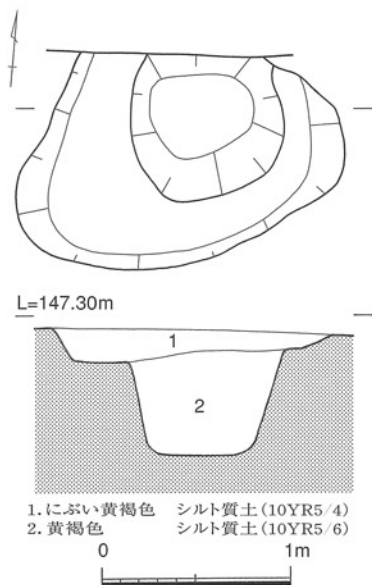
第156図 SK1117 出土遺物実測図



第157図 SK1118 実測図



第158図 SK1118 出土遺物実測図



第159図 SK1122 実測図

形な浅い土坑で、床の一部はさらに直径0.8m、深さ50cmの円形に掘り込まれている。

出土遺物

872は片岩製の磨製石斧である。斧身は扁平で刃部は両面から磨かれている。刃部付近は非常に丁寧な研磨が加えられているが、上半部には整形の際の剥離痕や敲打痕が多く残されている。

土坑 124 (SK1124)

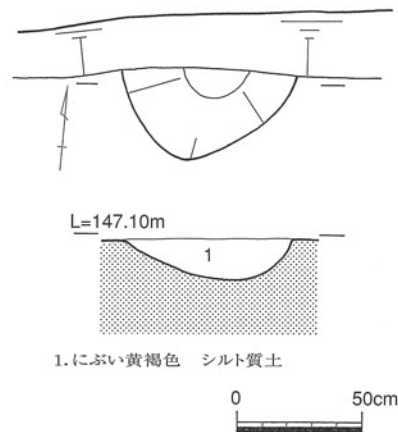
R-35グリッドで検出された幅1.1m、深さ40cmの土坑である。遺構の一部が北側の調査区域にのびているため遺構の正確な大きさは不明であるが、残された部分から推定すると長さが1.5m前後の楕円形のプランを持った土坑と考えられる。

出土遺物

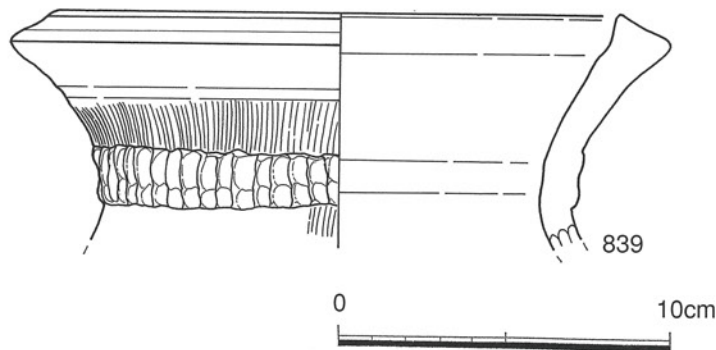
839は緩やかに外反する口縁部を持つ壺である。口縁端部は内方に拡張され、平坦に仕上げられた頂部はわずかにくぼんでいる。頸部には指オサエが加えられた幅広の突帯がタガ状に2本廻されている。873は砂岩の円礫を使用した敲石であるが、ほぼ中央で半分に割れている。敲打痕は表裏両面と側面部全面に残されている。また、両面には磨石として使用されたためか磨かれた部分もある。

土坑 126 (SK1126)

Q-37グリッドで検出された長さ1.3m、幅1m、深さ50cmの不整形の遺構である。遺構の西側が部分



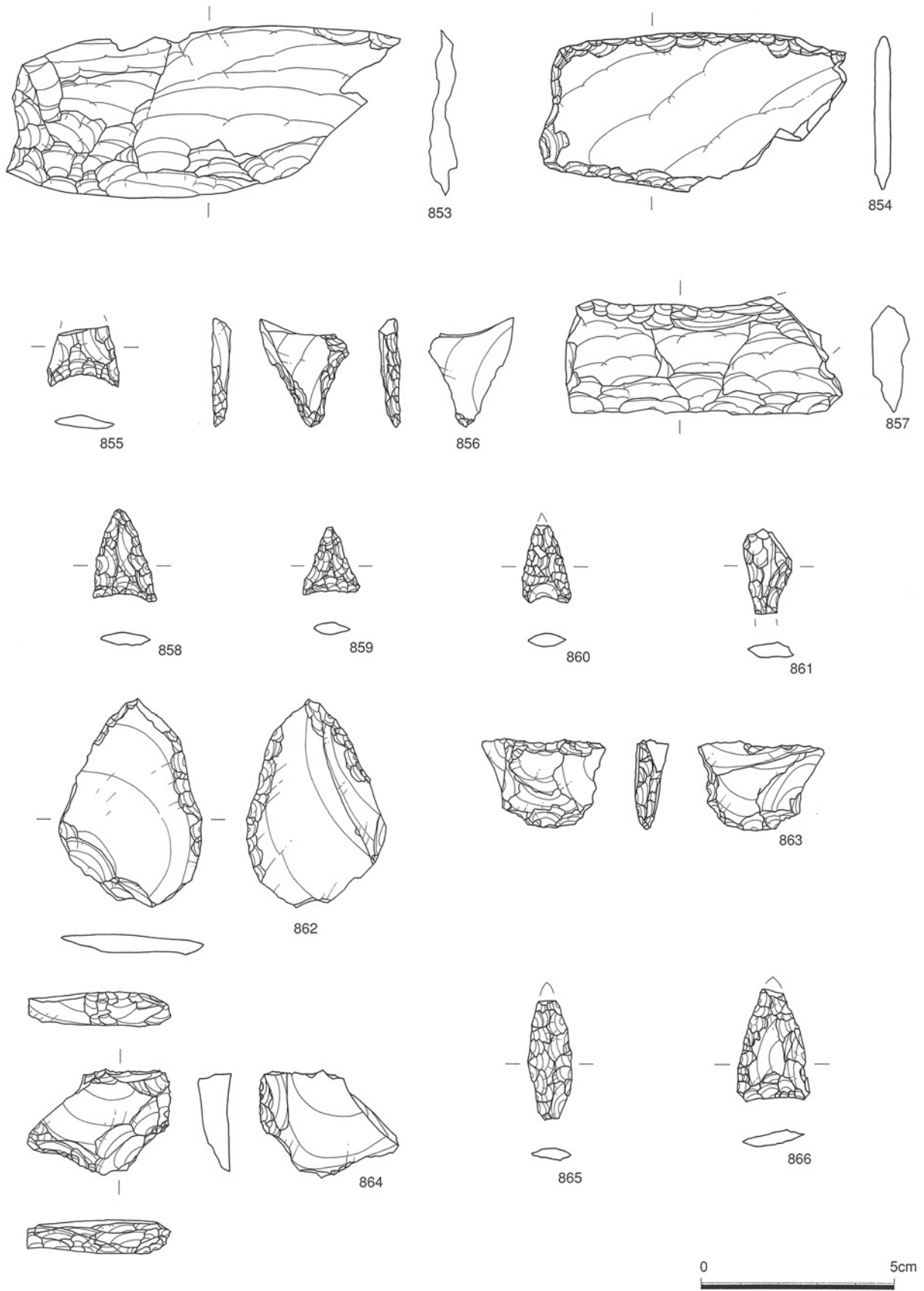
第160図 SK1124 実測図



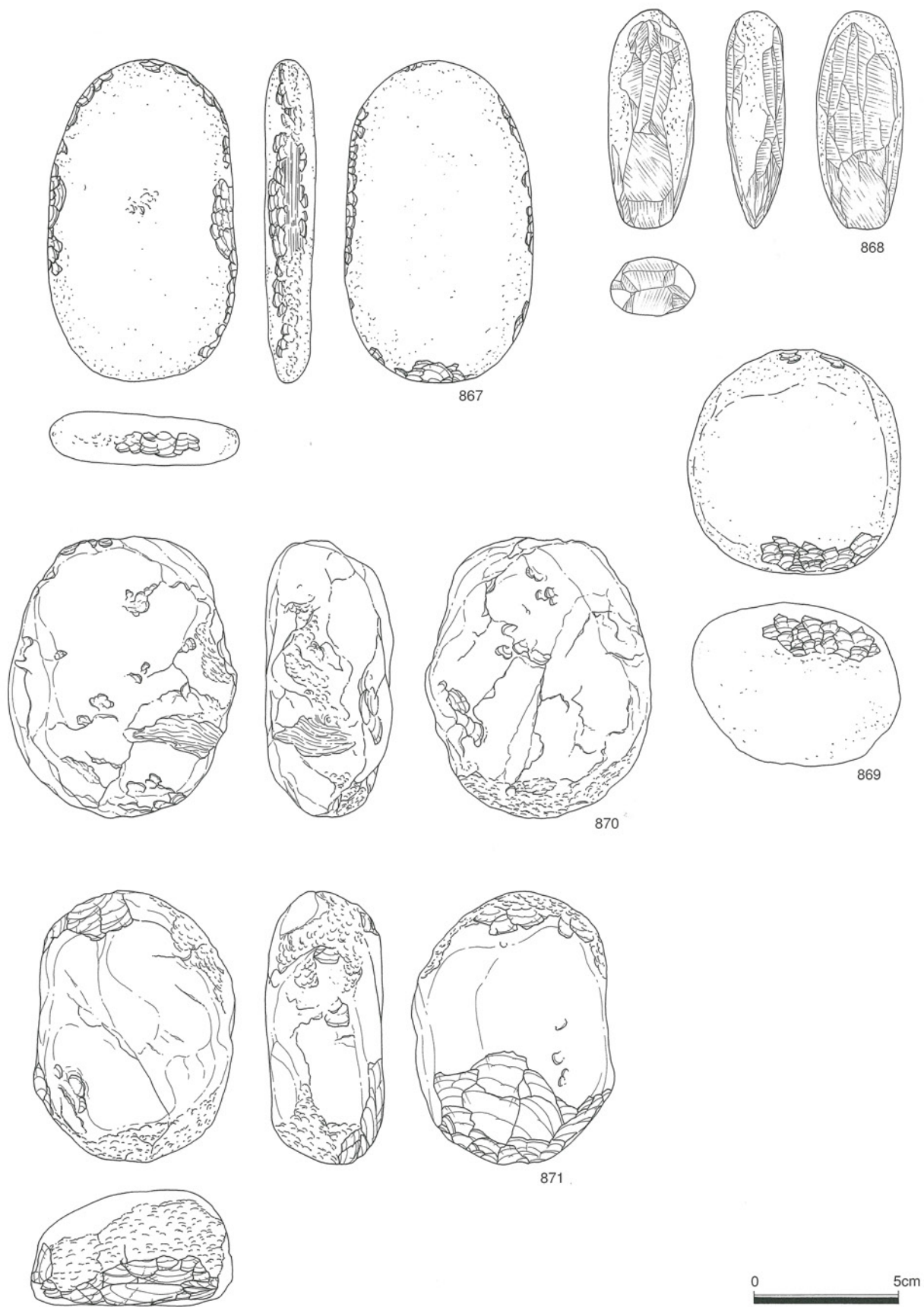
第161図 SK1124 出土遺物実測図



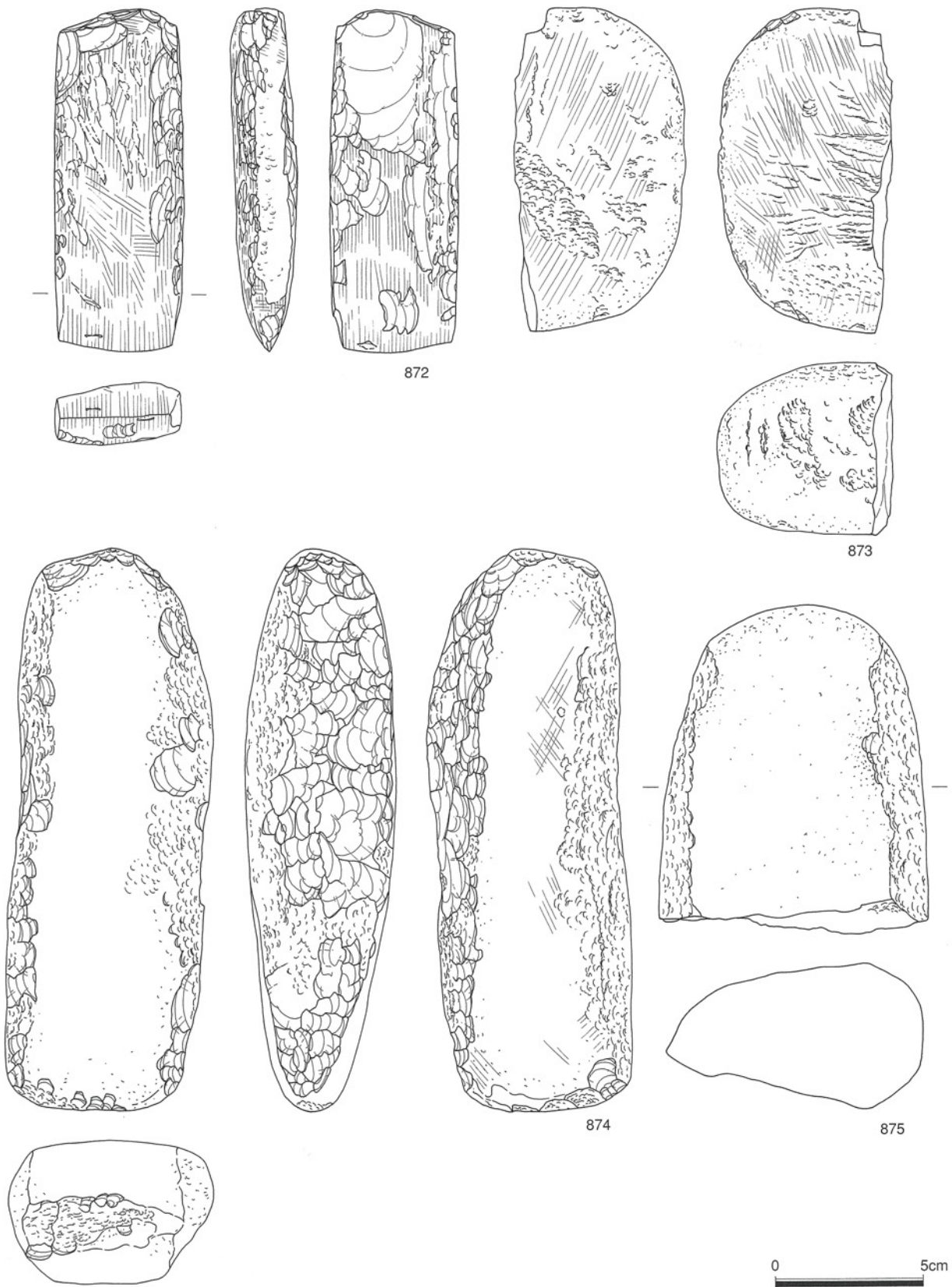
第164图 SK出土遺物実測図(1)



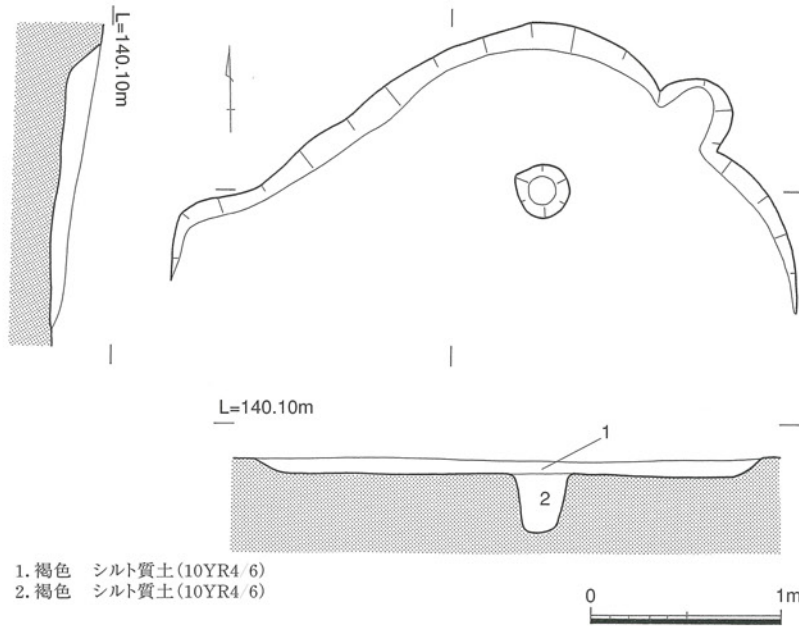
第165图 SK出土遺物実測図(2)



第166图 SK出土遺物実測図(3)



第167图 SK出土遺物実測図(4)



第168図 SX1001 実測図



第169図 SX1001 遺物出土状況図

的に外側に張り出し、底からは扁平な片岩の円礫が出土している。

出土遺物

863は側縁に截断と折断が加えられた剥片の上下に両極打法による加撃を加えて刃部を作り出した削器と考えられる石器である。864も同じく折断により作り出された不整形な剥片の折断面に調整を加え刃部を作り出した削器と考えられる石器である。刃部の角度は急

で部分的にノッチ状にくぼんでいる。

土坑 133 (SK1133)

I-32グリッドで検出された長さ3.6m、幅1.2m、深さ20cmの不整楕円の形態の大型土坑である。遺構の大きさに比べて掘り込みが浅いが、遺構のすぐ南側に農地造成の際の削平部分がのびていることから、遺構の上部が削平されている可能性も考えられる。また、周囲10m以内に

は目立った遺構の分布は認められず、殆ど単独に近い状態で存在している。遺構内には大型の砂岩礫石器以外目立った遺物は出土していない。

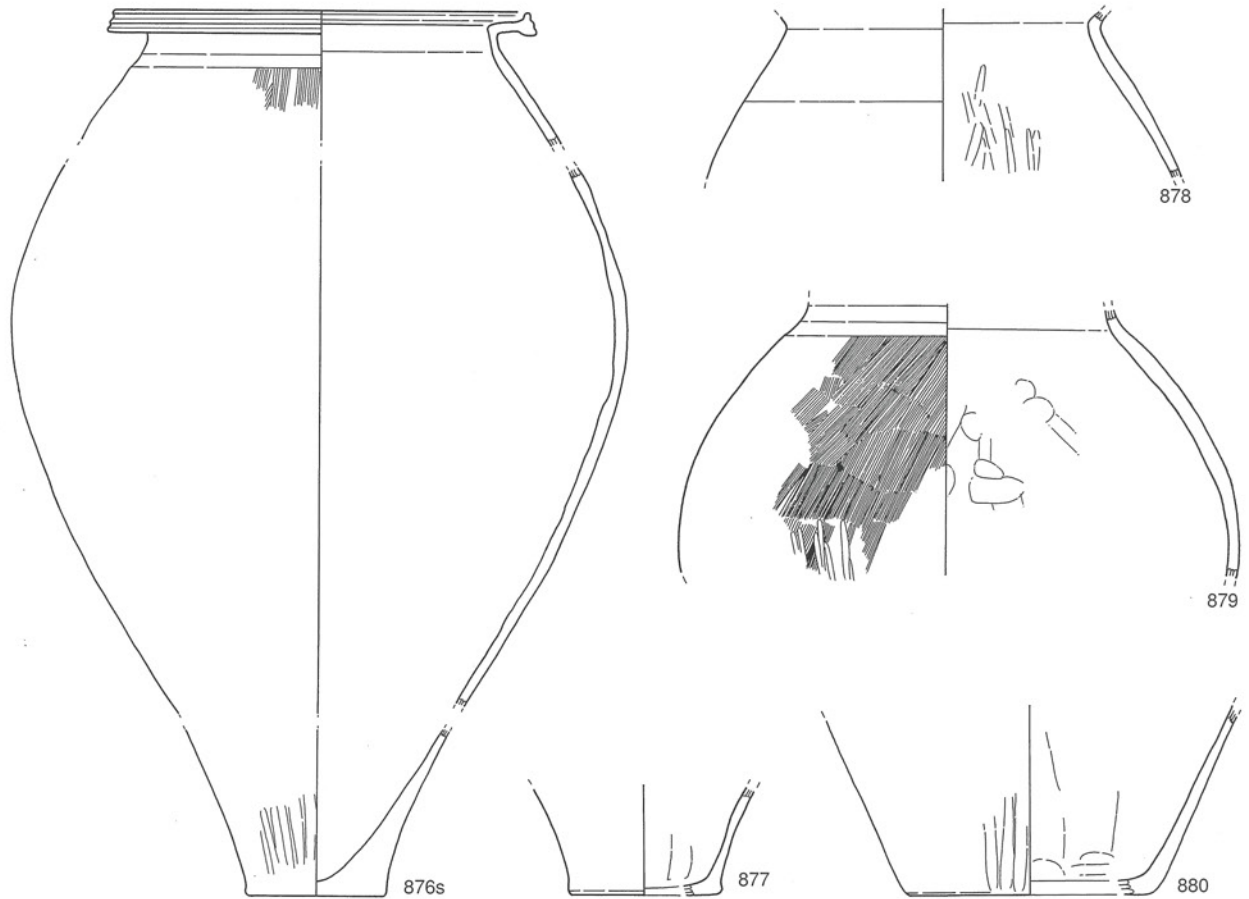
出土遺物 (第167図)

874は磨製石斧の未製品と考えられる石器である。楕円形の礫の側縁部に敲打を加え石斧の形を整えている。875は破損した砂岩の大型蛤刃石斧を敲石に転用したものである。主として側縁部を使用したためか敲打痕が集中している。また一方の側縁は剥片が大きくはぎ取られた後に敲打を加えている。

不明遺構

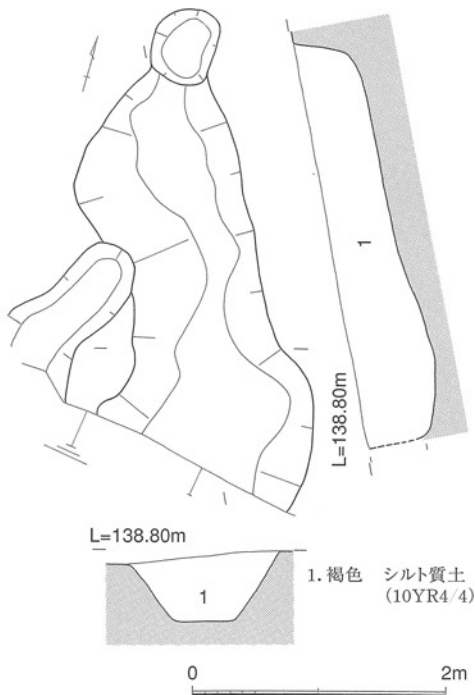
不明遺構 1 (SX1001) (第168~169図)

他の多くの遺構と同様、北から南に向かってくだる緩斜面上に作られているため、遺構の掘り込みが検出できたのは比高の高い北側の部分に限られているが、残された部分から平面形を推測すると楕円形

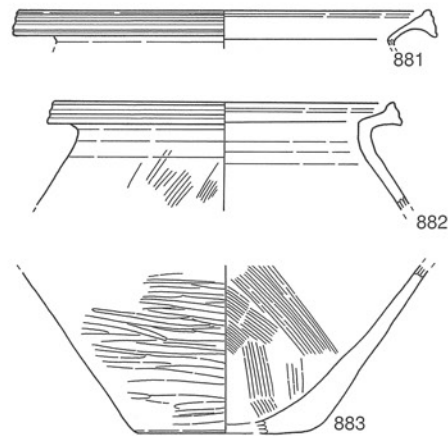


第170図 SX1001 出土遺物実測図

0 10cm



第171図 SX1002 実測図



第172図 SX1002 出土遺物実測図

をした遺構であ
ったと考えられ
る。遺構の底は
平坦でピットが
1基掘り込まれ
ているだけであ
ったが、ところ
どころに遺物の
集中する地点が
あった。

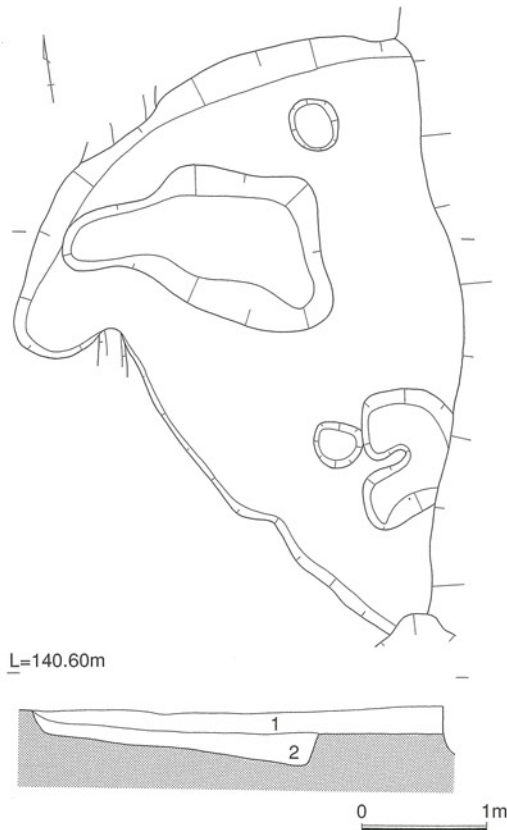
出土遺物(第170
図)

876は倒卵形の体部と「く」の字に屈曲する頸部から水平方向にのびる短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上下に拡張され、凹線が2条巡らされている。また頸部の屈曲部直下は内面に施された横ナデによって外側にわずかに

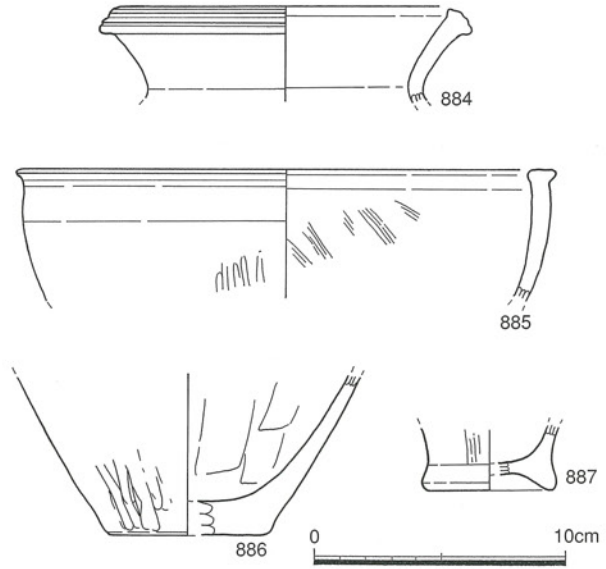
膨らんでいる。

不明遺構 2 (SX1002) (第171図)

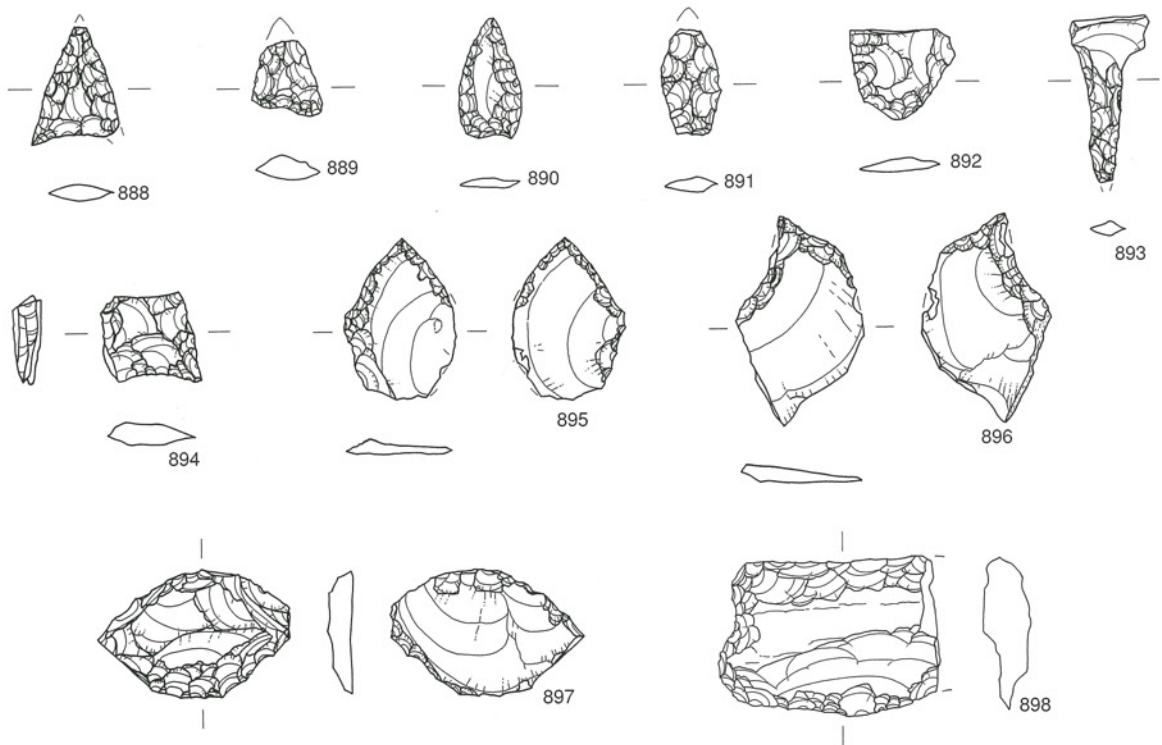
遺構の南側が調査区外にのびているため遺構本来の形状は明らかではないが、調査区内に残された部分は長さ約3.7m、最大幅1.8m、深さ60cmの溝状の遺構



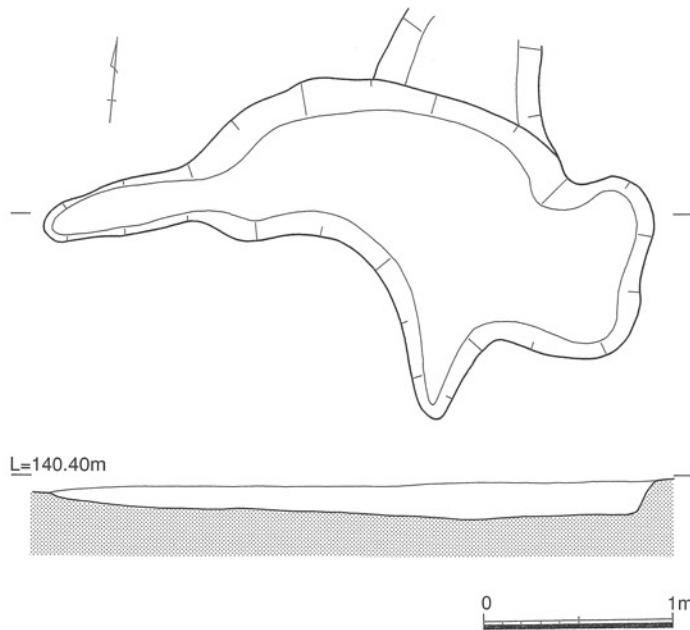
第173図 SX1003 実測図



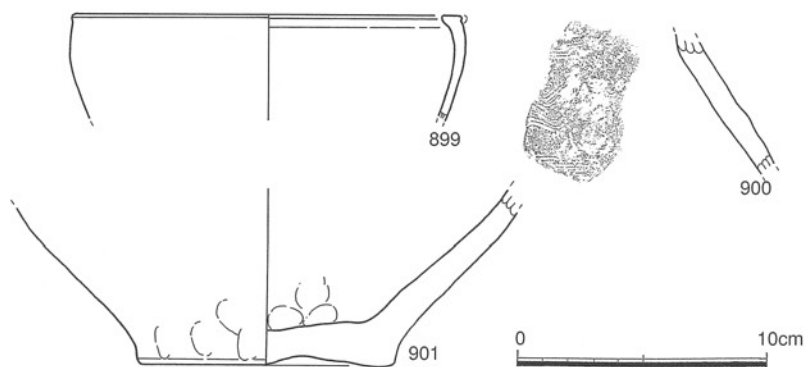
第174図 SX1003 出土遺物実測図(1)



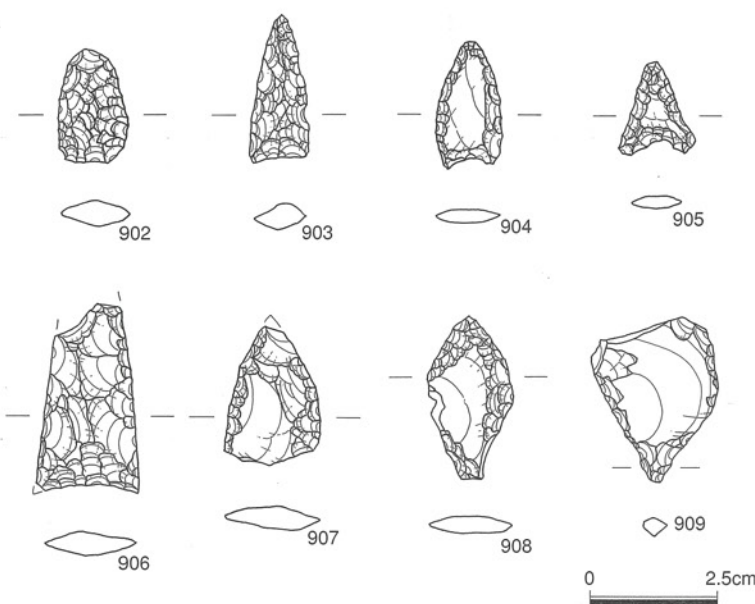
第175図 SX1003 出土遺物実測図(2)



第176図 SX1004 実測図



第177図 SX1004 出土遺物実測図(1)



第178図 SX1004 出土遺物実測図(2)

である。遺構の形態は蛇行するような形状で逆台形に掘り込まれている。

出土遺物 (第172図)

881は「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な口縁部を持つ甕である。口縁端部は上下に拡張され、凹線が3条巡らされている。882も「く」の字に屈曲する頸部と凹線が巡らされた口縁部を持つ甕である。ほぼ水平にのびる口縁は端部が上方に拡張され、凹線が2条巡らされている。また頸部直下は内面に行われる横ナデ調整によってわずかに外側に膨らんでいる。

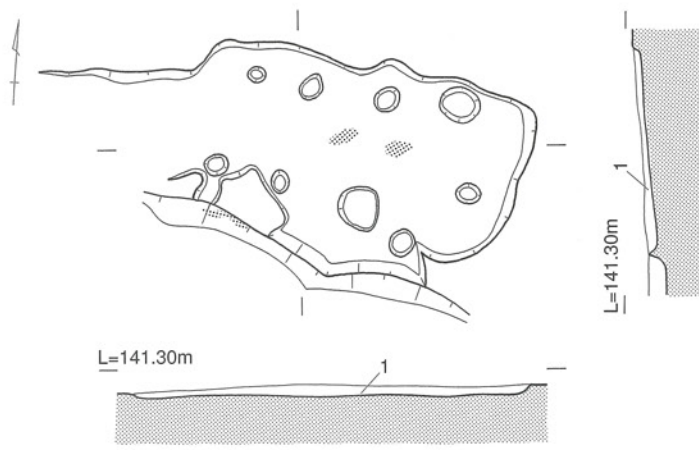
不明遺構 3 (SX1003)

(第173図)

遺構の東側を溝SD1005に切られているため正確な形や大きさは不明だが、長軸の長さ4.6m、最大幅2.6m、深さ20cmの不整形な形状である。床面は平坦だが一部に深さ20cmの不規則な落ち込みが見られる。遺構内からの弥生土器の出土は少ないが、サヌカイト製の打製石鏃とともに剥片がまとまって出土している。

出土遺物 (第147～175図)

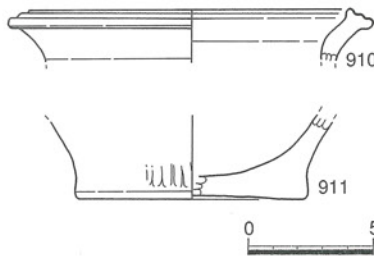
884は「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ壺である。上下に拡張されて平坦面が作り出された口縁端部には、凹線が3条巡らされている。885は高杯の杯部または鉢



1. 黄褐色 シルト質土 (10YR5 6)



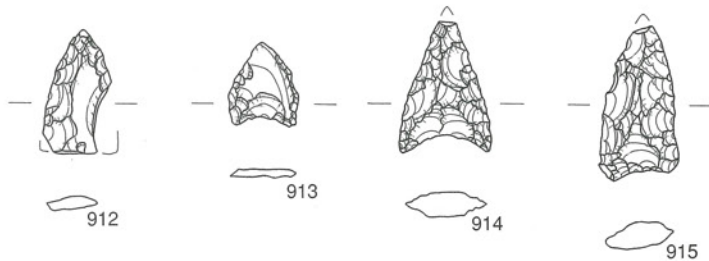
第179図 SX1005 実測図



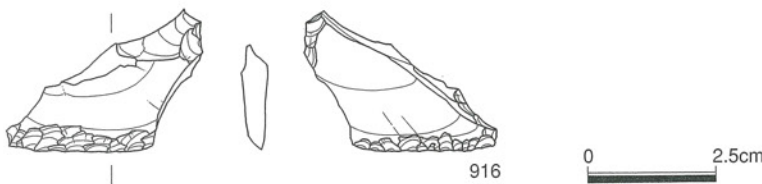
第180図 SX1005 出土遺物実測図(1)

と考えられるもので、緩やかに内湾しながら上方にのびる体部と、内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部を持っている。口縁部と体部の境は屈曲部を持たず、横ナデ調整によるわずかなくぼみが認められる程度である。888～892はサヌカイト製の打製石鏃で、凹基無茎式と平基無茎式、円基式のものが出土している。893は同じくサヌカイト製の打製石鏃である。894は打製石鏃の欠損品に縦の截断面が残るものだが、截断が意図的に行われたものかどうかは不明である。895・896は薄い横長の剥片に丁寧な調整を加えたもので、打製石鏃の未製品と考えられるものである。897はやや厚手の剥片を素材にして片側の周縁部だけに調整が加えられたもので、895や896同様石鏃の未製品の可能性がある。898は結晶片岩製の打製石庖丁の破片である。残された端部にはくり込みが作り出されている。

不明遺構 4 (SX1004) (第176図)



東西方向に長軸を持つ不整形な形状の遺構である。長さ約3.2m、幅約1mで南壁の一部が南に向かって約0.5mほど細長く突出している。深さは20cmと浅い。

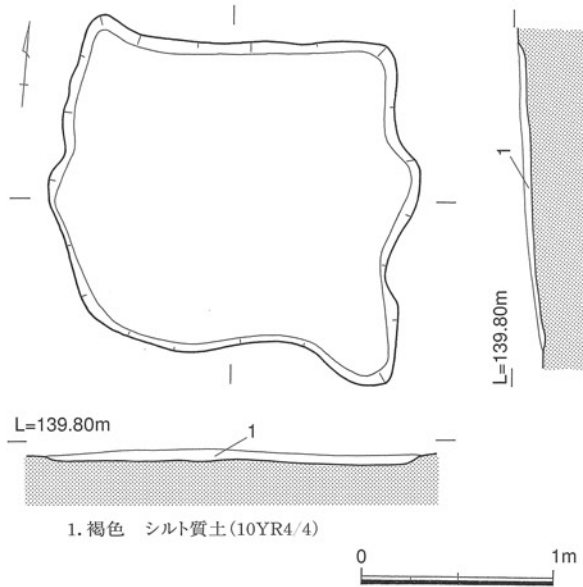


第181図 SX1005 出土遺物実測図(2)

出土遺物 (第117～178図)

899は内湾しながら上方に向かつてのびる身の深い体部と、内方に拡張され端部が平坦に仕上げられた内屈する口縁部を持つ鉢または高杯である。900は櫛描の波状文と平行線文が多段に描かれた壺の体部である。

902～907はサヌカイト製の打製石鏃である。基部の形態によって902・903が平基無茎式、904～906が凹基無茎式に分類される。906は先端部を欠くが現存する長さが3.7cm、幅2cmの大型の製品である。908は凸基有茎式の石鏃とも考えられるが茎が細く打製石鏃の可能性もある。909は厚みのある剥片の側縁部に調整を加えて錐部が作り出された石鏃である。



第182図 SX1006 実測図



第183図 SX1006 遺物出土状況図

た遺物や礫のなかには、床面よりも20cm以上浮き上がった状態で検出されたものも多く見受けられたことから、本来の深さは20cm前後あったものと考えられる。遺構内の覆土はやや締まりのないシルト質土で炭化物や焼土粒が若干含まれているが、人為的に投棄されたと考えられる大型の砂岩の角礫が床面中央で多数に検出されている。

不明遺構 5 (SX1005) (第179図)

竪穴住居SB1003、1004の北側で住居跡と切り合った状態で検出された遺構である。遺構は東西方向が約2.5m、南北方向が1mの東西に長い不整形の形態で、遺構の規模の割には深さはわずか5cmしかない。床面からは大きさの不揃いなピットが4基ずつ東西方向に2列並んで検出されたが、この遺構に伴うものかは不明である。覆土中には土器の小片などとともに炭化物や焼土粒が少量混入し、底面の一部には小規模ながら焼土ブロックが3カ所残されている。

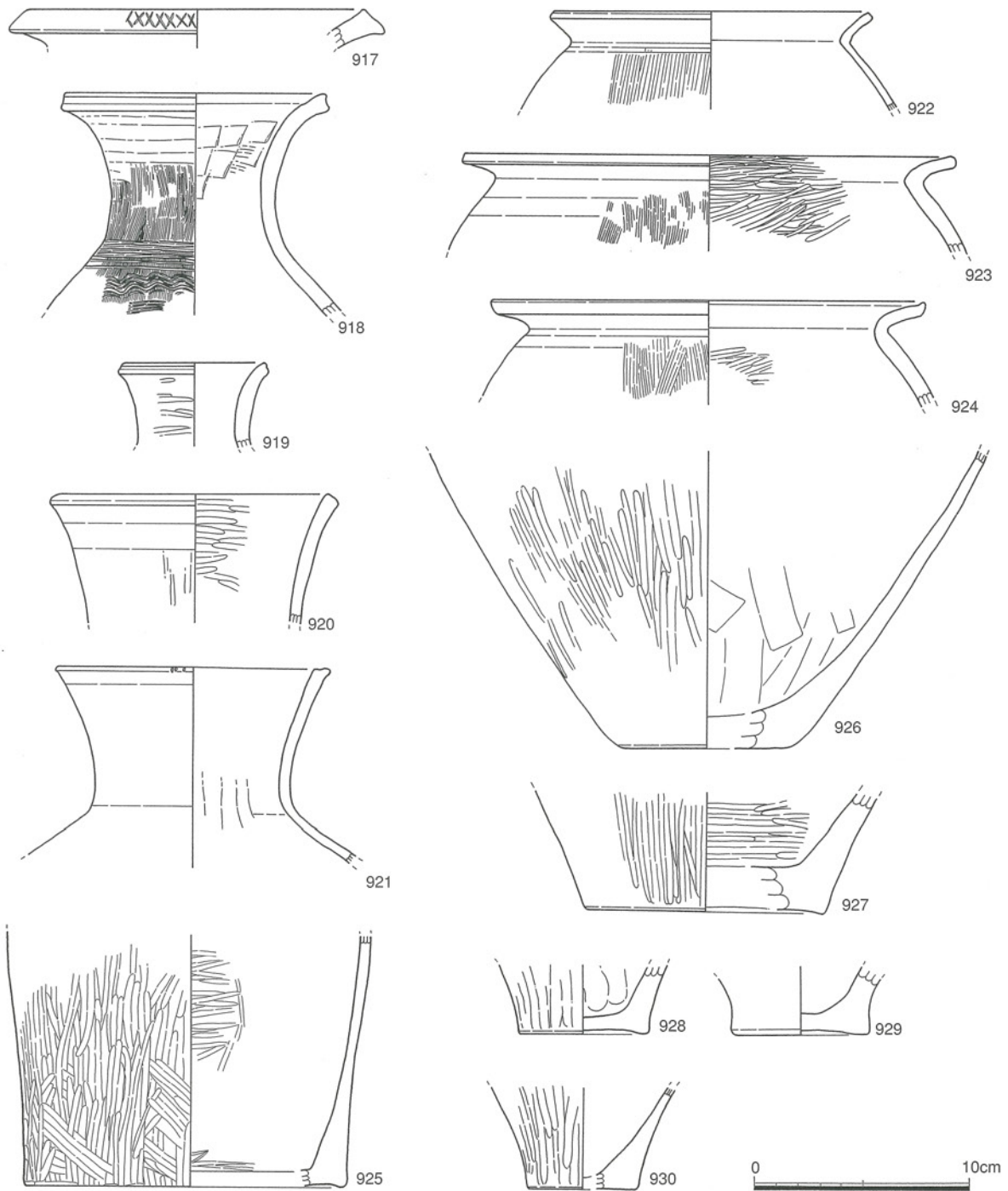
出土遺物 (第180～181図)

910は外反する口縁の端部を上下に拡張し凹線を2条巡らした短頸壺と考えられるものである。912～915はサヌカイト製の打製石鏃である。912が平基無茎式、913～915が凹基無茎式に分類される。916はサヌカイトの剥片を折断によって分割し、縁辺部に両面から調整を加えて刃部を作り出した削器である。

不明遺構 6 (SX1006)

(第182～183図)

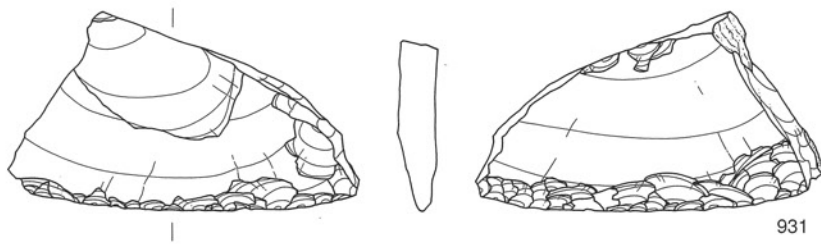
東西約2m、南北1.6mの不整形の形態で遺構の北西と南東の隅がそれぞれ舌状に突出している。完掘した状態での遺構の深さは最も深いところでも10cmに満たなかったが、遺構内から出土し



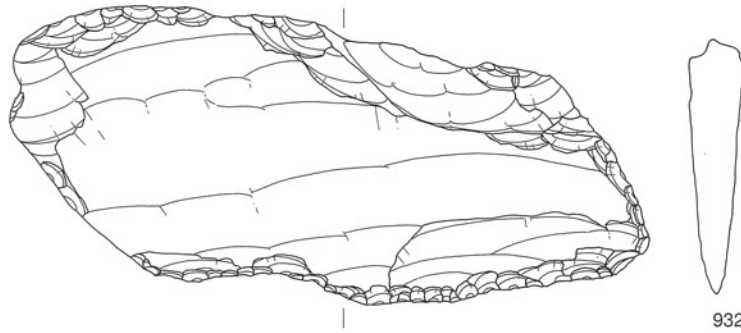
第184図 SX1006 出土遺物実測図(1)

出土遺物 (第184~185図)

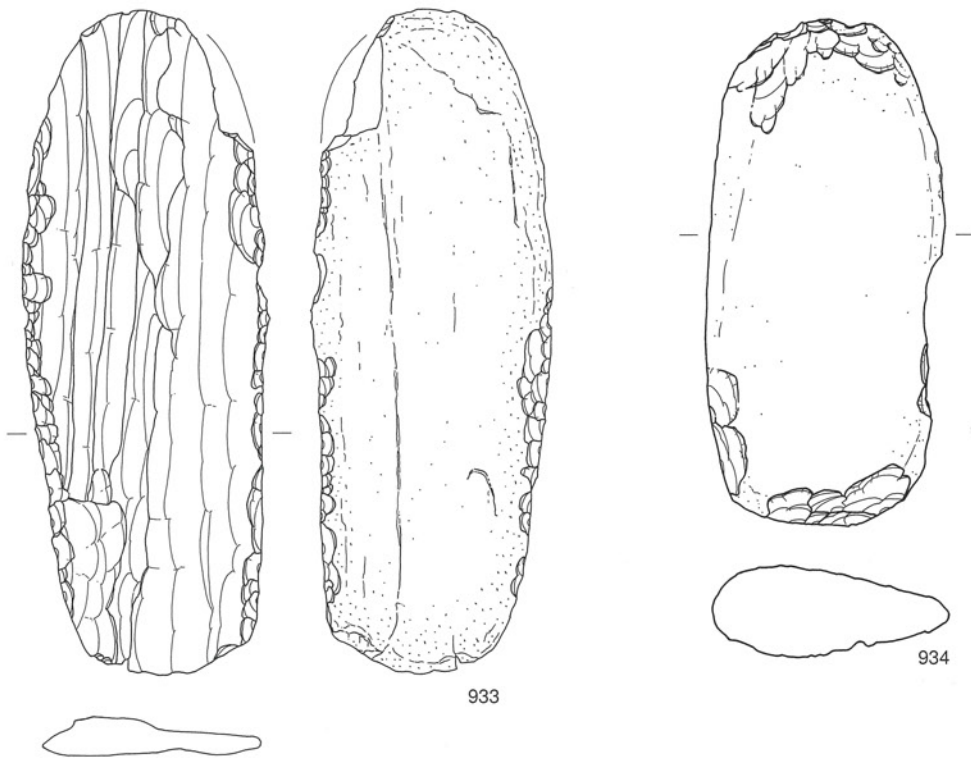
917は外反する口縁の端部が外面に向かって斜めに削ぎ落とされたような形態を持つ壺である。口縁端部の比較的幅の広い平坦面には斜格子目文が描かれている。918は頸部から緩やかに外反しながら上方に向かって開く口縁部を持つ壺である。平坦に仕上げられた口縁端部は凹線状にくぼんでいる。頸部下半から体部上半にかけては櫛描直線文が間隔をあけて平行してつけられ、その間には同じ櫛描による波状文が描かれている。919~921は上方への開きの小さい筒状の口縁部を持つ直口壺である。919・920の口縁端部は平坦に仕上げられているが、919は頂部が横ナデによって凹線状にくぼんでいる。921は口縁端部が外方に拡張されて平坦面が作り出され刻目が加えられている。体部は球形に膨らんでいる。922



931



932

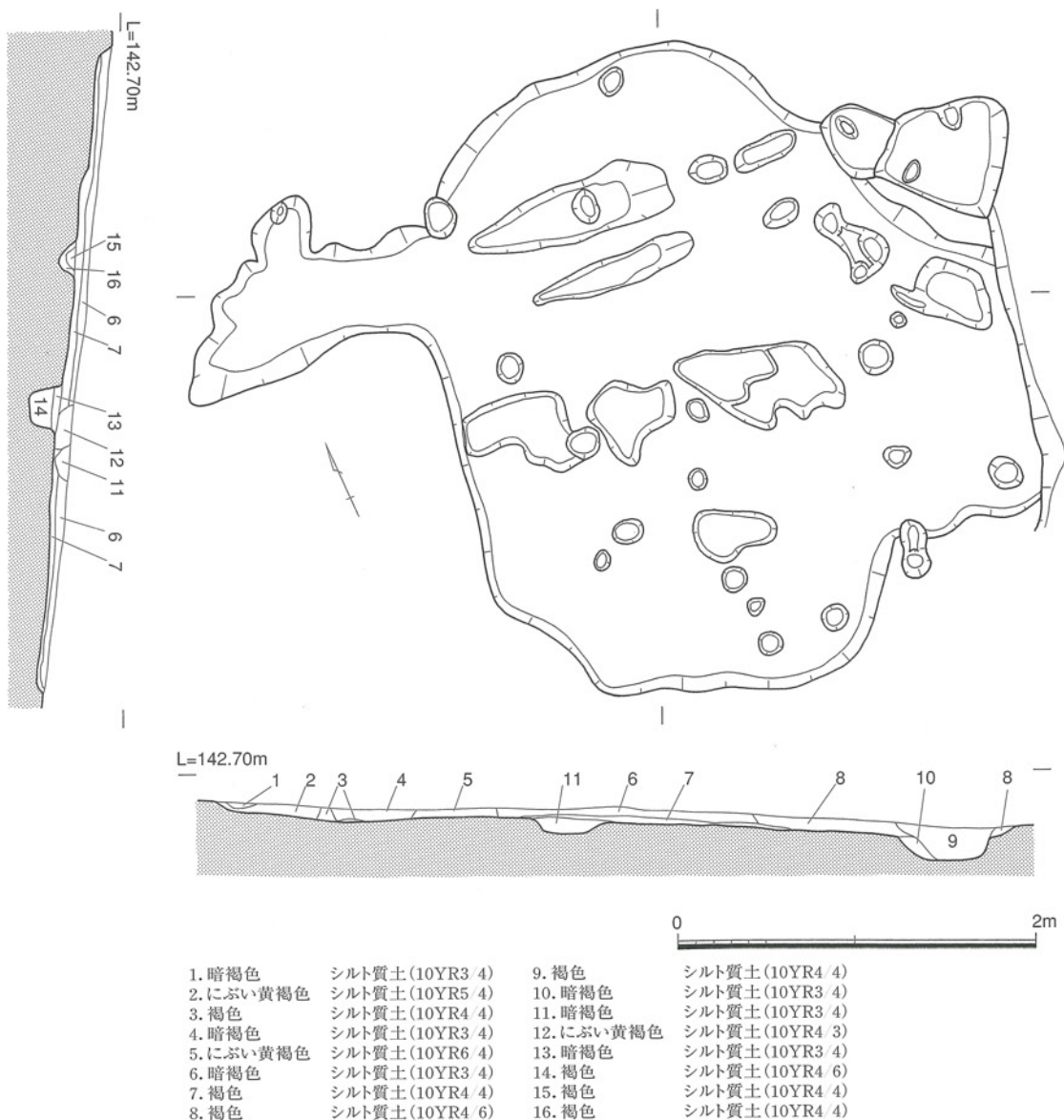


933

934

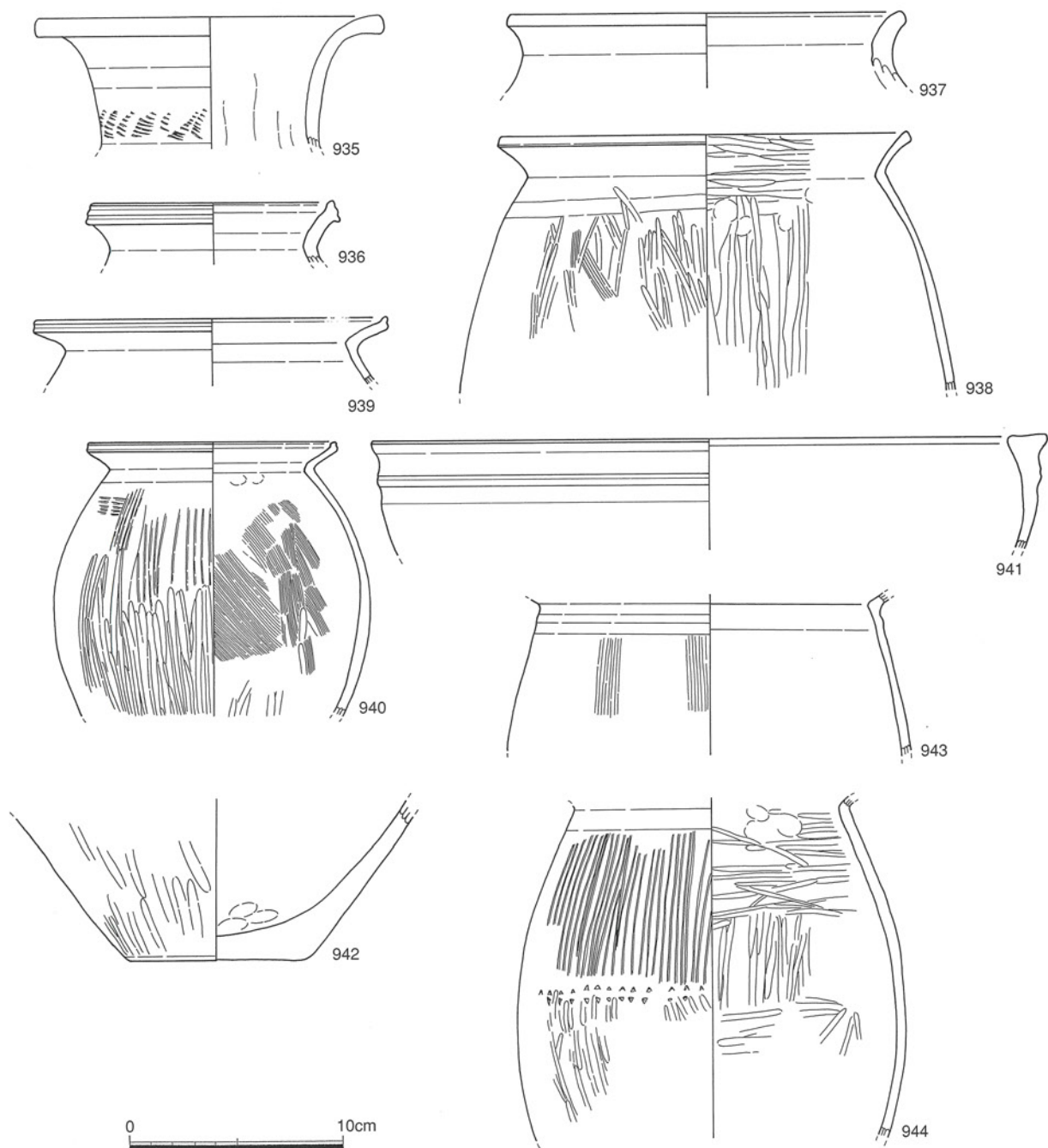


第185图 SX1006 出土遺物実測図(2)



第186図 SX1007 実測図

は「く」の字に屈曲する頸部と短く直線的な口縁部を持つ甕である。口縁端部は拡張されることなく平坦に仕上げられ、体部は膨らみが強く球形を呈している。923・924は球形の体部と、大きく外反する頸部から水平方向にのびる短い口縁部を持つ甕である。923は口縁端部が円く仕上げられ、内面は端部近くまでヘラ磨きが加えられている。924は上方に拡張され円く仕上げられた口縁端部が、弱い受け口状になっている。925は底部から直立する体部を持つ鉢と考えられる個体で、体部内外面にはいずれも丁寧なヘラ磨きが加えられている。931はサヌカイトを折断して得られた不整三角形の剥片の縁辺部に、両面から調整を加えて刃部を作り出した削器である。932は結晶片岩製の打製石庖丁である。不整形な菱形に近い形態で端部にはくり込みは作られていない。933は打製石鋏、または打製石庖丁と考えられる石器である。長楕円形の結晶片岩の礫から剥ぎ取られた大型の剥片を素材にし、縁辺部に両面から調整を加えている。934は扁平な長楕円形の礫を敲石として使用したもので、礫の両端にはかなり強く打ち付けられた痕跡が残されている。



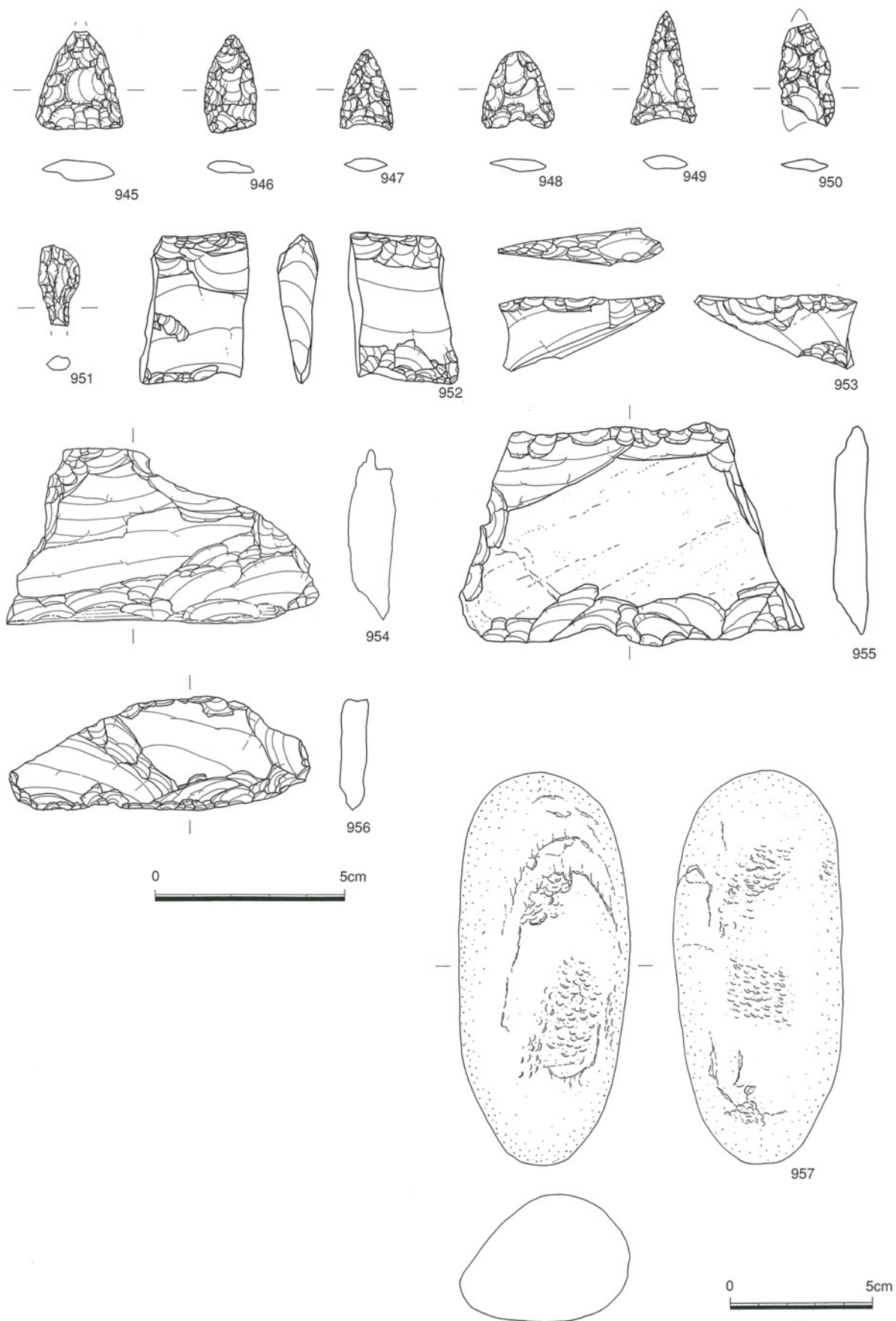
第187図 SX1007 出土遺物実測図(1)

不明遺構 7 (SX1007) (第186図)

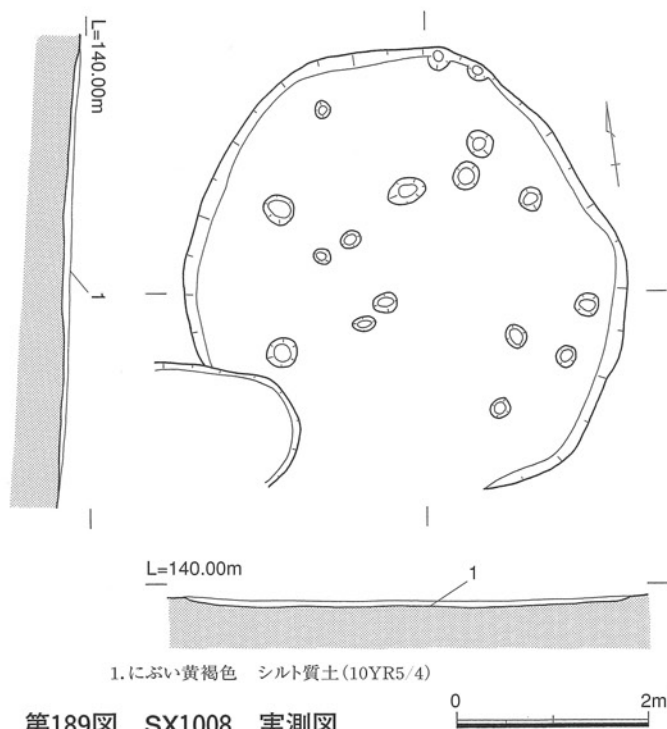
東西約3.2m、南北3.7mの不整形な形をした遺構である。床面からは大きや形の異なる落ち込みが多数検出され、そのうちの1基には焼土層が残されているものもあった。また遺構内に掘り込まれた長さ約1m、幅約0.2mの細長い土坑からは、周囲を礫と土器片で囲われ、口縁部を塞ぐような位置に土器片を置いた甕の上半部が出土している。

出土遺物 (第187~188図)

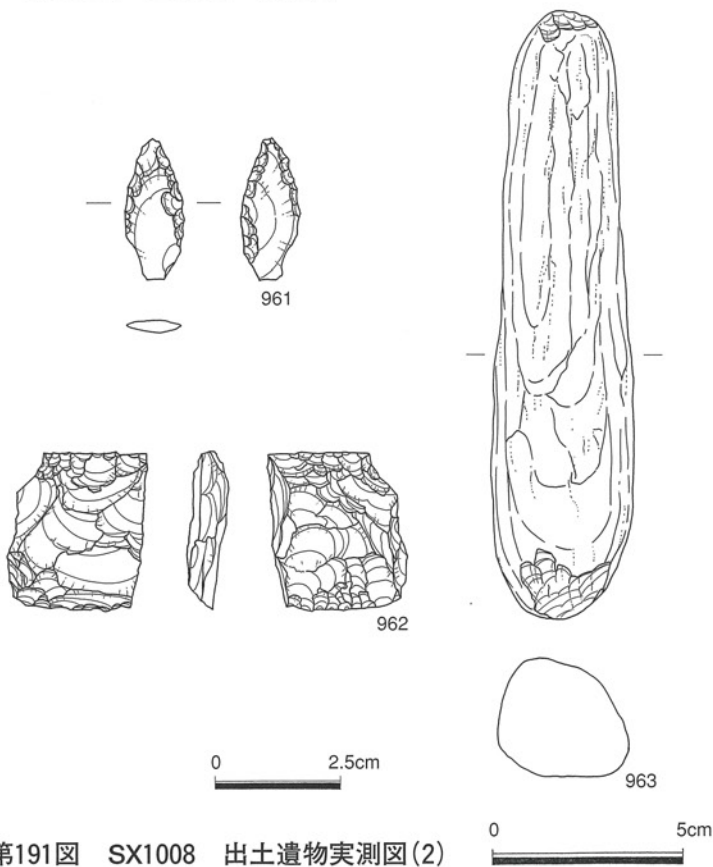
935は筒状の頸部と緩やかに外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ壺である。口縁端



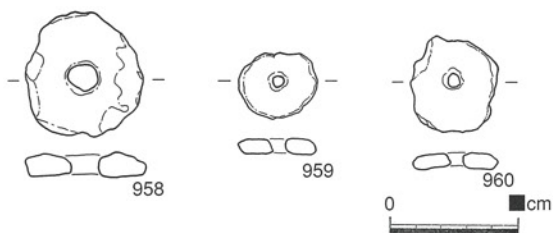
第188图 SX1007 出土遺物実測図(2)



第189図 SX1008 実測図

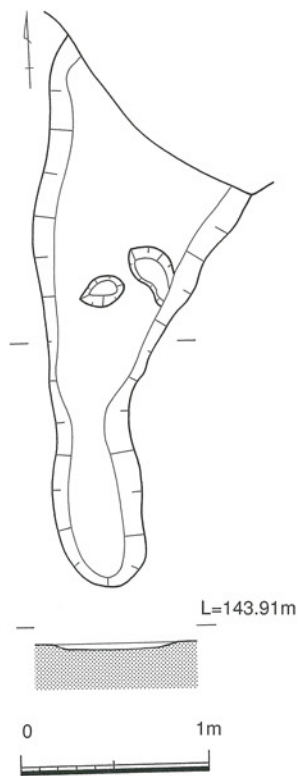


第191図 SX1008 出土遺物実測図(2)

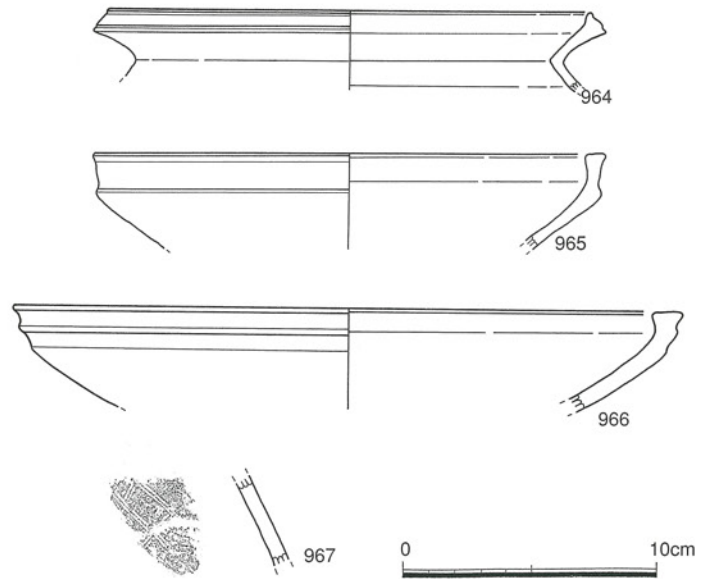


第190図 SX1008 出土遺物実測図(1)

部は若干肥厚しているが拡張されることはなく、円く仕上げられている。口縁部外面には横ナデが施され、頸部との境には櫛による連続する刺突が加えられている。936は外反しながら上方にのびる短い口縁の端部が上下に拡張され凹線が2条巡らされる短頸壺である。937は外反する短い口縁部を持つ壺であろうか？器壁は厚く口縁端部は円く仕上げられている。938は膨らみの小さい長い体部と「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ甕である。口縁端部はわずかに肥厚し平坦に仕上げられている。頸部の屈曲は比較的弱く、体部内外面には丁寧なヘラ磨きが加えられている。939・940は「く」の字に屈曲する頸部と外上方にのびる口縁の端部が上方に拡張され、拡張部に1条の凹線が巡らされる甕である。頸部の屈曲は938と比較して強く、口縁部は弱い受け口状である。941は内湾する深い体部と内外方に拡張される口縁端部を持つ大型の鉢または高杯と考えられる個体である。口縁の頂部はわずかにくぼみ、体部との境には凹線が巡らされている。943・944はともに口縁部を欠くが938と同じ体部の膨らみの小さい甕で、944の体部には三角形の押圧文が一周している。945～950はサヌカイト製の打製石鏃である。基部の形態から、945・946が平基無茎式、947～950が凹基無茎式に分類される。951はサヌカイト製の打製石錐であるが、他の石錐と異なり摘みは小さく円い。952は両面調整の石器を截断した楔型石器である。953は折断によって得られた剥片に、折断面を打面にして両極打法



第192図 SX1009 実測図



第193図 SX1009 出土遺物実測図

による剥離が行われたものである。954～956は結晶片岩製の打製石庖丁である。951の刃部は使用痕か研磨によるものかは不明であるが稜線が摩滅している。955は片面に自然面を残す結晶片岩の剥片を使用した大型の打製石庖丁である。不整形の形態で両端にはくり込みは作られていない。957は長楕円形の砂岩の礫を敲石として使用したもので、細かい敲打痕が表裏両面の中央部付近に残されている。

不明遺構 8 (SX1008) (第189図)

南西側の側壁の一部を欠く直径約5mの不整形の遺構である。遺構の掘り込みは浅く、床面からは18基のピット以外、炉址や周溝などは検出されなかった。この遺構の周囲は比較的ピットの集中する場所であることを考慮すると、遺構内で検出されたピットもこの遺構とは無関係なものである可能性が高い。

出土遺物 (第190～191図)

958～960は土製の有孔円盤である。何れも土器片の周辺を打ち欠き、中央部に穿孔を加えたもので、周縁部は打ち欠きの痕をそのまま残すものと丁寧に研磨したものの両方がある。961・962はサヌカイト製の打製石鏃と楔型石器である。石鏃の基部付近は未調整で未製品の可能性がある。963は棒状の片岩の礫の両端に敲打痕が残された敲石である。

不明遺構 9 (SX1009) (第192図)

竪穴住居址SB1014の南西で検出された長さ約2.5mの舌状の形をした遺構である。遺構の規模に反して掘り込みは極端に浅く深いところでも10cm前後の深さしかない。

出土遺物 (第193図)

964は「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され凹線が巡らされている。965は外上方にのびる体部と屈曲部を持って上方に立ち上がる口縁部を持った高杯である。口縁端部は外方に拡張され、頂部は平坦に仕上げられている。966は緩やかに内湾する浅い皿状の体部からやや内屈気味に立ち上がる口縁部を持つ高杯の杯部である。口縁端部は内外方に拡張され、中部はわずかにくぼんでいる。また口縁部には凹線が2条巡らされている。

柱穴出土遺物

柱穴 26 (SP1026)

G-9グリッドで検出された長さ0.4m、幅0.3m、深さ20cmの不整楕円の形態の遺構である。遺構内には炭化物や土器片を少量混入する褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

968は中央に最大径を持つ甕の体部である。底部の径は比較的大きく、弱い上げ底である。器面の遺存状態が悪く、全体の調整は不明であるが、底部近くには丁寧なヘラ磨きが施されている。

柱穴 30 (SP1030)

F-9グリッドで検出された直径約0.4mの不整円形の形態の遺構で、深さは30cmある。遺構内には炭化物をわずかに混入する褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

992はサヌカイトの翼状の大型剥片である。打面には背面から主剥離面方向への丁寧な打面調整が行われている。背面は2枚の剥離面で構成されるが、そのうちの1面は石核の底面で、瀬戸内技法による翼状剥片に類似している。

柱穴 34 (SP1034)

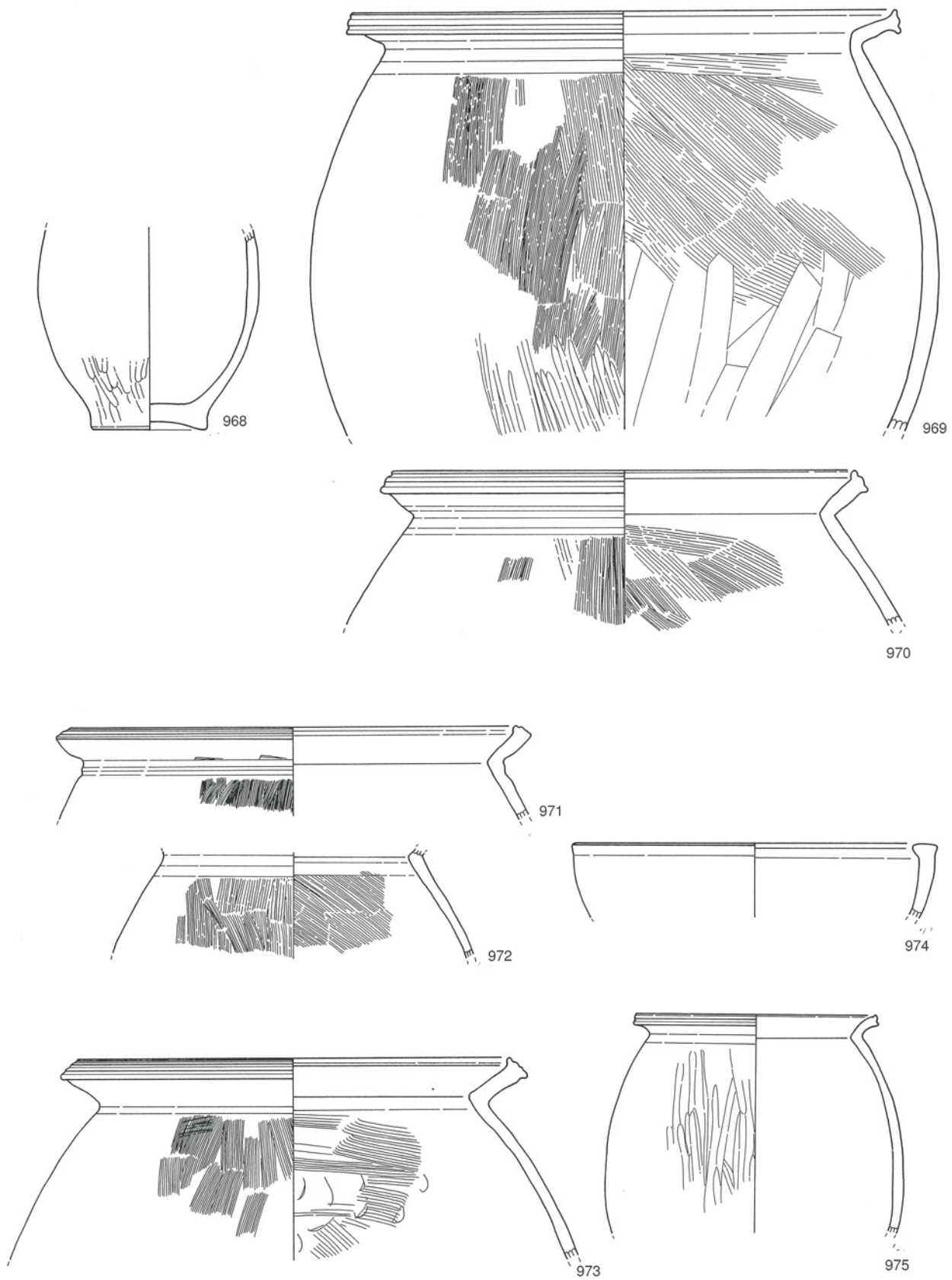
E・F-10グリッドで検出された直径約0.4m、深さ40cmの円形の遺構である。遺構内には粒子の細かい褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

969・970はともに「く」の字に屈曲する頸部と直線的な口縁部を持つ甕で、体部の膨らみが大きい。いずれも口縁端部が上下に拡張され、拡張部には凹線が2条巡らされている。器面調整についても、口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部上半は内外面とも刷毛目調整が施されるなど2点とも共通する点が多い。969の体部下半は外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りがそれぞれ行われている。

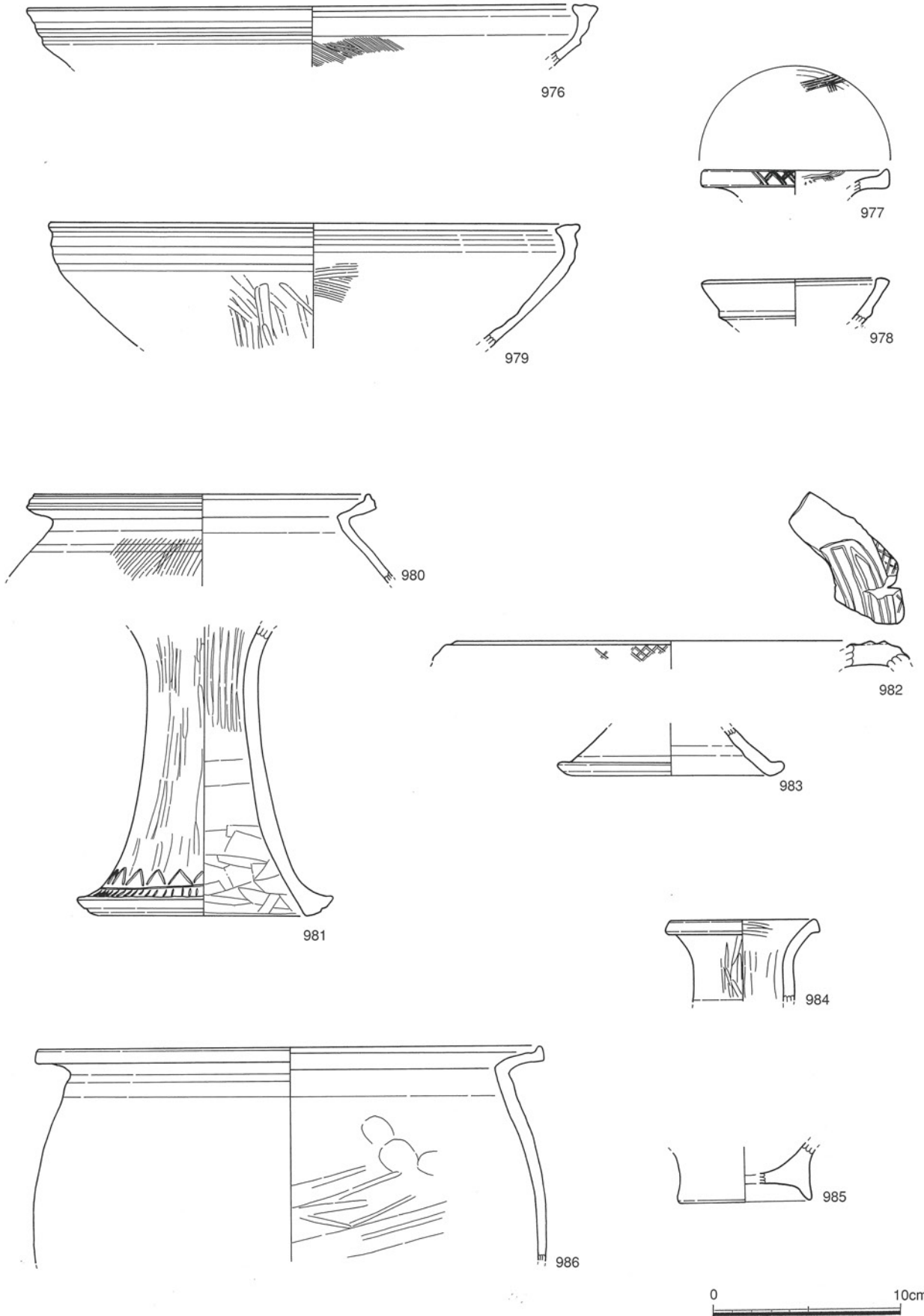
柱穴 39 (SP1039)

F-10グリッドで検出された直径約0.4mの円形の遺構である。深さは20cmと浅い。遺構内には土器

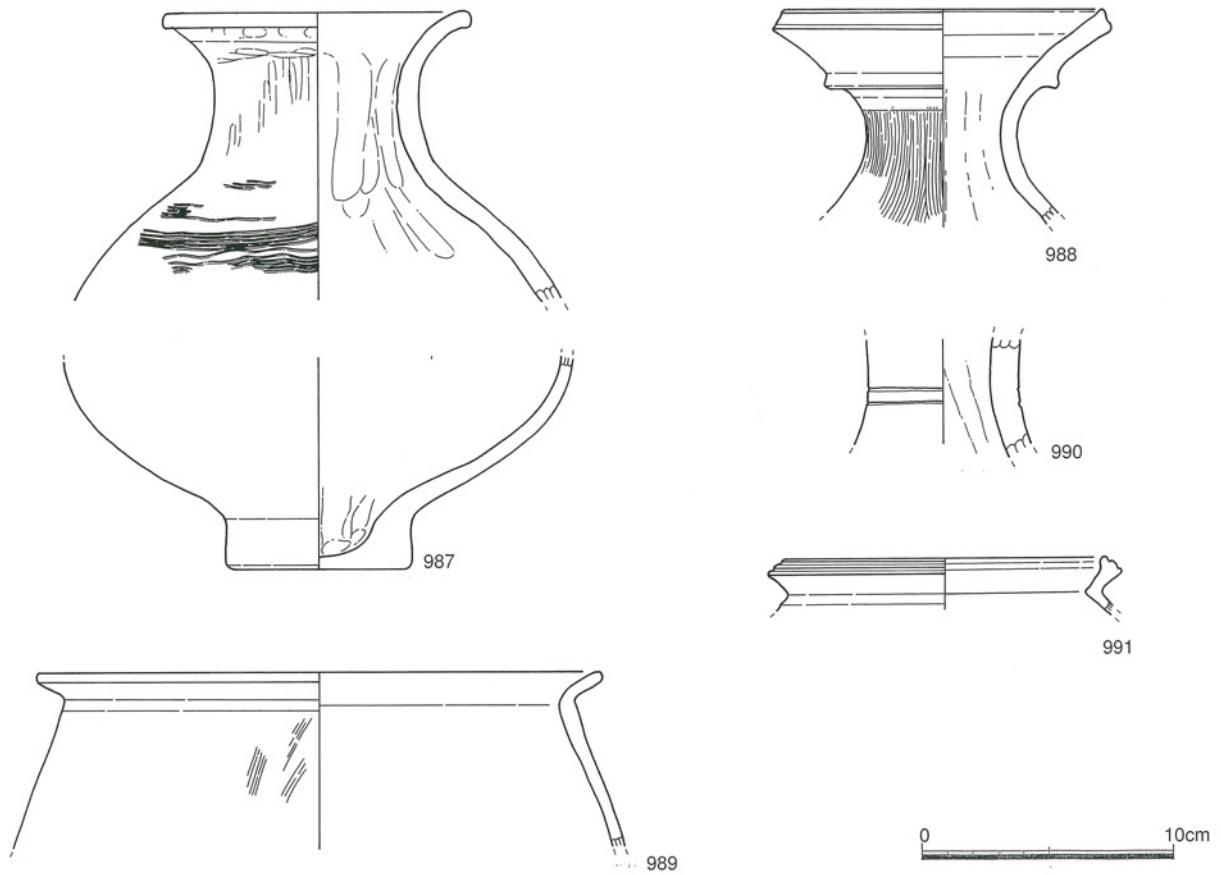


0 10cm

第194图 SP 出土遺物実測図(1)



第195图 SP 出土遺物実測図(2)



第196図 SP 出土遺物実測図(3)

片と炭化物を少量ずつ混入する褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

971は「く」の字に屈曲する頸部とわずかに内湾する口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され凹線が2条巡らされている。また、頸部外面には強い横ナデが施され、凹線状にくぼんでいる。972は口縁部を欠くが、同じように口縁端部に凹線が巡らされる甕であろう。

柱穴 42 (SP1042)

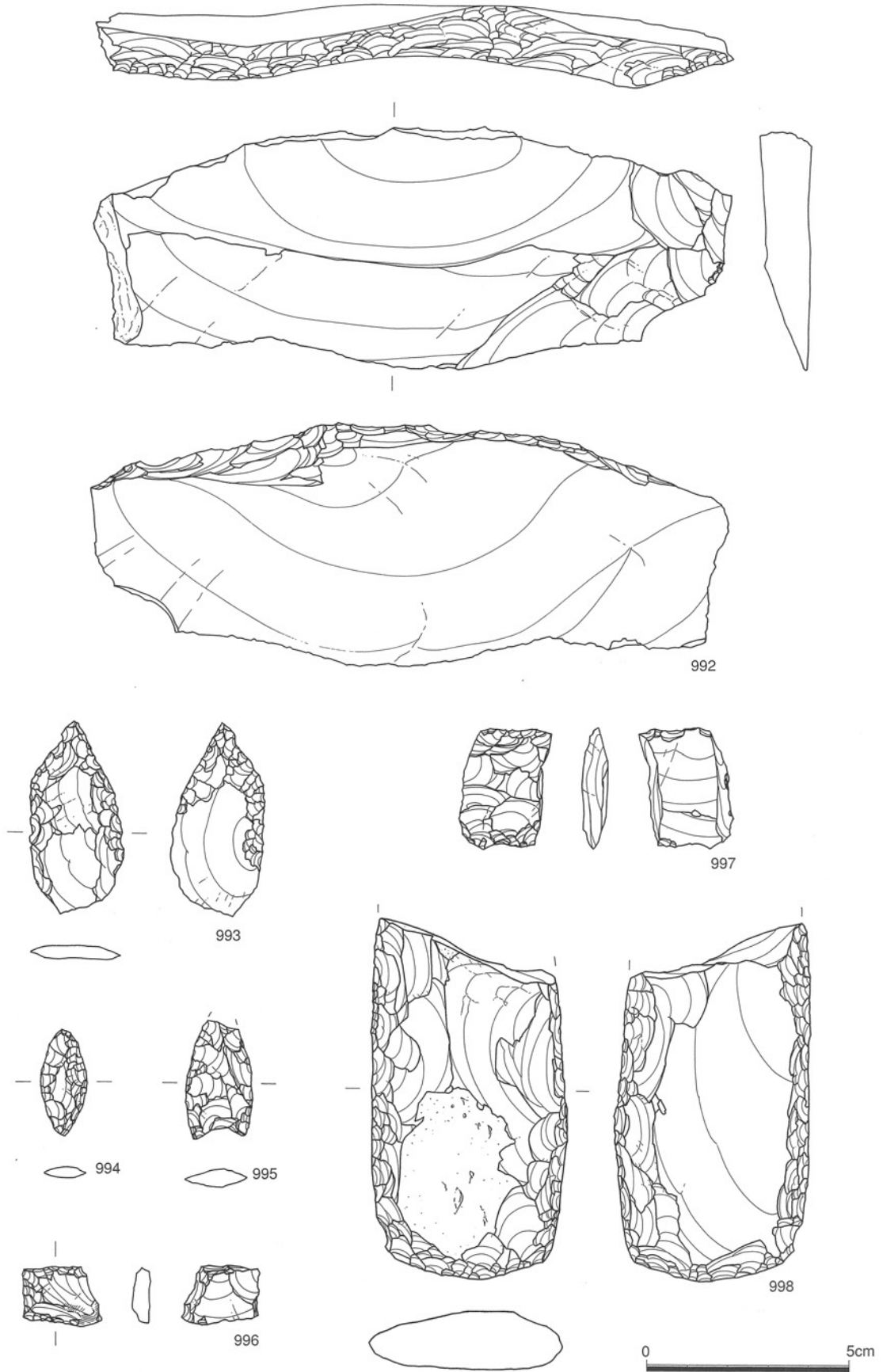
F-11グリッドで検出された直径約0.4m、深さ40cmの不整円形の遺構である。遺構内には土器片や炭化物が少量混じる、しまりの強いシルト質土が堆積している。

出土遺物

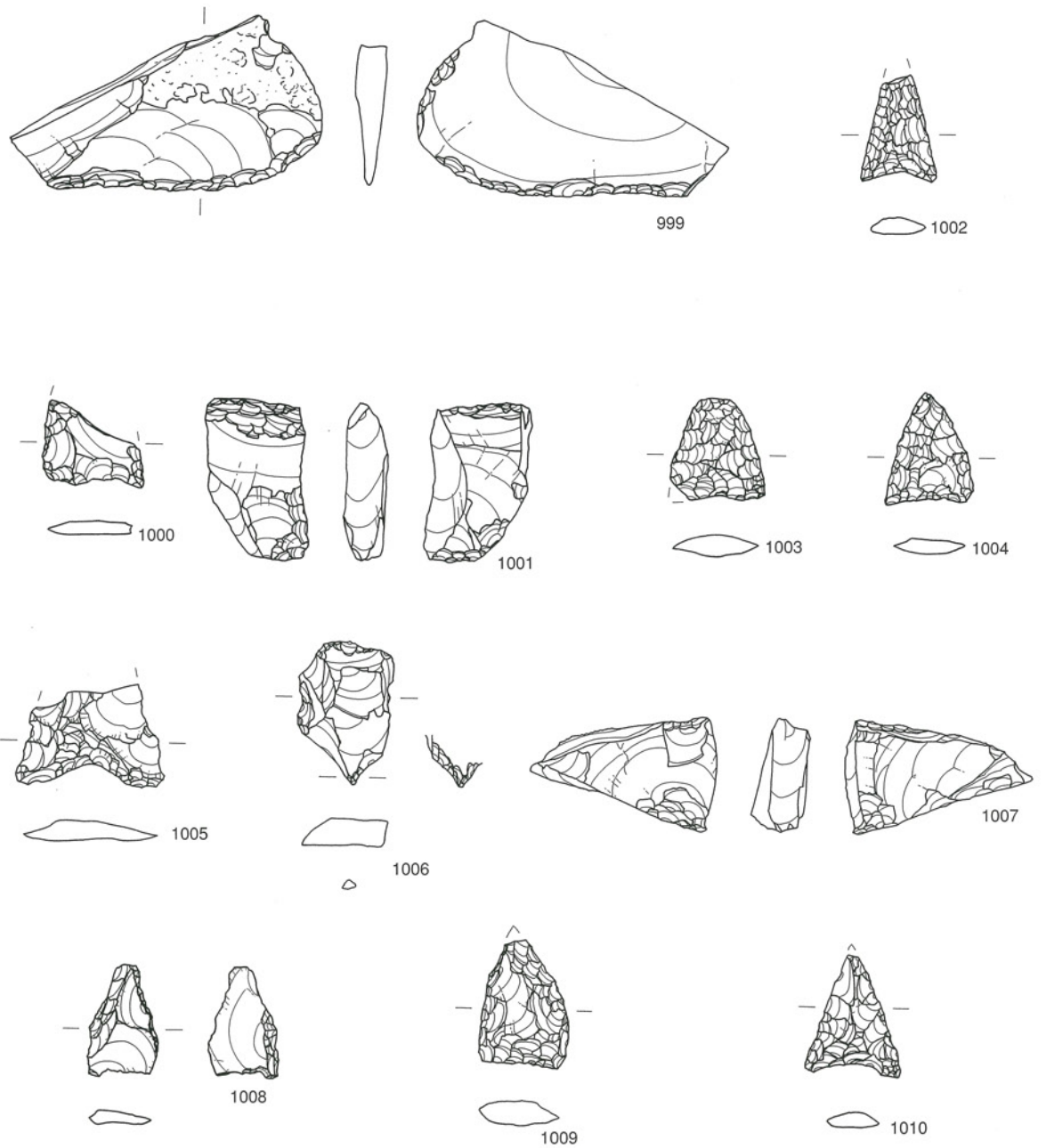
323は結晶片岩製の打製石庖丁である。身部の半分を欠失するが、残されたもう一方の端部は直線的に仕上げられ抉りは加えられていない。

柱穴 58 (SP1058)

E-12グリッドで検出された直径約0.5m、深さ30cmの円形の遺構である。遺構内には粒子の細かい



第197图 SP 出土遺物実測図(4)



第198図 SP 出土遺物実測図(5)



黄褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

973は「く」の字に屈曲する頸部と直線的な口縁部を持ち、体部の膨らみが大きい甕である。口縁端部は上下に拡張され、凹線が3条巡らされている。体部内外面には刷毛目調整が施され、内面には指頭圧痕の痕跡が残されている。

柱穴 102 (SP1102)

I-14グリッドで検出された長さ0.5m、深さ50cmの不整形な形態の遺構である。遺構内には礫を多く混入するシルト質土が堆積している。

出土遺物

974は緩やかに内湾する椀型の体部と、内外方に拡張された口縁端部を持つ高杯の杯部である。拡張された口縁端部は頂部が平坦に仕上げられ、端部直下には横ナデが施されている。

柱穴 104 (SP1104)

I-14グリッドで検出された直径約0.5m、深さ約30cmの円形の形態の遺構である。遺構内には多量の礫と少量の土器片を混入する粒子の細かいシルト質土が堆積している。

出土遺物

975は「く」の字に屈曲する頸部と緩やかに外反する短い口縁部を持ち、比較的膨らみの小さい体部を持つ長胴の甕である。口縁端部は上方にわずかに拡張され、凹線が1条巡らされている。横ナデが施された頸部以下の体部外面には縦方向の丁寧なヘラ磨きが行われている。

柱穴 118 (SP1118)

E-15グリッドでSP1119と切り合った状態で検出された直径約0.8m、深さ70cmの円形の遺構である。遺構の周囲には大型の掘建柱建物跡SA1001・1002の柱穴群が集中しているが、その他にも1001・1002に属さない比較的規模の大きい柱穴が点在している。SP1118もそのような掘建柱建物跡に伴う遺構の可能性が高い。

出土遺物

1012は結晶片岩製の打製石庖丁である。片方の端部を欠くが残されたもう一方の端部にはくり込みが作られている。

柱穴 126 (SP1126)

E-16グリッドで検出された長さ約0.7m、幅0.5m、深さ40cmの不整楕円の形態の遺構である。SP1118同様、周囲に大型掘建柱建物跡の柱穴が集中する場所にあり、規模も大きいことからSA1001・1002以外の大型の掘建柱建物跡に付随する柱穴である可能性が高い。遺構内の堆積は2層に分けられ、下層の褐色土には浅黄色土がブロック状に混入している。

出土遺物

976は体部が上方に向かって大きく開く浅い皿状で、体部との境で屈曲部を持ち端部が内外方に拡張される口縁部を持つ高杯の杯部である。口縁部には凹線が2条巡らされている。

柱穴 147 (SP1147)

E-17グリッドで検出された長さ1.1m、幅0.8m、深さ50cmの不整楕円の形態の大型の柱穴である。柱穴の規模が大きく大型掘建柱建物址群SA1001・1002に隣接しているが、これには属さないことから、これらとは別の大型掘建柱建物跡を構成する柱穴と考えられる。

出土遺物

993はサヌカイトの横長剥片の縁辺部に、両面から調整を加えた打製石鏃の未製品と考えられるものである。

柱穴 162 (SP1162)

G・H-17グリッドで検出された長さ0.6m、幅0.4m、深さ40cmの不整楕円形の形態の遺構である。遺構内には締まりの強い黄褐色のシルト質土が堆積している。

出土遺物

1019は短い棒状の礫を使用した敲石である。礫の一端は打ち欠かれた後に部分的に研磨が加えられている。敲打痕はこの打ち欠かれた部分の周囲と残されたもう一方の端部に集中している。1018も扁平な楕円形の礫を使用した敲石である。敲打痕は礫の両端に集中して残されている。

柱穴 177 (SP1177)

H-16グリッドで検出された直径0.4m、深さ20cmの不整円形の形態の遺構である。遺構内には礫を混入するシルト質土が堆積している。

出土遺物

994は左右対称に作られた凸基無茎式に分類されるサヌカイト製の打製石鏃である。

柱穴 193 (SP1193)

I-17グリッドで検出された直径0.6m、深さ約mの不整円形の形態の遺構である。

出土遺物

977は上方に大きく開く口縁を持つ小型の壺である。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部と口縁部内面には、櫛描による斜格子目文が描かれている。978は細く締まった頸部と受け口状の口縁部を持つ壺である。口縁端部はわずかに内方に拡張されて平坦に仕上げられ、端部からやや下がった位置には断面三角形の貼付突帯がつけられている。

柱穴 199 (SP1199)

I-17・18グリッドで検出された直径約0.5m、深さ30cmの円形の遺構である。遺構内には締まりの強い黄褐色のシルト質土が堆積している。

出土遺物

995はサヌカイト製の打製石鏃である。外湾する側縁部は左右対称に作られ、基部には明瞭な抉りが加えられている。

柱穴 211 (SP1211)

J-17・18グリッドで検出された直径約0.4m、深さ30cmの不整円形の形態の遺構である。遺構内には少量の土器片と礫が混入されたシルト質土が堆積している。

出土遺物

979は体部との境で内湾する口縁部をもつ高杯の杯部である。内外方に拡張された口縁端部は頂部がやや盛り上がっている。また、口縁部には凹線文が3条巡らされている。

柱穴 220 (SP1220)

J-18グリッドで検出された直径0.5m、深さ50cmの円形の遺構である。遺構内の堆積は粒子の細かいシルト質土で少量の土器片が混入している。

出土遺物

996は不整形に折断された剥片の縁辺部に細かい調整を加え刃部を作り出した小型の削器で、片面には研磨の痕跡が残されている。

柱穴 222 (SP1222)

J・K-18グリッドで検出された長さ0.5m、幅0.4m、深さ30cmの楕円形の遺構である。遺構内には少量の土器片を混入する粒子の細かい黄褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

997は截断と折断によって方形に整えられた剥片に両極打法による調整が加えられた楔型石器である。調整は片面だけに行われている。

柱穴 225 (SP1225)

K-18グリッドで検出された長さ約0.4m、幅約0.3m、深さ約30cmの不成型な形態の遺構である。遺構内には、少量の土器片を混入する黄褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

998片面に自然面を残すサヌカイトの大型の横長剥片の縁辺部に細かい調整を施し、短冊形の形態に仕上げた打製石斧または打製石剣と考えられる石器で、側縁部は両側とも円く潰されている。

柱穴 262 (SP1262)

G-22グリッドで検出された長さ0.6m、幅0.5m、深さ30cmの楕円形の遺構である。

出土遺物

1020は大型の磨製石斧を転用した敲石である。敲打痕はほぼ全面に残されている。

柱穴 277 (SP1277)

D・E-27・28グリッドで検出された長さ0.5m、幅0.3m、深さ20cmの長楕円の形態の遺構である。遺構内には土器片と炭化物を少量混入する褐色のシルト質土が堆積している。

出土遺物

999は折断したサヌカイトの剥片の縁辺部に調整を加えて刃部を作り出した削器である。調整はほぼ縁辺部全面に両面から行われている。

柱穴 299 (SP1299)

J-19グリッドで検出された長さ0.5m、幅0.4m、深さ40cmの不整楕円の形態の遺構である。遺構内には礫の他に土器片を少量混入するシルト質土が堆積している。

出土遺物

980は「く」の字に屈曲する頸部とわずかに内湾する短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され凹線が2条巡らされている。頸部の屈曲部直下は内外面ともに横ナデ調整が施されているが、外面は内面に施される強い横ナデによってわずかに突出している。981は細くて高い柱状の脚柱部を持つ高杯の脚台である。脚台下端面は上方に拡張され拡張部には凹線が巡らされている。裾部下端にはヘラ描きの鋸歯文と平行直線文、刺突文が描かれている。外面は丁寧なヘラ磨きを加えられ、脚端部内面にはヘラ削りが行われている。

柱穴 330 (SP1330)

J-21グリッドで検出された直径0.3m、深さ20cmの円形の遺構である。遺構内には下部に礫を多く混入するシルト質土が堆積している。

出土遺物

1000はサヌカイト製の打製石鏃である。身の半分ほどを欠失しているが凹基無茎式に分類される。1001は両面調整の石器を截断した楔型石器である。截断後に截断面を打面にして両極剥離が行われている。

柱穴 334 (SP1334)

J-21グリッドで検出された直径約0.3m、深さ30cmの不整円形の遺構である。遺構内には礫を多く混入する褐色のシルト質土が堆積している。

出土遺物

982は外反する口縁の端部が下方に大きく垂下し、幅広い平坦面を形作る壺である。垂下する口縁端

部外面には格子目文が描かれ、内面には貼付突帯による区画文がつけられている。983は下端面が上方に拡張された高杯の脚部で、裾部は強い横ナデによってくぼんでいる。

柱穴 384 (SP1384)

K-22グリッドで検出された直径0.5m、深さ30cmの円形の遺構である。遺構内には礫の他に褐色土をブロック状に混入する黄褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

984は長い筒状の頸部と外反する上方への開きの少ない口縁部を持つ壺である。口縁端部は下方に拡張され狭い平坦面が作り出されている。頸部外面には丁寧なヘラ磨きが加えられている。

柱穴 398 (SP1398)

K-22グリッドで検出された直径0.4m、深さ約20cmの円形の遺構である。遺構内の堆積は少量の炭化物と土器片を含む暗褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

985は低い高台がついた甕の底部と考えられる土器である。脚部は外下方への開きがほとんどない直立する形態で、端部は鈍く尖らされている。

柱穴 405 (SP1405)

K-21グリッドで検出された直径0.5m、深さ約40cmの不整楕円の形態の遺構である。遺構内には少量の土器片を含むシルト質土が堆積している。

出土遺物

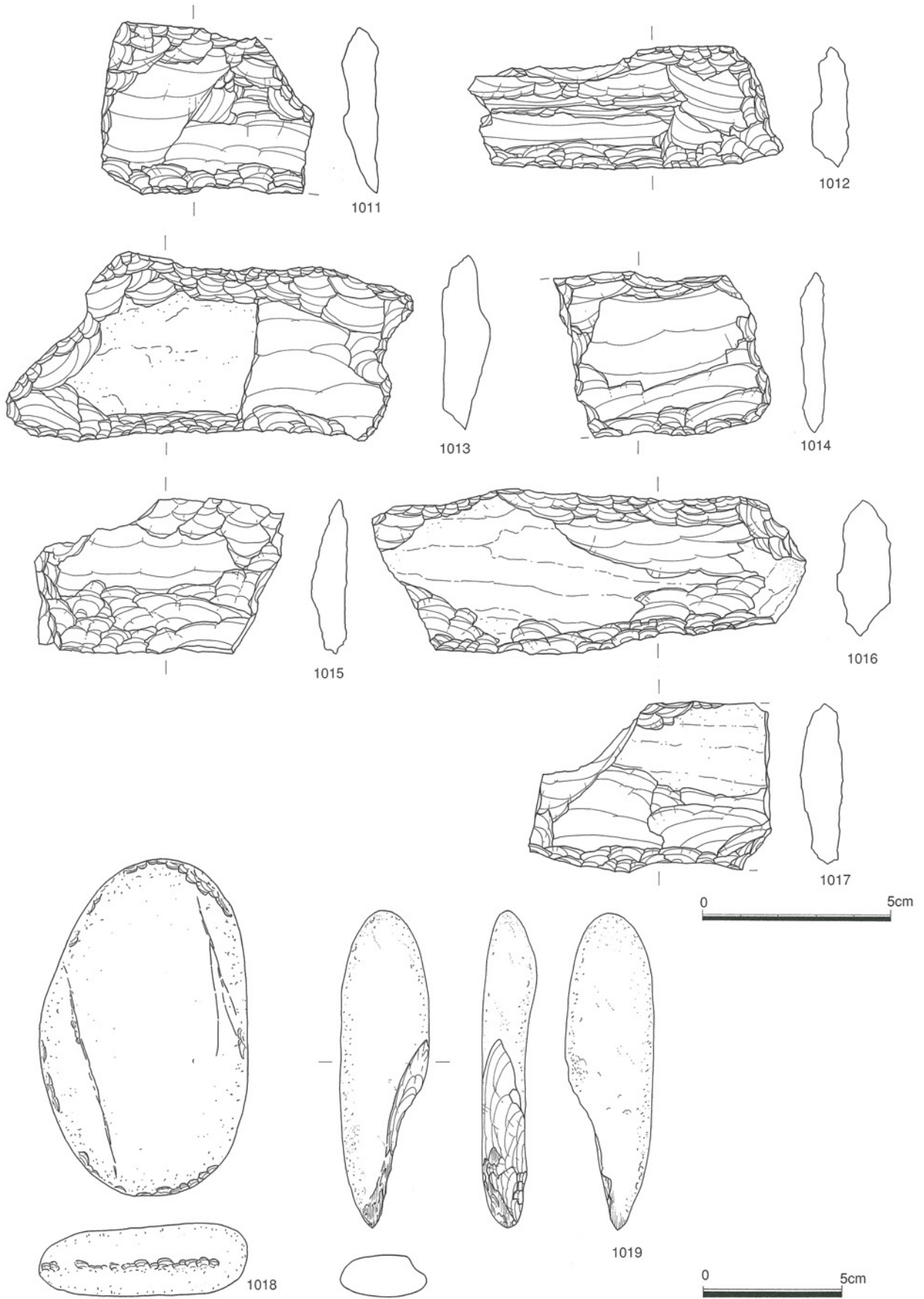
986は「く」の字に屈曲する頸部とわずかに外反する短い口縁部を持ち体部の膨らみの小さい甕である。口縁端部は上方に拡張され狭い平坦面を作り出しているが、凹線は施されていない。頸部の屈曲部直下は内外面に横ナデが行われ、外面は内面に加えられる横ナデによってわずかに外方に膨らんでいる。1013は片面に自然面を持つ結晶片岩の剥片を素材に使用し左右非対称に仕上げられた打製石庖丁である。両端にはそれぞれくり込みが作り出され、刃部はやや内湾している。

柱穴 433 (SP1433)

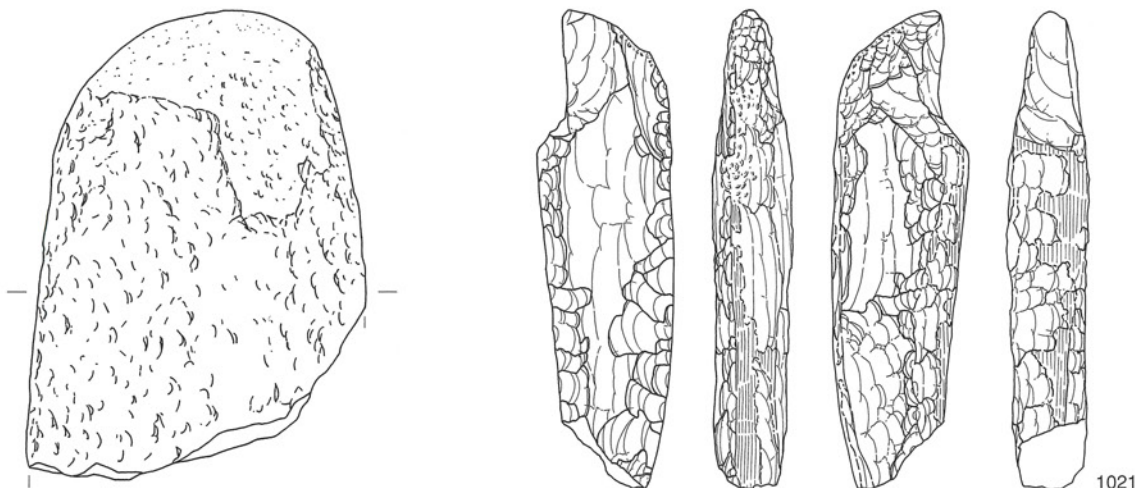
L-20グリッドで検出された直径0.4m、深さ20cmの円形の遺構である。遺構内には少量の土器片と礫を混入するしまりの良いシルト質土が堆積している。

出土遺物

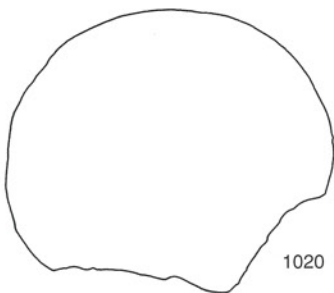
987は比較的長い筒状の頸部と緩やかに外反する口縁部をもつ壺である。口縁端部の拡張は行われず円く仕上げられている。頸部下半から球形の体部上半にかけては櫛描の波状文が平行して何段にもつけられている。底部は体部の径と比較して小さく下方に突出している。



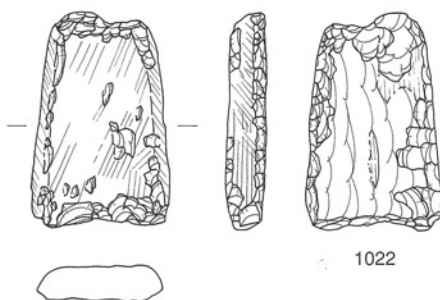
第199图 SP 出土遺物実測図(6)



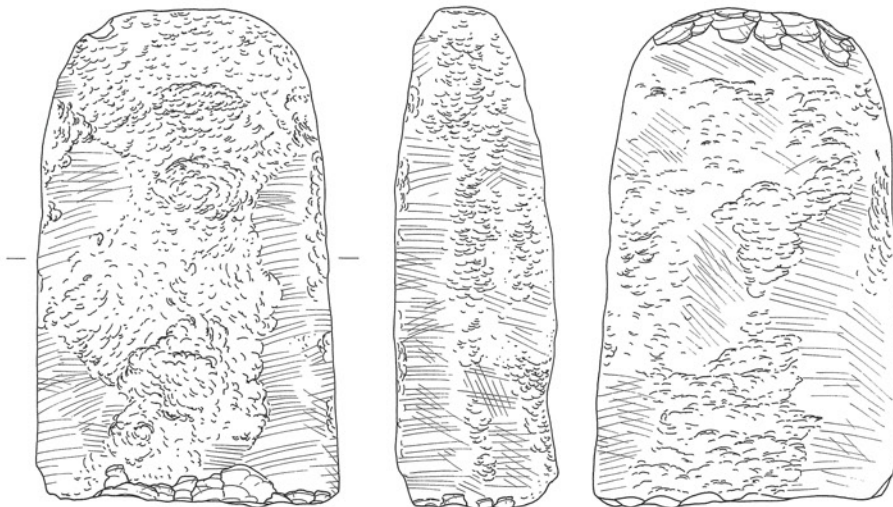
1021



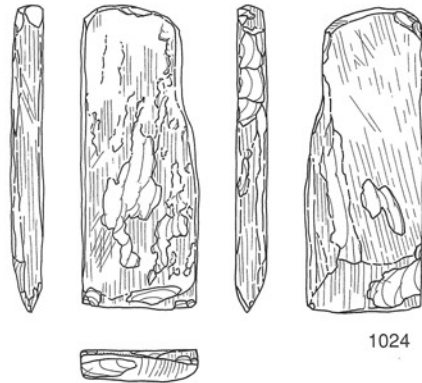
1020



1022



1023



1024



第200图 SP 出土遺物実測図(7)

柱穴 438 (SP1438)

L-21グリッドから検出された長さ0.7m、幅0.5m、深さ30cmの不整形な形態の遺構で、一部を他の遺構に切られている。遺構内には土器片や炭化物を少量混入する締まりの良いシルト質土が堆積している。

出土遺物

988は細く締まった頸部と外上方に大きく開く直線的な口縁部を持つ壺である。口縁端部は上方にわずかに拡張され、拡張部には幅広い凹線が巡らされている。また口縁部外面は広く横ナデ調整が施され、頸部との境には断面三角形の貼付突帯が1本タガ状に廻されている。

柱穴 459 (SP1459)

M-22グリッドで検出された長さ0.5m、幅0.3m、深さ20cmの不整楕円の形態の遺構である。遺構内には炭化物や礫を多く混入するシルト質土が堆積している。

出土遺物

1021は片岩を素材にした柱状片刃石斧である。頭部の一部を欠くことや、部分的に敲打痕が残されていることから敲石に転用したと考えられるが、表裏両面には研磨が加えられながらも調整の際の剥離の痕跡がそのまま残されている。

柱穴 478 (SP1478)

M-22グリッドで検出された直径0.2m、深さ20cmの円形の小型の遺構である。

出土遺物

1022は磨製石斧の破片に調整を加え、部分的に研磨を行ったものである。おそらく再度磨製石斧として使用されたものと考えられるが下半部を欠くため、正確なことは不明である。

柱穴 491 (SP1491)

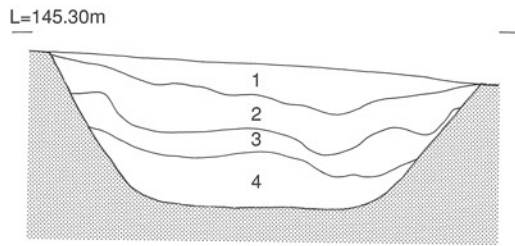
L-24グリッドで検出された直径0.4m、深さ20cmの円形の遺構である。遺構内には少量の土器片を含む粒子の細かい締まりのよいシルト質土が堆積している。

出土遺物

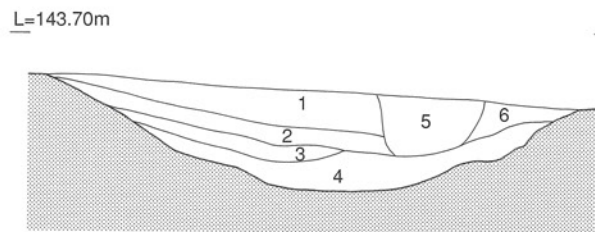
1002はサヌカイト製の打製石鏃である。先端部を欠失しているが凹基無茎式に分類されるものである。

柱穴 517 (SP1517)

M-25グリッドで検出された直径0.2m、深さ20cmの小型の円形の遺構である。遺構内には炭化物や礫を多く混入するシルト質土が堆積している。



- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 黄褐色 | 砂質土(10YR5/6) |
| 2. 褐色 | 砂質土(10YR4/4) |
| 3. 褐色 | 砂質土(10YR4/6) |
| 4. にぶい黄褐色 | 砂質土(10YR5/4) |



- | | |
|-----------|--------------|
| 1. にぶい黄褐色 | 砂質土(10YR5/4) |
| 2. にぶい黄褐色 | 砂質土(10YR4/3) |
| 3. にぶい黄褐色 | 砂質土(10YR4/3) |
| 4. にぶい黄褐色 | 砂質土(10YR4/3) |
| 5. にぶい黄褐色 | 砂質土(10YR5/4) |
| 6. にぶい黄褐色 | 砂質土(10YR5/4) |



第201図 SD1027 遺構断面図

出土遺物

339は結晶片岩製の打製石庖丁である。身部の半分を欠失しているが残された片方の端部にはくり込みが設けられている。背部の縁辺部が部分的に摩滅している。

柱穴 520 (SP1520)

M-25グリッドで検出された直径0.5m、深さ30cmの円形の遺構である。遺構内には炭化物と礫を含むシルト質土が堆積している。

出土遺物

1015は結晶片岩製の打製石庖丁である。身部の半分と残された端部の一部を欠失している。

柱穴 541 (SP1541)

O-24グリッドで検出された長さ0.6m、幅0.5m、深さ30cmの不整楕円の形態の遺構である。遺構内部には少量の土器片と多量の

礫を混入する粒子の細かい締まりの良いシルト質土が堆積している。

出土遺物

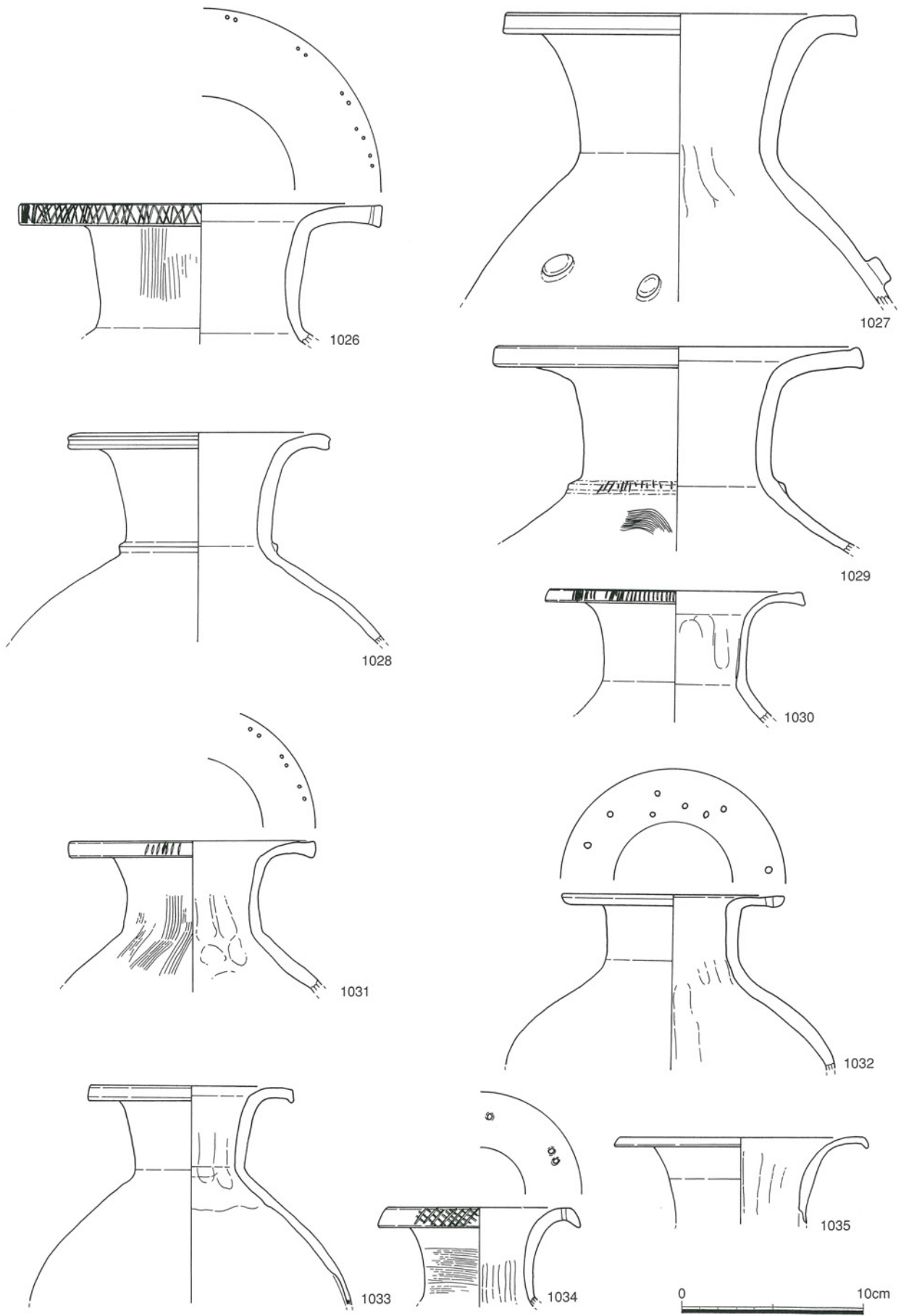
989は「く」の字に屈曲する頸部と直線的な短い口縁部を持つ甕である。頸部の境から下方に向かって「ハ」の字に開く直線的な体部は外方への膨らみが小さい。口縁端部は拡張されず円く仕上げられているだけである。

柱穴 613 (SP1613)

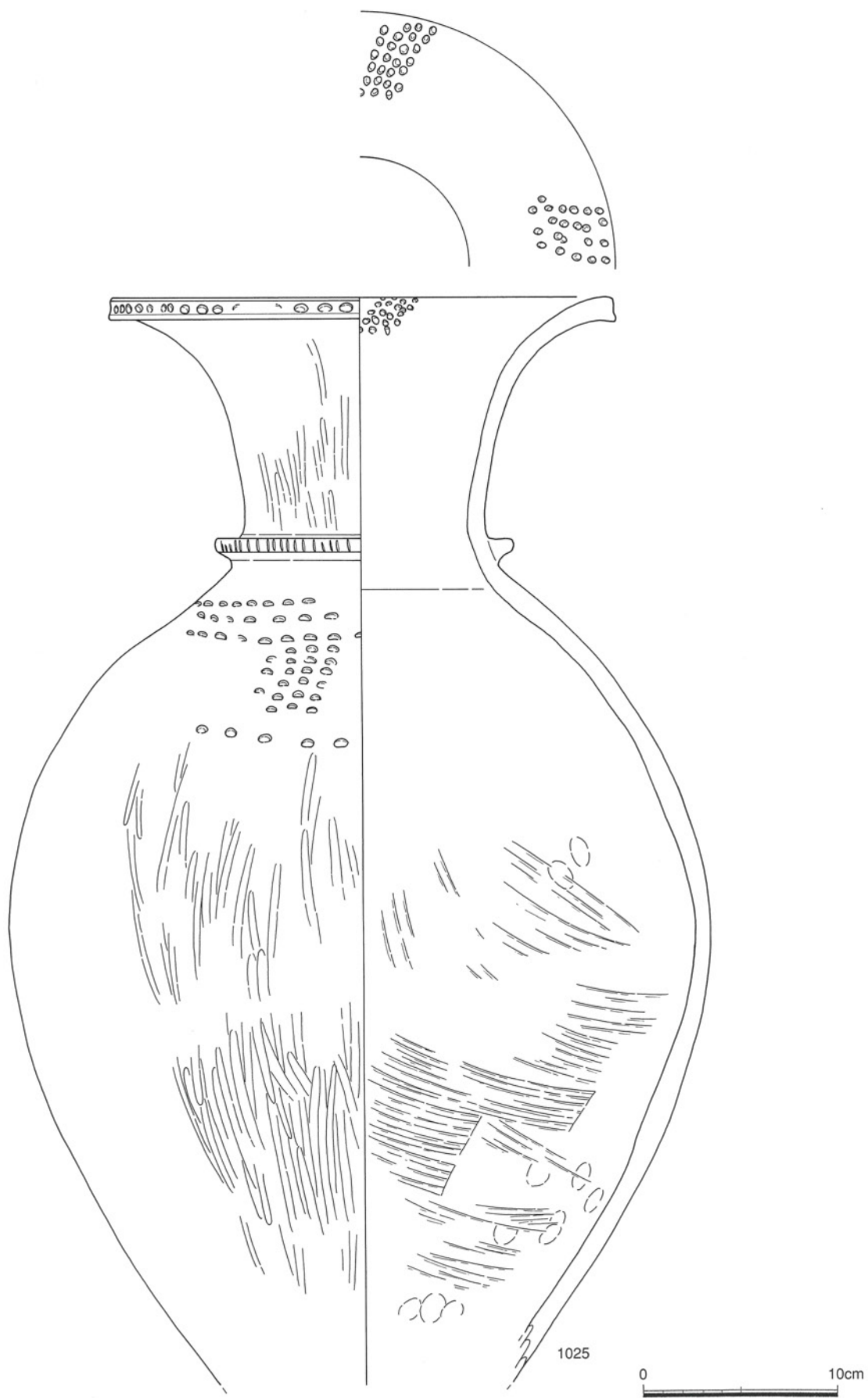
O-25グリッドで検出された遺構である。東側半分を削平されているが本来は直径約0.5m前後、深さ20cmの円形の遺構であったと考えられる。遺構内には炭化物と礫をそれぞれ少量ずつ混入する粒子の細かいシルト質土が堆積している。

出土遺物

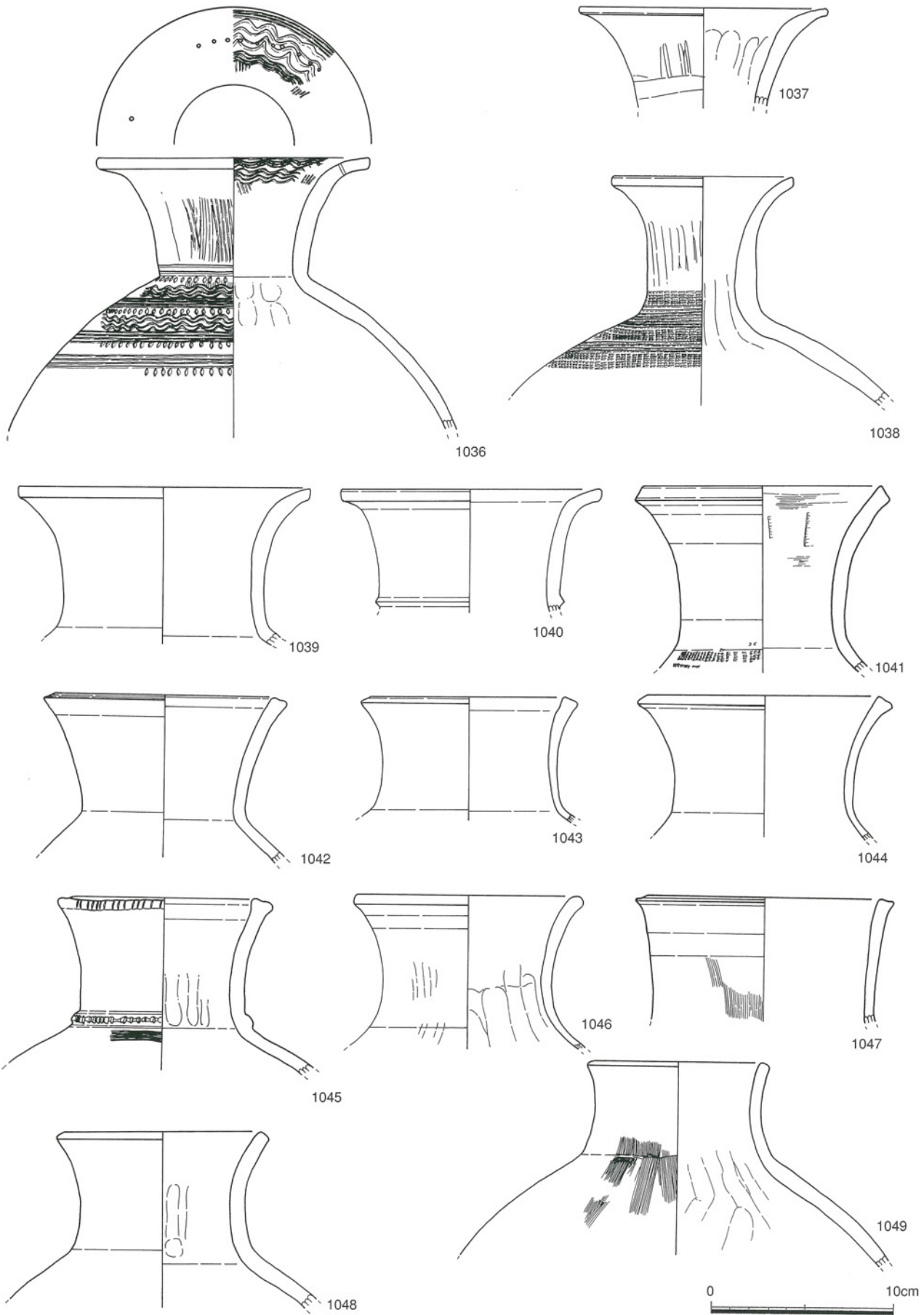
1016は両面に自然面を残す扁平な結晶片岩を使用した打製石庖丁、または打製石鋏と考えられる石器である。一端を欠くが側縁部には両面から調整が加えられ、断面はレンズ状を呈している。



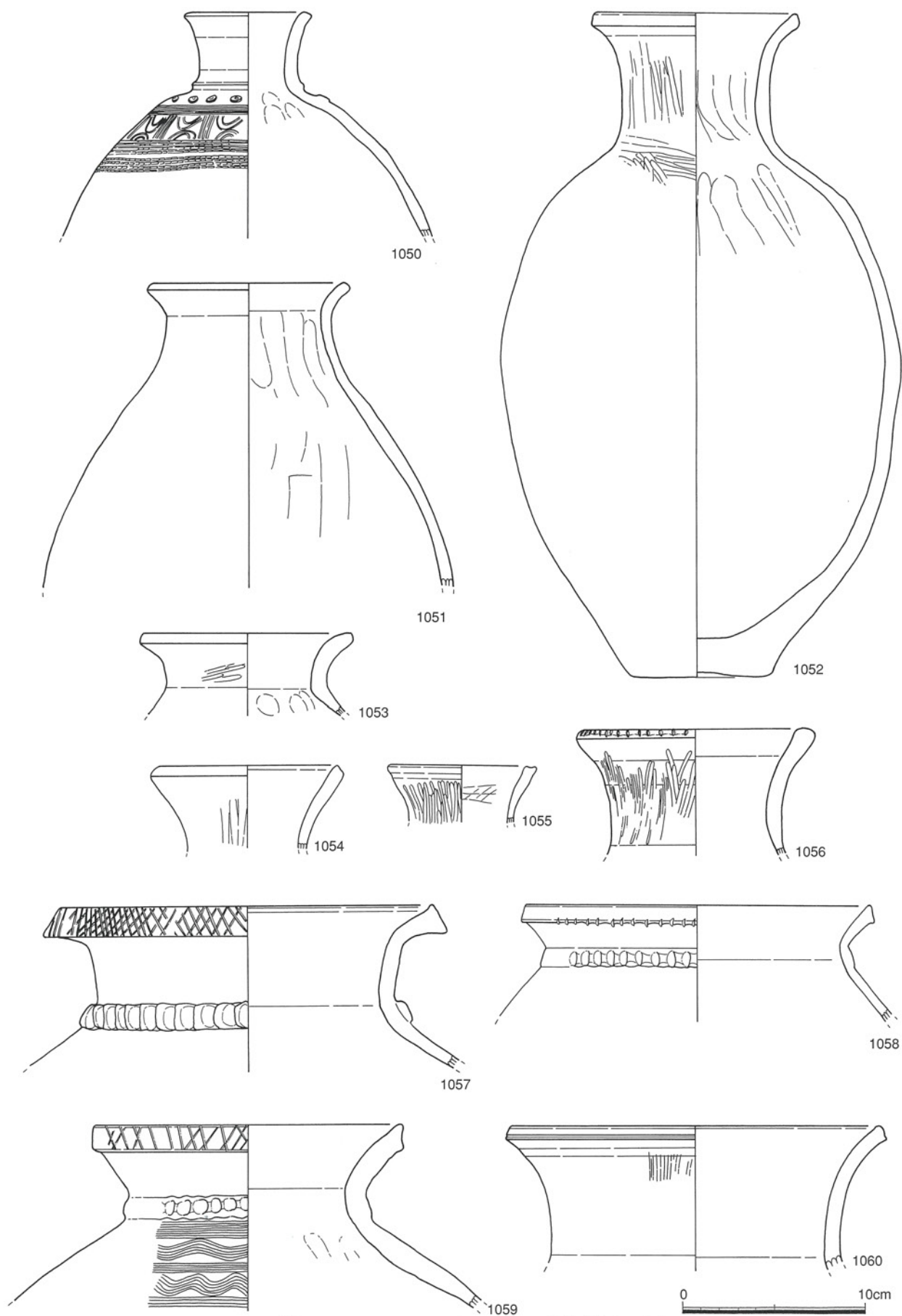
第203图 SD1027A地区 出土遗物实测图(2)



第202图 SD1027A地区 出土遺物実測図(1)



第204图 SD1027A地区 出土遗物实测图(3)



第205图 SD1027A地区 出土遗物实测图(4)

柱穴 694 (SP1694)

O-21グリッドで検出された長さ0.7m、幅約0.5m、深さ30cmの不整楕円の形態の遺構である。遺構内は礫を多く混入するシルト質土が堆積している。

出土遺物

1017は片面に自然面が残る結晶片岩の剥片を素材に使用した打製石庖丁である。身部の半分と残された端部の一部を欠失している。

柱穴 752 (SP1752)

Q-16グリッドで検出された直径0.3m、深さ20cmの円形の遺構である。

出土遺物

1003はサヌカイト製の打製石鏃である。基部の形態から凹基無茎式に分類され、先端は円く仕上げられている。

柱穴 776 (SP1776)

J-30グリッドで検出された直径0.4m、深さ40cmの円形の遺構である。

出土遺物

1023は大型の蛤刃の磨製石斧を敲石に転用したものである。部分的に研磨の跡を残すものの、全面に敲打痕が残されている。

柱穴 838 (SP1838)

Q・R-38グリッドで検出された直径0.4m、深さ30cmの不整円形の遺構である。遺構内には礫を少量混入する粒子の細かい黄褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

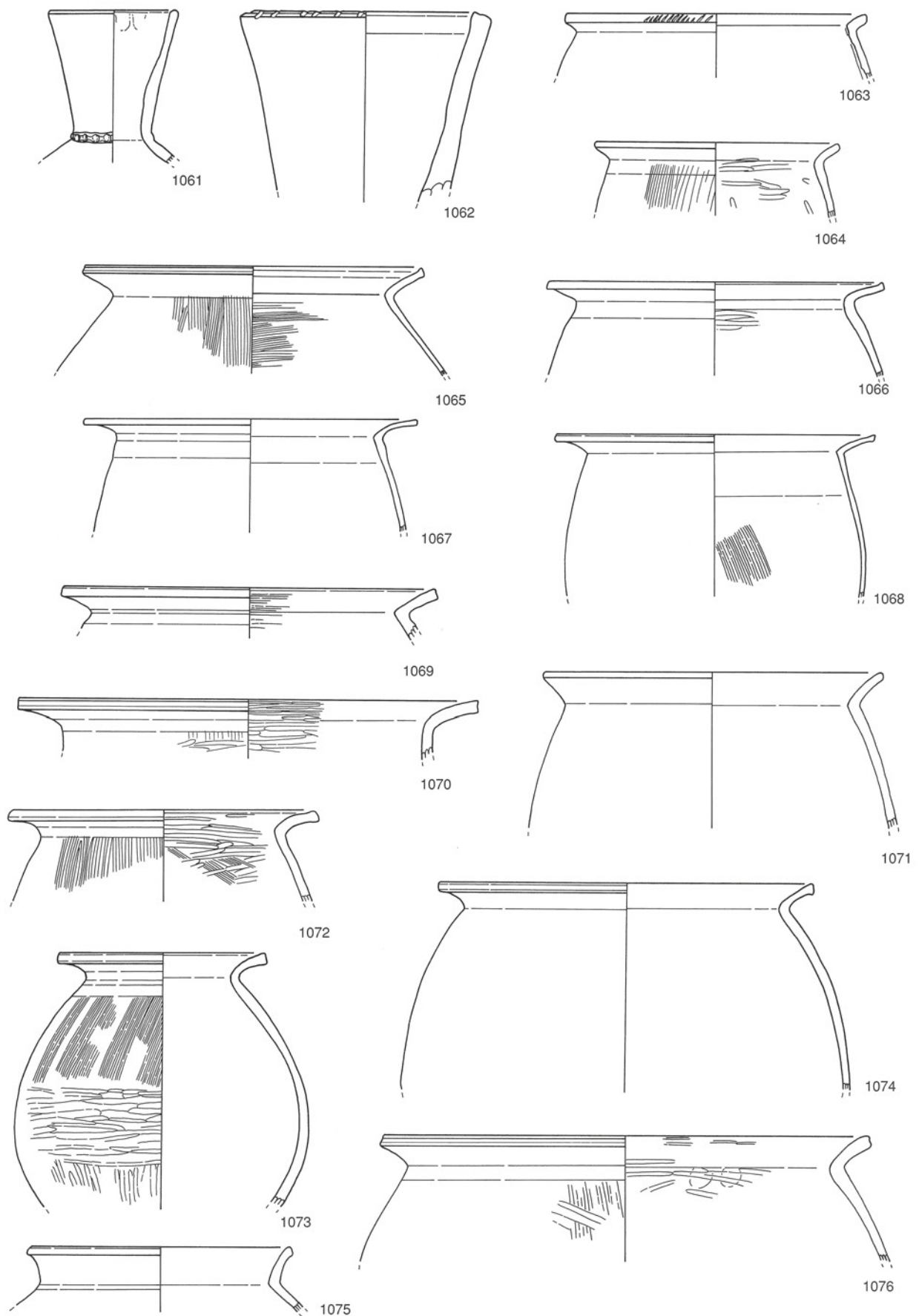
990は高杯の脚柱部である。杯部との境近くの破片と考えられ、外面には太めの沈線が平行して2本引かれ、内面には指頭によるナデまたは絞り目が残されている。

柱穴 842 (SP1842)

P・Q-36グリッドで検出された直径0.4m、深さ30cmの円形の遺構である。遺構内には礫を混入するしまりのよい褐色シルト質土が堆積している。

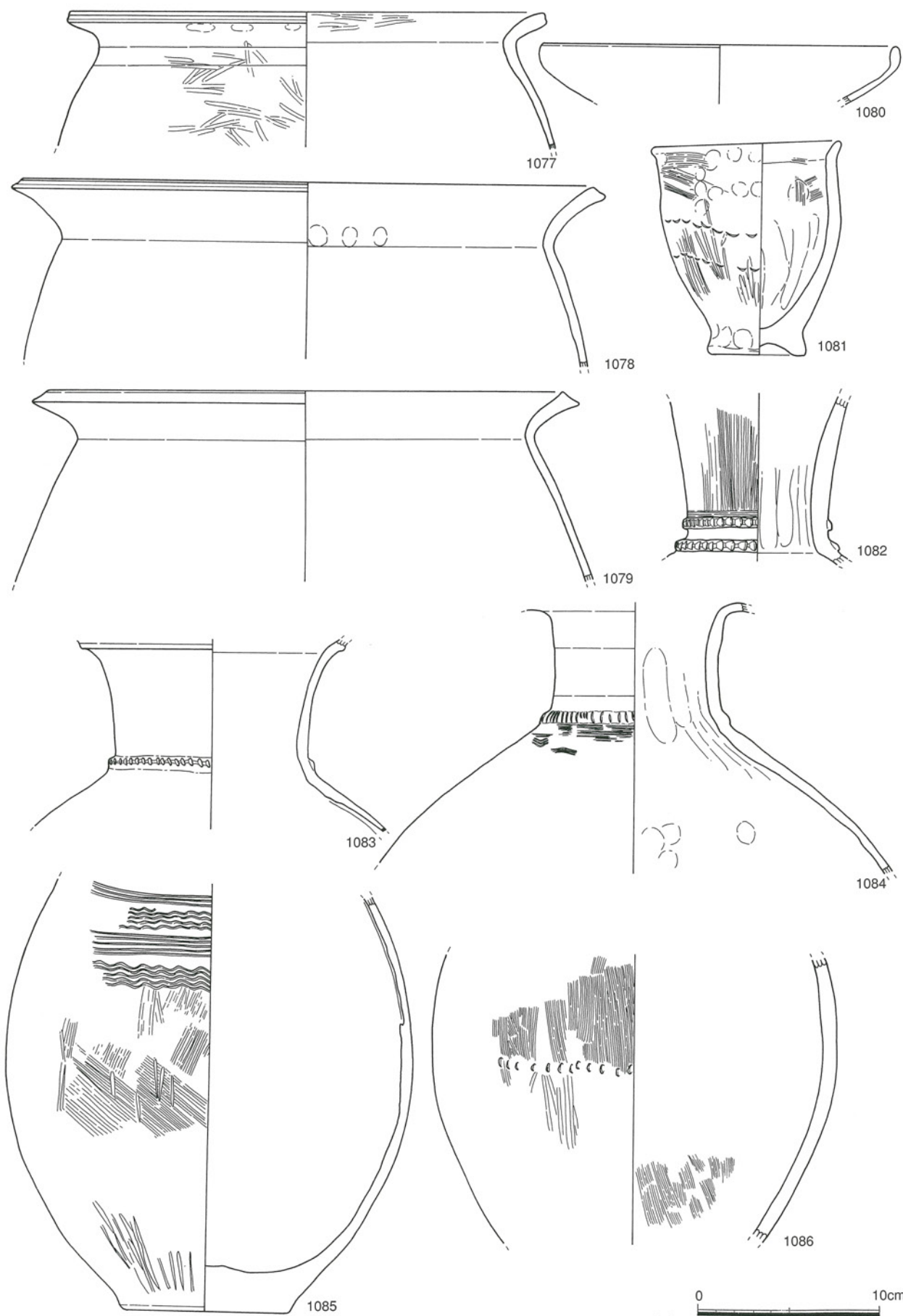
出土遺物

1004はサヌカイト製の打製石鏃である。側縁部が外湾する左右対称に仕上げられた身部は基部がわずかにくぼんでいる。



第206图 SD1027A地区 出土遗物实测图(5)





第207图 SD1027A地区 出土遗物实测图(6)

柱穴 860 (SP1860)

R-37グリッドで検出された直径0.3m、深さ30cmの円形の遺構である。遺構内には風化した角礫を多く混入する締まりのやや悪いシルト質土が堆積している。

出土遺物

991は「く」の字に屈曲する頸部と直線的な短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され凹線が2条巡らされている。また頸部直下の体部外面には強い横ナデが行われている。

柱穴 883 (SP1883)

S-27グリッドで検出された長さ0.4m、幅0.2m、深さ30cmの楕円形の遺構である。遺構内には風化した多量の角礫とともに、焼土粒や炭化物が少量シルト質土の中に混入されている。

出土遺物

1005は幅3.3cmを計る凹基無茎式に分類されるサヌカイト製の大型の打製石鏃である。基部は丁寧な調整が加えられているが、側縁部の調整は非常に粗い。

柱穴 900 (SP1900)

Q-26グリッドで検出された直径0.7m、深さ40cmの不整円形の遺構である。

出土遺物

1006はサヌカイトの剥片を折断して得られたわずかな突起を調整して刃部を作り出した打製石錐である。先端部分は使用により摩耗している。1007は不整三角形に折断された剥片の二辺を打面にして両極打法による剥離が行われている。

柱穴 911 (SP1911)

R-26グリッドで検出された直径0.3m、深さ20cmの円形の遺構である。遺構内には多量の礫の他、炭化物を少量混入する黄褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

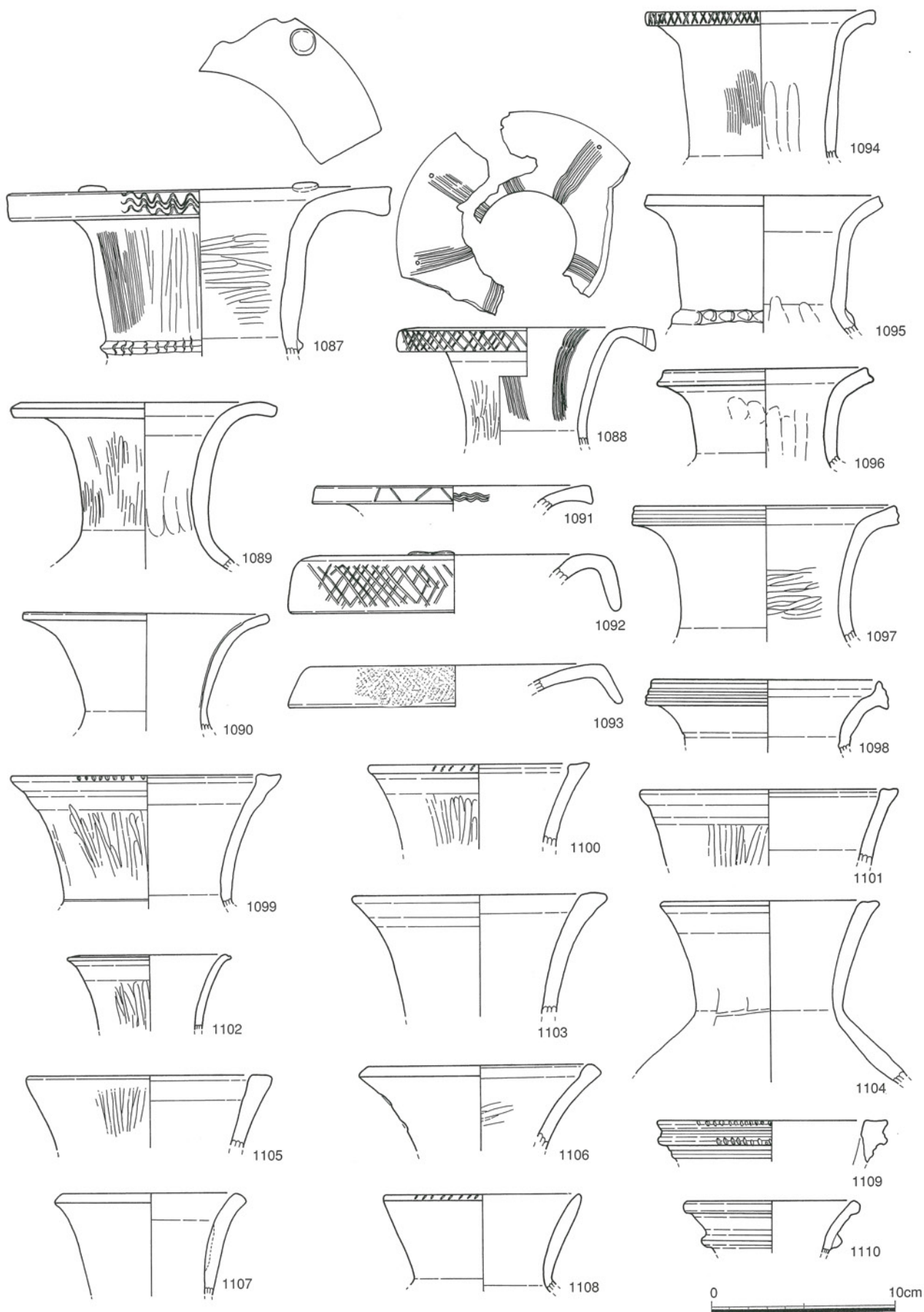
1008はサヌカイトの剥片の縁辺部に簡単な調整を加えて形を整えた打製石鏃である。調整は剥片の遠端部縁辺と打点付近に行われているだけである。

柱穴 918 (SP1918)

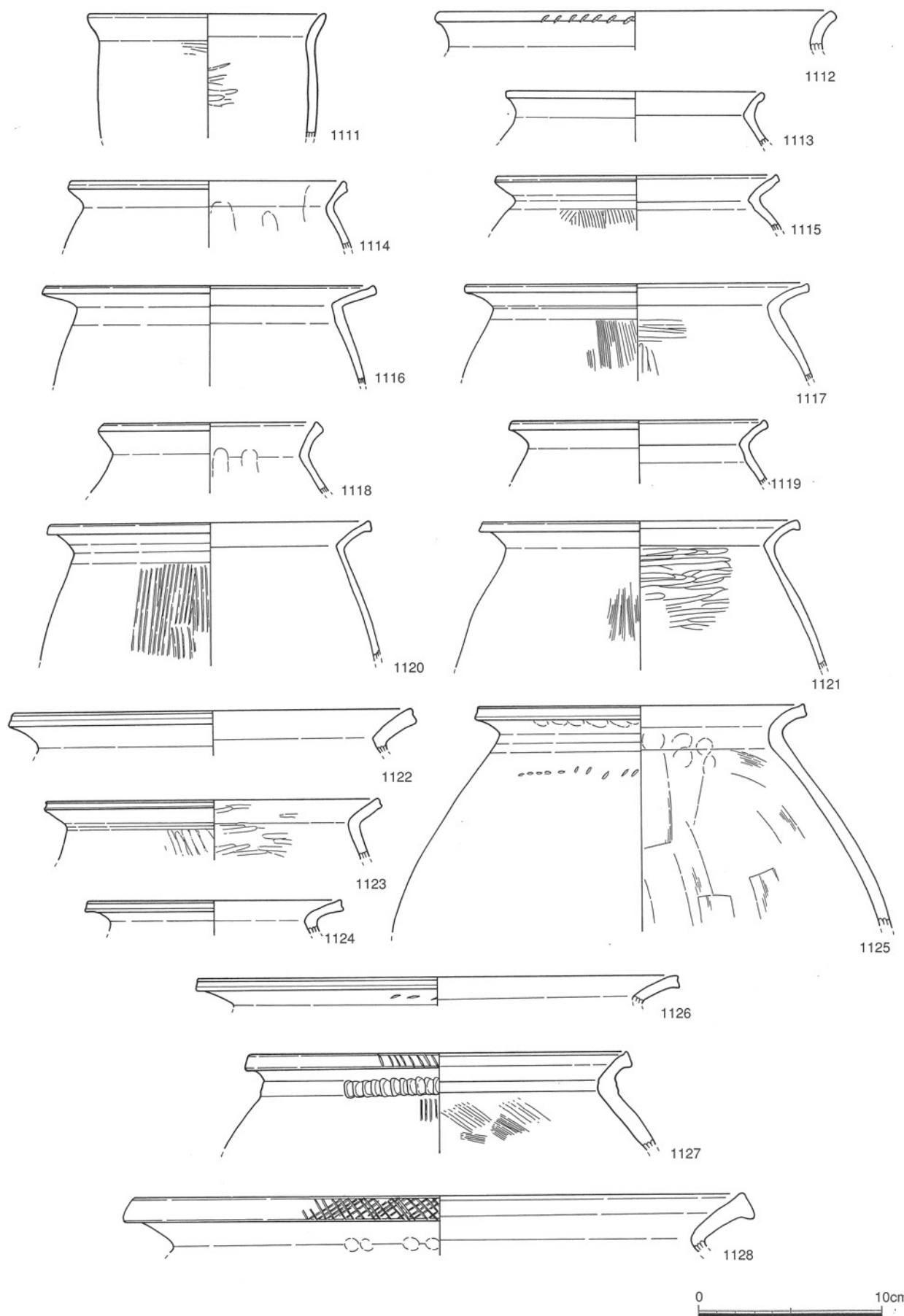
R-26グリッドで検出された直径0.3m、深さ20cmの円形の遺構である。遺構内には炭化物を少量混入する締まりのよい黄褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

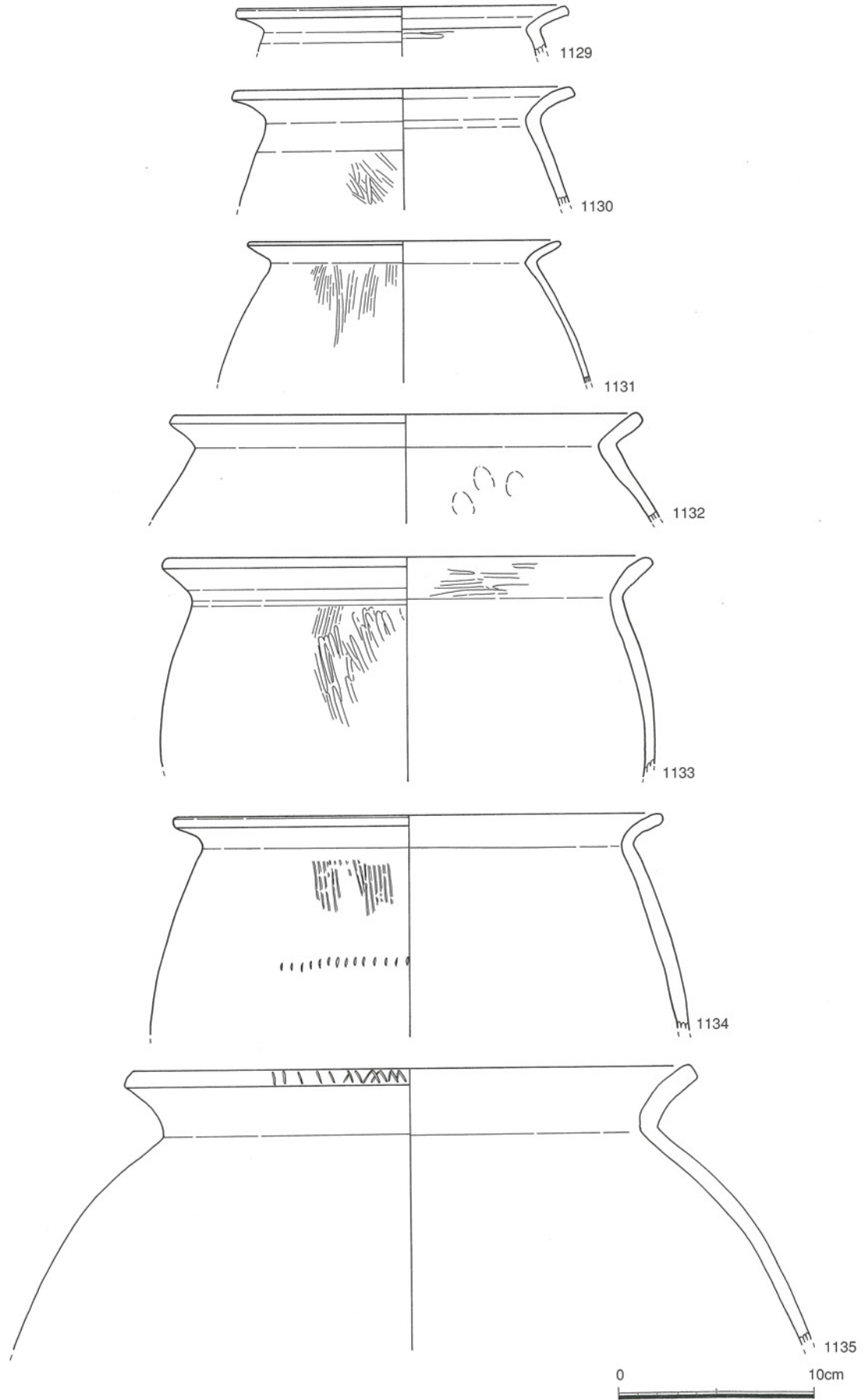
1009はサヌカイト製の打製石鏃である。平基無茎式に分類される左右対称に近い身部は先端部をわず



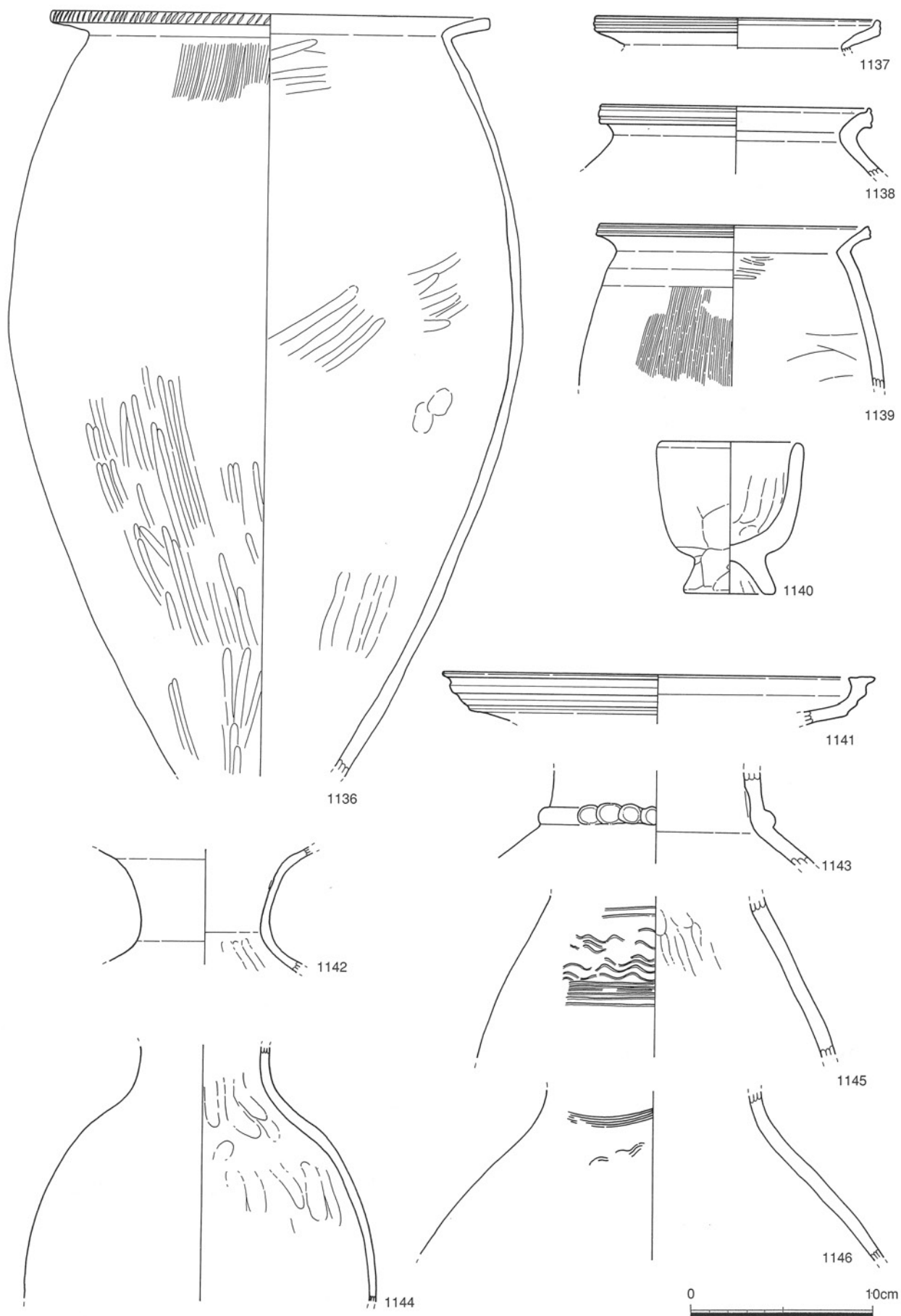
第208图 SD1027B地区 出土遗物实测图(1)



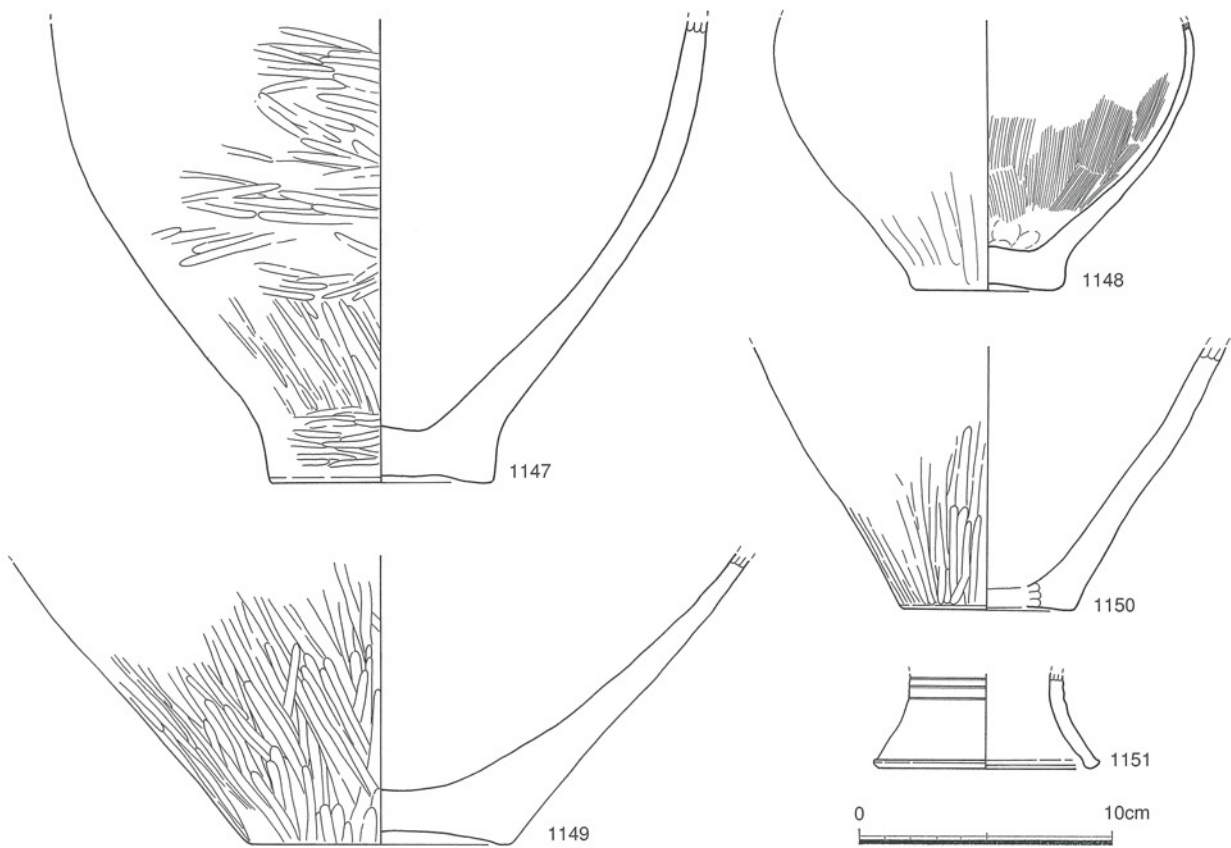
第209图 SD1027B地区 出土遗物实测图(2)



第210图 SD1027B地区 出土遗物实测图(3)



第211图 SD1027B地区 出土遗物实测图(4)



第212図 SD1027B地区 出土遺物実測図(5)

かに欠失するが、丁寧な調整が加えられている。

柱穴 919 (SP1919)

R-26グリッドで検出された直径0.3m、深さ30cmの円形の遺構である。遺構内には風化した角礫を多く混入するシルト質土が堆積している。

出土遺物

1010はサヌカイト製の打製石鏃である。先端部をわずかに欠失する身部は側縁部が直線的で左右対称に作られている。

柱穴 922 (SP1922)

R-26グリッドで検出された長さ0.3m、幅0.2m、深さ20cmの不整楕円の遺構である。遺構内には炭化物を少量混入する黄褐色シルト質土が堆積している。

出土遺物

1024は片岩製の扁平片刃石斧である。刃部や側面に整形の際の剥離の痕跡が残されているが、全体的

に丁寧な研磨が施されている。

溝

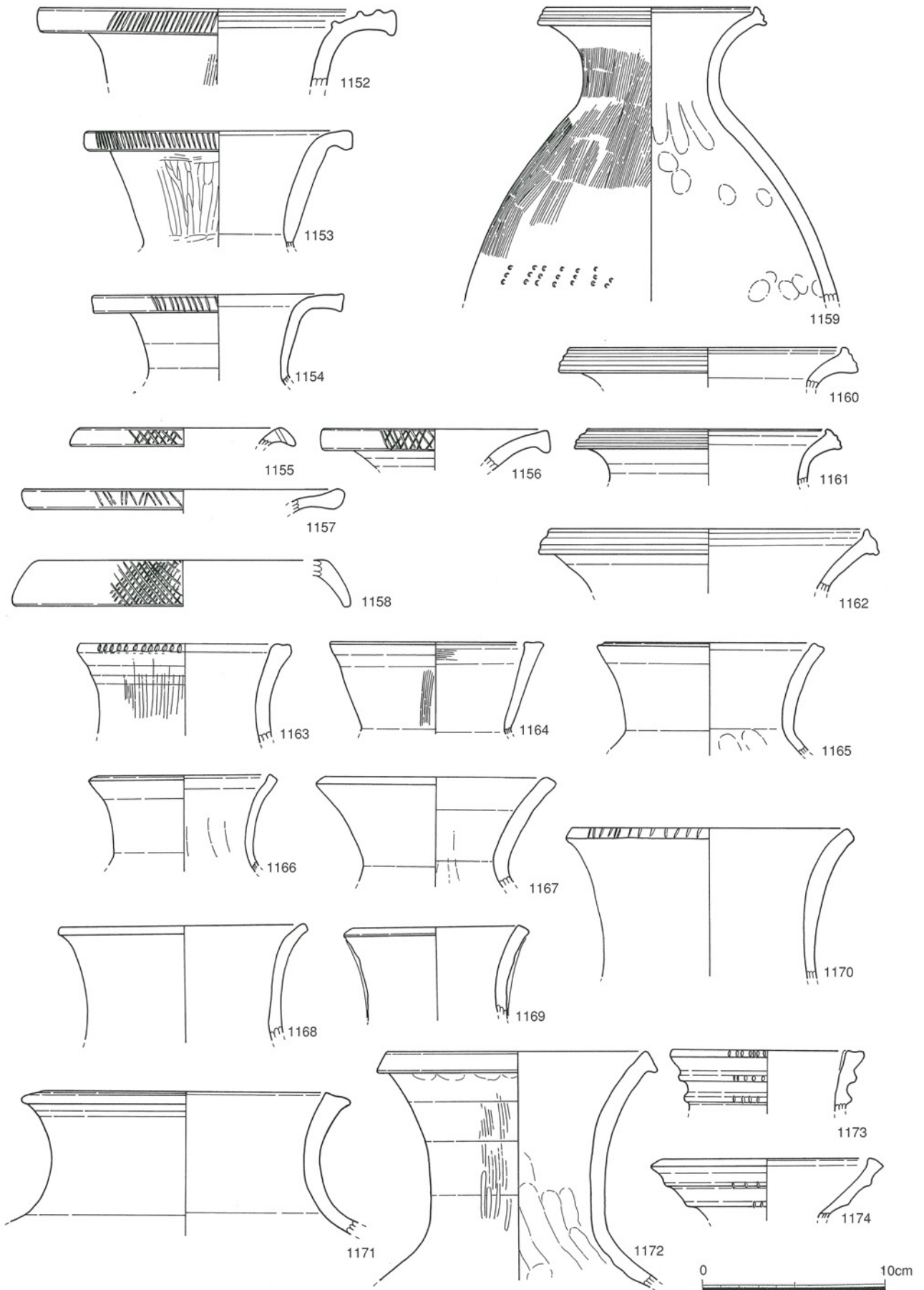
溝 27 (SD1027)

調査区内を緩やかに弧を描くようにして北西から南東に向かって延び、最後は東側の段丘崖に達する長さ100m余りの大規模な溝である。遺構内の覆土はきめの細かいシルト質の土壌で、水が流れたり滞水したような痕跡は認められない。遺構内のほぼ全域で弥生時代の遺物が多量に出土しているが、それらは遺物の出土が途切れる区域を挟んでおおむね3つのグループに区分できる。これを仮に北西方向からA・B・C地区として出土遺物を記述していきたい。

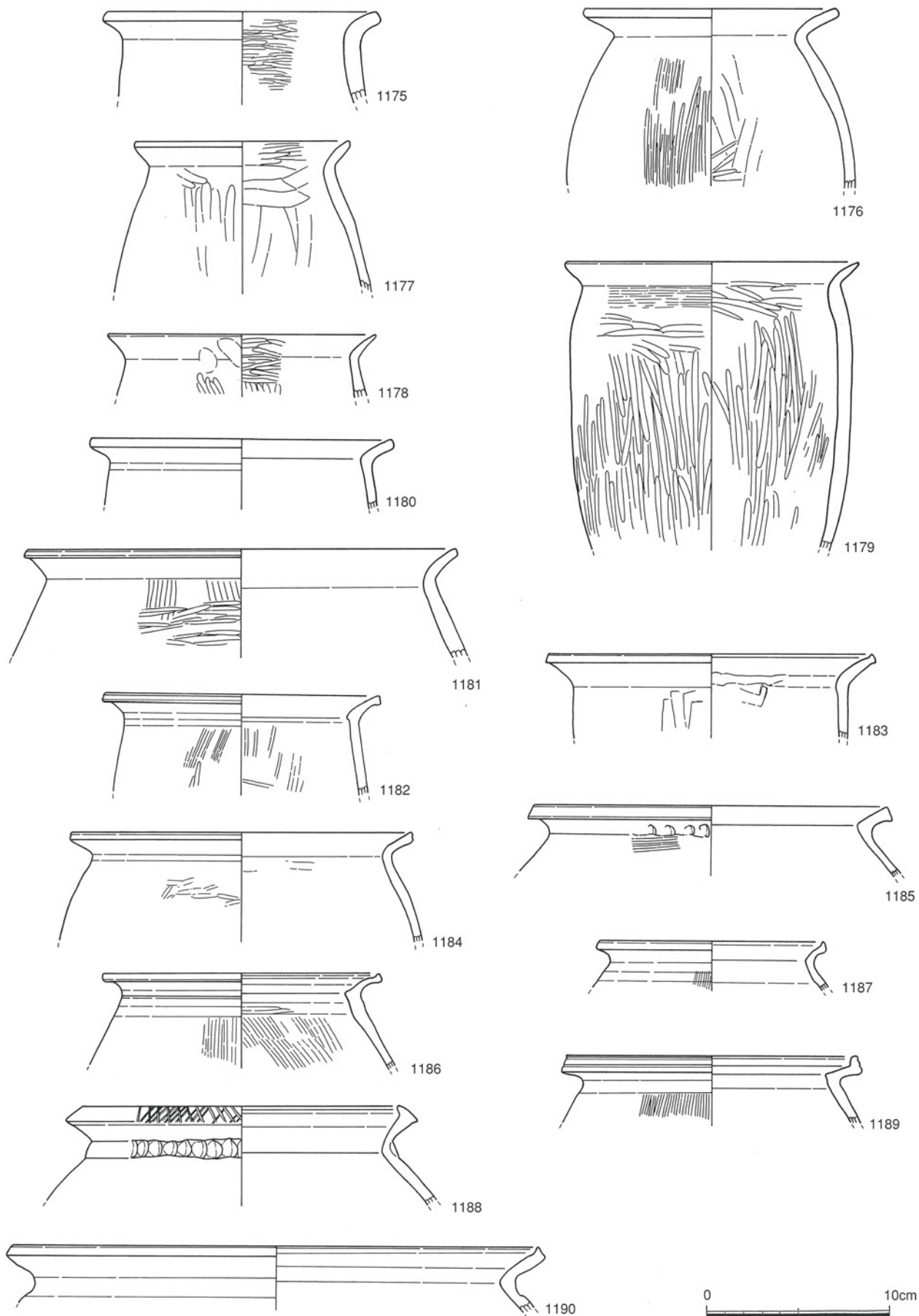
出土遺物

(A地区出土遺物) 調査区内を南北に走る町道の西側部分で長さ約10m余りの範囲から出土した遺物である。B地区との間には遺物の出土が途切れる空間が約16mある。他の2地区とは異なり、遺構の上部は耕作による削平を受けているが、遺物の出土数は多く、多量の礫とともに比較的大型の土器片があたかも詰め込まれたかのような状態で出土している。出土した弥生土器は大半が二次加熱を受け、中には発泡した個体も認められる。土器の器種は圧倒的に壺が多く、高杯はごくわずかである。1025は筒状の頸部と外反しながら上方に大きく開く朝顔型の口縁部を持つ広口壺である。口縁端部はわずかに肥厚し、平坦に仕上げられている。体部は長さが長いのに比較して肩の膨らみが小さな形態で頸部との境には刻目の施された断面三角形の貼付突帯が1本廻されている。また、口縁端部や口縁部内外面には半截竹管か棒の先端を施文具に用いたと考えられる連続する刺突が加えられ、突帯直下の体部上半にも同様の文様がつけられている。1026～1035も筒状の頸部と外上方に大きく開く口縁部を持つ広口壺であるが、口縁部は頸部から「く」の字に屈曲して水平方向にのびるものが多い。口縁端部は1026・1027のように水平のものや、1028・1030・1031のようにわずかに垂下するもの、1034・1035のように垂下するものなどさまざまである。体部は1027のように膨らみのやや小さいものと1028・1032のように大きく張り出すものがある。口縁部には斜格子目や刻目などが口縁端部に施されたり、1026・1031・1032・1034のように口縁部に穿孔が加えられているものがあるが、凹線文が施されているものはない。また、体部には頸部との境に1027・1028のように貼付突帯が廻されるものや、1026のようにボタン状の円形浮文がつけられたもの、1028のように櫛描波状文が描かれたものなどが出土している。1036は筒状の頸部と外反しながら上方に開く朝顔型の口縁部を持つ肩のよく張った球形の壺で、口縁部は若干短く端部も薄くなっている。口縁部内面と体部に櫛描による直線文や波状文、列点文などが多段に描かれた加飾性の強い土器である。1037・1038の壺も朝顔型の口縁部をもつ壺であるが、頸部が細く締まり口縁部がさらに短くなっている。1038は頸部下半から体部上半かけて簾状文が描かれている。1039～1049は筒状の頸部と緩やかに外反する短い口縁部を持つ壺で、なかには1047や1049のように口縁部がほとんど直立するものが含まれている。

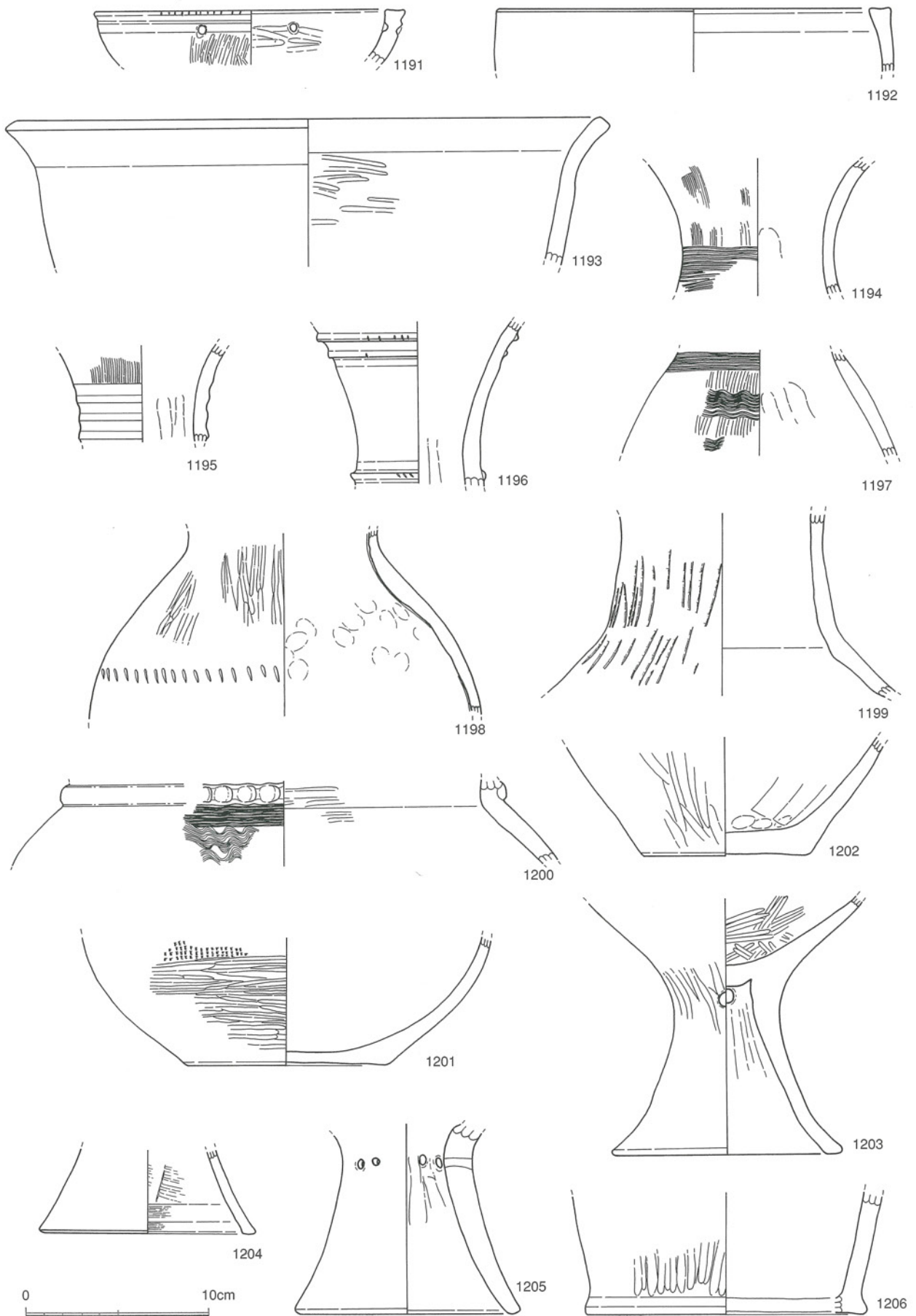
口縁端部は1039～1041のように平坦に仕上げられたものや、1042～1045・1047のように内外方に拡張され頂部がわずかにくぼむもの、1046・1049のように円く仕上げられたものが出土している。文様はこれまでの壺と比較して少なく、口縁部に文様が施されたものは1045の端部への刻目以外は見あたらない。



第213图 SD1027C地 区出土遗物实测图(1)

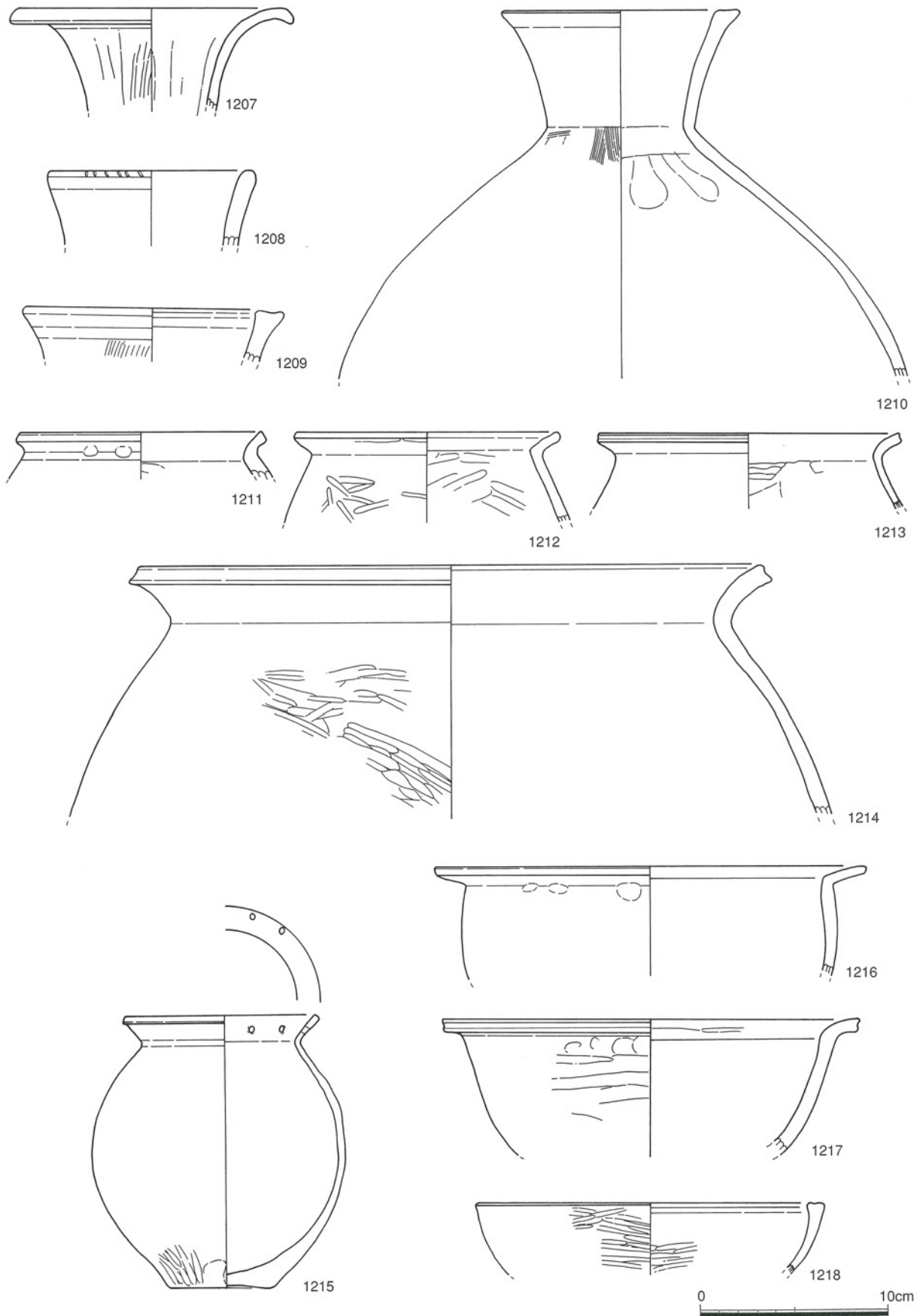


第214图 SD1027C地区 出土遗物实测图(2)

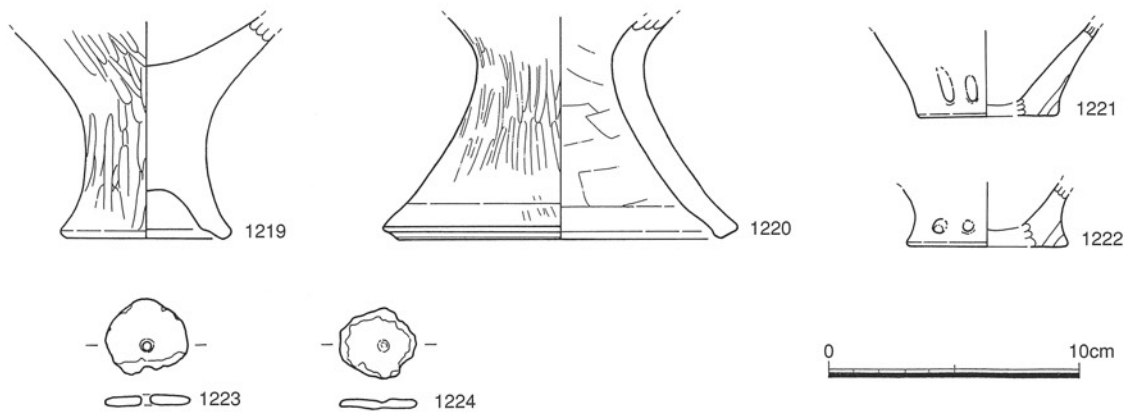


第215图 SD1027C地区 出土遺物実測図(3)

い。体部については頸部との境に貼付突帯が廻されたものが2点出土している以外は、1041のように簾状文が描かれたものや、1045のような櫛描直線文が残されているものが1点ずつ出土しているにすぎない。1050は球形の体部と上方に向かってわずかに開く短い口縁部を持つ壺である。口縁端部は円く仕上げられ、体部と頸部の境には突帯が廻されている。体部上半は櫛描の直線文と簾状文によって水平方向に区画され、さらにその中を3本一単位の沈線で縦に区切り、各区画のなかは沈線によって弧線文が描かれている。また、頸部の突帯と平行線文の間には円形浮文が付けられている。文様から土佐との関連が考えられる遺物である。1051は体部の中央から下半にかけて膨らみを持つ卵形の形態の体部と、頸部から緩やかに外反する短い口縁部を持つ壺で、口縁端部は円く仕上げられている。1052は肩の膨らみの小さい長楕円形の体部と、筒状の頸部から緩やかに外反する短い口縁部を持った壺である。口縁端部は円く仕上げられ、底部は弱い上げ底である。1053も頸部から緩やかに外反する短い口縁部を持つ壺で、口縁端部は円く仕上げられている。1054は頸部から緩やかに外反しながら上方に向かつてのびる口縁部を持つ壺で、口縁端部は平坦に仕上げられている。1055も1054と同様の特徴を持つ壺の口縁部であるが、口縁端部の頂部がわずかにくぼんでいる。1056は緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部が端部近くでわずかに内湾する受け口状の口縁部を持つ壺である。口縁端部は円く仕上げられ、刻目が施されている。1057は筒状の頸部から「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ壺である。口縁端部は上方に拡張され平坦に仕上げられた拡張部には斜格子目文が付けられている。また、頸部と体部との境には指頭圧痕の施された幅広の貼付突帯が1本廻されている。体部は大きく膨らんでいる。1058は貼付突帯が付けられた頸部から外上方にのびる直線的な短い口縁部を持つ壺である。口縁端部は下方に拡張されて平坦面を作り下部には刻目が加えられている。1059も貼付突帯の付けられた頸部から外反しながら上方にのびる短い口縁部を持つ壺である。平坦に仕上げられた口縁端部は中央部がわずかにくぼみ、不規則な斜格子目文が付けられている。1060は頸部から緩やかに外反しながら上方に向かつてのびる口縁部を持つ大型の壺である。口縁端部は平坦に仕上げられ凹線が1条巡らされている。1061は直線的に上方に向かつてのびる口縁部を持つ壺である。口縁端部は内外方に拡張され頂部はわずかにくぼんでいる。1062も1061同様、頸部から直線的に上方に向かつてのびる口縁部を持つ壺で、口縁端部は外方にのみ拡張されている。1063～1079は甕である。1063・1064は、やや膨らんだ体部「く」の字に屈曲する頸部からのびる直線的な短い口縁部を持つ甕である。いずれも口縁端部は円く仕上げられ、1063の口縁端部には連続する刻目が施されている。1065・1066は「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら上方に向かつて大きく開く口縁部を持ち、口縁端部がわずかに上方に拡張されているものである。1065の体部は「ハ」の字に大きく広がっているが、1066ではわずかに膨らむ程度である。1067・1068も「く」の字に屈曲する頸部から上方に向かつて大きく開く口縁部を持つ甕であるが、口縁部がわずかに外反し端部も円く仕上げられている。頸部の屈曲は鋭角で屈曲部内面がわずかではあるが内側に突き出ている。また体部の膨らみは小さく中央部が若干膨らむ程度である。1070は頸部から大きく外反しながらほぼ水平方向にのびる直線的な口縁部を持つ甕である。口縁端部は平坦で中程がわずかにくぼみ、体部はほとんど膨らみを持たない。1071～1073は頸部から大きく外反しながら上方に向かつて開く口縁部を持つもので、口縁端部はわずかに肥厚し円く仕上げられている。頸部の屈曲は鈍く体部は中央部が大きく膨らんでいる。1076・1077も大きく外反し肥厚する端部の円い口縁部と、大きく膨らんだ球形の体部を持つ大型の甕である。口縁端部は中央がわずかにくぼんでいる。1078・1079は頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部と、膨らみの小さい体部を持つ大型の甕である。口縁端部は外方に拡張され、頂部



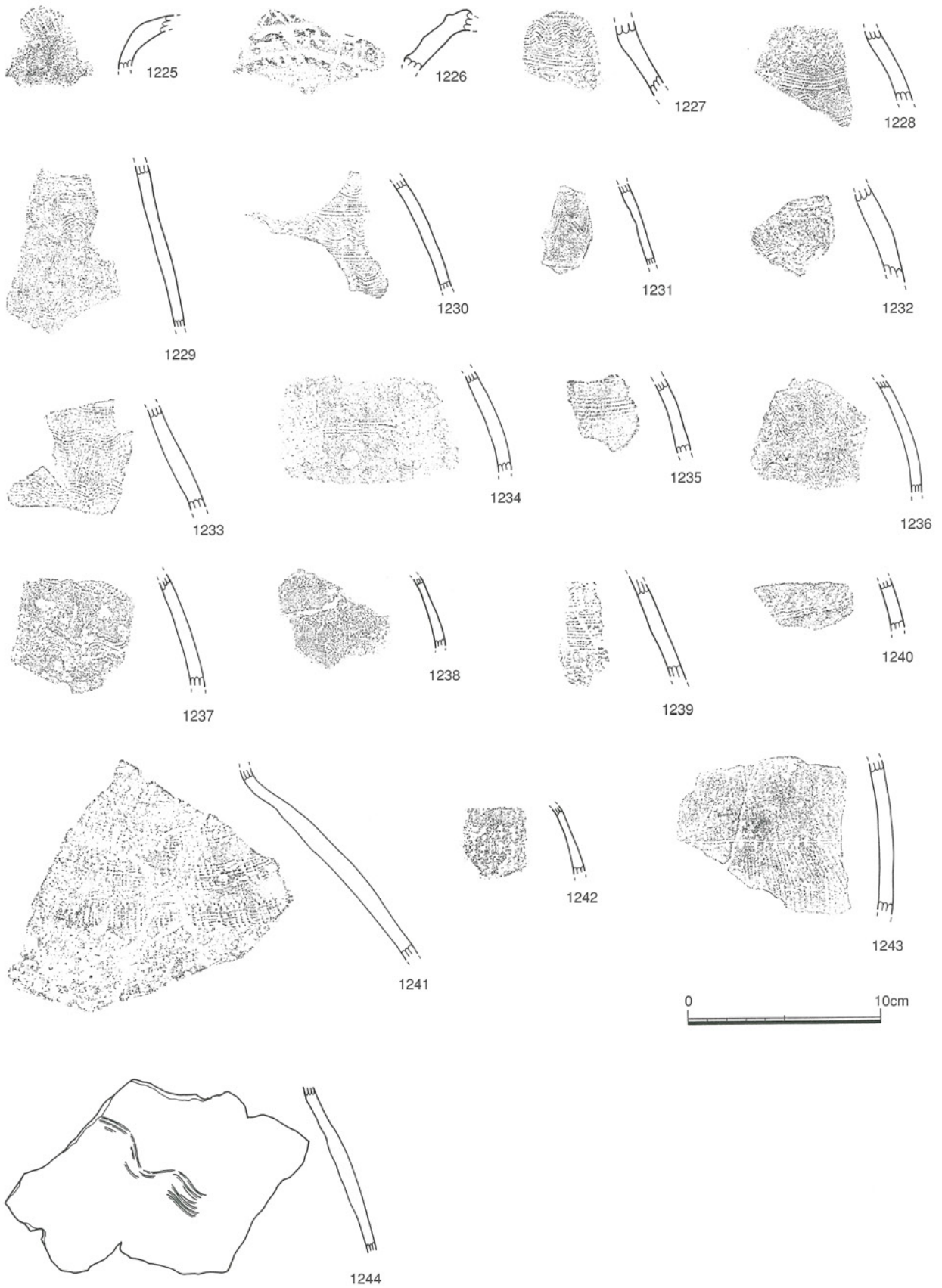
第216图 SD1027 出土遺物実測図(1)



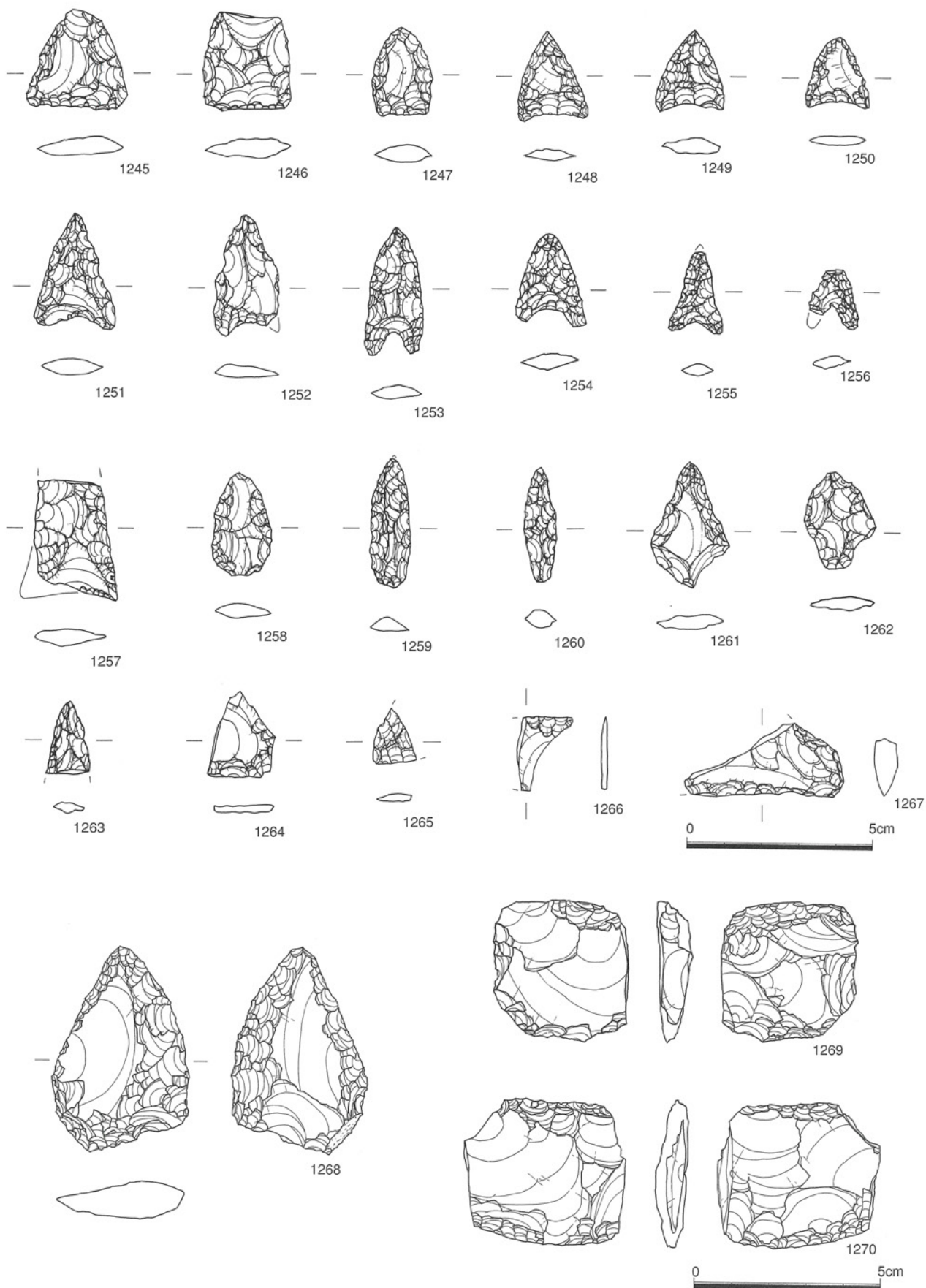
第217図 SD1027 出土遺物実測図(2)

はわずかにくぼんでいる。口縁部がやや長い。頸部の屈曲は鈍い。1080は浅い体部と、端部が内側に向かって大きく内湾する口縁部を持つ高杯である。口縁部は肥厚し端部は円く仕上げられている。1081は緩やかに内湾しながら上方に向かってのびる体部と、わずかに外反する短い口縁部を持つ鉢である。口縁端部は円く仕上げられ、底部には低い高台がつけられている。外面全体に指頭圧痕の痕跡が多く残され、体部中程には爪形文が2列巡らされている。1082は上方への開きの小さい直線的な頸部と、膨らみの大きい体部を持つ壺と考えられるもので、頸部と体部との境には指頭圧痕の施された突帯が2本廻されている。1083・1084は球状の体部と筒状の頸部を持った壺である。いずれも頸部と体部の境に刻目の施された貼付突帯が廻されている。頸部は1083が上方に向かってわずかに開くものに対して、1084はほぼ円柱状を呈している。また、1083が口縁部と頸部との境に貼付突帯が付けられた痕跡があるのに対して、1084では口縁部が頸部との境で「く」の字に強く屈曲した後、水平方向に張り出している。1085は楕円形の比較的長い体部を持つ壺である。体部上半には櫛描による平行線文と波状文が交互に描かれている。

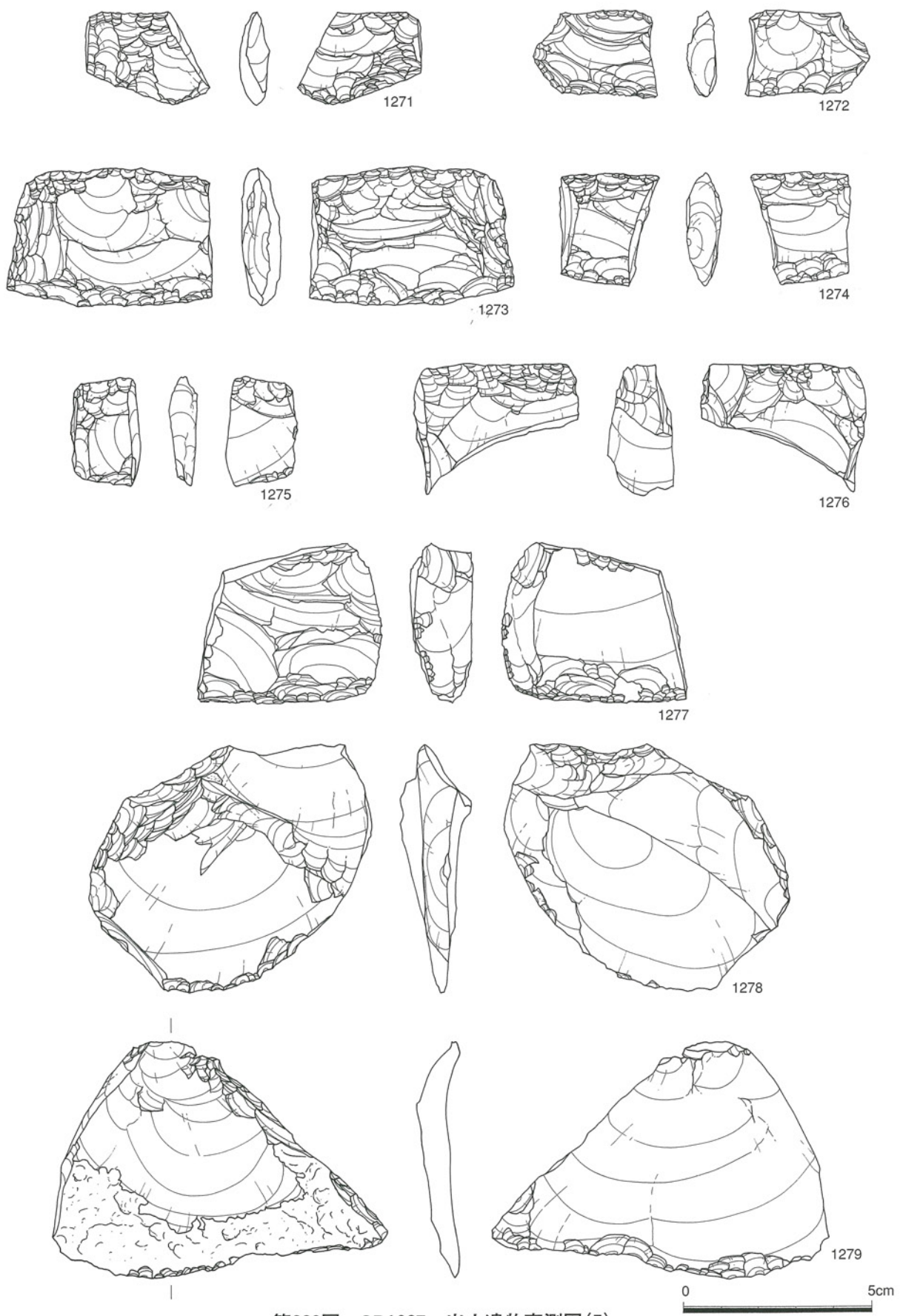
(B地区出土遺物) 町道を挟んでA地区の東側に位置し、竪穴住居跡SB1026、土坑SK1129が隣接している。遺物の広がりには20mと長く、土坑SK1129付近に遺物が最も集中するが、南東に向かうほど遺物の密度が低くなり、C地区との間には約8mの遺物の途切れた空間がある。遺構内の堆積には水が流れた痕跡は認められないが13m離れた遺物同士が接合する例があることから考えると、廃棄当時の位置関係をそのまま保った状態ではなく、かなり移動していることが考えられる。1087は筒状の頸部から「く」の字に屈曲しほぼ水平方向にのびる口縁部を持つ広口壺で、肥厚し平坦に仕上げられた口縁端部には櫛描波状文が描かれている。さらに口縁部内面には円形浮文が付けられ、頸部と体部の境には刻目が施された貼付突帯が1本廻されている。1088～1093も筒状の頸部と外反しながら上方に向かって大きく開く朝顔形の口縁部を持つ壺である。口縁端部は平坦、または円く仕上げられているが、中には1092・1093のように下方に向かって大きく垂下するものもある。口縁端部を中心に施される文様はさまざま、1088・1092のような斜格子目文をはじめ1093のような櫛先を用いた刺突文や1091のような口縁部内面に櫛描波状文が施されるもの、1088のような縦方向の直線文が施されたものなどが出土している。1094～1097は筒状の頸部と、「く」の字に屈曲して外上方に開く口縁部を持つ壺である。口縁部は直線的で1087と比較すると長さが短い。口縁端部は肥厚して平坦に仕上げられただけのものから、1094のように



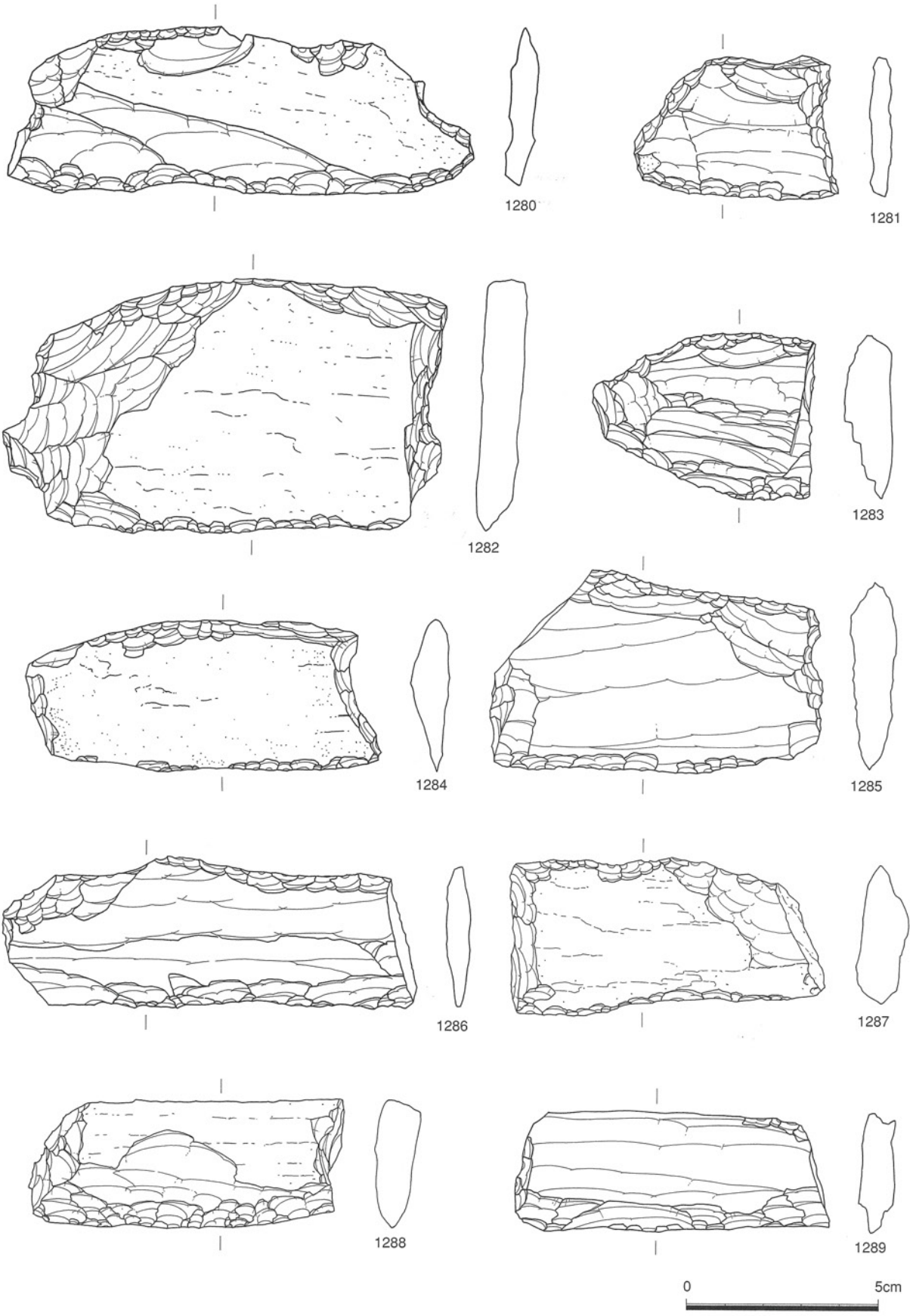
第218图 SD1027 出土遺物実測図(3)



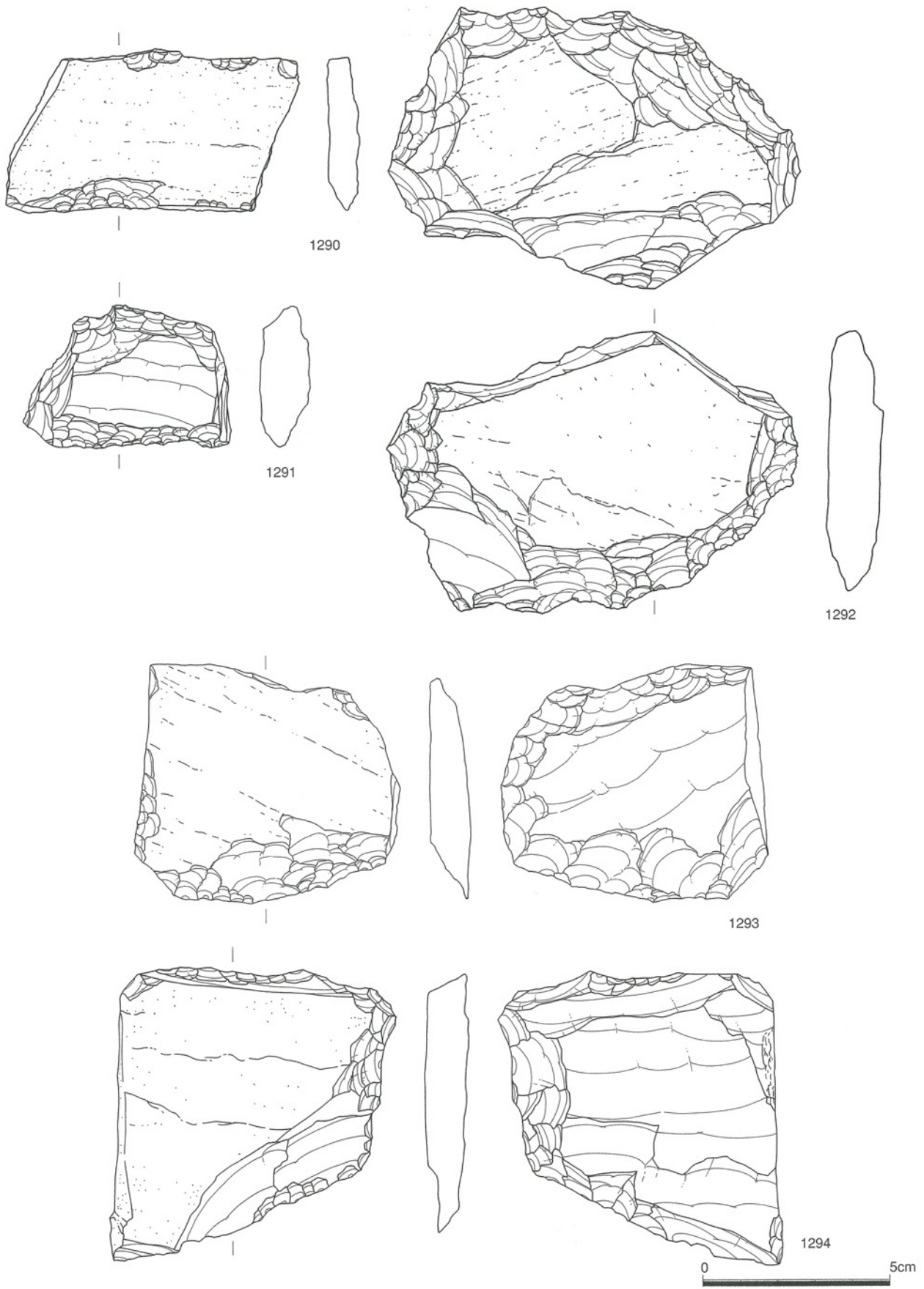
第219图 SD1027 出土遺物実測図(4)



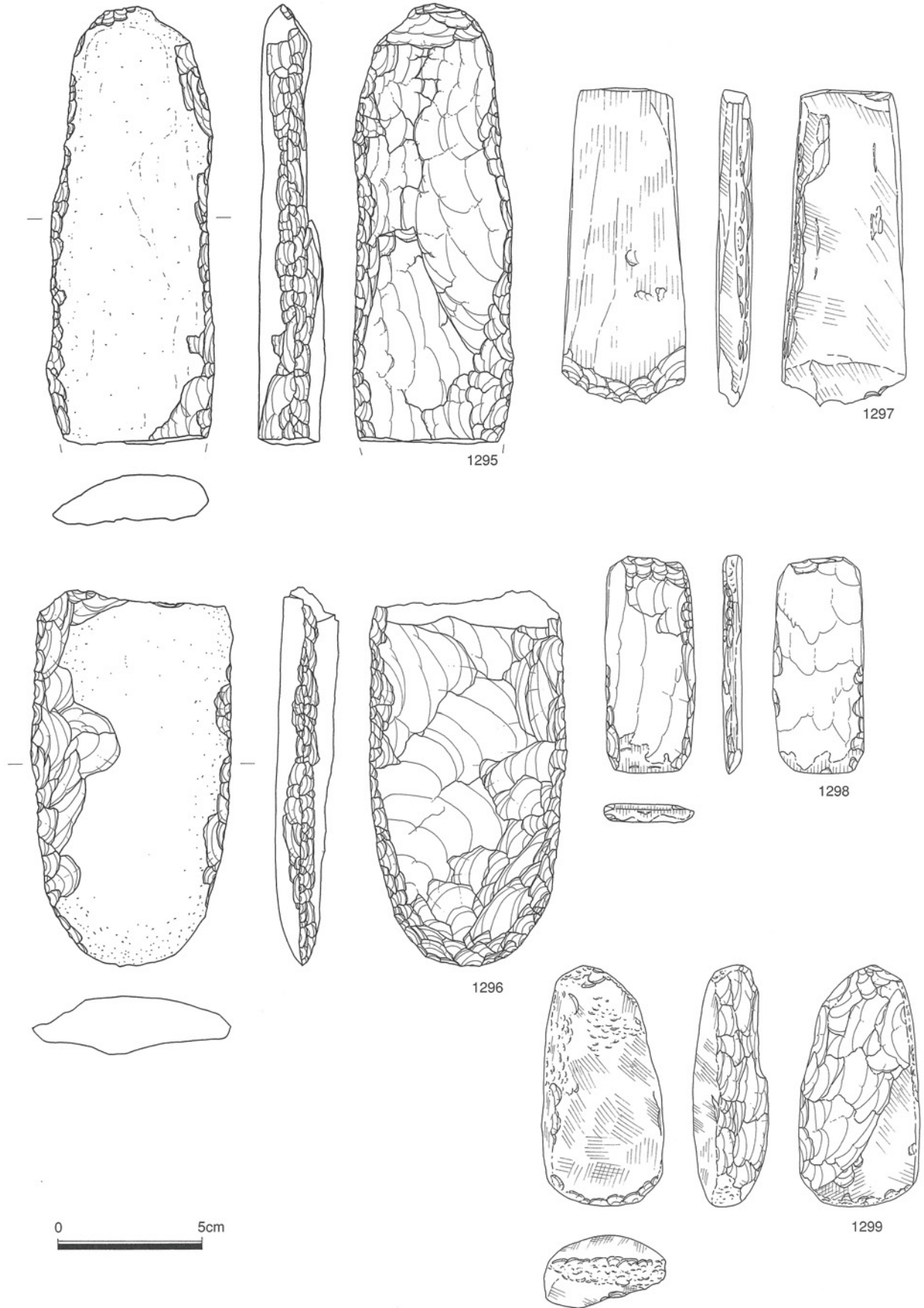
第220图 SD1027 出土遺物実測図(5)



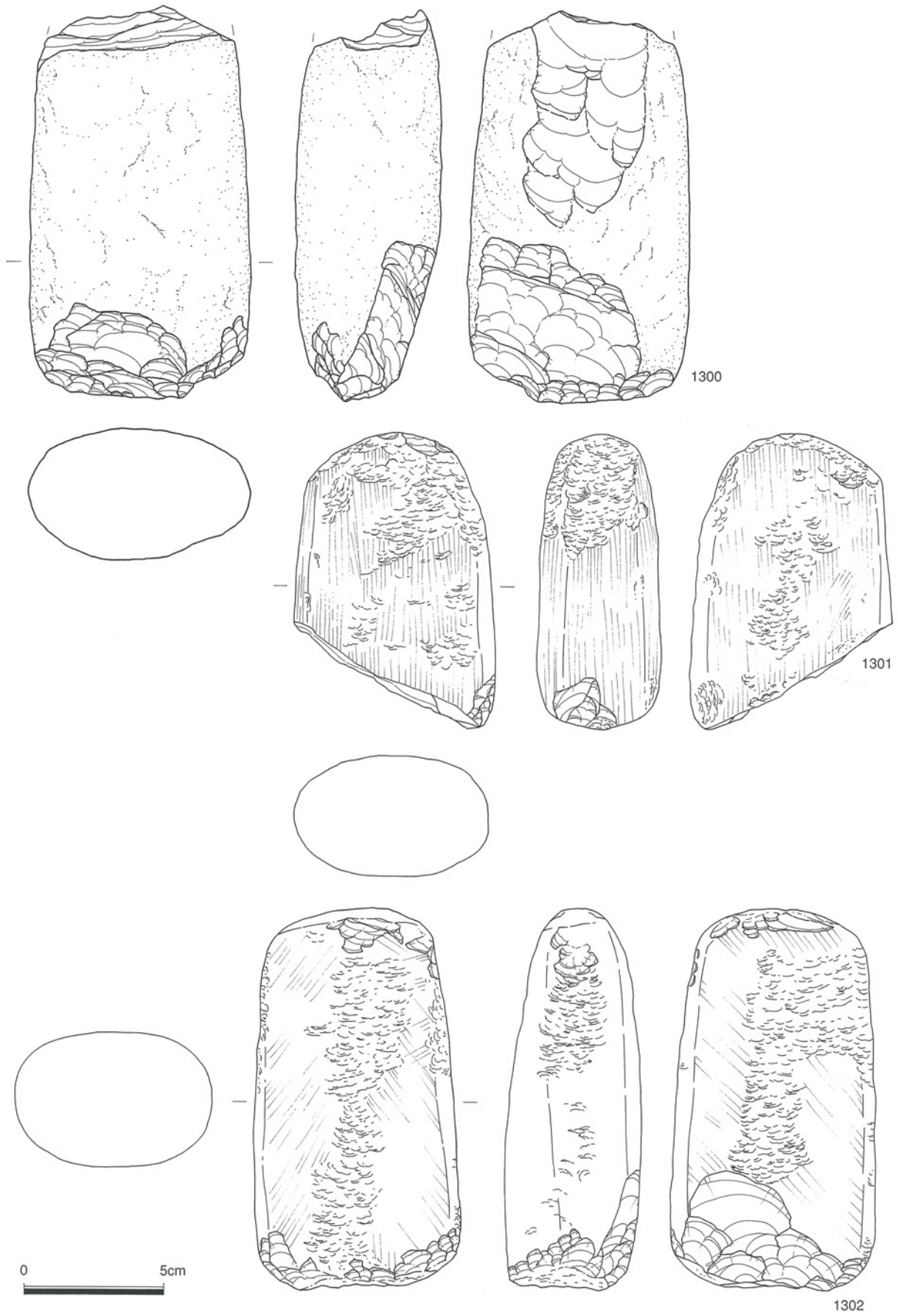
第221图 SD1027 出土遺物実測図(6)



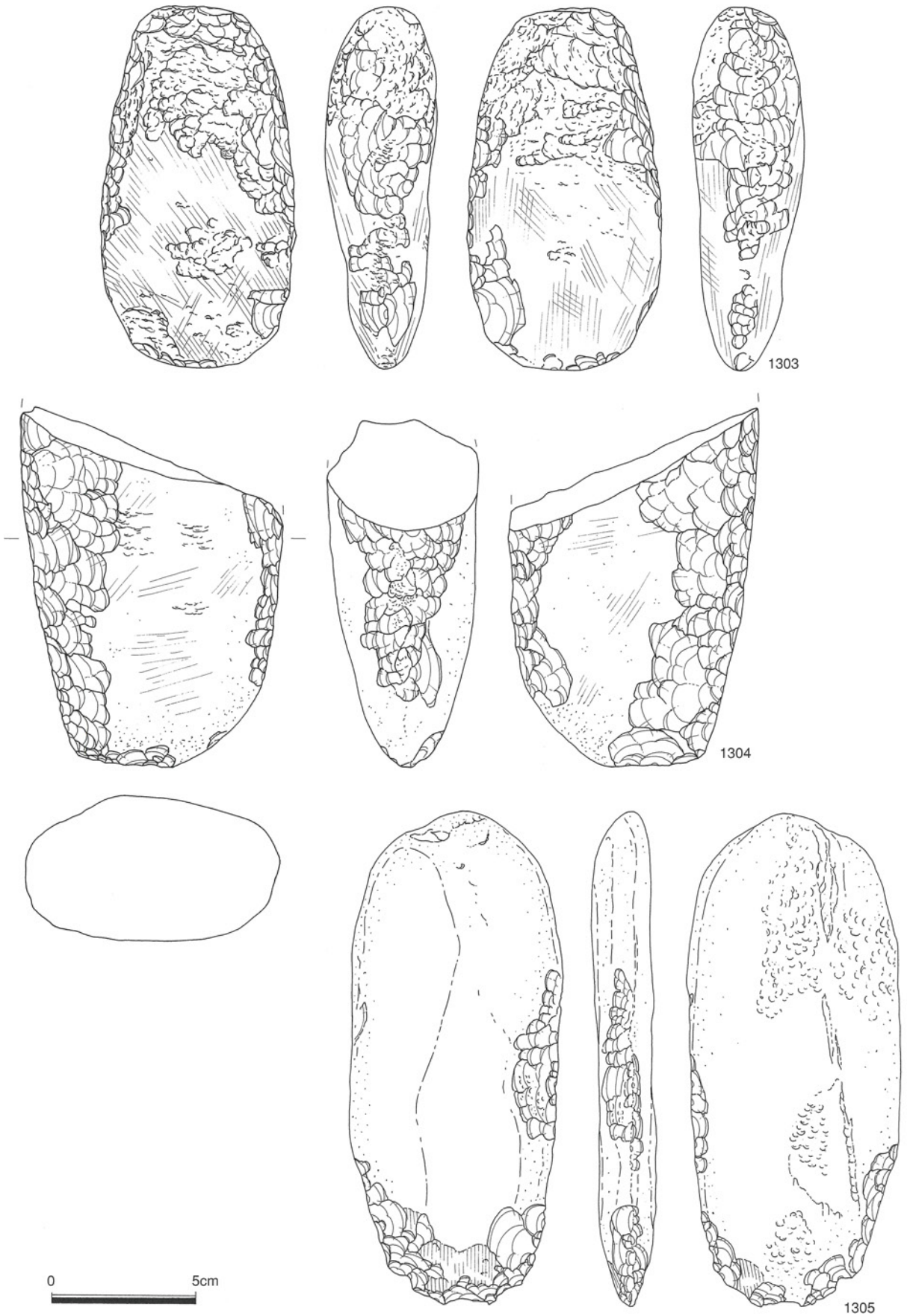
第222图 SD1027 出土遺物実測図(7)



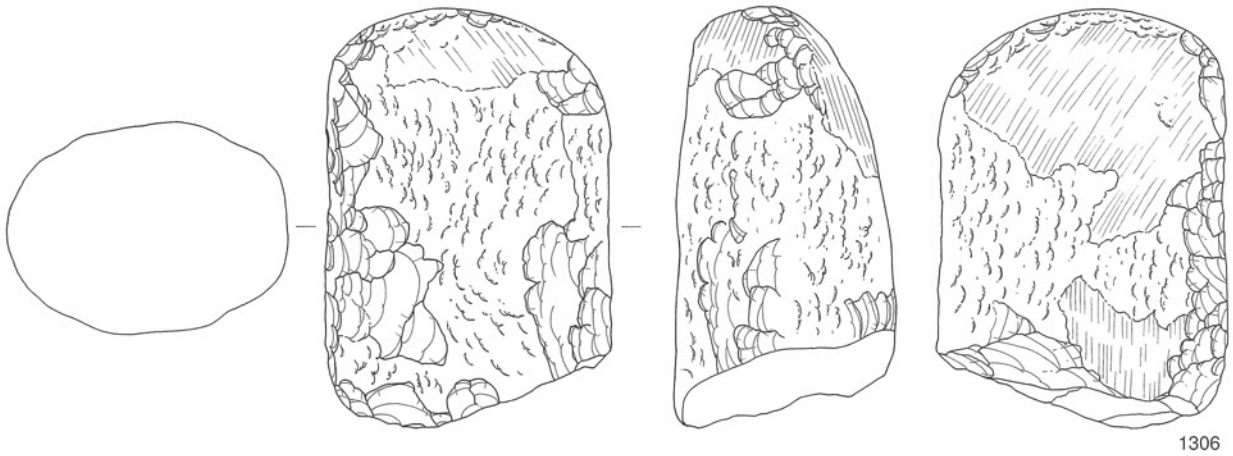
第223図 SD1027 出土遺物実測図(8)



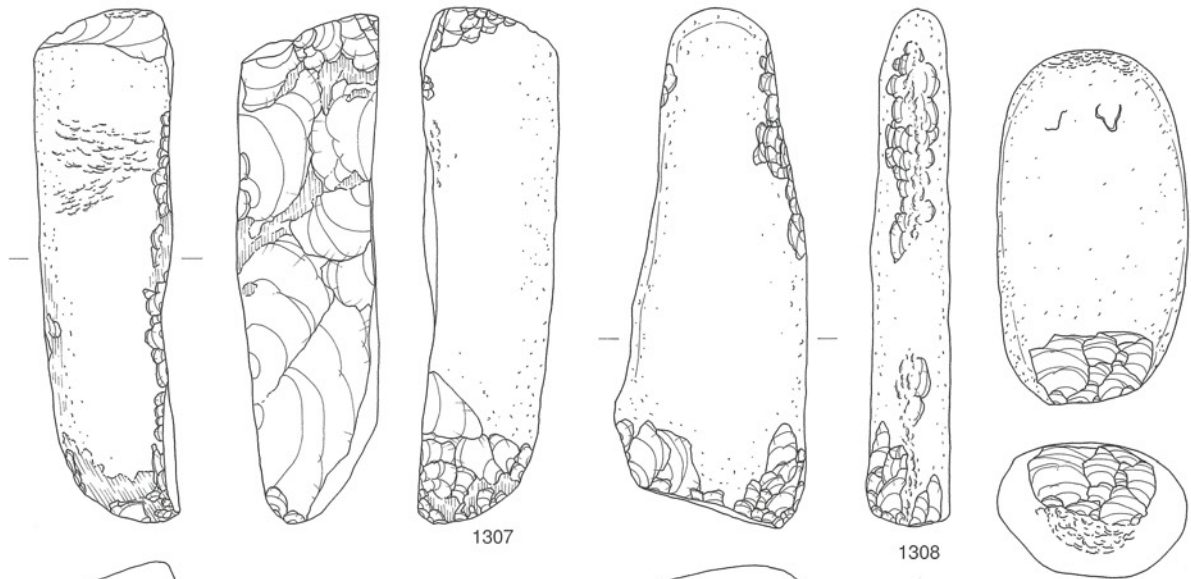
第224图 SD1027 出土遺物実測図(9)



第225图 SD1027 出土遺物実測図(10)



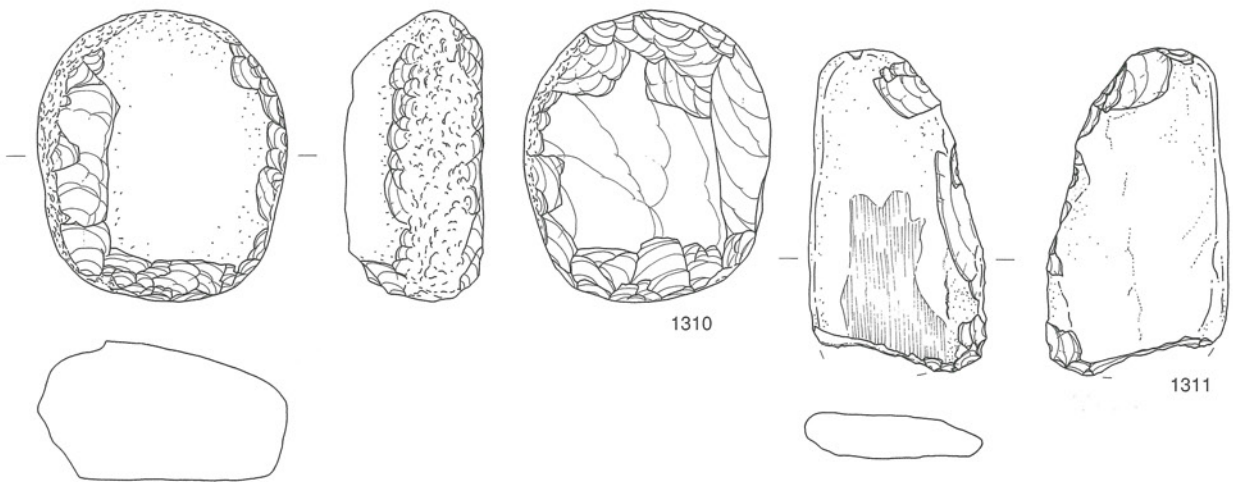
1306



1307

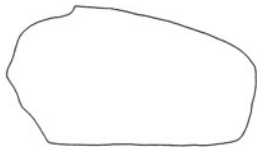
1308

1309



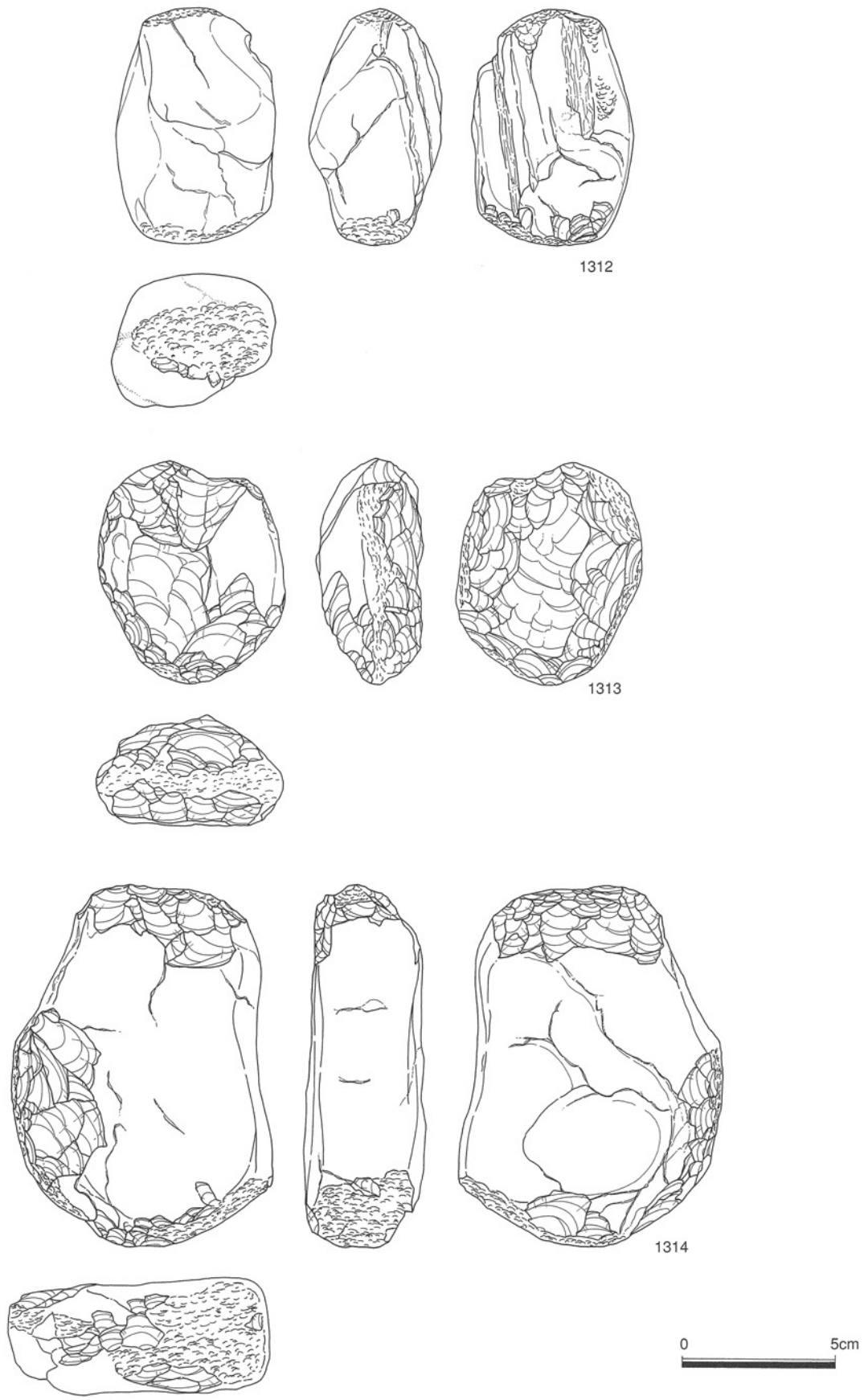
1310

1311



第226図 SD1027 出土遺物実測図(11)





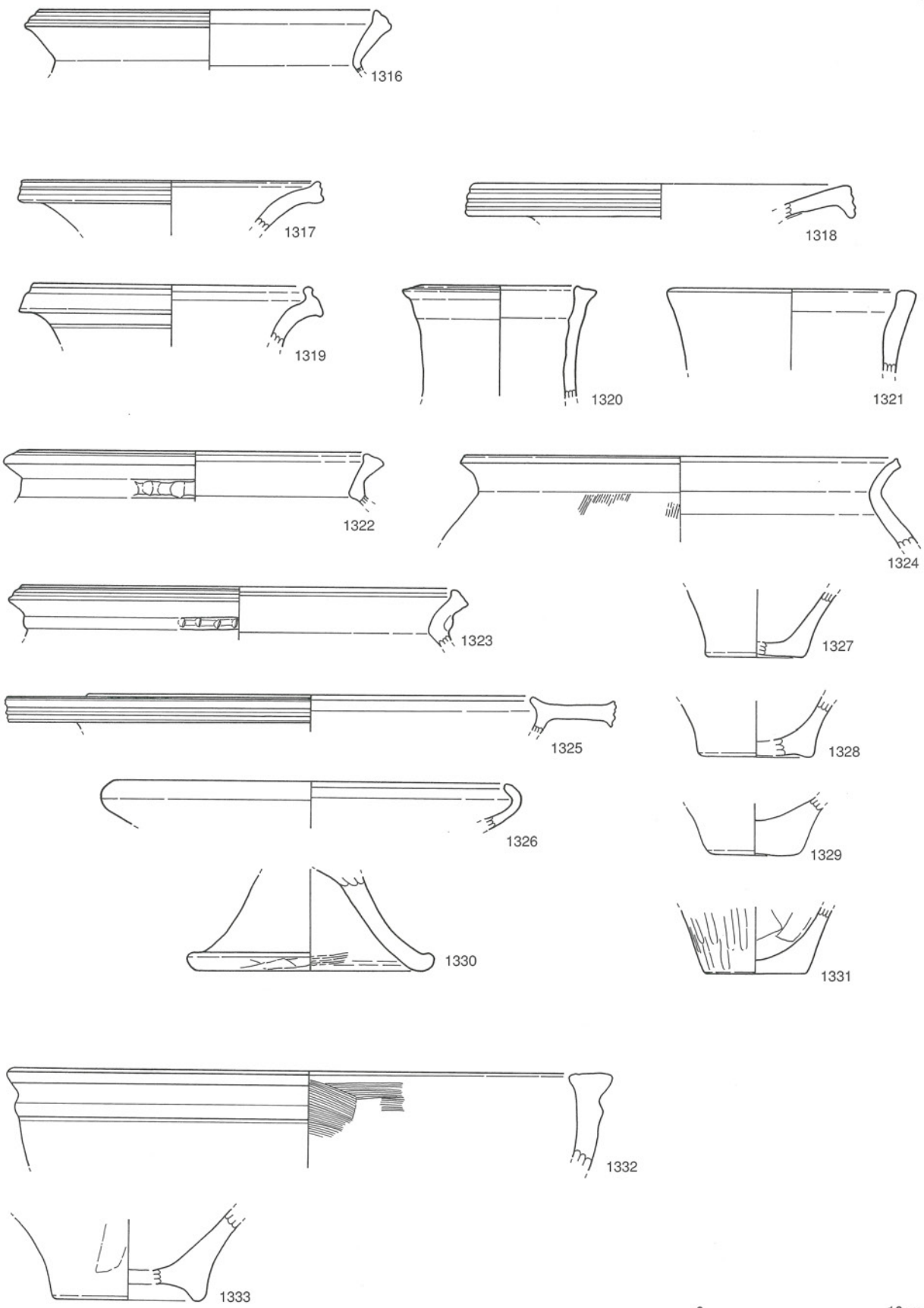
第227图 SD1027 出土遺物実測図(12)



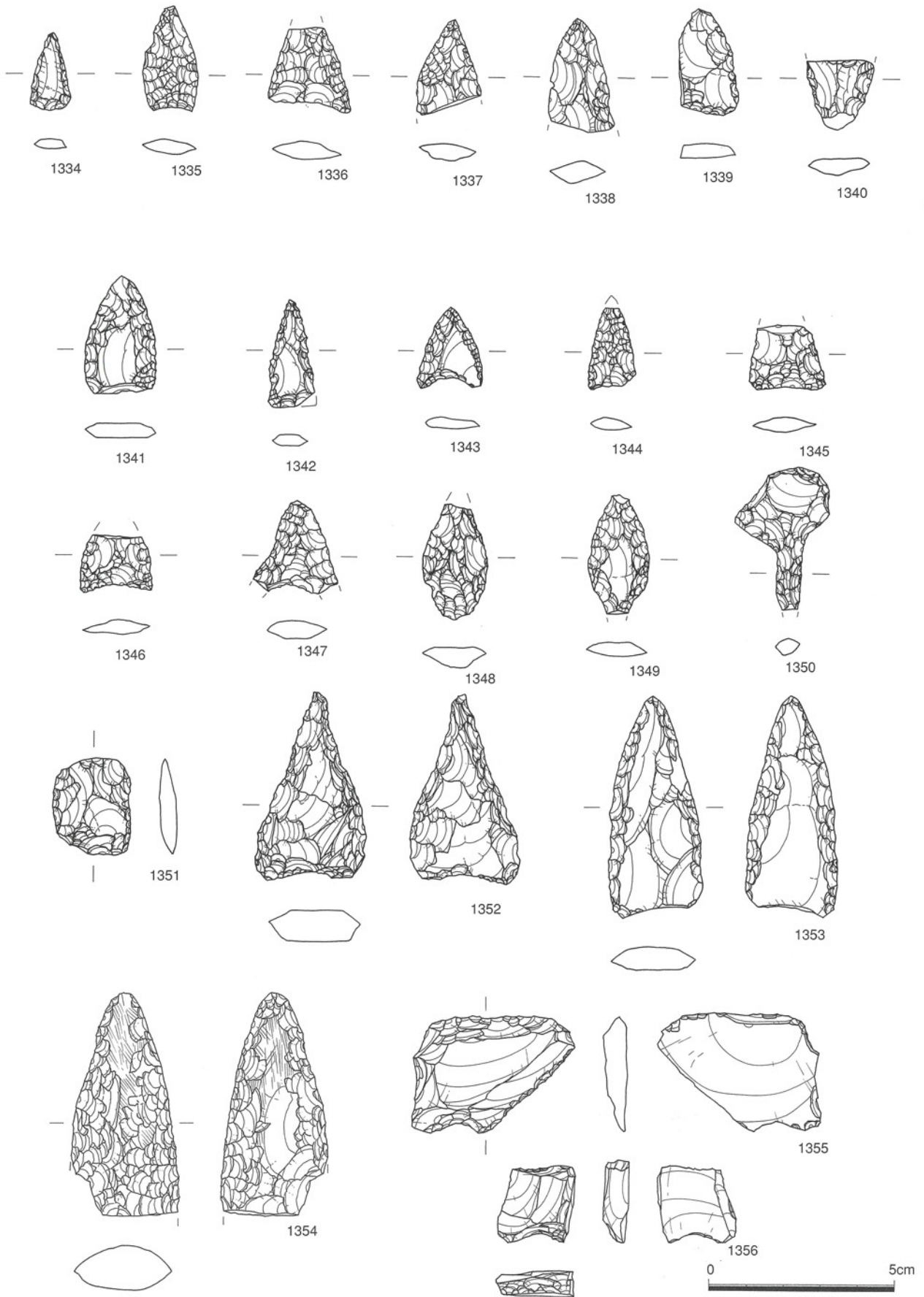
第228図 SD1027 出土遺物実測図(13)

斜格子目文が施されたもの、1097のように凹線文が巡らされたものなどもある。また、1095には体部と頸部との境に指頭圧痕が施された貼付突帯が1本廻されている。1098は外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ短頸壺である。口縁端部は上下に拡張され凹線が3条巡らされている。1099～1107は頸部から緩やかに外反しながら上方に向かってのびる口縁部を持つ壺で、口縁の上方への開きが小さいものである。口縁端部は平坦、または円く仕上げられているが、中には1099～1101のように内方に向かって拡張された端部の頂部がわずかにくぼむものがある。また、1099・1100の口縁端部には連続する刻目が施されている。1108も上方への開きの小さい口縁部を持つ壺であるが、頸部からの立ち上がりは直線的で、刻目の施された口縁端部は鈍く尖らされている。1109・1110は漏斗状に開く口縁部を持つ壺である。いずれも口縁部に断面三角形の貼付突帯が廻されているが、1109の突帯上には刻目が施されている。1111～1139は甕である。1111は外方への膨らみのほとんどない体部と、屈曲が弱く上方への開きの小さい口縁部をもつ甕である。口縁部は直線的で短く端部は鈍く尖らされている。1112は外反する短い口縁部を持つ甕である。円く仕上げられた口縁端部には連続する刻目が施されている。1113～1139は「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる口縁部を持つ甕で、口縁端部を中心として形態差が認められる。1113・1114は口縁部が直線的で短く、口縁端部は円く仕上げられている。1111と比較して体部の膨らみが強い。1115～1128は1113・1114同様、外上方にのびる直線的な口縁部を持つ甕であるが、口縁端部がわずかに上方に拡張されているものである。口縁部は短く直線的なものもあるが1116・1117のように長いものもある。また、1116・1117はこれ以外にも頸部の屈曲の度合いが強いという相違点も持っている。1120・1121は口縁端部が下方に拡張され平坦に仕上げられている。1122～1126では、口縁端部の頂部がわずかにくぼんでいる。1127・1128は口縁端部が上下に拡張されて平坦に仕上げられ、斜格子目文や斜行文が付けられている。1129～1136は口縁部が直線的または緩やかに外反し、口縁端部が円く仕上げられたものである。口縁部の形態に顕著な差は認められないが、体部は1130のように膨らみの小さいものから1135のように球形に大きく膨らむものまで形態に顕著な差が認められる。文様がつけられるものは少数で、1136には口縁端部に斜格子目文が、1134では肩に爪形の刺突文がそれぞれつけられている。1137～1139は上方に開く短い口縁の端部が、上方、または上下に拡張され複数の凹線文が巡らされたものである。B地点ではこの他にも壺や高杯に凹線が巡らされた個体が出土しており、A地点とは対照的である。1140は台付き鉢である。1141は高杯の杯部である。口縁部はほぼ水平方向にのびる浅い体部との境で上方に屈曲し、口縁端部は内外方に大きく拡張されている。また、口縁部には複数の凹線が巡らされている。

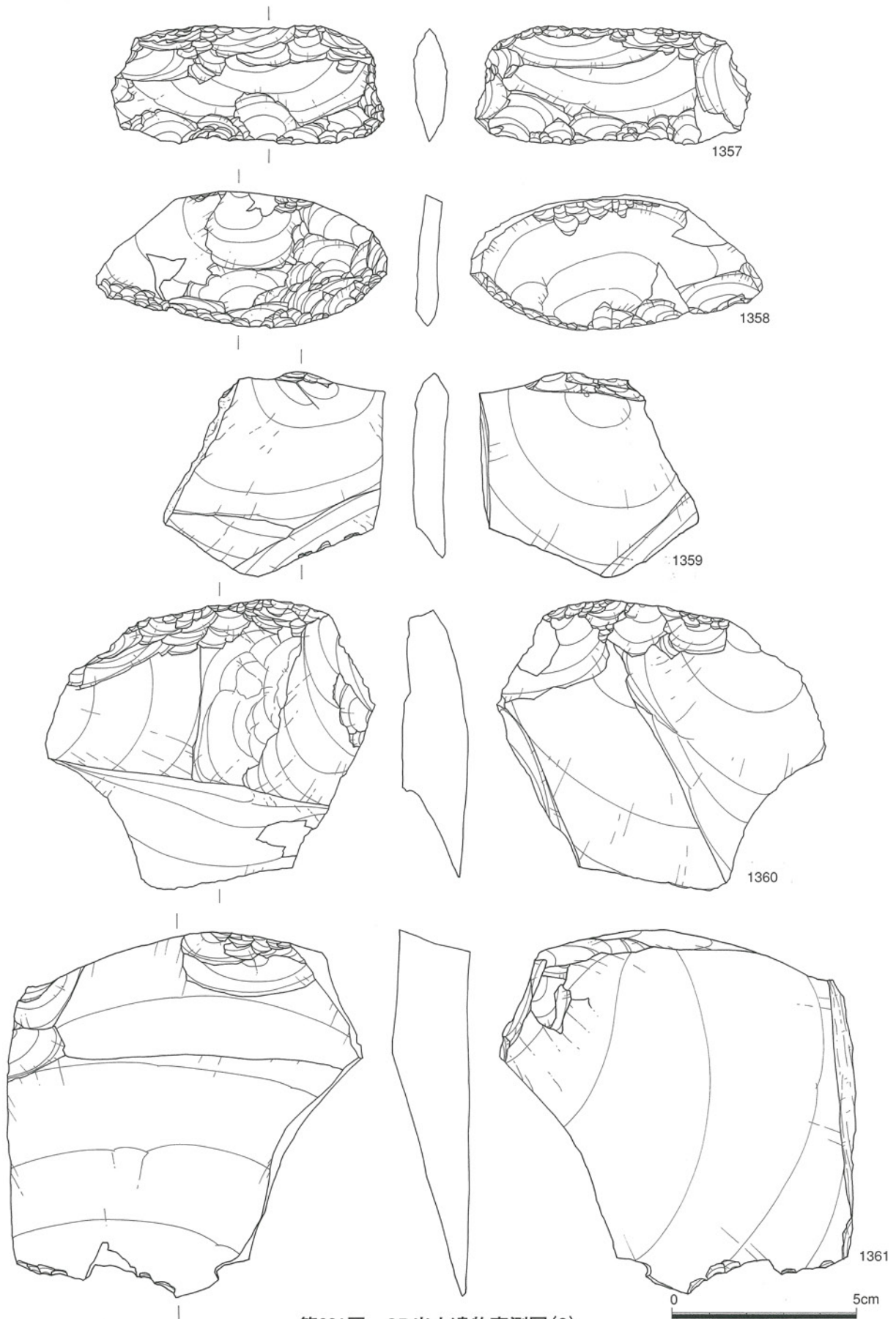
(C地区遺物) B地区の説明で述べたようにB地区との間に約8m、遺物の出土が途切れた空間がある。A・Bの2つの地区と比較すると遺物の出土状況は散漫である。1152は上方に向かってわずかに開く筒状の頸部と外反しながら外方に向かって大きく開く口縁部を持つ壺である。平坦に仕上げられた口端縁部にはヘラ先による連続する刺突が加えられ、口縁部内面には貼付突帯文が廻されている。1153は上方に向かって開く直線的な頸部から「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ壺である。1152同様、口縁端部は平坦に仕上げられヘラにより連続する刺突が加えられている。1154も上方に向かってわずかに開く筒状の頸部と大きく外反する口縁部を持つ壺である。1152・1153同様、平坦に仕上げられた口縁端部にはヘラ先による刺突が施されている。1155～1158は外反する口縁の端部に斜格子目文や斜行文が描かれた中・小型の壺である。1155・1156は口縁端部がわずかに下方に垂下するのに対して、1157は円く仕上げられているだけである。1158は大きく外反する口縁の端部が下方に垂下するもので、広い口縁部には



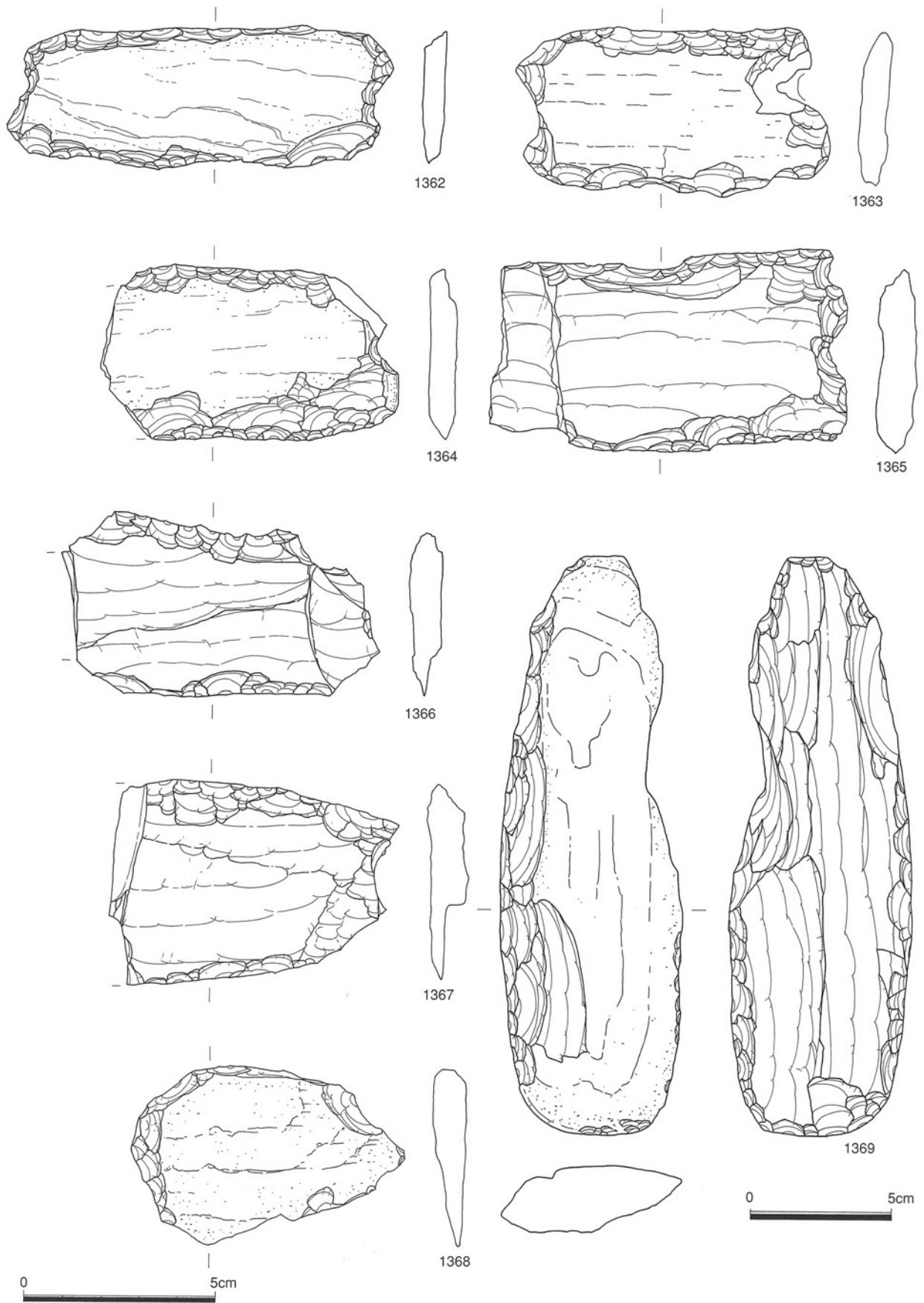
第229图 SD出土遺物実測図(1)



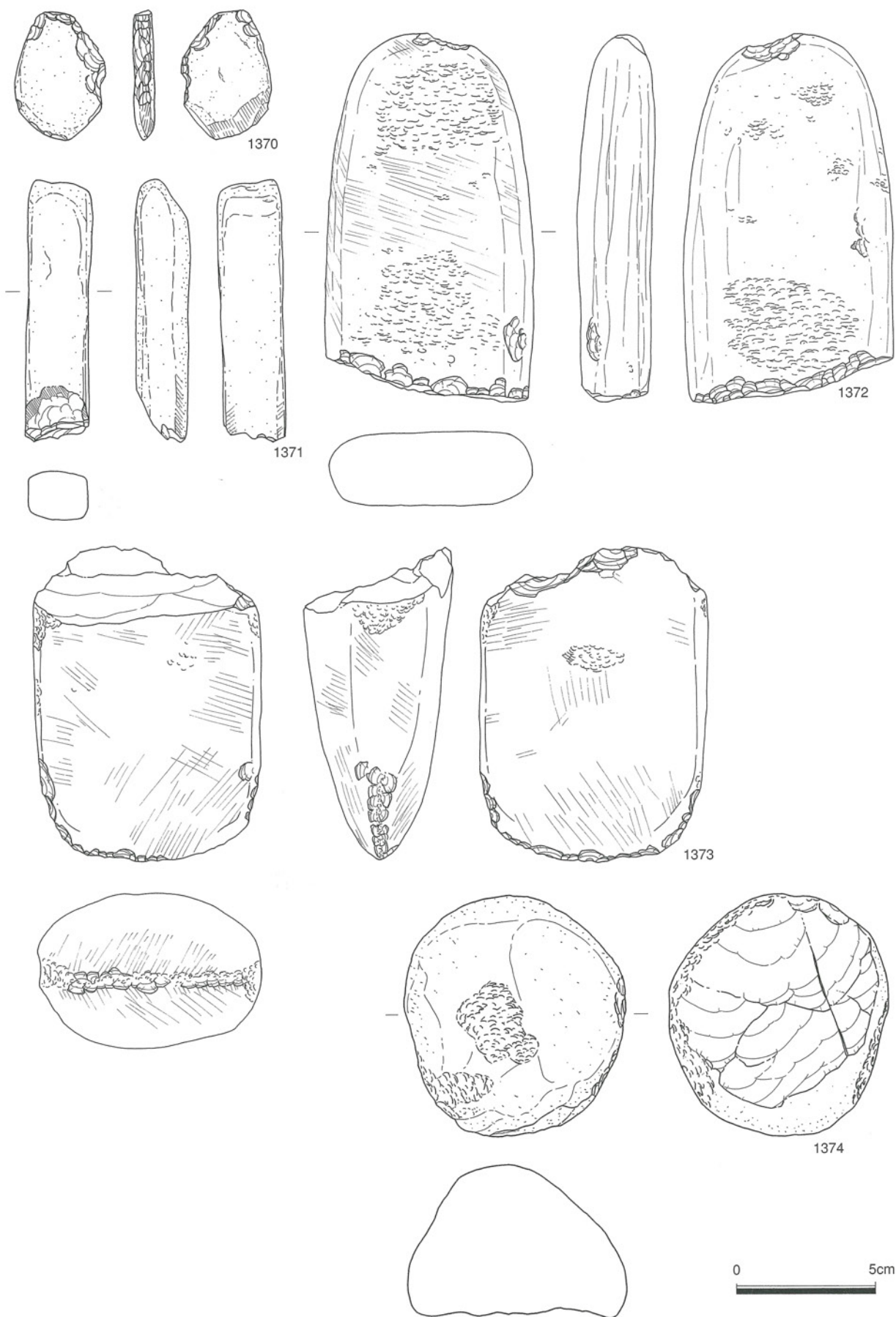
第230图 SD出土遺物実測図(2)



第231图 SD出土遗物实测图(3)



第232图 SD出土遺物実測図(4)



第233图 SD出土遺物実測図(5)